
黒い鳥さんと一緒。

蛇真谷 駿一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い鳥さんと一緒。

【Nコード】

N7384T

【作者名】

蛇真谷 駿一

【あらすじ】

面倒事が嫌いな高校生の神尾瞬と、命を救われた一羽のカラス。そして始まった彼と『彼女』のゆるーい生活。

ブログと彼の話 (前書き)

初投稿です。更新スピードは鈍足な上、読みづらいと思います
が、気分を悪くせず、あたたかい目で見守ってもらえると幸いです。

ブログと彼の話

元々、動物は好きじゃない。別に嫌いというわけでもないが。わざわざ飼いたいとか触りたいとかは思わない。

とは言え、仮に大の動物好きでも、敬遠されがちな動物もいる。俺の腕の中にいるこいつもどちらかと言えば敬遠される方に分類されるだろう。

それでも、助けたいと思ってしまったのは何故だろうか？

……いや、ただの気まぐれだろうな。

現在、俺、高校一年生。夏休みも中盤に差し掛かったところだが、しかし、やる事が何もない。金は……まあ、なくはないがわざわざ遊びで無駄金を使うほど馬鹿じゃない。何よりわざわざ遠出するのが面倒くさい。

とりあえず昼過ぎに起きた俺はこれから、暇つぶしの散歩ついでに矢島（やじま）さんのところまで遊びに行くところだ。

矢島さん本名、やじまいちろう矢島一郎。二十四歳で、職業は獣医だ。

矢島さんは、顔は精悍な感じで割りとかっこいいし、少々お喋りだが、気遣いの出来る優しい人だ。けれど結婚はおろかは彼女すらいない、そして出来ない。

なぜか。

年の割に髪の毛が少々——いや……それは関係ないだろう。

出逢いが無かったただけだろう。うん。

それはさておき、どうして、ただの高校生の俺が、獣医のおっさんと知り合いであるのか、それは同じクラスのある女子がきっかけだ。

そいつは、少々頭は悪いが、いい奴だ。

しかもかなりの動物好きで、暇さえあればペットショップや、野良猫のたまり場などによく足を運ぶらしい。

そんな奴が、偶然学校の帰りに怪我をしている大型犬を見つけたらどうするだろうか。そして偶然そこに同じクラスで暇そうな男子が通りかかったのを見つけたら、いったいその男子に何を求めるだろうか。

「お願い！ この子を運ぶのを手伝って！」

まあ、そう言うだろう。

基本的にクラスの奴らと必要以上に関わりを持たずに学校生活を送っている俺だが、流石にこの状況で見なかったことにするのは、後味が悪い。

そして確実に後々、面倒くさい事になる気がするので、仕方なく手を貸してそのまま近くの動物病院に連れて行った。

俺は、すぐに帰るつもりだったが、怪我をした犬がどこかの飼い犬だったため、飼い主が来るまでその場にいることになった。

そのとき帰ろうとする俺を呼び止めたのが、矢島さんだった。

結局、治療を終えた矢島さんと一緒に犬を連れてきた子と話をしながら飼い主を待つことに。

その間に話した内容はほとんど覚えていないが、気が付くと俺は矢島さんに心を許していた。

飼い主が来た後にすぐ帰ったが、それ以来、暇があれば今のよう
に矢島さんがいる動物病院にちよくちよく顔を出すようになった。

……そういえばこのあたりは、大型犬を見つけた場所だ。

「おーい」

こちらに呼びかけながら駆けて来たのは、同じクラスの飯田愛実。
彼女と一緒に犬を動物病院に連れて行った子だ。

あの一件以来、彼女と仲良くなった。

——正確に言うなら、懐かれた。

動物病院に行った次の日から、学校に行くことやたらと話しかけて
くるようになり、たまに帰りもついてくるようになった。

あの時のクラスの連中の驚きかたはハンパなかった。

他人から見たら、付き合っているように見えるかもしれない。実
際そう思っている奴も多いだろう。

飯田愛実は少し幼い顔立ちに大きな瞳が印象的な少女といった感
じ。しかも、裏表のない性格で、面倒見も愛想も良い。付き合っ
ていると思われて、悪い気はしなくてもない。が、静かな生活を好む俺
は彼女が少々苦手だ。

「こんにちは！ 瞬君」

「……おー」

「どこ行くの？ また矢島さんの所？」

「ああ」

「瞬君、矢島さんと仲いいもんね。私も一緒に言ってもいい？」

「……別にいいけど」

どうも俺は押しに弱いような気がする。

「瞬君の家から、矢島さんの所まで行くのに絶対ここ通るよね。私の家ここの近くなんだ」

——どうりでここ通るたびに会うと思った。っていつかもう待ち伏せに近いじゃないか「あ、待ち伏せとかじゃないよ？ たまに私の家の窓から通るのが見えたりするから」……。
彼女は笑いながら、そう答えた。

一瞬、心を読まれたかと思った。

「別に、見えたからって一緒に行こうとしなくていいんじゃない？ 飯田さん」

「えーいいじゃん。お友達と一緒に遊ぶのは普通のことでしょ？ それよりいい加減、名前で呼んでよー」

「……ソーデスネ」
やはり懐かれている。

「ちよっ！ 何その生返事！ ちゃんと返事してよー！」

「ソーデスネ」

「酷い！」

プロローグと彼の話 (後書き)

感想お待ちします。

彼の話。 2

見えてきたのは、少々小さめの建物。
ヤジマ動物病院である。

「やあ、また来たんだね。神尾君^{かみお}、飯田さん」
ちなみに、二人とも髪のはきは、絶対に話したりしない。

以前、飯田愛実が髪に髪に触れてしまい、途端に暗くなり、地面に「の」の字を書き続けるというベタな落ち込み方をしてしばらく元に戻らなかったことがあるからだ。

「まあ、暇だったんで」

「私も！」

「だめだよー。夏休みもたくさん残っているのに、暇を持て余したくらいでこんなところに来ちゃー。そうだ！二人で遊園地とかでも行ってきたらいいのに」

「やですよメンドイ。——っていつか何でこいつと」

「酷い！」

「あはは、神尾君。女の子にそんな事言っちゃだめだよ」

「そーだよ！いくら私でも傷つくよ！」

「……はあ……でも、わざわざ二人で行く理由がないじゃないですか」

「……はあー……」

二人揃ってため息をついた。飯田愛実にいたっては、なぜかこっちをジト目で睨んでくる。

——俺は何か妙な事を言っただろうか。

「最近気づいたんだけど、神尾君って鈍感だよー」

「……私もそう思うー」

「え、そんなことはないと思いますけど？」

「あーあ、私は頭痛が痛くなってきましたよ、瞬君」

「……『頭痛が痛くなってきた』じゃない。『頭痛がしてきた』または『頭が痛くなってきた』のほうが正しい」

「（わからないと思うけど……）」

「？ 何が違うの？」

「（……やはりわかってない）説明、めんどくさい」

というより、わざわざ指摘するような面倒なことをしなければよかった。

「………少しは勉強したほうがいい」

「勉強嫌いー」

「でも飯田さんは将来獣医になりたいんじゃないんですか？」

「そうです！ 怪我や病気で困っている動物を助けたいんです！」

「じゃあ、かなり勉強が必要になりますよ。僕も必死で勉強しましたから」

「……はい。がんばりまーす」

「無理だ」

「酷い！ ——あ！ そう思うなら私に勉強教えてよ！」

「面倒くさいです」

「即答した！」

彼女はいちいちアクションがでかい。

「あははは、君らまるで漫才しているみたいだよ。ところで勉強といえば、二人とも宿題は終わったのかい？」

「うー。一つもやってませーん」

「俺は、夏休み前にもらった時点でさっさと終わらせました。それと漫才してるつもりは全くありませんので」

ほんとに勘弁してほしい。

「早っ！ どーしてあの量をそんな早くに終わらせられるの！」

「ところで矢島さん。前から聞こうと思ってたんですけど」

「無視された！」

「ん？ なんだい？」

「俺らちよくちよく遊びに来てますけど、仕事の邪魔とかじゃないんですか？」

「ああ、大丈夫だよ。うちのスタッフが優秀だからねー。まあ、今は患者さんはいないしね」

「いっつもガラガラですもんね？ いや、いいことなんですけど」

「……まあ、矢島さんがいいて言ってくれるならいいです」

「それはそうと「先生！いつまでサボっている気ですか！……」こめん行ってくる」

「あ、はい。どうぞ、俺らにかまわず。俺らもう帰りますんで」

「矢島さーん。がんばってくださいーい」

「ああ、またおいでー。帰りにいつものティッシュを貰ってねー」
いつものティッシュとは、この動物病院に行くと、帰りに渡される特製のティッシュである。

何が特製なのかというと、ティッシュの中の型紙一枚一枚に矢島さん作の動物画が描いてあるからだ。良く言えば『个性的』悪く言えば『ど下手』。暇なときはずっと描いてるらしいが、一向に上達しない。

「はい、どうぞ」

帰ろうとする俺たちに笑顔でティッシュをくれたのが、受付スタッフの春川^{はるか}静香^{しずか}さんだ。

春川さんは、ロングの黒髪に、清楚な顔立ちのきれいな女性だ。いつも静かに笑顔を浮かべていてたたくまいも、お淑やかだ。

しかも暇をつぶしに来る俺たちに文句も言わないどころか、矢島さんが忙しい時わざわざ話し相手もなしてくれるとても優しい女性。

正直、この人と居ると気が楽だ。

「ありがとうございます。いつもいつもお邪魔してすみません」

「いえ、いいですよ。矢島先生もあなたたちが来るのを楽しみにしているみたいですし、私も一緒に居て楽しいですから」

そう言つてそつと微笑まれた。何となく照れ臭くなつてしまい、目を逸らしてしまった。

「……ねえ、そろそろ行こうよ」

ずつと黙っていた飯田愛実が少し不機嫌そうな声でそういった。

なぜ、機嫌が悪いのか不思議に思ったが、面倒だったので気にしないことにした。

「ああ。それじゃあ、また暇になったら、来させてもらいます」

「さよなら。また来ます」

「ええ、二人ともまたいらっしやい」

動物病院を出たらもう夕方だった。さすがに昼まで寝ると、明るい時間が短い。

帰りもまた散歩でもしながら帰ろうと思い、飯田愛実に用がある

と言って人通りの少ない道を歩き出した。

飯田愛実は不服そうな顔をしていたが、文句は言わなかった。

来たことのない道だったので、道に迷わないように気をつけながら、歩いているとそこに微かな血の匂い。

少し気になって目を向けてみると、そこには傷だらけの体で横たわっている鳥がいた。

まるで助けを求めるかのように一声鳴いた漆黒の鳥が。

彼の話。 2（後書き）

鳥さんでした。

彼女の話。

——いたい。いたい。くるしい。何故こんなことになったのだろう。

皆が怪我している。何故？ わからない。とにかくワタシは逃げた。

必死に逃げた。皆に助けられ、とにかく一生懸命。

そして限界が来た。

ここはどこかわからない。

このまま死ぬのかと思った。たぶん死ぬのだろう。

それでも、わたしは叫ばずにはいられなかった。有り得ないとわかっていても。

『……たす、けて』

ふと、体が浮いた気がした。ワタシに飛べる力はもう残ってない。死んだら浮くのかと思った。

でも違った。ニンゲンだ。

ニンゲンがワタシを持ち上げ走っている。

意味がわからない。

ニンゲンは嫌い。ワタシたちを見る眼が冷たいから。

ニンゲンは嫌い。何もしていないワタシたちを恐れるから。

ニンゲンは嫌い。ワタシたちの嫌がることを平気でするから。

ニンゲンは嫌い。そしてニンゲンが少し怖い。

でも、このニンゲンは何か違う。私を見る眼が違う。冷たくない。そして恐れていない。

でも、情けをかけられてるわけではなさそう。

考えているうちに、どこかの建物に入った。

ワタシを抱えているニンゲンが、白い格好で出て来たニンゲんに何か話している。

よく聞こえない。

眠いからだ。気を抜くと眠ってしまいそうだ。

白いほうのニンゲンがワタシを連れて行こうとする。

いやだ、まだ離れたくない。

なぜかそう思った。しかし抵抗も出来ない。

そして意識が薄れていくワタシを、白いほうのニンゲンがどこかへ連れて行こうとするのが何とか分かった。

眼が覚めたらどこかに閉じ込められていた。

ココはどこなのだろう。

白く狭い部屋に入れられ、部屋の一部にはガラスが張ってあるが、今のままじゃ出られそうにない。

体には、妙な匂いのする液体を塗られ、その上から白い布が巻いてある。

ただ一つだけ分かっているのは。

『……ワタシは、生きてる』

少し考えたところで、傷がさほど痛まないことに気が付いた。

さすがに動こうとすると、痛みはあるが、それでもココに来る前の痛みほどではない。

そういえばこの白い布、たしか『ほーたい』とか言うもので、人間が傷を治すために使うものではないか。

『助かった・・・の？』

しばらく考えていると、白い格好をした頭の毛が薄いニンゲンが近くまでやってきた。

「――。」

何を言っているのかは、聞き取ることができなかったが、ニンゲンはワタシに触れようとした。

——触るな！

『やめろ！ 近寄るな！』

「わ、なんだいきなり。ちよっ！ よせ、暴れるな。……イタタタタ！ わかった、わかったから髪はやめてくれ！」

白い格好のニンゲンは頭を押さえ、ワタシから二・三步離れた。

「まったく……まあ、これだけ元気になれば問題ないだろう。一応、神尾君にも連絡を入れておかないと。かなり必死だったようだし」

『？』

何を言っているのだろう？ ——カミオクン？ ワタシを運んだ

あのニンゲンの事か？

あのニンゲンはなぜ私をここへ運んだのだろう。

助けるため？

何故？

ワタシたちがニンゲンを嫌っているように、ニンゲンはワタシたちを嫌っているのに。

彼女の話。 2

ワタシが生まれる前からワタシたちに対するニンゲンの対応は変わっていない。

ワタシたちはただ生きているだけだ。
でもニンゲンはそれを良しとしない。

ワタシたちが近寄れないように網や棘をつけている所も少ない。

ワタシたちを脅かそうとしてなのか、円盤状の光ものや、妙な人形や、小さな石がぶら下げてあったりもする。

皆、最初は警戒するが、危険の有無を判断すればそんなものは何も気にはしない。

ただ、仲間の死体やそれに似せて作られたものをぶら下げている時もある。

初めてその光景を目にしたとき、ワタシは呆然としてしまった。

信じられなかったのだ。

ワタシたちは、ニンゲンが捨てたものを利用してるに過ぎない。
いや、捨てたもの以外にもネズミと呼ばれる小動物なども、狩って生きている。それはニンゲンたちにとっても、プラスになるはずである。

それなのに、塀に立っているだけで、ニンゲンはワタシ達を避けて歩く。

空へ飛び立つただけで、ニンゲンは一瞬怯えをみせる。

ワタシたちは存在するだけで迫害され、罫を張られ、捕らえられ、命までも狙われる。

『それなのに何故……？』

あのニンゲンに少し興味を持った。

とにかく早くこの狭い空間から出なくては。その為にはこのままじゃだめだ。

『あれを使うのはいやだけど……』

白い格好のニンゲンがいないのを確認し、物音を立てないように外に出た。

外はもう暗くなっていた。

元の姿に戻り、空へと飛び立つ。

傷は痛むのであまり遠くへは行けそうにない。

では、どこへ向かっているのだろう。

何も考えていなかった。

でも多分、あのニンゲンの所に行こうとしている。

どこにいるのかわからない。

けれど、不思議と見つからない気はしなかった。

だから今、私の目に入る姿に、ほとんど驚きはない。

彼の待ち時間とまさかの再会の話。

両親を二年前の冬、交通事故でなくした。

それから俺は、一人暮らしをしている。

家は、家族三人で暮らしていたマンションをそのまま使っている。
両親の部屋はきちんと片付けて、物置となっている。

そのままにしておくと、少し昔を思い出すからだ。

事故の後、身寄りのない俺は、誰かに引き取られることもなく、
一人きりになった。

幼なじみの女の子やその家族と一緒に住もう、といってくれたが、
迷惑をかけることになるし、何より家族で住んだこの家を離れたく
なかった。

その幼馴染も事故からちょうど一年前、家の事情で引っ越してい
った。

本来、収入のない十四歳のガキがたった一人で生活できるはずも
ないが、俺の場合、金銭の心配は必要なかった。

遺産だ。

別に親が金持ちだったわけじゃなくて、俺の父親の父親、つまり俺

のジーサンが金持ちだった。

そのジーサンが死んだときに、一人っ子だった親父に莫大な遺産が入った。

だが親父もお袋もその金にはほとんど手をつけず、自分たちで働いた金で生活していた。どうやら俺のために残すつもりだったらしい。

別にそんなことする必要はないと思ったが、結果的にはその金に助けられている。

自分で言うのもなんだが、元々しっかりしていた俺は、その遺産をうまくやりくりして生活している。

バイトをしようと思ったことはあるけれど、残念ながらうちの学校はバイト禁止だった。

事情を話せば問題ないと思うが、わざわざそんなことをするのは面倒だったので、結局バイトはしていない。

道で怪我をしたカラスを矢島さんのところに連れて行った後、俺は家に帰った。

カラスを見つけたあとき、頭の中は助けなければと言うことでいっぱいになっていた。

前に犬が怪我したのを見たときはそれほどじゃなかった。

むしろ面倒くさいと思ったくらいだ。

カラスが好きなわけじゃない。むしろ厄介な存在だと思っている。

でもなぜかただ助けたかった。

——あのカラスはどうなっただろうか。

手術が終わるまで待っていていようとしていたら、矢島さんに「今日は遅いから帰りなさい」と言われ、しぶしぶ帰ることにした。

終わったら電話すると言われたが、まだ連絡はない。

コン。

しかし矢島さんの腕は確からしいので、あまり心配はしていない。

コンコン。

……ん、ベランダの方から何か物音が聞こえた気がする。

「……………気のせい……………」

コンコンコン。

「……………じゃないみたいだ」

——何かいるのか？ しかしうちのマンションは十二階建てで、この部屋は八階だ。人がいるとは思えない。

少し気になって見に行こうとしたとき。

ピリリリリリリリリリリリリリリリリ！

電話か。

手元にあつた携帯を取って、窓へと近づく。

「はい、もしもし。神尾です」

『あ！　もしもし！　神尾君？』

「あ、矢島さんですか？　手術終わっただんですか？　あのカラスどうなりました？」

『あ、ああ。手術は無事終わって、もう暴れるぐらいには回復したみたいだ。あ、い、いや！　それよりも！』

「？　どうかしたんですか？　矢島さん。何か焦ってませんか？　少し落ち着いてください」

話しながら、ベランダの窓を開けるとそこには、

『いなくなっただ！　あのカラスが！　術後一度目を覚ましたんで、君に連絡しようとして目を離れた隙に！』

包帯でぐるぐる巻きのカラスが一羽、こちらを見つめていた。

意味がわからない。——って言うかなぜココにいる。

獣医の困惑と彼の困惑の話。

電話の相手からの返事がない。やはり戸惑っているのだろう。

電話の相手——神尾君があのカラスを連れてきたとき、ちょうど患者さんが居なくなつた直後だった。

神尾君はいつも、面倒くさがりながらも、周りに気を配り、何か起きれば、感情に左右されず、正確な判断を下せる冷静でとても頭の良い子だ。

その神尾君が動揺し、焦っている。

僕にとって衝撃だった。

「神尾君！ 落ち着きなさい！ とにかくそのカラスをこちらへ！」

僕は驚きつつも、治療を始めるようと必死に状況を説明しようとする神尾君から、怪我をしたカラスを預かった。

神尾君はどこかそのカラスと離れたくなさそうに見えた。

カラスの怪我は酷く、かなり危険だ。

手術が必要のようだ。

手術が終わるまで、神尾君は頑なに残ると言っていたが、たとえば一人暮らしとはいえ、高校生である彼を、遅くまで外出させておくわけには行かず、必死に説得し、何とか帰宅させた。

「……先生、お疲れ様です」

「ああ、お疲れ様。君は着替えたら先に帰っても良いよ。あとは僕一人で十分だ」

「はい。……結構時間かかりましたね」

「……そうだね、でももう大丈夫だ」

傷が多かったのですがに手術は時間がかかったが、何とか成功した。後は安静にしていれば問題ないだろう。

「では先生、お先に失礼します」

「ああ、お疲れ様」

スタッフを見送った後、椅子に腰を下ろした。僕はかなり疲れていた。だから少し休憩を取ってただけで眠ってしまったのは、仕方ないと僕は強く言いたい。

物音が聞こえ、目を覚ますと、一時間ほど経っていた。

「神尾君に連絡も入れず、悪い事をしたな……」

ともかく、物音が聞こえた方を見に行くと、カラスすでに目を覚ましていた。

容態を見ようと、触ろうとした瞬間、激しく抵抗された。

術後すぐだと言うのにこのカラスの暴れ方はものすごく、本当に怪我をしたのかと思うくらいだ。

しかしいくら元気でも、このカラスは怪我をしていて、手術したばかりだ。安静にしていもらなければ困る。

少し離れば、カラスも大人しくなった。
やはり野生動物。人間慣れはしていないのだろう。

とにかく神尾君に連絡してあげるべきである。
あのときの彼は必死だった。

「……きつと心配しているはずだ」

どうせなら携帯のテレビ電話で元気な姿を見せてあげようと思った。
連絡が遅くなってしまった事のせめてものお詫びだ。

しかし、携帯を探すのに思ったより手間取ってしまい、急いで戻る。

だが、そこにカラスの姿はなかった。

「……あー……えーっと……そう、ですか……」

「……神尾君？」

やっと返ってきた電話の返事は、何かに困惑しているようだった。
「……はい。わかりました。えーと明日そちらにお邪魔します」
「ごめんね神尾君。こちらの不手際だ。どうやって出たのかまったくわからないんだ。——やっぱり怒っている……よね？」

「あ、いえ。……あの、手術は成功したんですね」

「……ああ。……後は安静にしていれば問題なかったんだけど……」
『えーつとだったら大丈夫です。大丈夫……だと思い、ます』
「？ え、怒ってないのかい？ それに大丈夫って、何が大丈夫なんだい？」

『あー……つと、……明日！ 明日いろいろ話しましょう！』

「あ、ああ……わかった……。明日だね……。待ってるよ。本当にごめんね」

『はい。また明日』

電話を切った後も、残りの仕事を片付けている時も、ティッシュの袋に絵を描いてる時も、カラスのことと、神尾君の言葉が頭から離れなかった。

あのカラスはどうやってあの場所から出たのだろう。

神尾君が言った「大丈夫」とはいったいどういう意味だろう。

どうしよう。疲れているのに気になって眠れない。

「ヤバイ……明日も早いのに……」

彼と彼女の意志疎通の話。(前書き)

いつもより少し長めです。

彼と彼女の意志疎通の話。

頭の中を整理し、電話を切った。

矢島さんにはうまく言ったつもりだが、誤魔化せてはいないだろう。

正直、意味がわからなかった。このカラスは俺が動物病院に連れて行き、矢島さんに預けたカラスのはずだ。それはおそらく間違いない。

矢島さんは「手術は無事終わった」「安静にしていれば問題ない」そう言っていたはず。そしてカラスが病院から消えたとも。――病院から消えたカラスがなぜうちのベランダに？

窓を開けたままにすると虫も入るし、何より怪我をしたカラスをこのままベランダに出しておくことはしたくない。

俺は、動揺しながらも、カラスを家の中に招き入れた。

意外とあっさり家の中に入ってくれたカラスに驚きながらも、とりあえず余っている毛布などで寝床を作り、そこにカラスを乗せた。

しかし、怪我をした動物の世話なんてやることはないと思っていたので、この後何をすればいいのかわからない。

矢島さんのところに遊びに行っても、矢島さんの仕事姿は余り見ていなかった。飯田愛実のように獣医になりたいわけじゃなかったし、動物を飼う予定もなかったからだ。

こんなことになるなら獣医の仕事をよく見ておくべきだった。

後悔しながらも、矢島さんが安静にしていれば問題ないと言っていたのを思い出し、とりあえずそっとしておくことにした。

いつもならこの時間は、くつろぎながら本を読んでいる頃だ。しかし今はどうも落ち着かない。

気になるのだ、カラスのことが。

自然と俺は、「腹は減ってないか？」とか「傷は痛むか？」とか「水はあるか？」とか、色々とかラスに話しかけていた。
「……………何やってんだ俺、ばつかみたいだ」

ふと、自分のしている無意味な行為に恥ずかしくなり、その場でうずくまってしまった。

——ああ、顔が熱い。動物に話しかけるなんて俺らしくもない。
「何をやっている？ 大丈夫？」

「……………ああ、大丈夫だ。気にしないでくれ」
「なら良いけど」

——ほんとに恥ずかしい。心配までされてしまった。

「……………って、え？」
「？ どうかした？」

生まれて始めて二度見というものをした。

先ほどまでカラスが乗っていた場所に、綺麗な長い黒髪、そしてまるで雲一つ無い澄んだ夜空の様な漆黒の瞳を持った少女が座っていた。

頭の中がおかしくなりそうだ。

普通なら驚いて大声を上げたりしそうだが、そんなことよりもこの子の格好は……。

「……え、……な、ん……え？」

「？ ああ、この姿か。この姿は好きじゃないが、話をするのにちよつどいいから」

「……い、や、そ、……えーっ、と、とりあえず、な、何か着てくれ。服持ってくるから」

この女の子は、ほぼ何も着ていない状況で体育座りをしていた。幸い長い髪や巻いてあった包帯がうまいこと隠してはいるが、動くといういろいろ見えそうだ。まずい、すぐく目のやり場に困る。

俺は服を取りにその場から離れた。

「……どうなってるんだよ、めんどくせー」

とにかくいろいろ話を聞かなければいけない。——その前に服を着させなければ。

女の子に俺のジャージを渡し、着替えが終わるまで隣の部屋で待っていた。混乱していたので、とっさに目に入ったジャージを持って行ったが、どうせなら母さんの服を持っててやればよかったかもしれない。

「服着たか？」

「着た」

「……なんで上しか着てないんだ？」

部屋に入ると、ジャージの上だけを着て立っていた。

「下、大きい」

確かに、かなり小柄な子で、歳は俺よりも少し若いぐらいか。俺のジャージでは大きかったかもしれない。

だが、裸にジャージの上だけというのもきわどい。

「……君が穿けそうな服持つてくるからもう少し待ってて」

「いい。ただ少し話するだけだから」

「……じゃあ、せめてその毛布に包まっててくれ」

「？ わかった」

女の子は、カラスがいたところに行き、毛布に包まり座った。

「……それで、君はいつたい誰なんだ？」

先ほどまでの会話で少し落ち着きを取り戻し、頭の中を整理して聞いた。正直、このとき俺は一つの仮説を立てていたが、普通に考えたらありえないことだ。それでも今の状況から見ると、それ以外考えられなかった。

「誰とはどういう意味だ？」

「どういうって……あー……質問を変える。君はどうしてここにいるんだ？」

「どうしてってお前が入れてくれたんじゃないのか」

「……じゃあ、きみは、もしかしてその……カラス、なのか？」

「カラス……確かにワタシ達はニンゲンにそう呼ばれている」

「！ ……やっぱりそうか。……でも、本当に？」

思わず口から出た言葉を聞いた瞬間、一瞬にして女の子が、カラスの姿になり、また人の姿になった。

「これで信じてもらえるだろうか？」

仮説が、確かな現実になった。

「……どうして人間の姿になれるんだ？」

「知らない。気づいたらできた。でもワタシはこの姿はあまり好きじゃない」

「なぜ？」

「ニンゲンの姿だから。ニンゲンは……嫌い」

「……それならばなぜ、きみは俺のところに？」

「わからない。自然とお前を探してた。でも、多分ワタシはお前と話したかった」

「話？　そういえばさっきも話があるみたいな事言ってたような……」

「そう。聞きたかった事がある。お前はなぜあの時「あ、ちょっといいか？」……なに？」

女の子は、話を遮られて不服そうだったが、このままじゃ話づらい。

「名前、聞いても良いかな？　君って呼ぶのに慣れてなくてさ。あ、俺は神尾、神尾瞬だ。きみの名前は？」

「名前……ない。今まで必要じゃなかった」

「じゃあ今までなんて呼ばれてきたんだ？」

「誰も、呼んだりしない」

「そ、そっか……だったら、俺が名をつけても？」

「……かまわない」

「わかった……じゃあ……っと……夜羽……とか？」

「ヨハネ？」

「うん。夜に羽で夜羽。……いや、夜空みたいなきれいな黒が印象

的だったから、後はなんとなく鳥で羽になって……」

と、説明している間に俺は徐々に恥ずかしくなっていた。

「（——っ！ 何を言ってるんだ！？ 俺は！）」

しかし、女の子はそんな俺の様子を気にすることなく、与えられた名を何度も呟いていた。

「ヨハネ、夜羽……うん、覚えた。ワタシはなんて呼べばいい？」

「ああ、好きに呼んでもらってかまわないよ」

「カミオシュンで一括りなのか？」

「いや、神尾が苗字で、瞬が名前」

「ミヨウジ？」

苗字の意味がわからないのかきよとした顔で尋ねてくる。

「あー……じゃあ、瞬って呼んでくれ」

「シュン……わかった。シュンだな！」

そう言っただけの子——夜羽は笑った。人の姿になってから、ずっと無表情だった彼女が初めて魅せた笑顔。それを見た瞬間、顔が熱くなるのを感じた。

風邪にでもかかったか？ いや、違うよな。よく分からないが、照れているのだ。実の正体はカラスの女の子に。

俺らしくもない。笑顔を見ることなど少くないはずだ。飯田などとはいつも笑顔を絶やさないし。

なら、なぜこの子の笑顔に俺は。

「それで、話の続きはもういいか？ シュン」

割と長い事一人で照れていたらしい。すでに夜羽から笑顔は消え、

真剣なまなざしで俺を見つめていた。

「あ、ああ」

「……シユンは、どうしてワタシをその……た、助けてくれたのだ？」

「どうしてって……わからん。理由なんか無い。ただ助けたいと思った」

「でも、ニンゲンはワタシ達のことを嫌っている。今までワタシ達を助けようとするやつには見たことが無い。それに、あの白い服を着た髪の薄いやつは、お前が……シユンが必死だったと呟いていた。シユンが必死になった理由が……知りたい」

「……さっきも言ったように理由なんて無いさ。でも、たしかに実際、俺は柄にも無く慌てたと思うよ。そのときのことをあんまり覚えてないくらいね。ただ、絶対に助けなきゃいけないって気がしたんだ。……なんかあいまいな理由で申し訳ないけど、こうとしか言いようがないから」

「……でも「それとさ」……？」

「さっき君たちを助けてくれる人間は見たことがないって言うけど、夜羽が会ったことがないだけで、世の中には共存をしようとしている人間はたくさんいると思うよ。だからさ、すべての人間を嫌わないでほしい」

柄にもないことを言ってしまったている。俺はこんな性格じゃないはずだけど。

「……わかった。……あ、そういえばまだ言っ てなかった事がある」

「え、なに？ ……まだなにかあるのか？」

「……その……」

「ん？」

少々躊躇いつつも、ぼそつと言呟いた。夜羽の顔を見るとわずかに赤くなっている。

よほど言いづらかったのだろうか。小さな声だったので、少し聞き取りづらかったけれど、俺にはしっかりと聞こえていた。

——「助けてくれてありがとう」と。

「どういたしまして」

そう返すと、わずかに赤かった夜羽の顔が一気に真っ赤になった。その姿に、かわいいと思っている自分がいて、こっちも顔が赤くなってしまう。

少しの沈黙の後、なぜか可笑しくなり、二人で（正確には一人と一羽だが）笑いあっていた。

「あ、そういえば」

「え？」

笑いも収まったところ、夜羽が唐突に言ってきた。

「お腹は少しすいたかも。傷は体を動かさなければ痛みはない。水は出来ればほしい」

「ん？ え？」

「最初にシユンが聞いてきた質問の答えだ」

「あ……ああ！ ……あ、あれ、か……」

——ああ聞いたな俺。しゃべれないと思ってた相手に。

絶対今、顔赤い。

「わかった。今もってくる。少し待っててくれ」

とは言ったものの、ろくな食べ物が残っていない。それはそうだ

ろ。一人暮らしで基本的には一人分食う量しか買ってきていない。数日分を一気に買ってくる、なんて面倒くさいことは絶対にしないのだ。重いから。

$$\begin{matrix} \vdots \\ \hline \hbar \end{matrix}$$

「どうした?」

「いや、食べ物がるくなもん残ってなくて」

「でも、なんか匂いする」

確かにある。今日の俺の晩飯の残り物だ。——しかしこれは……。

「あー……無くはないが」

とりあえず持つていってから様子を見てみることにした。

「これは何だ？」

「……鶏の唐揚げ……」

「食べていいの？」

「……え？　食うの？　いや、食うか……」
「つーか見たことある気がする」

何？

「いやなんでもない。どうぞ」

唐揚げと水を渡してからフォークを忘れたことに気づき、急いで持つて戻ると、皿から半分ほど唐揚げがなくなっていた。少しと言つてはいたが、意外と空腹だったのかもしれない。

「で、何してる……？」

ただ、今、夜羽が何をしようとしているのかは、よくわからなかった。

「残った。どこかに隠しておいておくの」

よく知らなかったが、どうやらカラスは食量を一定の場所に保管

するようだ。

「待ってくれ。食べ物の保管は俺がやっておくよ。人間はそういう道具も持ってるしね」

「……とられないの？」

「大丈夫だよ。ここは俺の部屋だから」

「シユンのテリトリーってこと？　じゃあ大丈夫だ」

「うん……まあ、間違ってるかい、か」

とりあえず、人間の姿のとき。——いや、この部屋に住んでいるときは、最低限は人間の生活に合わせてもらうことにする。手でものを食べないとか、食べ物を部屋の中に保管しないとか。

気がつくまで静かになっていたので、ふと横目で、夜羽の方を見ると。

「……眠ってる。疲れてたのかな？　……仕方ないか……」

今日一日で、大怪我をし、手術を行い、術後の傷ついた体でここまで飛んできたのだ。疲労が溜まっていて当然だ。

「まだいろいろ聞きたいことがたくさんあったんだけど……まあ、いいか。明日起きてからでも聞く事はできる」

今日は俺も疲れた。さっさと寝たい。——あ、そういえば明日矢島さんと会う約束してたような気がする。困ったな、何をどうやって話そうか。

「……ああ……面倒くさいな……」

余談だが、未だ裸にジャージの上と言つきわどい格好の夜羽を前に、瞬が持てる理性を総動員して、彼女を空いているベッドに運んでいた。

彼と彼女の意志疎通の話。(後書き)

長めでしたが、ほとんどセリフになってしまいました。

勢いで書いていますが、自らの文才の無さに愕然としています…

…。

感想をいただけるとありがたいです。

ちよくちよく修正も入ります。

獣医の驚きと理解と彼の考えの話。

僕は、神尾君を待っている。
落ち着かない。

それもそうだろう。昨日、電話での神尾君の様子は明らかに妙だった。何かに困惑している様子で、なんと言うか彼らしくなかった。

神尾君は昨日、「明日話しましょう」と言っていた。
それはつまり、あのとき状況を整理できていなかったと言う事になる。いつもの彼から考えると、とても珍しいことだ。

何時ごろ来るんだろうか。時間までは聞いていない。

「先生、もうお昼の時間ですよ。」

「！……ああ、すまない」

気づけばもう昼過ぎだった。ずっと考え込んでいたらしい。

「……失礼しまーす」

「あら？ こんにちは、神尾君。いらっしやい。……えーっと、その……」

「こんにちは、春川さん。あーっと、これは、その、後で話しますよ。あはは」

どうやら神尾君が来たらしい。でも、わざわざ昼休みの時間に来るってことは、あまり聞かれたくないのだろう。

「や、神尾君。よく来——って、え？」

「……あははは。……どうも……」

昨日、電話先で神尾君が戸惑った理由が少しわかった気がする。どうも昨日から驚きっぱなしだ。

神尾君の腕には、昨日ここから消えたカラスが抱えられていた。

「……で、いったいどういうことが説明してもらえるんだろうね。神尾君」

「えーっと、まあ、俺が説明できる部分は」

今、ここには僕と、神尾君。——それと、一羽のカラスがいるだけだ。

ちなみに、他の皆は、基本的に外食しているのでここにはいない。春川さんはお弁当だったのだが「私は邪魔になりますから」とわざわざ外出し、公園で食べるそう。本当に空気の読める人で良かった。

「……簡単に言えば、そのカラスがここを脱出して、俺の家のベランダまで飛んできたって事なんですけど……」

「いや、でも、あのわずかな時間でカラスがここを脱出できるなんて考えられないし、この傷で、空を飛んで、わざわざ神尾君の家まで行くなんて……」

「……そんな事言われなくても、実際、ここを抜け出して、俺の家のベランダにいた。それは事実です。それに、俺もよくわかってない、ですよ……」

なんとなくだが、わずかな違和感を覚えた。まるで何かを隠しているような。

それはほんの少しの違和感で、気のせいだったと言えばそれまでだ。

でも、もし何かを隠しているなら、今はそっとしておくべきのよう感じた。

それに僕が今聞いても神尾君を困らせるだけだろう。

いや、彼の事だから、嘘だとばれた時の対処法も考えて来ているかもしれない。

何にせよ彼は、いずれ全て打ち明けてくれる。それまで待つてみるのも悪くない。

「……んー、まあ、何はともあれ、カラスが帰ってきた事には変わりはないさ。これで治療も出来るしね。よかった、よかった」

「あ、その事なんですけど、俺に簡単な治療の仕方を教えてくれませんか？」

「え？ どういうことだい？」

「えっと、ほら、もう手術も終わったし、後は安静にしていればいいみたいだし。だったら俺の家でも出来るんじゃないかと。それに昨日矢島さん、カラスが暴れたって言ってましたよね。でも、俺が触っても暴れたりしないんで、しっかり休めるかなって思ってる」

「もしかして、このカラスを飼うつもりなのかい？」

「……まあ、一緒に住むつもりではありません」

「……野生動物を飼うには申請が必要だったはずだけど」

「……………ばれなければ」

「ああ……めんどくさいんだね？ 獣医として、と言うより大人としてそういうことはしっかりしてもらいたいところだけど、友人として君の性格は知っているからね。申請のほうはこっちでやっておくよ。コネとかもあるし」

「ありがとうございます」

「とりあえず。まずは基礎から教えるけどいいかい？ それと飼うのが無理そうだったり、怪我が悪化したりしたら、すぐにこの病院に連れて来てもいいからね」

「はい」

本当に珍しい事もあるものだ。

神尾君がこのカラスを、動物を飼おうとするなんて
いや、「飼う」って言葉はやめたほうがよさそうだ。

神尾君はわざわざ、「飼う」を「住む」に言い直していたのだから。

彼と彼女の今後の話 (前書き)

いつもではありますが、短いです。そして、相変わらず文章が浮かばずです。

(――；)

彼と彼女の今後の話

矢島さんは納得していないだろう。

そんな顔していた。

矢島さんにいろいろ聞いた後、買い物が必要なことを思い出し、とりあえず夜羽を自宅に連れて行った。

ちなみに夜羽は行く当てもないことからこのまま家に居つくことになった。

しかも家に入るなり、いきなり人間の姿になりやがった。

人間の姿が嫌いだと言っていたから、カラスの姿のまま生活するもんだと思っていたのだが。

当然また、服を着ていない状態だ。

いい加減にしてほしい。

いちいち目を逸らすのも大変なのだ。

「……人間の姿は嫌いじゃなかったのか？」

「そうだけど、シユンと話すのにはこの姿じゃなきゃだめだから」

「何か話す用事があったのか？ いや、その前に何か着てくれ」

「わかった。着る」

そう言っつて、今朝渡しておいた母さんの服を着ながら、話しかけてきた。

「たいした用はないけど……あのヤジマって言う奴は信用できるのか？」

昨日も言っただけど下も穿きなさい。

「ああ、信用できなかったら、怪我をした夜羽をあそこに連れて行ったりしない」

「……それもそっか。」

「……夜羽がもう少し矢島さんを信用してくれたら、ちゃんと紹介しようと思ってる。……あの人は大丈夫だよ」

「シヨウカイ？ ワタシのことを話すのか？ ……うん、わかった」

「それよりも、帰ってきてすぐその姿になるのはやめていただきたい。包帯もほどけるし。せめて、別な場所で服を着て、それから俺の前に現れてください」

「む？ 服を着ないと駄目、と言うことか？」

「そういうことになりますね」

「何故だ？ ワタシはあまり服は好きじゃないんだが」

「何故って……」

俺が目のやり場に困るから。

「えーっと、人間は服を着て生活をしている。夜羽のその姿は、人間と同じ姿だから、その姿のときぐらいは人間と同じように過ごしてほしいから……かな？ 人間嫌いでも、それくらいなら問題ないだろ？」

「……」

「好きじゃないのは仕方ないけど、いずれ慣れるって」

「……」

「それに、えっと……寒くないのか？ その姿だと」

「……むしろ暑い」

.....。

「とにかく、少なくともその姿のときは我慢してほしいな」

「.....わかった」

「悪いな。.....それと今度、夜羽の服も買いに行くから」

「ワタシの、服？」

「ああ、いつまでも母さんの服だけってのも問題あるからな。サイズ的に。他に着るもんもないし。まあ、どうせなら新しいやつのほうがいいだろ」

「.....ワタシはこれで良い」

「まあまあ、今度見に行くだけでもいいからさ」

「.....むー.....わかった」

なんか、渋々納得した感じだな。

「それじゃあ、ちょっと出かけてくる」

「どこ行くんだ？」

「買い物。食べ物もないし、他にもいろいろ買って来ようかと思っ
て」

「ワタシも」

「無理じゃないのか？ 昨日今日と見てたけどその姿でいるとき動きづらそうじゃないか。その姿に少しは慣れてからの方がいいと思うぞ。だからと言って元の姿の夜羽を連れて買い物行くわけにもい
かないし。.....目立つから」

「.....飛んで」

「まだ安静にしてなきゃ駄目だろう」

「……………わかった」

「よし、じゃあ行ってくる。なるべく早く帰るつもりだから。おとなしくしてるんだぞ」

「……………」

置いていかれて怒っている——と言っより拗ねてんな、ありゃ。

少女と怪我と犬と飼い主の話

朝起きてから、お昼まで家でごろごろして、そのあと、遊びに出かけた。

もちろん、宿題なんてやるはずもない。

遊びに出かけると言っても、特に行く場所もない。ただの散歩だ。

「どーしょーかな」

矢島さんのところには昨日行つたから、今日も行くのはさすがに迷惑かもしれない。

瞬君の家に遊びに行こうか。

——あ、だめだ。私、瞬君の家知らないや。

前、一緒に帰った時は、途中で分かれちゃったから、大体の場所しかわからない。

ふと、目に入った近くのベンチに腰を下ろし、ボーっとしていると、

「こんにちは」

「ふえ？」

突然声をかけられた。

「え、っと……」

「あはは。忘れちゃいました？ 私のこと」

目の前に居たのは、見るからに活発。といった感じの中学生くらいの女の子。

「ご、ごめんなさい……」

「うん、無理もないです？ 私あの時めっちゃ泣いてましたし。でも、こっちは覚えてるじゃ？」

そう言っただけの子の後ろから出てきたのは、大型犬のゴールデンリトリバーだった。

確かにこのゴールデンリトリバーは見覚えがある……。

「あ！ あの時の！」

「うん。思い出してくれてありがとうございます。そしてあの時もありがとうございました」

少し前に瞬君と一緒に怪我をしたこの子を矢島さんの所に連れて行ったのだ。

「もう絶対離したりしたらだめだよ？」

「……うん。もうあんなことは絶対しない」

このゴールデンリトリバーが怪我をしたそもその原因は飼い主であるこの子が、友達との会話に夢中でつないでいたリードを放してしまった事にあるのだ。

もともと、女の子は犬に下に見られていたので、おとなしく待っているなんて事はせず、走り出してしまい、スピード違反のバイクに跳ねられてしまった。

そして最低なことにそのバイクの運転手はそのまま走り出したのだ。

そこに偶然居合わせた瞬君と私が近くの動物病院に運び、事なきを得た。

矢島さんが言うにはもう少し遅かったら手遅れになる所だったそうだ。

「何度も言う形になるけど……この子を助けていただき本当にありがとございました！」

「ううん。命に別状が無かったからよかったよ。えっと……」

「あ、私の名前は高嶺^{たかみね}蛸^{ぼた}つて言います。この子はシヤンです」

「私は飯田愛美。よろしくね蛸ちゃん、シヤンちゃん。もう動いて大丈夫なんだね？」

「はい。少しなら。でも、会えてよかったです。あの時はちゃんとお礼を言えなかったの。あ、っと……その、飯田さん」

「愛美でいいよ。何？」

「はい、愛美さん。あの時私にお説教してくれた方は、どちらに行ったら会えますか？」

「瞬君？ あー私も家は知らないんだけど……どうして？」

「いえ、あの人にもすっかりお礼を言いたくて……」
顔を赤くして、語尾がだんだん小さくなっていく。

会いたい理由が大体わかってしまい、私は心の中でため息をついた。

事故のとき、蛍ちゃんは友達と別れた後、自分の近くにシヤンが居ないことに気づき、あわてて探し出した。その際近くで犬が跳ねられた事を知り、あわてて矢島動物病院に駆け込んだらしいの。

そこで、シヤンの状態を知り、泣き出してしまった。

周りの人は矢島さんを含め、皆慰めようとしたのだが、瞬君は違った。

瞬君は、どうしてシヤンを離れたのかを聞き、涙する蛍ちゃんを容赦なく叱りつけた。

犬の上下関係に対する認識の甘さ。犬を、動物を飼う大変さと命の重みを蛍ちゃんに教えたの。

蛍ちゃんは今までの軽い考えを改め、自分の起こしてしまったことを深く反省してた。

そしてそのまま自らを責めた。

だが、瞬くんは蛍ちゃんの頭に手を置き「反省するのはいい。だけど自分を責めすぎるな」と蛍ちゃんを慰めたの。

飴と鞭にしては、ありきたりかもしれないが、蛍ちゃんの気持ちが楽になったのは私でもわかった。

私は顔を赤くする蛍ちゃんを見ながら考えていた。

当時はわからなかったが今、瞬君の性格から想像すると、あの時瞬君は面倒ごとに巻き込まれ、若干イラついていたのではないかと。

そして勢いで説教してみたが、予想以上に相手がへこんでしまい、

周りの視線も気になった瞬君は、焦って慰めに入っただけではないかと。

あくまでも、私の想像だけ。

「会いたいのなら、あの時の動物病院に行けば居るかもしれないよ。ちよくちよく遊びに行っているみたいだし」

「あ、……はい！　ありがとうございます」

声をかけられて、蛍ちゃんは正気に戻ったよう。

その後、他愛も無い世間話などをして、蛍ちゃんとわかれた。

その間、二人でシヤンをかまっていた。

まあ、犬にいっぱい触れたから私は幸せだったけど。

幸せに浸りながら歩いていると、前から志戸塚君しとつかが歩いてきた。

志戸塚君も同じクラスの……友達、かな？　一応。――志戸塚君

はあんまりそう思って無さそうだけど……。

名前は竜刃たつは。志戸塚竜刃君しとつかたつは。

女の子みたいな名前に聞こえるけど実は、漢字で書くときごく男の子らしい名前になる。

志戸塚君は自分から目立とうとしない。それは瞬君と同じだが、志戸塚君はさらに上に行く。

志戸塚君は、人との関わりをシャットアウトしようとするのだ。

だからといって完全に独りになるわけじゃない。

私が話しかけると、嫌々ながらも、ちゃんと受け答えしてくれる

し、実は瞬君とも仲がいいのも知っている。

多分、瞬君と同じ、いや、それ以上のめんどくさがり屋なのだ。

それでも、私が授業で出た課題で悩んでいると、教えてくれたころもある。

実は結構いい人なのだ、志戸塚君は。

今回も宿題が終わらなかった場合の最終手段として、志戸塚君のメルアドをゲットしてあるのだ。

——あ、いや、あくまで最終手段だよ？

「やあ、志戸塚君！ こんにちは」

ん？ 私、何か変なこと言ったかな？ なんか固まっている。考え事、かな？

「……………宿題？」

「ち、違うよ？ 今日会ったのは偶然だよ。宿題を教えてもらおうとしたわけじゃないよ。……………まだ」

「……………まだ……………」

「い、いや！ 聞かないよ？ 多分。わからなかったときの最終手段として連絡先聞いただけだし」

「……………絶対、今のところ一つもやってないでしょ」

「……………い、いや？」

「声、裏返ったよ？ 目も泳いでるし」

「……………」

「もういいよ……………。連絡は早めに。全部教えるのは時間かかる」

「ついや！ 全部じゃないから！ 少しは終わらせるから！」

「……………そう。じゃあもう行くから」

「あ、うん。じゃあまたね」

なんか学校にいるよりも志戸塚君と喋った気がする。

——それにしても志戸塚君……宿題、全部やってなくても教えてくれるんだ！……やっぱりいい人だな！。

「あら？ 飯田さん？」

……あんまり会いたくない人にも会っちゃったな！。

少女と怪我と犬と飼い主の話 (後書き)

感想お待ちします。

独りの男の遭遇と憂鬱の話。(前書き)

気が付いたらポイントが入っていたり、お気に入り登録されて
ありがとうございました！

ありがたい限りです！これからも頑張らせていただきます！

独りの男の遭遇と憂鬱の話。

もう、動きたくない。

別にそれなら動かなきゃいい話だが、動かなきゃ動かないで暇だ。そんな事を考えているうちに一日が終わることが多い。どうしようもない駄目な人間なのはわかつている。

だがそれが僕だ。

それは変えようがない。

——って言うか変えるつもりなんて一切ない。

めんどい。

しかし、ごく稀に体を動かそうと言う気になることもある。

ごく稀に、だ。

本当にやることなく、夏休みが始まってから始めて外に出かけた。

まあ、間違いだったような気もしないでもない。

基本的に外に出てもやることなんてほとんど無いのだが、出来ることなら、知り合いには誰とも会いたくない。

会ったところで話しかけてくる奴などいないだろうけど。

とにかく長い休みの間は誰とも会わないのが僕の流儀だ。

とりあえず、外へ出たついでに、家にいる間の暇つぶしの本を調達しに行く。

家にある書庫の本は全て読んでしまったし、夏休み前に調達した本も、三日で読み終えてしまった。

前回、夏休み前に購入した本は、持って帰るのがダルだったので、十冊程度しか買わなかったのだが、それでは少なかったようなので、今回は三十冊買って帰ることにした。

疲れる事はしたくないし、本当にめんどいが、家から書店までの距離でタクシーを使うのは嫌だ。

そもそも、タクシーの運転手との会話が嫌だ。

「……………仕方が無い」

意を決し、書店に向かった歩き出したところで。

「やあ、志戸塚君！ こんにちは」

最悪だ。

飯田愛実ではないか。

まさか話しかけてくるなんて。

そもそも彼女と関わってしまった事は大きな間違いだった。

彼女はなぜか学校でもやたらと僕に話しかけてくる変わった奴だ。最初の方は無視していたのだが、どれだけ無視しても話しかけてくる。

結局いつの間にか返事をしてしまっていた。

何故返事をしたのか考えたが、自分でもよくわからなかった。

とりあえず、無視しても話しかけてくる彼女のしつこさに負けてしまったと自分では結論付けている。

ともかく一度返事をしてしまったせいで、その後も何度か話しか

けてくるので、しかたなく適当に返事をしていた。

しばらくは、それで何とかなっていたのだが、ある時、授業で出た課題に取り組む彼女に、僕はつい答えを言ってしまった。うーうーうなっていて煩かったのだ。

おそらくこの行動がなければ、今のような状況に陥ることはなかったであろう。

彼女はその問題を解くのにかなりの時間をかけていたようで、その答えの出し方を教えさせられ、ものすごく感謝されてしまう。

それ以来、話しかけてくる回数が増え、夏休みに入る直前なんて「もしかしたら宿題教えてもらうことになるかもしれないから、メルアド教えて！」などと言ってきた。

すでに抵抗は無駄だと知ってしまった僕には、教えることにした。

人生、諦めが肝心だ。

とりあえずこのタイミングであつたならば。

「……………宿題？」

そう思って聞いてみたのだが、どうやらまだ違うらしい。だが、まだと言っていた。近いうちに確実にメールがあるだろう。

「……………疲れた」

話した時間はわずかだが、だいぶ氣力を奪われた気がする。

思わず近くのベンチに腰を下ろしてしまった。

まあ、人と会話をしたこと自体が久しぶりだし、仕方がないと言えは仕方がないのだが。

しかし、すでに本を買いに行く事自体が若干めんどい。

それでも買いに行かなければこの先暇すぎる。

「……………仕方が無い」

さっきも言った様なセリフを吐き、僕は立ち上がろうとした。

しかし、あいにくそれは犬に遮られた。そして尻尾はものすごく振っている。

「こら！ シャン！ だめでしょ？！ 迷惑かけちゃー！」
「……………」

中学生ぐらいの女の子がそういうと犬はすぐに大人しくなる。
しっかりとしつけがされているようだ。

「すみません！ 最近はこんなこと無かったんですけど…………。って
なんかすごく懷いてますね。動物に好かれやすいんですか？」

「……………いや」

どうだろうか。あまり動物と触れる機会など無かったのでよくはわからない。

「ほら、行くよ？ シャン。おにーさんも迷惑かけてすみませんでしたー！」

「……………」

飯田愛美と似た雰囲気を感じた。さらに、疲れた。

「……………仕方が無い」

本日三度目の同じセリフで行動を開始した。

その足取りは重い。

少女と看護士の邂逅の話。

「あら？ 飯田さん？」

「……こんにちは。春川さん」

「こんにちは。飯田さんはお散歩？」

私は正直、春川さんの事があんまり好きじゃない。
だってなんか瞬君が私より春川さんに心を開いてるような気がする。
て。

「はい。春川さんはどうしたんですか？ 今日仕事じゃありませんでした？」

「ええ。今はお昼の時間だったから。外に食べに出てたの」

「そうなんですか？ でもどうしてまた？ いつもお弁当でしたよね？」

「んー、今日はちょっとね」

「……そうですか。それじゃあ、私はそろそろ行きます」

「あっ！ ちょっと待って！」

「……なんですか？」

今、すごく不機嫌そうな声が出た気がする。
折角話しかけてくれたのに、私、最低だ。

「さっき、うちの病院に神尾君が来ててね？ 先生といろいろ話していたみたい。何か相談があったらしいの」

「？ それがどうかしたんですか？」

私の知らない瞬君の話がこの人から聞くのは、なんとなく嫌だった。

理由はわかってる。
ただの嫉妬だ。

「うん。でも先生に出来る事ってやっぱり限られてるから、飯田さんも力になれる事もあると思う」

「？」

「今回、神尾君の手助けをしてあげること、一気に近づくチャンス！　ってこと」

「え？　いや、あの、いきなりそんなこと言われても……」

「私は二人のこと、応援してるの！」

「……でも、瞬君はどっちかって言うと、春川さんのほうが……」

「そんなことない！　多分、神尾君にとって私や先生は、何か遭ったときに頼る、拠り所のような存在だと思うの。その証拠に、今回も先生のところに相談に来たし、前に一度私のところにも相談に来た事がある」

「拠り所……」

「そう、拠り所。今は、私や先生くらいしか神尾君が頼ってくれるような人はいないけど、飯田さんにもそういう存在になれると思うの。私個人としてもなあってほしい。だから、私は応援してる」

「……あの……」

「？　何？」

「……えっと……どうして、春川さんはそこまで瞬君のことを気にかけたりするんですか？　……何か、あるんですか？」

「……」

え……春川さんのこんな顔は初めて見た。

——すごく、悲しそうな顔。

「あの、」

「……似てるのよ……。四年前に病気で死んだ弟に……」

「……弟さん……？」

「ええ、顔、とかじゃなくて……雰囲気みたいなものが。それにあのちょっとめんどくさがりな性格も少しね。だから……少し思い出しちゃって」

「……あ、えつと、ごめんなさい……」

「いいの、気にしないで？ 私は多分、神尾君と弟を重ねちゃってるの。だからかな？ 神尾君には幸せになってほしくて。……あ、もちろん飯田さんにもね」

「……ありがとうございます。……私、もう少し頑張ってみます。」

「うん。応援してる」

「………つらいこと聞いてしまつて、本当にすみませんでした。」

「あははは、大丈夫、気にしないでつてば。あ、そろそろ昼休みが終わりの時間みたい。それじゃあ、またね」

「あ、はい、また。……あの！」

私は急いで病院に戻ろうとする春川さん呼び止めた。

「んー？」

「あの……名前、で呼んでいいですか？」

「……いいよ。だったら私も飯田さんのこと愛実ちゃんって呼ぶことにする。あ、でも一応私のほうが年上だから、さん付けぐらいはしてね？」

春川さん、じゃなくて静香さんはそう言うと、いつもの大人っぽい微笑じゃなくて、子供の様に悪戯っぽく笑った。

「わかってますよー」

からかわれているのが照れくさくて、顔が赤くなってしまう。

静香さんは私の顔を見て、少し笑いながら走って病院に戻っていた。

静香さんが見えなくなった後、正直、自分で自分が嫌になった。

私はやっぱり馬鹿だ。

ただの嫉妬であんなにいい人を勝手に嫌って、何も考えずに静香さんを傷つけてしまった。

気が付けば、近くの壁に頭を打ちつけながら自己嫌悪に陥っていたみたいだ。

おでこが痛い。

少女と看護士の邂逅の話。（後書き）

そろそろストックが切れ始めました・・・。

申し訳ないですが、今までのように連日更新が難しいかもしれません。

しかし、まだ頑張りますので、応援よろしくお願いします！

彼の気まぐれと観察の話。

無かったことや、放っておいた方がいいことなんてのは世の中、たくさんあると思う。

そして今は、見なかったことにしたい。

——っていうか見なかったことにしようかな？ よし、そうしよう。壁に頭を打ちつけながらなんかぶつぶつ言ってるクラスメートなんて気にしない。

「あ……瞬君……」

見つかった……。ほんと、面倒くさい。

「……………何、してんの？ 壁に頭なんか打ちつけて」

「え？ あ、その、い、いろいろあって」

「……………ソーデス力」

「またその返事！」

「何でもいいけどやめたほうがいいよ。そういつこと。周りの皆さんめっちゃ引いてたし」

「え？」

彼女は周りをぐるっと見回すと一気に顔が赤くなった。今頃、通行人の視線が気になったらしい。

「何があったか知らないし、言いたくないなら聞くつもりもないけど、出来れば常識的な行動をとったほうがいいよ。……出来れば、だけど」

「ちよっ！ 出来ればって！ 出来るから！ 普通に！ み、見くびらないでほしいな」

「……そう」

少し無理して笑っているように見えた。その顔を見るうちに、俺は、何か胸の奥がモヤモヤしている気がした。

「それじゃあ、俺は行くから」

「えっ！ あ、ど、どこ行くの？」

「買い物」

「へー、そっか。じゃ、じゃあ、またね」

「……飯田さん」

「え？」

「………暇なら、手伝ってくんない？ 荷物多くなるかもしれないし」

「……え！ て、手伝い？」

「うん。嫌ならいいけど、ジュースぐらいなら奢るよ」

「嫌じゃない！ 手伝うよ！」

「そう」

気が付いたら手伝ってくれるよう頼んだ。

何でだろう。

普段はこんなことなんて絶対言わないし、そもそも荷物が多くなる予定なんてない。

ただ、なんとなく。

少なくとも、こいつは——飯田愛実は、いつもみたいに馬鹿みたいに騒いで、いつも通りの顔で笑っていればいいと思ってる。

「そうだ！ 今日ね、昼から出かけたんだけど、結構いろんな人と会ったんだよ」

「……いろんな人？」

「そう！ 最初はね、蛍ちゃんと会った。あ、蛍ちゃんはその時病院に連れて行った犬の飼い主の。今日はシャンちゃんの……あ、犬の名前ね？ 散歩中だったみたい」

ああ、あの時の子か。

——無責任な飼い主だと柄にも無く説教をたれて泣かせてしまった女の子。

本当にやりすぎてしまったが、後悔先に立たず、か。

「蛍ちゃん瞬君に会いたがってたよ？ あの時の事を謝りたいのとお説教してくれた事のお礼がしたいんだって」

「お礼？ なんで」

「勉強になったって事じゃない？」

どうやら真剣に受け取ってもらえたのかもしれない。

「そういえばさ、瞬君。シャンちゃん名前の由来って何かな？」

「シャン？ 確か……フランス語で、犬って意味だったはず」

「そのまんまなんだ……」

ふと、夜羽の顔を思い出した。……夜羽って名前、気に入ってるんだろうか。

「まあ、どんな名前だって気に入っているんだったらいいよね」

「……ああ」

「その後すぐに、志戸塚君に会ったの」

「志戸塚？ あいつ休みの日でも外に出るんだ」

「どんなイメージ！」

「いや、自分で言ってたぞ。だるいからあんまり外に出ないって」

「すっごい、めんどくさがりだ……。瞬君そっくり。仲もいいしね」
「仲いい？ あいつと？ 俺が？」

「うん、瞬君が学校で自分から話しかけるのって志戸塚君だけじゃない？」

「あー、そういえばそうかもしれない」

最初に見たときから思っていたことだが、あいつと俺は少し似ている。

もちろん顔とかではなく、性格。

あいつも俺と同じ——いや、俺のはるか上に行くめんどくさがりだ。

そういうところもあり、俺が話しかけるのはただ、他のやつらより少しは一緒にいるのに気が楽なのだ。

「でも、まあ、仲いいってほどではないよ」

「えー、そーかな？ あ、それでね、宿題のこととか話したんだ」
「……………」

「？ ど、どしたの？」

「……………」
「え？」

「あいつ、人と話したのか……！！？」
「え！ それそんなに驚くことかな！」

驚くことだ。学校にいるときでさえ、俺以外があいつに話しかけて返事が返ってくるのは、ごく稀だと言うのに。

——あいつが休みの日に出かけ、さらに話しかけたら会話が成立するなんて！

「それで、志戸塚君と話した後、静香さんと会ったの」
愛美は、驚き戸惑っている瞬をおいて、話を進めた。

「静香さん？ 春川さんか？ 飯田さん、春川さんのこと名前で呼んでたっけ」
「あはは、今日いろいろ話して仲良くなったから呼ばせてもらうことにしたんだ」

また、無理して笑っている。
どうやら春川さんと何かあったようだ。

「……なあ、「あ！ ほら、もうすぐスーパーに着くよ！ 早く行こ！」……ああ」

話を聞こうと話しかけたが、ちょうど目的地の近くまで来てしまい、彼女は先に走って中に入ってしまった。

「……………ま、あいつの問題だ。放っておくか。……………てか面倒くさい」

彼女の悩みと小さなイライラの話

暇だ。

暇すぎる。

シュンがカイモノに出かけてしまっただけでワタシはやることがない。

最初のうちはテレビとか言うものをつけて、見ていたのだがあまり面白くない——と言うか意味がわからないので消してしまった。

空を飛びたいと思わなくてもいいが、まだ怪我が治っていない。
ゼツタイアンセイだ。

「……あの時、いったい何があったのだろうか」

夜羽は自分の怪我を見つめ、呟いた。

あの時、気がついたらワタシは怪我をしていた。何かなんだかわからないまま、逃げ出した。

近くに居た仲間みんなやられてしまった——と思う。でももしかしたら生き残りがいるのかもしれない。だとしたらすぐにでも探さない。

その為には怪我が治してここを。

「……………出なくちゃいけない」

そんなことは分かっている。

元々は少しだけ話をしたくて会いに行っただけ。

ただそれだけだった。

でもここを——シユンのそばを離れたくないとも思っている。

自分でも変だと思う。

でも事のほかここでの生活が心地よい。

「……………これからどうしよう」

とにかく、まず怪我を治そう。

考えるのは、後だ。

「……………暇、だなあ……………」

気が付いたら目をきつく瞑っていた。

そうする事で、今ワタシが置かれている状況をも、見ない様にしたのかもしれない。

「ただいま」

奥から聞こえるシユンの声で目が覚めた。目が覚めた、と言うことはどうやらワタシは眠っていたらしい。

それよりも早く帰ると言っていたのに、ずいぶん待たされた気が

する。

「一人暮らしなのに、ただいまは言うんだ」

文句を言ってやろうと立ち上がったが、知らない声が聞こえて、驚いた。

「まあ、たまには。それより、もうここでいいよ。後は中に運ぶだけだし」

「……うん、わかった」

「今日は悪かったな」

「いやいや、気にしないでいいよ？ まあ、どうしてもって言うんだったら、毎日ジュースとか奢ってくれてもいい」わかった、気にしないでおく。まったく」早っ！ まだ全部言ってないよ！」

姿は見えないが、どうやら女のようだ。

それにシユンの声は、なんだか、楽しそうだ。

「ま、とにかく助かったよ」

「うん、また何かあったら言ってくれていいから」

「あー……考えとく。………それとさ」

「ん？」

「何があつたか知らんが、あんまり気にするな」

「……え？」

「何も考えず能天気なのがお前だ」

「ちょっ！ 酷っ！」

「とにかく、いつも通りでいいんだよ」

「………うっ………」

「……まあ、それだけなんだけど。……じゃあ」

「ふえ?! あ、うん。じゃあまたね。……あのさ」

「なに」

「えっと、その、……ありがとう」

「……………おお」

足音がすごい勢いで聞こえる。走って帰ったみたいだ。

「あー、ただいま。遅くなってすまなかった。買う物が多くなつてな」

シュンの顔が若干赤くなっているのが目に入り、ワタシはイライラが少し強くなる。

——なぜだろうか？

「……………」

「あー……悪かった。遅くなったこと怒ってるんだろ？」

確かに遅かったことは少し怒っていた。でもそれ以上に、

「……………さっきの、誰？」

「? さっきの? ああ、聞こえてたのか。あいつの名前は飯田愛実。あいつは俺が通ってる学校で同じクラスの奴だ。学校については教えただろ？」

今日の朝、ニンゲンの事を少しでも教えてもらった。

それとシュンの事も。

その時に、ガッコウの事も確かに教わった。

「今は確かナツヤスミで、ガッコウは無いんじゃないかったか？」

「そつだよ。会ったんだよ。偶然な。で、暇そつだったから荷物持ち頼んだんだ」

「それで、イイダマナミとやらはお前とは仲がいいのか？」

「あー、どうだろうか。個人的に言えば懐かれてるだけのようないつもするけど」

何か胸の奥のほうがちクちクする。

「……イイダマナミと話しているお前は、どこか楽しそつだった」

「俺が？ ……そつかな。まあ、他のやつと話すよりはマシだと思つ」

シユンから、そんな話は聞きたくない。

だつたら聞かなければいいのだが、質問をやめる事が出来ない。

「ふーん……イイダマナミとお前は……恋仲、なのか？」

「……は？ 違つよ。何でそつなるんだ？」

その言葉を聞いたとき、わずかにイライラが収まつた。

理由はよくわからなかつたが、少し安心感があつたこともあり、ついで言葉を漏らしてしまつた。

「……そつ。……なら、いい」

彼の大きな動揺の話。

「……………」

俺はなんて返事をしたらいい。

いや、単なる聞き間違いなのだろうか。

そもそも、帰ってきてからの夜羽の様子がおかしかった。

少なめの買い物の予定だったがかなりの量になってしまい、本当に飯田に荷物を持たせる事になってしまった。

元々はそんなつもりなかったのだが。

買い物中も結局、飯田の隠している事を聞くことは出来なかった。と言うよりしなかった。

もちろんいつも通り面倒くさかったのもあるが、なんとなく言いたくなったら自分で言う気がしたからだ。

家まで案内して、玄関先で少し話をした。

俺は言いたい事を言ったただけなのだが、感謝されてしまった。

しかも、気が付いたら飯田はいなく、足音だけ聞こえる。

あいつ礼を言い終わった途端、ダッシュ帰って行きやがった。

言い逃げだ。

不意なお礼に少々照れてしまった。

そこで気が付いたが、今まで誰かを家まで連れてきたことはなかったと思う。

連れてくる理由がなかったからだ。

自分でも気づかない内に少しはあいつに気を許していることに驚いた。

とりあえず、遅くなったことを夜羽に謝りながら部屋に入る。

もちろん返事はない。

当然遅くなったことを怒っているものだと考えていたが、その後の夜羽からの質問は遅れたことにはまったく関係ないことばかりだった。

意味がわからないまま答えていくが、一向に夜羽の機嫌は直らない。最後の方には「恋仲なのか？」とまで聞かれた。

——いやいやいや、お前は、クラスメートか！

とりあえずそこは、はっきり否定しておいた。

そして次だ。

俺は、どうしてそんなことを聞くのか聞こうとした。

「……そう。……なら、いい」

……特に深い意味はないのかもしれない。
いや多分ないのだろう。

だが、俺をフリーズさせるには十分な一言だった。

無意識だったとしたら、本音と言うことになるのかも。

だとしたら、つまりは……？

「（いやいやいや！　いいように考えすぎだ！　自意識過剰にも程がある！）」

聞き流したほうがいいのか、追求してみたほうがいいのか。
どうしたら良いのか全く分からない。

そして、夜羽もそれ以降口を開こうとしない。

膠着状態だ。

それからしばらくの沈黙の後。

「……お、おなかすいた」

「あ、ああ、悪い。今準備する」

やはり、深い意味なんてないのだろう。

とにかく俺は、考えることを放棄して、食事の支度に取り掛かった。

食事の後、矢島さんに教わった怪我の治療をし、夜羽に言葉や人間の日常生活について教えて一日が終わった。

しかし、買い物から帰って来た後の一日、あの「ならいい」発言が頭に残っている。

気にしても仕方がないのだが。

それとは別に気になっていることがもう一つ。結局、病院から帰ってからの夜羽は一度もカラスの姿に戻ることなく、人間の姿で過ごしていた。

人間が嫌いであの姿も嫌いと言っていたのに、何かあったのだろうか。

彼の大きな動揺の話
(後書き)

感想お待ちします。

彼の案内と彼女の冒険の話。(前書き)

一日間があきまして、すみません。

彼の案内と彼女の冒険の話。

次の日も夜羽は人間の姿のままだった。

「動きの練習する。置いてかれるの、や」

どうやら、昨日待っていた間とても暇だったらしい。

さすがに何度も言い聞かせたおかげで、今では何も言わなくても服を着てくれるようになった。

それでも自分のサイズに合わない服を着ているせいか、あまりいい機嫌だとは言いがたい。

「じゃあ、そろそろ夜羽の服でも買いに行くか」

「また置いていくつもり？」

「いやいや。さすがに婦人服売り場に男一人で踏み入れる自信は無い」

「なんで？」

「いや、行けばわかる」

「？」

結論から言うと、店についてから、服を買うまでは割とすぐ終わった。

最初にまず夜羽には、店に入って俺以外の誰かから話しかけられたら、適当に返事をしてもらうよう言っていた。

これで妙なことを言って怪しまれることは無い。

ただ、夜羽はまだ人の姿だと動きにくいようで、たまによろよろしていたので、そこは包帯していることと、予め「怪我をしているから気をつけてほしい」と店員さんに言っておく。

これでいろいろ深く突っ込まれることも無い。

そして、次は俺の話術で何とかするしかない。

瞬は学校で、クラスメイトに自分から関りあうようなことはしない。だが、孤立するようなことは無い。

適度な交流関係を築き、孤立することがあれば、おそらく話しかけてくるクラスメイトはいるだろう。

グループを作れといわれても、余りものになることはないだろう。

ただそれは友達と呼べるものではない。

卒業したら会うこともなくなるような薄い関係性。

それでも学校で孤立してしまうほうが、自分にとって面倒なことになるのを理解している。

瞬は人と会話が出来ないのではなく、普段は面倒なだけなのだ。

「怪我をして落ち込んでいる彼女に、いくつかプレゼントしたいのだが、彼女はファッションにはあまり興味がなく、大人しい性格で少し無口な子なので、コーディネートのお任せしたいのですが」

「ま、やさしい彼氏さんですね？」

夜羽は言われたとおり、適当に首を縦に振った。

その後も、夜羽は相槌を打つだけでよかった。

と言うより夜羽は店員の勢いに押されているだけの様子だ。

そして俺はその間、店員さんが選んだものを着た夜羽に感想を言い、買い物は終わった。

終わってみたら結構な金額になって少し驚いたが、まあ気にするほどでもない。

「……………」

ただ、夜羽はこれ以上ないといっていいほど疲れているようだった。

「だ、だいじょぶか？」

「……大丈夫に見えるなら、シユンはおかしい」

すごい眼で睨まれてしまった。

だいじょ立腹のようだ。

「でも、一人では入れそうにないってのはわかってもらったと思う」「それはもう、十分すぎるほど」

「……どこかで休むか」

夜羽は何も言わずにうなずいた。

とりあえず近くにあったのは、自然公園だけ。

この自然公園はかなりの大きさを、町の人の散歩の定番となっていた。

と言う俺も暇なときは、よく中をふらつくこともあった。

人ごみは嫌いだが、うまく探せば静かな場所は結構あるのだ。

とりあえず、人通りの少ない木陰のベンチを探し出し、そこに座る。

夜羽はよほど疲れていたのか、うつむいて黙ったままだ。

「（……さて、どうしたもんか）」

と、少し遠くに眼を向けると、一台の車を見つけた。

「（ふむ、疲れたときには、というやつだな）」

俺は即座に行動に移った。

彼の案内と彼女の冒険の話。(後書き)

今後も更新ペースは落ちるかもしれませんが、見捨てないでいただけると幸いです。

ある出会いと彼女の衝撃の話（前書き）

ポイントもお気に入り人数も増えてました！
ありがたい限りです！これからも頑張ります！

ある出会いと彼女の衝撃の話

ワタシはとても疲れていた。

なれないこの姿での行動に加え、あのテンインという奴らはとにかく話しかけてきては、ワタシに服を着せる。しかもそのたびにシユンに見せに行き、一言シユンが言つとまた、ワタシに服を着せていった。

いったい何だというのだ。

大体、一回一回シユンに見せる必要はないと思う。
そのせいで何度顔が熱くなつたか。

「（やはり、これは全てシユンのせいだ！！）」

怒りを乗せて隣に座っているニンゲンをにらみつけ

「？ あれ？」

ようとしたが、そこにシユンは居なかった。

周りを見回したが、近くには居ないようだ。

「むむ！ ワタシを置いて一体どこに！」

ワタシは立ち上がって、探し出そうとした。

「悪い！ 待たせたな！」

立ち上がった直後、遠くから声が聞こえ、その方向を見ると、シユンが駆けってくる。

手にはなにか持っているようだ。

「……なにを」

「これ」

「？」

シュンが手渡してきたのは、何かの筒に白く丸い物がのっかっているものだった。匂いから察するに、食べ物のようだ。

「これは？」

「アイスクリームっていうやつ。まあ、食べてみな？」

シュンが食べられないものを持つてくるとは思わなかったが、恐る恐る、少しだけ口に含んだ。

「……！！」

何だこれ！ 冷たいものが口の中に入ってきたと思ったら、徐々に溶けていき、さらにその間にも、口の中には味が広がっている！
しかも、おいしい！！

冷たいものだったので、がつついて食べることは出来なかったが、ワタシはすぐにその、アイスクリームを租借していった。

「喜んでいただいたようで何より」

「……！！」

チラッとシュンを見ると笑顔でこちらを見ていた。

なんとなく恥ずかしくなり、誤魔化すように咳払いをした。

「こほん。……とりあえずさっきのは許す」

実際、アイスクリームのおかげで先ほどまでのイライラは吹き飛んでいた。

「そりゃどうも」

シュンは相変わらず笑顔のままだ。

「……………もう一個」

「だめ。食べすぎはよくない」
「……けち」

ワタシの文句も聞かなかったように、シユンは話を進めていく。

「とりあえず、もう少し休んでから、家に帰るか……」
「……家」

頭に浮かんだのは、自分がすんでいたはずの場所。

今、あそこはどうなっているのかは全くわからない。

調べにいこうにも怪我が治らない事には始まらないと自らに言い聞かせてはいたが、ふと思いついてしまった。

「……大丈夫か？」
シユンもワタシの様子に気づいていたようで、心配したように訪ねてくる。

「大丈夫。問題ない」
「……そう。じゃ、そろそろ帰るか。家に」

「……どうして……」
——シユンがわざわざ同じ事を言ったのは、今ワタシが帰る場所はシユンの家だと言いたいのにはわかった。

でも、わからないのは何故ワタシをそこまで気遣ってくれるのかという事。

「俺ん家にいるからだ」

「？」

「理由や状況はどうあれ、今夜羽が俺ん家に住んでいるのは確かだ。面倒は嫌いだ、親の教えで家に招いた相手は自分に出来る最大限のもてなしをしろって言われてんだ」

「でも、招いた訳じゃない」

「招いただろ？ ベランダの窓開けて。それに理由や状況はどうあれとも言ったろ？ 死んだ親の教えだ。破るような真似はしたくない」

そう言ってシュンは笑った。

——やっとわかった。面倒くさがってはいるけど、シュンはいいやつだ。ニンゲンの言葉で確か……そう！ オヒトヨシだ！ シュンはオヒトヨシだ！

「なんか、非常に不本意な評価をもらった気がするぞ……………」

「そんな事ない。そろそろ帰ろ？」

「……………ああ」

ある出会いと彼女の衝撃の話（後書き）

今後の展開は浮かんではいるんですが、どうつなげるかが悩みどころです。

感想が頂けるとありがたいです！

彼の彼女についての考えと空気の存在の話

夜羽がうちに来て、三日がたった。

驚いたことに、夜羽の怪我が治る速度はかなり速かった。

これならすぐに良くなるだろう。

本人も早く飛びたいとぼやいていた。

この三日間、動きの練習のため人の姿で外に出るようにもなり、少しづつ人間に対する負の感情も薄れてきてはいるようだ。

そして夜羽には、人間としての常識も少しずつ教えていった。どうやら人の姿のときは体質まで人と同じになるようだ。

いつも料理のときは、鳥の体に悪影響なものを考えながら作っていたが、隣で生ごみを見ていた夜羽がつぶやくように、

「いつもの姿のときに平気で食べていたものが、なぜかこの姿のときまったく食べたいとは思わない。と言うよりなんか気持ち悪い」と言い出したのだ。

思えば、食材を考えながら作ったとはいえ、味付けは人間のものとえ続ければいくらカラスでも毒になるかもしれない。

しかし、夜羽の体調にまったく変化はない。

やはり、わからないことが多すぎる。なにせ夜羽自身も、人の姿になれることに關して、理由などはまったく知識がないのだ。

「シュン？」

「ん……なんでもない。それより、怪我也だいがよくなってきたよ
うだし、一回矢島さんのところで見てもらおう」

人の姿になれることはとりあえず置いておこう。

どうせ考えたって答えは出ない。

何より考えることが面倒くさい。

ただ、それとは別に少し気になることがある。

それは夜羽は怪我が治っていくにつれ、なにやら考え込むことが
多くなっている事。

だが、それはおそらく本人の問題。

口を出すことはできない。

「ん、わかった。行こう」

そう言って、夜羽は玄関まで向かった。

「……って、ちょっと待て！ その姿で行くつもりか！」

「あ、そうか。今戻る」

ポンッ！ という音とともに夜羽はカラスの姿になった。

怪我の具合を見るときはいつもこの姿になってもらっていたので、
すでに見慣れた光景だ。

俺は夜羽を抱きかかえ、家を出た。

「矢島さんいますか？」

「ああ、神尾瞬君。矢島先生なら今、診察中だから少し待っててねー」

「はあ、臼井^{うすい}さんは行かなくて大丈夫なんですか？」

「僕は別の患者を診てたからね。っていうか僕、臼井^{うすい}って名前じゃないからね？ 大村^{おおむら} 洋二^{ようじ}って名前があるから。ああ、その子が噂のクラスか」

大村洋二。第一印象は、半人前。と言うより、印象が薄く、初めて会ったときは、一緒の部屋に三十分も居たのに、俺は気づきもしなかった。

年齢は二十代前半にも見えるが、実際は謎とされている。三十歳後半だと言う噂もあれば、矢島さんと高校時の同級生だと言う噂、実は還暦を迎えてるんじゃないかと言う馬鹿げた噂まである。

「臼井半人前。うるさいです。馬鹿ですか？」

「ひ、酷い言い様だな……。さっきも言ったけど、僕、臼井じゃないよ？ それに半人前って僕、結構長いんだよ？ この仕事始めてから。まあ別にいいけど」

「……………」

「あー無視かー」

この人とはいつもこんな感じなんで、お互いあまり気にはしてない。

「ああ、神尾君。来てたんだ」

診察室から犬を抱いた飼い主が出てきて、そのあとすぐに矢島さんが顔を出した。

「こんにちは。今日は一回こいつの診察してもらおうと思って」

「うん、わかった。だったらこのカードに必要事項を書いというて」

「……………め「面倒くさいってのは聞かないからね？ 今日遊びに来たんじゃなくて、診察に来たんでしょ？」……………はい」

俺は渋々、カードに記入していった。

この間、臼井はずっとその場にいたのだが、空気となっていたので、誰も何も言わなかった。

ただのサボりだ。

彼を焦らせる彼女の話

診察自体はあっさり終わり、数日分の治療に必要な道具をもらった。

ちなみに空気となりサボっていた臼井さんは、春川さんに見つかり、説教を食らっていた。

診察中、矢島さんは何か探るような目でこちらを見てきたが、あくまでこちらから話すまで事情は聞いてこないだろう。

矢島さんはそういう人だ。

「それじゃあ、矢島さん。春川さん。……………あ、臼井さん。さよなら」

「うん。またおいで……………って獣医の僕がそれを言ったらだめか」

「先生、今度は患者さんを連れずに遊びにおいで。でいいんですよ。神尾君、またね？ あ、愛美ちゃんによろしくね？」

「今、僕のこと忘れてたよね？ 神尾君。それに僕は臼井じゃ……………
つてもういないし……………うん、もう臼井でいいや」

瞬は動物病院を出て、とりあえずいつもの自然公園に足を踏み入れた。

「あの人らはいつも元気だな……………。てか、春川さんは何で飯田愛美のことを…………？」

いろいろ考えを巡らせていると、腕の中で夜羽が小さく鳴き、若干暴れている。

「？ な、なんだ？ ……もしかして、人の姿になりたいのか？」
それを聞いた夜羽は首を縦に振った。

「ち、ちよつとまで。いくら人気がないといっても、ここはまずい。どっか隠れられる場所は」

瞬は大いに慌てた。何せ夜羽が今、人の姿になるというのは、誰かに見られる可能性があるだけじゃなく、見られずにすんだとしても、彼女は何も着ていない状態になってしまうのだ。

幸い、今までしつこく言ってきたおかげで、いきなり変わるような真似はしなかったが、待たせすぎたら、痺れを切らす可能性がないわけじゃない。

すると夜羽は嘴で持ってきたカバンをつつき始めた。

「？ なんだ、あけろってことか？」

またも夜羽は首を縦に振った。

瞬は示されたとおり、カバンを開けてみると、そこには以前に買った夜羽の服が入っていた。

「……いつの間に……。出かける前に入れたのか」

瞬はため息をつきつつ、近くの誰も近づかないであろうトイレに夜羽とカバンを置いて外に出る。

しばらくすると、夜羽が着替えて戻ってきた。

「誰にも見られてない？」

「……あんな臭いのするトイレには誰も近づかない」

「そうか……。だが、外で変わるときはああいう場所ぐらいしかないぞ？ だから、あんまり外でヒト化するとかは言うな」

「……わかった。なるべく家にいるうちに人間の姿になる。それより、ヒト化って……」

「いや、変わるだとか、人の姿になるとかって長くて言いづらくていいけど……」

いいとは言っているけど、あまり納得しているようには見えないが。

「んで？ 何でいきなりヒト化したがつたんだ？」

「ん、なんとなく。散歩したくなった」

「そうか、んじゃ行くか」

瞬は歩き出そうとするが、後ろから夜羽がついてくる様子はない。

「夜羽？」

「ね、一人で散歩していい？」

「は？」

「だから一人で。だいぶこの体にも慣れてきたし」

「……………んー」

確かに、夜羽は動きもスムーズになってきたし、怪我也だいぶ治ってきている。

人間の常識もいろいろ教えているから、何かをやらかすようなこととはしないと思うけど。

「……大丈夫なのか？」

「ん、シュンと一緒にいて、ニンゲンへの恐怖心もだいぶ取れてきたから平気」

心配なのはそれだけでもないのだが。

「……ま、いいか。じゃあ、一時間後ここに戻ってくるんだ。あ、後これ。お金も少し渡しとくから、隙に使え」
「わかった。一時間後」

そう言つて、彼女は歩き出した。

もしかしたら、少し一人になりたかったのかもしれない。

「迷子にならなきゃいいけど……」

若干の不安が瞬の頭をよぎる。——が、すぐに頭を振ってその考えを振り払う。

ここは何度も夜羽と来ている場所だ。問題ない。

「……さて、俺はここらをうろついてっ」と

「あ、瞬君」

後ろから聞いたことのある声がかかった。

面倒に思いながらも、彼は後ろを振り返る。

彼に見送られた彼女の散歩の話 (前書き)

短いです。

序盤少し一人称、途中から三人称です。

彼に見送られた彼女の散歩の話

一度やってみたかった。——と言うより、試してみたかった。
自分は今、ニンゲンをどう思っているのか。

夜羽は足を止め、考えた。

この何日か、シュンと一緒にこの公園を何度も歩いてきて、すれ違うニンゲンはいなかったわけじゃない。

しかし、そのときは何も感じなかった。

でもそれは近くにシュンがいたからだと思う。

ここが安全だとわかっていたから。

正直今でも、ニンゲンはやはりあまり好きじゃないし、少し怖い
が、それでも前よりはましになったと思う。

シュンにニンゲンのことをいろいろ教えてもらったから、知識の
部分でも問題ないと思う。

「……よし！」

そしてワタシは意を決し、歩みを進めたのだ。

彼女は、周りに目を配りながら歩いている。

夜羽の目的は二つ。

一つは自分の人間に対する認識の判断。

そしてもう一つは。

「……うん！　ワタシにも出来る。シュンが買っているところは何

度も見てるし、知識としても教えてもらった！」

そう。自分の手で物の——甘味の購入。

夜羽は以前、瞬に買ってもらったアイスクリームを食べて以来、甘いものが気に入っていた。

そして、どうしても自分一人で買い物をしたくなつたのだ。

「……あれはジドウハンバイキ。あれの中にたくさん飲み物が入っている。……今はいらない」

「あそこにあるのはコンビニ。いろいろなものが置いてあって、歩いているときあつくなつたら、あの

中で涼めばいい」

「あれが………」

はたから見れば女の子がなにやらぶつぶつ言いながら歩いている奇妙な状況なのだが、幸い近くには大して人もおらず、彼女を気にとめるものもいなかった。

口にした知識が若干ずれているのは、教えた人間——瞬が面倒くさがっただけである。

「！……あつた」

そして夜羽が見つけたのは、お目当てであつたアイスクリームの移動販売車であつた。

「……よし」

意を決し、夜羽は移動販売車の前に立った。

「いらっしゃいませー!」

「……………あの……………」

顔を出した店員のお姉さんは、緊張気味の夜羽を見て、クスリと笑い、優しげに質問してきた。

「どちらの商品をお求めですかー?」

「うえ? ……えっと、こ、これ」

「はい。バニラアイスですねー? かしこまりましたー」

店員のお姉さんはテキパキとすばやい手つきで完成させていった。
「はい。お待たせいたしましたー」

渡されたのは二段のバニラアイスだった。

「あの…………?」

「今回はサービスですー。お金も一段分で大丈夫ですー。また来てくださいねー?」

「は、はい。えっと、あの、その、あ、ありがとう」

「いえいえー」

こうして夜羽の目的の一つは果たされた。

彼女を見送った彼の散歩の話。 (前書き)

少し短いです。

彼女を見送った彼の散歩の話。

「いやーきぐーだねー？　こんなところで会うなんて」

「奇遇、な。……いや、若干偶然と言い切れない要素もあるが」

今、俺は飯田と二人、公園を歩いていた。

一瞬、春川さんの顔が浮かんだのは気のせいだろうか。

——おそらく、気のせいではない。

「え？　なに？　後半聞こえなかったんだけど？」

「……いや？　飯田はだいたい以前の能天気に戻ってきたじゃないか」

「能天気って！　って、あれ？　いつの間にか、さん付けじゃなくなってる！」

「なんか、飯田にさん付けしてるの馬鹿らしくなった」

「新密度が上がったのプラスじゃなくて、私の評価が下がったマイナスだった！！」

と、いまいちわかりづらいツツコミを聞き流しながら、俺は歩みを進めた。

「……………」

「……………」

しばらくの間、無言が続く。

「えっと……最近、どう？」

「お前は、息子との接し方がわからない父親か！」

「あ、ええと。あ！ 静香さんから聞いたんだけど、瞬君カラス飼いは始めたんだって？」

「あ？ ……ああ」

「それで、どう？」

「だから、そのあいまいにもほどがある質問はやめろ」

飯田はうーと唸りだし、頭を抱えていた。

訳がわからん。頭を抱えたいのはこっちのほうだ。

「でも、瞬君が動物を飼おうとするなんて、本当に珍しいと思って「ほっとけ」

「あう……。それで、そのカラスの名前はなんて言うの？ つけたんでしょ？」

「ああ、名前は……いや、いわね」

「うええええええー！！」

「うるさい」

「いやいやいや！ 何で教えてくれないの！？」

「……なんとなく」

ふと、考えたのは、飯田と夜羽が遭遇する可能性。

もしも、人の姿の夜羽と会って、カラスと同じ名前だとばれると、妙なことになる。

飯田は馬鹿なので気づくことはないだろうが、話がややこしくなるのは請け合いだ。

「ええ！ 教えてよお！」

「面倒くさい」

「またそれえ！」

「俺の性格かつ俺の口癖なもんで」

「ぶー」

彼女はぶつぶつ文句を言いながらも、それ以上は聞いてこない。さすがに今までに付き合いで、もうどう聞いても答えはもらえないというのがわかっていてるためだ。

とはいえ、頭の片隅にでもカラスの名前の話が残っていると厄介である。

多少なりとも誤魔化したほうがいいかもしれない。

「それより、ジュースかなんか奢るけど、いるか？」

「いる！」

「……………」

お馬鹿は話をそらすのが簡単で助かる。

彼女の初めての邂逅、飼い主と犬の話（前書き）

若干、各キャラが定まっていらない気がします。どうしたものでしょうか……？

彼女の初めての邂逅、飼い主と犬の話

二段のアイスクリームを早々に平らげた夜羽は、道も気にせず、上機嫌で歩いていた。

「ん、テンインというのは悪い奴らばかりではなかった！ あれはいいニンゲンだった！」

意気揚々と歩いていると、夜羽に大型犬が近寄ってきた。

「む、これはイヌ、と呼ばれるものだったはず。ニンゲンと共にいるイヌは愛想がいいと教わったぞ？ どれ、少し触って」

「ワンワンッ！」

「うー！ 何故いきなり吠える。威嚇行動か！？」

「ワンワンワンッ！」

「お、おとなしくしろ。別に悪さするつもりなんてまったくない」「ワンワンワンワンワンッ！！」

「……うっ。うう……な、何故ワタシはここまで……」

夜羽が若干、半泣きでいると女の子が走ってくる。

「シヤン！ どうしたの？ いきなり走り出して……ってコラッ！ シヤン！ 何、女の子を泣かしてるの！ ほら、大人しくしなさい。……ふう、ごめんなさいね？」

「も、問題ない。それよりワタシは泣いてはいない」

「あ、うん。ごめん。私は高嶺蛭。中学三年生。蛭、って呼んでね

？ こっちはゴールデンレトリバーのシヤン。あなたの名前は？」

「名前……夜羽」

名前を出すのに少し戸惑いを感じてしまったのは今まで名乗る、
と言っことをすることがなかったせいだ。

「夜羽ちゃんね？ よろしく。年は？ なんか私と同じくらいに見えるけど？」

「トシ……今まで生きてきた年数？ ……あなたは？」

「名前、蛭ね？ 私は十五歳だよ？」

「じゃあワタシも十五歳」

「じゃあって……でも同じ中学じゃないよね？ この辺の人じゃないの？」

「ん、ちがう」

そう、人、じゃない。

「旅行中か、親戚の家に遊びに来てるのかな？ ……ま、いいか。
とにかくごめんね？ いつもはこの子吠えることなんてないのに」

「……もしかしたら、ワタシに何か感じたのかもかもしれない」

夜羽も自分の正体が人間にばれてはいけないのはわかっている。

だから、年齢を聞かれてもとっさには答えず、相手の年齢を聞いた。

自分と同じぐらいに見えると言っなら、その年齢に合わせた。

ただ、このシヤンという犬が何かを感じ取ったのなら、もしかしたら、ふとした事で人間にもばれてしまう事があるかもしれない。夜羽は、若干の不安を感じ取っていた。

「え？」

「なんでもない。それよりホタル？　なんかそのイヌ、さつきからずっとワタシを警戒しているよう。嫌われてる？」

「うーん。そんなことないと思うんだけど……。あ、大丈夫だよ。シヤンは人懐っこいから。すぐに慣れてくれるって」

「ん、ワタシも慣れてくれるといい。ワタシはイヌ、触ったことないから」

事実そうだった。

夜羽が元の姿で近寄っていても、先ほどのように吠えられるか、警戒して近寄ってこないことばかりだった。

「そうなんだ。今時だと結構珍しいね？　うん。そうだ！　私、夏休みの間はここにシヤンの散歩に来るんだ。もし時間あったら、会おう？　一緒にいる時間が増えれば、シヤンもきつと慣れてくれるよ」

「ん、むー。帰って相談してみる」

「わかった。じゃあ、私帰るね？　大体いつもこの時間にはここに
いるから」

「ん……。あ！　待って！」

「ふえ？」

「えと、ここ、どこら辺……？」

今まで気づかなかったが、夜羽がいる場所はいつもは行かない場所だった。

道も考えず歩き回ったせいで、自分がどこにいるのかわからなくなってしまったのだ。

「あー……迷子？」

こうして瞬の不安は当たってしまう。

彼女の初めての邂逅、飼い主と犬の話（後書き）

犬さんは少しの獣の匂いに反応しただけ？　です。

合流の話。
(前書き)

やっぱりなんかハーレムチックになってきた……。なぜ？

合流の話

「んー。おいしかった。ありがと？ 瞬君」

「あー。気にすんな」

……しかし、ジュースを一本奢ってあげただけでそこまで機嫌がよくなるのか。

それから、しばらくの間その場で世間話などをして過ごした。
瞬は、ふと時計を見ると、夜羽とわかれてから一時間と少しがたった所であった。

瞬がいる場所は夜羽との合流場所からほとんど離れていない。
夜羽はカラスだけあって体内時計はしっかりしているので、正直、待ち合わせ時間を過ぎるとは考えていなかった。

「（……となると、やっぱり……）」

「？ 瞬君？ どしたの？」

時計を見てから急に黙りだした瞬に、愛美は尋ねた。

「ん、いや？ 待ち合わせしてたんだけど、少し遅いなと……」

「！？ ま、待ち合わせって……誰と？」

「あー……飯田の知らないやつ」
どう説明すればいいのかわからず、どうしても、曖昧な返答になっ
てしまっ。

「えー？ それってどういう知り合い！？」

「あー………」

「たぶんこの辺だと思っただけ……？　　どうか？　　夜羽ちゃん？」

「ん、ここで合ってる。ありがとう。ホタル」

瞬が、どうやって話をそらそうかを必死になって考えていると、二つの聞いたことのある声が耳に入ってきた。

「いた」

「え？　どこ？　……　ってあれ！？」

「あれ！？　蛍ちゃん！？　……と？」

なにやらとても面倒くさい状況になってきた気がします。

状況を少し整理すると、夜羽はやはり、瞬の予感が的中し、一人で行動してしばらくしてから、自分がどこにいるのかわからなくなつたようで、そこにたまたま居合わせた彼女がここまで案内してくれたとの事。

「まずは、連れて来てくれてありがとう。高嶺さん」

「あ、い、いいえ！　私も楽しかったですから」

「それで、瞬君？　この子はいったい誰？」

軽い挨拶を交わしていると、愛美が割り込んできた。

「ああ、そうだな。とりあえず各紹介から入ろうか」

「まずはこいつ。えーっと、最近うちで世話してる。名前は夜羽」

「ええ！？　世話してるって、一緒に住んでるって事！？」

「ど、どどどど同棲ですかあ!？」

ツッコミどころは満載だが、面倒くさいので無視することにする。

「で、夜羽。彼女はさっきまで一緒にいたからわかんと思うけど、高嶺蛍さん。これは俺のクラスメイトの飯田愛美」

「ちょっ！これって！……まあ、いいや。えーと私は飯田愛美。よろしくね？夜羽ちゃん？」

「……よろしく」

と、一通り紹介も終わったところで、蛍が瞬に尋ねた。

「えっと、世話してるって、その、どういう状況とかって聞いても大丈夫ですか……？」

「あ、それ私も気になる」

「あー、夜羽は親戚の所の娘さんで、ある事情で少しの間うちで預かってほしいと」

「ある事情、ですか?」「れ? 瞬君、親戚って」

二人同時に個人の疑問を投げかけてきたが、瞬も余計なことは話さない。

「高嶺さん。ある事情については聞かないでくれ。その家の問題だ。後、飯田。お前の思ったとおり、俺に親戚はいない。でもそれは血のつながった親戚はいないってだけで、血のつながらない遠い親戚ならいる、ようだ」

「そう、ですよ? すみません」

「ふーん」

「どうやら、各自納得はしてくれたようだ。」

「それで？ 夜羽ちゃんはいくつなの？」

「ああ、それは「十五」……………だそうだ」

瞬は、いつ自分の設定を考えたのか疑問に思い、チラリと夜羽のほうを見ると、今は聞くなと言わんばかりに睨み返されてしまった。

まあ、特に変な事を言っている訳でもないの、後で聞くことにする。

「つと、そろそろ遅くなるし、帰るぞ。傷にも響く」

「「えええ！？ 夜羽ちゃん、怪我してるの（んですか）！？」」

「ああ、少しな。大した事はない。…………理由は、聞かないでくれよ」

と、深刻な顔を作り、告げると、二人とも大人しく引き下がってくれた。…………よし。

「…………それじゃ、私帰るね？ 瞬君。蛍ちゃん。夜羽ちゃん。また「んー」」

「はい。また今度」

「……………」

「じゃあ、俺たちも「あ！ あのだ！ まだ少し話したいことが……………」
……………いいけど？」

合流の話
(後書き)

……あれ？ 鳥さんなんか空気に……。

飼い主さんの出会いと出逢いの話。

……私はやっぱり懲りてないのかもしれない。

最近シヤンはすっかり私の言うことも聞くようになってきていて、これならもう心配は要らないと油断してしまった。

いや、あの時のことを考えると、もう油断なんて言葉じゃ言い訳も出来ない。

散歩の最中、いきなりシヤンはすごい力で動き出した。

私は止める暇もなかった。

一瞬、事故のことが頭に浮かび、急いで追いかけると、シヤンは私と同じぐらいの女の子に吠えていて、急いで止めに入った。

幸いすぐに謝ると、女の子も許してくれた。

それでもシヤンはまだ警戒を解こうとはしていなかった。

聞けば女の子——夜羽ちゃんはどうやら私と同年（曖昧だったので、たぶん）で、この辺に住んでいたわけではないらしい。

この公園で迷子になると言うのはそういうことだ。

確かにこの公園は、来る回数の少ない人はとても迷いやすい。

昔から複雑な道をしていたのだ。

「えーと、近くに何かあった？」

「ん……周りは木だらけ。ジドウハンバイキが一個あった。……あと、トイレ。クサイやつ」

「あー……じゃ、あつちかな？」

このあたりで木に囲まれていて、公衆トイレがある場所は限られてくる。

「へー。じゃあ、今その人と待ち合わせしてるんだ？」

「ん、少し遅れてしまった……」

と、夜羽ちゃんは少し申し訳なさそうに俯いてしまった。

待たせたことを申し訳なく思っちゃってるんだ……。

「だ、大丈夫だよ。少し心配させちゃったかもしれないけど、謝れば許してくれるって」

「ん。ありがと」

「いえいえ」

話している間に、目的地まで近づいて、

「たぶんこの辺だと思うんだけど……？　　どうかな？　　夜羽ちゃん？」

「ん、ここで合ってる。ありがとう。ホタル」

夜羽ちゃんはどうもあまり名前で呼んでくれないので、お礼とともに呼ばれて、私は少し頬が緩んでしまった。

「いた」

そんな私の様子に気づいていない夜羽ちゃんは待ち合わせの人物を見つけ、指をさした。

「え？　どこ？　……　つてあれ！？」

そこにいたのはこの前、お友達になった愛美さんと、もう一度会いたいと思っていた人物がそこにいた。

正直驚きだった。

夜羽ちゃんが神尾さんと一緒に住んでいるなんて。

家の事情は気になったけど、確かに気安く踏み入れていいところじゃないのは確かだった。

でも、一番驚いたのは夜羽ちゃんが怪我をしていると聞いたとき。

たいしたことはないとは言っていたけど、やっぱり心配だった。

でも怪我については聞いてはいけないような気がしたので、聞くことは出来なかった。

「それで、なに？」

愛美さんが帰った後、私は神尾さんを引き止めていた。

もちろん言いたいことはたくさんあるのだ。

「えっと、まずは……あの時、私を叱ってくれてありがとうございました」

「いや、こっちも言い過ぎたと思ってるよ」

「いいえ。あの時確かに私が悪かったんです。それをわからせてもらっただけでもお礼は言い足りないです」

ここまで言うと、神尾さんは困ったように笑っていた。

「神尾、さん？」

「いや、だったら感謝はありがたくもらっておくよ。それより高嶺

さん。俺の名前知ってたんだ。はつきり自己紹介したっけ？」

「あ、いいえ。もう一度神尾さんに会いたくて、ヤジマ動物病院に何度か足を運んだんです」

「ああ、それで」

「神尾さんも私の名前知っててくれたんですか？」

「俺は飯田に聞いてね」

「じゃあ、あらためまして。高嶺瑩です。よろしくお願いします」
「神尾瞬。よろしく」

挨拶も終わり、踵を返そうとしたが、もう一つ用事を思い出した。

「あの、神尾さん」

「うん？ 今度は？」

「あ、夜羽ちゃんのことなんですけど」

「夜羽？」

名前を呼ばれた本人は、不意をつかれ、とても驚いていた。

「ワ、ワタシが何？」

「大丈夫。なんか夜羽ちゃん犬に触ったことないみたいなんで、ちよくちよくシヤンと触れ合ってもらおうかと思ひまして。あ、もちろん怪我に差し障りない程度ですよ？」

私が言った言葉に神尾さんは驚き、夜羽ちゃんはその事かと納得した。

「……それは、夜羽自身が決めることだから、夜羽がいいといえは問題ないけど……。どうしてそこまで夜羽にかまうんだ？」

「どうしてって……友達だからです」

「トモダチ？」

「うん。いや？」

「トモダチ……仲間？」

「そうだね」

「……いやじゃない」

「よかった」

いやじゃない、と言う時の夜羽ちゃんの顔はともうれしそうだった。

神尾さんも、それを見てうれしそうに笑っていた。

「ならいいんだ。夜羽も行きたいときに散歩に出ればいい。病院に行くときは別だが」

「ん、わかった」

「あ、神尾さん！ 最後にもう一つ」

「？」

「私のこと、名前で呼んでくれませんか？ 私のほうが年下なんですから」

「あー……でも」

「……じゃあ、せめてさん付けはしないでほしいです」

「んー……じゃあ、高嶺で」

「むー。しばらくはそれでいいです。慣れたら名前で呼んでくださ

「い
……
善処する」

家での彼と彼女のそうだ、状況を整理しよう。の話。

帰宅するなり瞬は、倒れ込むように、ソファーに突っ伏した。

「ふー、なんか今日は疲れた……」

「ワタシはそれなりに楽しかった」

「……そっか。ならいいんだ。それより、一人になってからどんなことして過ごしたんだ？ 高嶺さんとも何か話したんだろ？」

蛍にはさん付けはしないといわれていた瞬だが、まだ慣れていないのと、本人がいらないことで、つい、さんを付けてしまった。「ホタルにはさん付けはいらなと言われた」

「……」

しかし、夜羽に注意され、沈黙してしまう。

「……いや、本人いないし」

「でも、つづけないと慣れるものも慣れない」

「……」

その台詞は、夜羽に服を着させたり、動きの練習のときなどによく瞬が言う台詞。

もちろん、瞬がそれを聞かないわけにはいかない。

「……で、どんなこと話したんだ？」

正論には負けると判断した瞬は話を先へ進めた。

「……にげた。……いいけど。だいじょぶ。ホタルにワタシのこと

がばれるようなことは話してない」

「いや、それは別に……」
「？」

心底わからないと言った顔をする夜羽に、瞬はため息をつきつつ、
「友達との会話がどんなだった？ って聞いてるんだよ。楽しかったんだろ？」

「……一人なつてからは、アイスクリームを買いに行った。……その時のテンインは、とてもいいニンゲンだった！ ホタルとは、……イヌについて話したのと、一人で買い物できたこと話した。……楽しかった」

「そっか。よかったな？」

「……よかった」

それを聞いた瞬は満足げに笑い、

「あ、そういえば夜羽、歳聞かれたときすぐに答えてたけど、あんなもんいつ決めたんだ？」

気になっていたことを口に出した。

「ん、さつき。ホタルに歳を聞かれたとき。……だめだった？」

「いや、問題ないけど、意外と妥当な年齢だったから驚いただけ」

「ホタルが自分と同じぐらいに見えるって。だからホタルとおんなじで」

「なるほど……考えたなー」

素直に感心していると、夜羽が何かを聞いたそうにしている。

「？」

「………シュンは一人になってから、何してた？ イイダマナミ

と一緒にいた」

何故か半眼でこちらを見てくる夜羽に、瞬は戸惑いを感じながら答える。

「い、いや。たまたま夜羽とわかれた後に会って……てか、何か怒って、る……？」

「……別に」

「?? じゃ、飯にでもするか？」

「……ん」

状況をあまり把握できてない瞬。
空気はいまだ、妙に気まづいまま。

「ああ、そういえばケーキ買ってあったんだ。飯の後にでも食べるか？」

「……けー、き？」

その後、食事の後に出されたケーキに、夜羽はえらく感動し、夜羽の機嫌もその場の空気も一気に回復した。

彼女の朝からの一日の話。(前書き)

最近更新が遅く申し訳ございません……。

前半三人称、後半一人称です。

彼女の朝からの一日の話。

「ん……朝……」

夜羽が目覚めたのは、ある部屋のベッドの上。

その部屋はかつて瞬の両親が使っていたという部屋。

今は整理され、夜羽がこの家ですごし始めてから使用している。

最初は、夜羽自身、部屋に全く慣れなかったが、今はこの部屋に居心地の良さまで感じていた。

「……おなかすいた」

寝起きで空腹の夜羽は、のろのろと瞬の部屋に向かった。

時計を見ると八時を少し回ったところだった。

瞬はこの時間いつも寝ている。いつもなら大体、後四時間は起きてこない。

もちろんそれを空腹の夜羽が許すはずもない。

「おきろ……。ごはん……」

夜羽の起こし方はいつも同じ。

フライングボディプレスだ。

「ごはん……!」

「おきた」

「……お嬢さん……何度も言っていますが、その起こし方はやめていただきたい……。軽いとはいえ、高さがあると、厳しいのです」

夜羽の体格が小柄なこともあり、体重自体は大した事はないのだが、彼女はわざわざこの一撃のためにカラスに戻り、傷も徐々に癒え、ほんの少し飛べるようになったのをいいことに、天井ギリギリまで飛び、そしてヒト化して落下してくる。

そのダメージは絶大である。

「おなかすいた」

「……………はい」

しかし彼女はそんなことは気にも留めない。

とはいえ、夜羽のおかげで、瞬の夏休み中の狂った生活リズムは正されつつあるのも確かなのだ。

「で。今日はどうするつもりなんだ？」

朝食後に瞬が尋ねる。

「ん、昨日とおんなじごろに公園に行く。ホタル待ってる。それまでは…………散歩。…………シュンは？」

「俺は…………今日は家で一日を過ごすかな。どっかに出かける気分でもない」

「ん。わかった。じゅーに時に帰ってくる」

もちろん昼食のためである。

「あいよ。いつてらっさい」

「いつてきます……………だったか？」

「ああ、合ってるよ」

覚えている道を歩く。

昨日は焦りとか緊張とか興奮とかで、道がわからなくなると言うミスをしてしまった。

しかし落ち着いて冷静であれば、ワタシは道を間違えたりしない。「むう。昨日はたまたまだ！ 特別なのだ！」

誰となく言い訳をしてしまうのは、少しずつワタシがニンゲンに慣れていくことが出来ている証拠なのかもしれない。

「しかし」

と、ワタシは改めて昨日のことを思い出していた。

テンインはいいニンゲンだった。

ホタルもそうだ。ワタシを仲間——トモダチとまで呼んでくれたのだ。

では、近くにいたニンゲンはどうだっただろうか。

正直なところあまり覚えていない。

ワタシも気に留めなかったし、周りのニンゲンもワタシを気にするようなことはなかったと思う。

——そう考えると、ワタシがおかしいように思えてきた。

今まで、どんなときでも周りの警戒を怠るようなことはなかったはずだ。

たとえ相手が自分に興味がなくとも、縄張りに近づく奴は、敵対をしないまでも、警戒はした。

なら何故昨日はそれをしなかったのだろう。

この姿だからか？
それとも

「無意識のうちに自分の縄張りをシュンの家だと思っている？」

ワタシはつい、声に出してしまった。

長いこと考え事をしていたのか、気づくと時間はあと少しで十一時五十分になるところだった。

ワタシは考えないようにと頭を振り、急いでシュンのところまで走っていった。

昼食をとり、時間になったので、ワタシはホタルとの待ち合わせの場所に向かった。

待ち合わせ場所にはすでにホタルとシャンが待っていた。

「む。またせた」

ワタシが声をかけると、ホタルが笑顔で駆け寄ってくる。

シャンのほうはまだ少し警戒しているが、昨日よりはましなように思える。

「んーん？ 待ってないよ？ さっき来たところ」

「ん。それで、慣れるため、とは何をするのか？」

えへへーと笑いながら、ホタルはごそごそと何かを取り出した。

「じゃじゃーん」

「？ これは？」

「フリスビーだよ！」

「ふりすびー？」

「うん。シャンはこれで遊ぶの好きなんだ！」

そう言つて、ホタルはフリスビーを遠くへ投げ飛ばした。

「！？ 何を」

と、ワタシが言い切る前にシヤンが走り出し、飛んでいたフリスビーをくわえ、戻ってきた。

ワタシはその様子をぽかーんと眺めてしまっていた。

「ね？ 夜羽ちゃんもやってみる？」

「ワ、ワタシもとりに行くのか？！」

「いやいや、違うよ。投げてみて？ こうやって、こう！ ね？」

「……ん。こ……か！」

ワタシの投げたフリスビーとやはは勢いよく飛んでいった。

「あ……」

さすがに遠くに投げすぎたかと反省しようとしたが、それは無用の心配であつた。

ガシッ！

シヤンはあつさりそれをくわえ、戻ってきたのだ。

そしてそのフリスビーをワタシに渡してきた。

「む？ もう一度やれと言うのか？ イヌ。いや、シヤンだったな。お前は見かけによらずすごいやつだな！」

こうしてワタシは何度もフリスビーを投げた。

ホタルはその間、近くで笑いながら見ていたらしい。

「それはそうと夜羽ちゃん？ 何か悩んでるの？」

何度かシヤンとフリスビーをした後、ホタルがそういえばといった感じで尋ねてきた。

「ん……何でそう思う?」

「いや、なんとなく、だけど」

わかりやすい態度をとったつもりはなかったが、確かに悩みと言えは悩みなので、ワタシは言葉を選びつつ、相談することにした。

「……前は、周りのニンゲンのことを気にしながらすごしてきたけど、最近はあまり気にならなくなった。それが、よくわからない。このままだったら危険が近づいても気づけないかもしれない」

言葉を選んではいたが、それでも、妙な言い回しになってしまった。だが、シュンが事前にワタシには何か事情があると、ホタルに思わせていたおかげか、深く突っ込まれることはなかった。

「んーそれっていつごろから、かな?」

「……シュンの家でくらしから」

「だったら、単純に安心できる人が近くに出来たから、じゃないかな?」

「安心……」

「そう。たぶんだけど夜羽ちゃんは今まで頼るって事をしなかったんじゃない? だからいつも周りを気にしていた。でも、安心できる人——神尾さんが近くにいて、少しづつ頼ることを覚えてきたんだとおもう」

「ワタシが、変わったということ?」

「うん。でも、変わることはいいことだと私は思うよ?」

「……………」

ワタシは自分が変わったのかどうかよくわかっていなかった。

自分自身では変わっていないつもりでもあった。

それ故に、ホタルの言葉が衝撃だった。

「……それじゃ、私達かえるね？ ……ゆっくり考えてみるというと思う」

「あ、……また」

「うん、また明日ね？」

家に帰ってもワタシはしばらく悩み続けた。

「……………？ なんかあったのか？」

シユンは何が何だかわからないといった顔で話しかけてくれた。

彼女の朝からの一日の話。(後書き)

どうも最近忙しいのと、無謀にももう一つ掲載を始めてしまったのあり、もしかしたら、今後若干遅れてしまつかもしれません。

すみませんが、長い目で見守っていただけると幸いです……。

それと、もう一つのほうも読んでいただけるとありがたいです。

獣医さんのここ最近の考えの話 (前書き)

短いです。

獣医さんのここ最近の考えの話

神尾君がカラスとの生活を始めてもうすぐ二週間になる。

彼の夏休みもそろそろ終わる頃だ。

何度が遊びに来てくれるが、学校が始まると、それも少なくなるのだろう。

神尾君はいつも最近、僕に何かを打ち明けようかを悩んでいるようだ。

それがどんな事かは見当もつかないが、できる限り支えてあげようと思う。

「そういえば神尾君、誰かと一緒に住んでいるんだったっけ？」

「ええ、どうも血の繋がりのない親戚で、夜羽ちゃんというかわいらしい女の子らしいです」

答えてくれたのは、春川君。

彼女はどこから仕入れてくるのか、神尾君つながりの話を良く知っていた。

「そうなのか……。血が繋がらないとはいえ、親戚の方がいたのか前に親御さんが亡くなったとき、誰も引き取り手がいなかったと聞いていたから、てつきり誰もいないものだ」と

「そうですね？ でも、疎遠になっていたのなら仕方がないのでしょー……」

「ああ。そうだね。でも良かった。出来るだけ、神尾君を一人にしないほうが良いと思っていたんだ。彼は辛いときほど一人になりたがるところがあるからね……」

僕は何度も神尾君が辛そうな顔をするのを見ていた。

それは誰かが家族の話題をした時。

それはいろいろな場所で家族睦まじい場面を見た時。
そんな時いつも彼はこっそりとその場を離れるのだ。

「そうですね……。でも、それとは別に年頃の男の子と女の子を一つ屋根の下に置いている状態はいかなものかと思いますね」

「あー……。でも、親戚だって」

「血の繋がらない、ですよね？」

確かにそう考えると、倫理的に問題がありそうな気もする。
しかし、

「神尾君がわざわざそんなことをするとは思えないんだけど……」

「……確かにそうですね……」

「一応気をつけるよう言っておくかな？」

「はい」

とは言え、神尾君はどうも他人の好意に鈍感なところがある。
正直、言ったところで何の事だかわからないといった表情をするに違いない。

獣医さんのここ最近の考えの話 (後書き)

最近同じようなパターンばかりで、代わり映えがない気がします……。

そろそろ、どうにかしなくては……！

感想頂けるとうれしいです。

相談と決意と緊急事態の話。

「んー……」

瞬は悩んでいた。

夜羽がこの家に来て約二週間。

矢島さんに隠し事をするのをやめるべきなのは、と。

正直、そろそろ隠していくには人手が足りないのだ。

夜羽の怪我もほぼ完治している。

もちろん今も少しだけなら飛ぶこともできるが、あと少しすれば完全に空を飛ぶことも可能なのかもしれぬ。

夜羽自身もあと少しで全て治るとうれしそうに言っていた。

だが、一度は詳しい検査をしてもらうべきだと思う。

それにはやはり、獣医である矢島さんに協力を仰いだほうが、物が事がスムーズに進むような気がする。

しかし、夜羽がそれに対して、どういう反応をするのかが不安だった。

夜羽もだいたい人間に慣れ、友達の高嶺と犬のシヤンとも着々と仲良くなっていつにいたる様子。

それでも、本当に信用している人間以外は警戒心を緩めない。

飯田などは常に警戒されっぱなしだ。

愛美は、瞬の家の場所を把握してからは、三日に一度のペースで訪ねてきていた。

瞬は八割方、居留守でやり過ごすのだが、運悪く夜羽の帰宅時間とぶつかってしまうときもある。

夜羽には鍵を渡してあるので、居留守自体はばれていないが、夜

羽はいつも非常に迷惑そうな顔をしていた。

とにかく、矢島さんに話すのは夜羽の反応を見てからだ。

「ん。どうした？」

「……いや？ なんでもない」
タイミングが掴めない……。

「む、何か言いたそう」

「そ、そうか？」

最近、夜羽が鋭くなってきた。

「ん、そう！」

「あー……えっと」

「………ヤジマ？」

「んな！？ ……なんで？」

激しく動揺する瞬に夜羽は冷静に続ける。

「わかる。最近ビョーインでのシユンの様子おかしい。絶対向こうもわかってる」

態度に出ているつもりはなかったのだが……平静を装うことは得意だったし。

——どうも最近うまくいかない。

「……まあ、そうなんだけど」

「ん、話して？」

「……まずは夜羽？ お前、矢島さんの事どう思う？」

「？ どう？」

「信用してるか。ってこと」

「………わからない。……何故？」

「矢島さんに夜羽のことを話そうかと思ってた」

「！ ……理由」

「ああ、やっぱり怪我の事とかは俺じゃあはつきりとはわからない。専門家の知識は必要だと思った。それと俺はあの人を信用してるから。俺たちが困るような事は絶対にしない」

「……………正直に言う……………怖い。シユンはあっさり受け入れてくれたけど、ニンゲンの常識でワタシの存在はありえない。ワタシ達は……………いつも迫害される」

「……………夜羽……………」

「……………でも、話したほうがいいと思うなら話していい。ワタシは怖いけど、シユンはヤジマを信用してる。ならワタシはシユンを信用する」

「……………ありがとう」

「……………ん」

とりあえず、話しに行くのは明日にしようという事になり、ひと段落し

「瞬くーん！！ あそぼー！！」
たかに思えた。

「いないのー？」

「……………」

「……………」

とりあえず居留守決定です。
何度も鳴り響くチャイムを無視して、瞬と夜羽は息を潜めた。
が、ここで最悪の事態が。

「あれ？ 鍵あいてる？」

「「！！？」」

「ぶよーじんだな」

と言いながら、入ってこようとする愛美。

まずい。この状態で入ってこられたら確実に一つ聞かれることがある。

カラスはどこか。

愛美は前々から瞬の家のカラスに興味を持っていた。
家に入ったならば確実に見たがる。

どうする。……いや、カラスがいないのは言い訳が聞かんが、夜羽がいない場合は出かけている最中で話は通じる。

即座に夜羽に目線を送ると、幸いそれだけで察知してくれたのか、すぐにカラスの姿になった。

ちなみに瞬の思考から夜羽へのアイコンタクトを含め、約一秒。

「おい……勝手に人の家に上がりこむな。不法侵入だ」

「あれ？ 居たんだけ？ ……居留守？」

「いや、寝てた。ガチャリで目が覚めた」

「ええ！？ チャイムじゃなくて！？」

近所迷惑なほどチャイムを鳴らした自覚はあるようだ。

「何しに来た」

「冷たっ！ 遊びに来たんだよ？ あ、そうだ。瞬君ちのカラスどこ？」

「帰れ」

「再度冷たっ！ あ、いたいた」

と、瞬の言葉を聞き流しながら、発見した夜羽に近寄っていった。

「怪我してんだからさわんなよ」

「わかってるよ？　って、あれ？　夜羽ちゃんは？」

「出かけてる」

「むー。私あの子に嫌われてるのかな？　あんまり話してかないんだよね？」

「……知らんな。で、何しに来た」

「え？　さっき言ったじゃん？　遊びに来たんだよ？」

さて、どうしようか。

と、夜羽からの早く帰らせろというプレッシャーを受けながら考える。

そこで、あるものを思い出す。

それは、後、数日で確実に必要になるもの。

そして、飯田愛美は確実にそれを所持していないはずのもの。

「飯田？　遊びに来たって事は、夏休みの宿題は終わったんだな」

「……！！？」

「まあ、夏休みも後少しだし、なあ？」

「あ、あのさ、遊びに来たって言うのは冗談で……その、あの、しゆくだ「俺は見せたりはしないけどな？」……あう」

「……………」

「……………お願い！」

「断る」

「……………うわーん！　志戸塚くーん！！　えまーじえんしー！！」

飯田は携帯を取り出し走り去っていった。

看護師さんのこころ最近の考えの話。 (前書き)

とても短いです。

看護師さんのここ最近の考えの話。

緊急事態ね。

まさか……。

「まさか、神尾君の家に可愛い女の子が居候を始めるなんてそれは、まさしく王道ヒロインになれるポジション。」

愛美ちゃんに強敵現る、よ。

「さて、どうしたものかしら？」

私は愛美ちゃんの恋を応援している。

それはしつかり本人にも伝えてあるし、何か神尾君の情報が入ったら、すぐに愛美ちゃんに教えている。

もちろん、その後どうなったかなどの報告も受け取っている。

朴念仁である神尾君だけあって、進展は少ないけれど……。

それにしても神尾君はいつの間に主人公体質になったのかしら？

自分に好意を寄せてくれる同級生。

血の繋がらない親戚の居候。

慕ってくれる年下の女の子。

よく顔を出す動物病院の看護師さん。

「ハーレム状態じゃない！」

その中にちゃっかり自分の存在を入れてみたのは、ここ愛嬌である。

「とにかく私は置いといたとしても、神尾君がいつ誰かの好意に気づかないとも限らないわ……」

とは言え、愛美ちゃんの話聞く限り、一番自分をアピールできているのは愛美ちゃんね。

家を教えてもらってから、何度か訪ねて、多少は一緒に過ごすこ

とも増えてきたようだし。

……でも、一つ屋根の下って言うのはやっぱり危険ね……。いつ大逆転があるかわかったものじゃないわ。

「んー……………」

「……さっきから何一人でブツブツ言ってるんですか？」

突然近くで聞こえる声。

「……………あら。臼井先生じゃない？ どうしたの？ こんな所でまさか聞き耳を立てていたわけじゃないわよね？」

「いやいやいやいや！ 何ですかその言いがかり！ たまたま近くを通ったらなんか聞こえてきたから話しかけただけですよ！ ……てか、君まで僕を臼井呼ばわりするんですか！？」

「そう、聞いてたのね？」

「まさかのこつちの話まる無視！！？」

「とにかくこつちへいらっしやい？」

「え？ へ？ あの？」

この日、ヤジマ動物病院から謎の悲鳴が聞こえたとか聞こえなかったとか……。

「う、うとう……。矢島先生も神尾君も飯田ちゃんも皆、春川さんをお淑やかとかって言うけど……大きな間違いであり、勘違いだよ……………」

「あら？ 臼井先生？ まだ足りなかったのかしら？」
「え？ ぎゃあああああああ！！！！！！！！」

看護師さんのここ最近の考えの話。(後書き)

キャラのぶれが激しいですか？
いえいえ、予定通りです。

彼と彼女の待ち時間と空気の話

夜羽に矢島さんの協力を仰ぐことを許してもらった次の日、瞬と夜羽は二人、でヤジマ動物病院に来ていた。

「ふー……」

「……」

これから話す内容を頭に浮かべるだけで緊張する。
矢島さんを信用してはいるが、この緊張はどうしようもない。
隣にいる夜羽も同様だった。

「やあやあ、神尾君。今日は一人じゃないんだね？ そのかわいい女の子は誰かな？ もしかして？」

何の前触れもなく後ろから声をかけてきたのは臼井だった。
夜羽も気づいていなかったのか、明らかに驚愕している。

「……何が、もしかして？ だ。妙な勘繰りはしないでいただきたい。臼井」

「妙な勘繰りって……てか、もうさん付けですらないよ……」

うつとうしい臼井は無視しようかと思ったが、ふと気になることがあったので、まずそちらを尋ねることにした。

「どうしたんですか？ その絆創膏」

そう、彼の顔にはいくつか絆創膏が張り付いていた。

「……聞かないでくれるかな……？」

聞いた途端、見て取れるほど気分が沈んだ臼井。

「はあ、まあ良いですけど。あ、そういえば春川さんは休みですか？」

それを聞いた瞬間、更に沈んでいく臼井。
何なんだいったい。

「春川さんなら……午後から来るよ？　今日は午前中に用があるらしい……」

「はあ、そうですか」

とりあえず、これ以上は聞かないほうがいいと判断した瞬は即座に話を変えた。

「ところで臼井さん」

「ああ、さん付けが戻ってきた……。じゃなくて！　そろそろほんとにやめたほうがいい。その臼井って言うの」

「？　何故ですか？　そんなに嫌がっているようには見えなかったんですけど」

「やっぱり気づいていなかったか。いいかい？」

と、臼井は声を小さくし、

「君が僕のことを臼井、と呼ぶたびに、矢島先生の肩がビクツと震えてることがある。正直、見ていて不憫でならないんだよ……」

「……………それは……気づきませんでした……」

「うん。だから矢島先生もはつきりと態度には出さないけどさ」

「……………わかりました」

「そうか、わかってくれたか」

「はい。別のやつを考えておきます」

「……………んー？　何か望んだ結果とは少し違うけど、まあいいか。それで、どうしたの？」

「ああ、紹介をしてなかったんで」

「あ、その子ね？　じゃあ、僕から自己紹介しよう。僕の名前は「あ、そうだ、空気って名前にしよう。夜羽、この人の名前は空気さ

んだ」……うおーい、自己紹介するってったじゃん！ 自己って意味わかってる！？ ってか空気って！！ よりひどくなった！！！」

「ワタシは夜羽。よろしくクウキ」

「うわーお！ その名前受け入れちゃった！？ いやいや、夜羽ちゃん？ 違っよ？ 僕の名前は「空気」……僕の「空気」………も、いいです。よろしく。夜羽ちゃん……って苗字は？」

「ミヨージ……」

しまった。

まだ何も考えてなかった。

「……ワタシも、カミオ？」

「……」

「ん？ どういう？」

「空気さん。夜羽は俺の遠い親戚に値するんです。なんで、神尾で「ああ、そうなんだ」

無難なところに落ち着いた。

よく考えれば、夜羽に苗字の説明などしていない。

なので、最初に聞いた苗字で覚えていたのだろう、神尾を口にしたらんだと思う。

「じゃあ、紹介も終わったんで、そろそろ戻ってください空気さん」

「クウキ。また」

「……うん。ちょっと隅っこで泣いてくるよ」

そう言っ走り去った空気を二人で見送った。

「おや？ 神尾君、来てたのかい？」

と矢島が奥から現れた。

今回の目的の登場だ。

気づけば、先ほどのまでの緊張も解けていた。

「（意外と、空気も役に立つ）」

ここにはいない男に少し感謝して、矢島に話しかける。

「うん。ちょっと話があつて」

「うん？ 良いけど、その子は？」

「それについても話すよ」

「……………わかった。もうすぐ休憩だし、こっちへ」

促されるまま、瞬と夜羽は矢島について行く。

彼と彼女の待ち時間と空気の話。(後書き)

臼井君もとい空気君をいじるのは楽しいです。

彼が教える彼女の事を知る獣医の話。

「……それで、どういう話か、聞かせてもらおうかな？」

ここに来る際の瞬の顔を見た矢島は、神妙な顔で問いかけた。

「えー……っと、まずは……自己紹介、か。夜羽」

「ん。ワタシは夜羽」

「えー！？ いきなりだな！ えーっと夜羽、さん？ 僕は矢島一郎。神尾君に聞いてるかな？ よろしくね？ あ、君が神尾君の親戚と一緒に暮らしているって言う？」

「よろしく。イチロウ」

一瞬、矢島さん呼び捨てにしたことに動揺したが、本人も気にしている様子がなかったので、置いておく。

というかそれよりも、

「……何でそのことを知ってるのかは疑問ではありますが、皆に言ってるのは、その通りです」

「皆に言ってるのは……？」

「はい。その話をしようとしたんです」

いろいろ質問を続けようとした矢島は瞬の言葉で押し黙った。

「……あー、昨日言うことを考えて来たんですけど……うまく言葉がでないなー」

「む。じゃあワタシがする」

「え？」

瞬がどういう意味かを問いかける前に、夜羽は行動を起こした。

ポンッ！

と、妙に軽快な音と共に綺麗な黒髪の女の子はその場所から消え、服だけがそこに残る。

「……え」

「おい……」

その服の中から出てきたのは一羽のカラスだった。

矢島は突然の出来事に絶句し、瞬は何もかもをすっ飛ばした説明に頭を抱える。

横目で矢島の方を見ると、

「……………」

明らかに矢島は状況の整理が出来ていない様子。

このままでは埒があかないと判断した瞬は、改めて矢島に説明を開始しようとした。

しかしそれは、いつの間にか人の姿に変化し、服も着直した夜羽にまたも奪われた。

「と言うことで、ワタシはシュンとあなたに助けられた、ニンゲン達が言うところの『カラス』。ケガが治ったか知りたい。ケンサ？ が必要ならする。いつ飛べるか知りたい」

何のフォローもなく、自分の聞きたいことを聞く夜羽に嘆息する瞬。

正直叫ばれてしまっても仕方がないと思っていたのだが、予想に反し矢島の対応は冷静だった。

「えっと。じゃあ、もう一回カラスの姿に戻ってくれるかな？　くわしく傷の具合を見たいんだ」

「？　矢島さん？　あの、俺が言うのも変ですが、大丈夫ですか？」
カラスの姿に戻った夜羽の傷を黙々と見ている矢島に瞬が声をかける。

「だ、大丈夫だよ。い、いや、でも驚いているよ。ものすごくね。正直、頭の中が整理できてないからもしかしたらやっぱり大丈夫じゃないかもしれない」

やはり混乱はしているようだが、状況事態は理解できているように思えた。

「でも、いろいろ納得する部分がたくさんあった。特に最初の日。このカラスがこの病院から消えて、君の家に行ったこととかね」

「あー、あの時ですか……確かに不思議がってましたもんね」

「それで、やっぱりこの事は秘密なんだね？」

「はい。大事にはするつもりはありません。……正直、誰にも話さずにいるつもりだったんですけど」

「協力者が必要と思ったんだね？」

「……はい。……協力、お願いできますか？」

少し恐る恐るといった感じの聞き方になってしまったのは、やはりどこか不安があるのかもしれない。

「……………何、心配してるんだい？　僕が断ると思ったのかい？」
「！　じゃあ……………」
「当たり前だよ。君はもっと周りを頼ったほうがいい。何もかも一人で背負うとしないだね」
「あ、ありがとうございます」

瞬は一安心し、今後のことの相談をしようとしたが、
「む。それでワタシはどうなんだ？」

またしてもいつの間にか人の姿に成った夜羽に奪われた。

夜羽の着替えスピードが、向上している。

ところで……気になる疑問。番外編？の話。

矢島さんに全てを話し、現在夜羽は検査中で、看護師さんに連れて行かれた。

もちろんカラスの姿で、だ。

「ところで神尾君。彼女と生活しているとは聞いたけど、実際夜羽ちゃんは人間としてどれぐらいの常識があるの？」

「あー、人間としてはほぼ皆無でした。一緒に暮らすようになってから徐々に教えていきましたんで。特に最初は大変でした。何か服を着るのが嫌いみたいだったんで」
「なるほどねー。それで、お風呂とかはどうしてるの？」

瞬の動きが一瞬固まる。

「……………神尾君、まさか」

「いえ！ 変な勘違いはしないでください！ 体を洗うときはカラスの戻ってもらって洗ってます」

「じゃあ、何で今動揺したんだい？」

「う……………それは……………」

瞬はあのをときを思い返す。

体を洗うとき、怪我のこともあり、カラスの姿で瞬が洗っていた。夜羽も元々水浴びは好きだったようで、文句も言わずに大人しくしていたのだが、ある日。

「シュン。いつもその部屋に入っては少し濡れてホカホカになって出てくるけど、何してる？」

「風呂だよ、お風呂。人間も体を洗うからね」

「ん、ニンゲンの水浴びか」

「あー、そんなところかな？」

適当な返事が良くなかったのだろう。

次の日。

「ああ疲れた。何もしてないけど」

いつものように風呂に入る瞬。

しかし、いつもじゃ考えられないことが起こる。

「シュンー。ワタシも水浴びする」

夜羽乱入。

もちろん服など着てるはずもない。

「よ、よよよ夜羽さんっ！！？ なっなにをされてるんで！……！！？」

「む？ ワタシもニンゲンの姿で水浴び」

激しく動揺しながらも、対処する瞬。

「い、いったん出なさい、てか、出てくさい！」

「ん？ わかった」

言われたとおり、風呂場から出る夜羽。

「そのまま、服を着て待つてくれ！」

「む？ 何で？ 水浴びでは服要らない。シュンも着てない」

「いいから！」

「むー……」

渋々といった声とともに、服を着る音も聞こえる。

「そして、ちょっと別の部屋で待つてくれまいか！？」

「……ん」

夜羽が脱衣所を出たのを確認すると、瞬は即座に風呂をあがり、体と頭を拭き、脱衣所を出る。

出た先には、納得の行っていない顔をした夜羽が待っていた。

「ん、シュン。何で水浴びはだめ？」

「……………いろいろ教えなきゃならんことはいろいろあるが、とりあえず……………」

「とりあえず？」

「俺が風呂に入っているときは入ってこないでくれまいか！……！！」

その後、いつもはカラスの姿で、怪我に気をつけながら体を拭いていおり、人間の姿で水浴びするとうまく体を洗うことが出来ないため、水が傷に響くということを説明し、最悪傷が治るまでは人間

の姿で水浴びは禁止した。

その際に「ニンゲンの姿でもシユンが気をつけて洗ってくれればいい」と言われたが、適当な理由をつけ、一蹴した。

あれから何度か、水浴びはまだかお風呂はまだかと聞かれることもあったが、聞かなかったことにしていた。

「と、特に意味はないです」

「……………顔を真っ赤にしながら言われてもあんまり説得力はないんだけどね」

うかつにも風呂場でのことを思い出してしまった事により、瞬の顔は茹蛸状態だった。

「うっ！ でも、ほんとに何もしてないですから」

「まあ、疑っているわけじゃないけど。夜羽ちゃんも、あと数日もしたら完全に治ったといってもいいだろうね。大体、君の始業式あたりじゃないかな？」

「それならいいんです」

その言葉に瞬はほっと胸をなでおろす。

しかし、それもつかの間。

いつから聞いてたのか、夜羽からとんでもない爆弾が落とされる。

「シュン！ 聞いた！？ あと少しで治る！ 治ったら一緒にお風呂！！」

矢島さん、そんな目で見ないでください。
誤解ですよー……。

その誤解を解くのに結構時間がかかった。

ところで……気になる疑問。番外編？の話。（後書き）

もうちょっと前、初期のほうにやる予定だったやつです。

彼の空気がじめとからかわれと無自覚の話。

(前書き)

続きです。

彼の空気がじめとからかわれと無自覚の話。

矢島さんには無事、本当の話をする事ができた。

夜羽の怪我については、夏休みが終わるころには完治しているだろうと言っていた。

夜羽も飛べる日が近いと上機嫌である。

「おや？ 矢島さんとの話は終わったのかい？」

「さて、夜羽。晩御飯、何が食べたい？」

「ん。から揚げ」

「うーん、から揚げね……。わかった、そうしよう」

「おい！！ 無視ー！？」

「ああ、空気さん。いたんですか」

「クウキ。びつくりした」

相変わらず、存在感の薄い人だ。

まあ、気づいてたけど。

「君は相変わらずきついね！？ そして、夜羽ちゃん！ さすがに神尾の名を冠するだけあって、すぐにこのノリについてきたね！」

「？ ノリ？」

「気にしなくて良いと思うよ」

恐らく夜羽は本気で気づいていなかったと思う。

この人の気配は慣れてなきや絶対読めない。

きつと、バスケでは幻の六人目シックスマンに慣れるに違いない。

「とにかく、話し終わってたんだ」

「終わりましたけど………なんですか。………つか、気配消して盗み聞きしてないでしょうね？」

「してないよ！！ そんな人間に見えるのかな！？」

正直見えるし、それができる人間であることも知ってる。

「そうですね。すみませんでした」

「なんか信用されているように見えない！！ しかも夜羽ちゃんも！」

言われて隣を見ると、夜羽も疑いの目を向けていた。

まあ、あれだけ驚かされたら、わからないでもない。

「それじゃあ、帰ります」

「え、このタイミングで」

「ん、シュン早く」

「はやっ！！」

夜羽はすでに扉の前にいた。

今すぐ出ようとしている夜羽だったが、それは阻止された。
別の人間が中に入ってきたのだ。

「む？」

「あら？ ごめんなさい。大丈夫？」

「平気」

入ってきたのは、見たことのあるきれいな女性。
てか、春川さんだ。

「こんにちは。春川さん」

「あら？ 神尾君？ こんにちは」

「……シユン？ 帰る？」

夜羽は晩御飯がから揚げだからなのか、早く帰りがついていた。

「え？ えっと？」

「あー、夜羽。紹介するからちよつと待って」

「ん、わかった」

春川さんは少し驚いている様子。

「えーっと、春川さん。……なんとなく、聞いてると思いますけど、こいつは夜羽です」

「夜羽。よろしく」

「ええ！ 聞いてるわ？ 私は春川静香。よろしくね夜羽ちゃん？」
「ん」

夜羽は若干警戒してるのか、気持ち動きが硬くなっていた。

しかし、春川さんはお構いなしだった。

「話は聞いてたけど……こんなに可愛いとは思わなかったわ……。
神尾君。何もしてないでしょうね？」

「し、してませんよ！！ 何言ってるですか！」

いきなりのとんでもない発言だった。

夜羽自身が意味がわからずきょとんとしているのが唯一の救いだ。

「だって、こんなに可愛いから」

「だからって、妙な疑いをかけないでください」

「ごめんなさい？ でも……ふふっ。可愛いことは認めているのね？」

「っ！！！」

たまにこうやってからかってくる事もあったが、ここまで大きいのは始めてだった。

「顔、真っ赤よ？」

「……つく！ た、確かに可愛いですよね？ でも春川さんも美しいですよ？」

悔しかったのでちょっとした反撃に出る俺。

「あら？ ありがとう。私も神尾君と一緒に暮らしたいかも」

「んなっ！！！」

失敗だった。

てか、見事にカウンター食らった。

クスクス笑っていて、からかわれているのははつきりしているのだが、顔が赤いのは抑えられていない。

絶対に勝てないような気がする。

「シユン？ もういい？ 行こ？」

すると、今まできょとんと春川さんとの攻防（だと言わせてください）を見ていた夜羽が助け舟をくれた。

まあ、本当に早く帰りたいだけなのかもしれないが。

「んー、夜羽ちゃんご立腹みたいだから、そろそろ行くね？」

——ん、ご立腹……？

不思議に思い、横を見ると確かに怒り気味の顔をしている夜羽が

いた。

何に怒っているのかはわからなかったが、どうやら本当に助け舟だったらしい。

「夜羽」

「む？」

「ありがとうな」

助け舟に対して礼を言っと、赤面し、顔をそらした。

何か、照れさせるようなことを言っただろうか？ それとも怒らせたか？

「ん。気にしないでいい」

「？ そうか」

正直、何に対して気にしなくていいかわからなくなったが、とりあえず置いておくことにした。

「それじゃ、帰るか」

「ん、帰る」

「あーちよつと待つて？ 神尾君。大村君知らないかしら？」

「大村…… ああ、空気さんですか。確か春川さんが来る前まで、隣にいたはずですけど」

「空気…… 新しいあだ名ね？ ふふつ、ピッタリだね。…… それにしても…… 逃げたわね？」

「？」

後半は何を言ったか聞こえなかったが、なんとなく空気さんがひどい目にあつような気がした。

彼の空気がじめとからかわれと無自覚の話。

（後書き）

感想お待ちします！

それぞれの心の中の話。 (前書き)

少し真面目な話で。

それぞれの心の中の話。

もうすぐ怪我が治るという朗報を聞かされ、始めこそ二人で喜びはしたが、その後なんとなく空気はギクシャクしていた。

どちらも、治った後の事を考えていたからだ。

「……あ、鳥肉ねえや。夜羽、俺は買い物行ってくるから、先に帰っててくれ」

「ん、わかった」

妙な空気のまま、瞬は鍵を預け、バラバラに行動を開始する。

瞬は夜羽と離れた後、ふと足を止めた。

頭に浮かぶのは、やはり今後のこと。

はじめから、なんとなく一緒に生活をはじめ、いつの間にか一緒に普通になっていた。

まるで家族が生きていた頃みたいな感覚を持ってもいた。

それでも、別れは来るとわかっていた。

夜羽には夜羽の生活はあるのだ。

夜羽が時折、窓の外を眺めていることも、外から別のカラスの鳴

き声が聞こえるたび、複雑そうな顔をしていたのも知っている。

やはり、元の生活の戻りたいと思うこともあるのだろう。

夜羽がどういう選択をするのかはわからないが、それはどんな形であれ受け入れなければならない。

——だとしても……。

「……………寂しくなる、な」

それは、かつて瞬が家族を失ったときも言う事のなかった言葉。

夜羽は家で寝転がり、考えた。

瞬と同じく、今後のことを。

それは、前にも考えたこと。

そしてそのときは結論が出なかったこと。
しかし、もうすぐ決めなければならない。

そのために思い出す。

自らの怪我の原因を。

あの時、逃げ延びたのは自分だけ？

周りは皆、死んでしまった？

縄張りだった場所はどうなった？

確認しに行くべきでは？

もし仲間は無事で、縄張りも無事だったなら？

自分はそこに戻るのだろうか。

でも、シュンの家に安心感があるのも事実。

シュンと一緒にいるのは嫌じゃない。

むしろ楽しく感じてると思う。

なら、ニンゲンはどうか？

ニンゲンとして過ごしてきて、いいニンゲンがたくさんいるのもわかった。

ニンゲンとも仲良くなることが出来た。

でもワタシはニンゲンじゃない。

いつまでもニンゲンの振りをしていると迷惑になる。

ワタシはここを離れるべきではないのか？

シュンとは離れなくてはならないのではないか？

——だとしたら……。

「……寂しい……」

それは、夜羽が今まで生きてきて一度も使うことのなかった言葉。

買い物を終え、戻ってきた瞬と他愛もない話をする夜羽。

決断の日が近いことを理解しながらも、彼も彼女もいつも通りの日常を続ける。

それぞれの心の中の話 (後書き)

えっと、シリアス風にしてみたんですが……なっていましたか？
シリアス。

夏休み最終日と彼の話。

朝、自然と目が覚めた。

今まで夜羽に朝から起こされてきたからか、そういう習慣が出来ていた。

「……今日で夏休みも終わるか」

大して気にした様子もなくつぶやく瞬。

時計を確認し、夜羽が起こしに来なかったことを若干疑問に思いながらも、ダルそうにリビングに向かう。

「……夜羽の包帯、そろそろ取ってもいいんだっとな……」

矢島さんには二・三日前から、傷も塞がっていてもうそろそろ包帯も取ってもいいといわれていた。

それなのに今まで取らなかったのはただなんとなく、気まぐれだ。いつも起きるのが早い夜羽には珍しく、彼女はリビングにいなかった。

まだ起きていないのかと、夜羽に使わせている両親の部屋に向かうとすると、ベランダの窓から朝の涼しげな風が入り込んできた。

「……風……？」

そちらに目を向けると、ベランダの窓は少しだけ開いていた。

——昨日、すっかり戸締りはしたはず……。

疑問に思う瞬の顔に、入り込む風で何かが飛んできた。

「おっ……と、なんだ？」

飛んできたのは包帯。

何かに気づき瞬は走り出す。

向かう先は両親の部屋。

勢いよく扉を開けるが、そこに望む姿はなかった。

一瞬、焦ったように捜しに行こうかと思ったが、すぐに思いとどまった。

これは夜羽の選択であると。

しばらく立ち尽くしてしまった瞬であったが、また今までの生活に戻ろうとする。

だが、そんなものはうまくいくはずもない。

前までなら寝ている時間も、二度寝はできそうにもない。面倒くさいはずなのに、何もしていないと落ち着かない。

「あー……くそっ！　いつもの俺じゃない！　落ち込みすぎだろ！」
たった数週間のはずなのに、居なくなるところも凹むものだろうか。

凹んだ気分を振り払うために外に向かう瞬。

だが、歩きながらも自然と視線は空の方に。

「って、未練ったらしい……。馬鹿か俺は」

「おや！　瞬君！　久しぶりー」

散歩しても気分の晴れない瞬に、よく聞く声がかかる。

「ん……飯田？」

「そうだよ！　久しぶり、元気だった？　今日は一人なんだ？」

「それなりに……って、宿題終わったんだ」

夜羽のことについて尋ねられていたのはわかったが、スルーして他の話題を振った。

「うん！　志戸塚君にメールして、教えてもらったんだ！」

「へえ、あいつに……。よくそんなことできたな？　あいつは絶対面倒くさがると思ってた」

「そんなことないよ？　志戸塚君は学校でも教えてくれてたし。あー、でも保険で志戸塚君のメルアド聞いたってほんとに良かったよ……。！　瞬君教えてくんないし、ほとんどやってなかったからどうしようかと思ったよ」

元々、俺は教えるつもりはなかったが、志戸塚は答えをほとんどメールで教えたってことか。

——ちなみに志戸塚は逆に教えないとしつこいから教えたただけである。

「一回一回メールの受け答えしたわけか。よくやるな」

「違うよ？　なんか志戸塚君にヘルプメール出したら、宿題の答えがのったメールがすぐにいっぱい送られてきたよ」

ということはつまり、飯田が宿題をほとんどやらないのを見越して、答えの書いてあるメールを事前に作って、教えてくれて言われたらそのメールを立て続けに送ったって事か。

「どこがわからないとかの受け答えが面倒だったからだと思うが……
…答えの載ったメールを予め作つとくのも相当面倒だろ……よくやるわ」

「ねー？　志戸塚君すごくいい人だね？」

飯田がかなり論点のずれたことを抜かしていたが、気にしないようにしよう。

「ほんつとに！　誰かさんとは大違いだね?!」

……嫌味だったようだが、気にしないようにしよう。

「ソーデスネ」

「……それはもういいよ」

彼と彼女の夏休み最終日の話。(前書き)

最初一人称、途中から三人称になります。

彼と彼女の夏休み最終日の話。

飯田と他愛の無い話をした後、何もする気も起きずにふらふらと家に帰った。

——……また一人の生活に慣れるには少し時間がかかるかなー。

ガチャッ

「ただいまっ」と

ついその言葉が出てしまったのは、この短い間で出来た習慣であった。

だが今はそれに返すものはいない。

「ふー……」

特に疲れた訳でもなく、ただなんとなくため息をつく瞬間。

とりあえず明日からの登校の準備をしなければと立ち上がる。
コンコン。

——ベランダの窓から音がしている……？。

「……………気のせい、か…………？ ……まさかな」

コンコンコン。

「……………気のせいでもないみたい、か」

だとしたらもうそれしかないだろうと、若干何が待っているかを理解しながらもベランダに向かう。
勢いよくベランダの窓を開けると、

ひたすらに元気そうなカラスが一羽、こちらを見つめていた。

『カー』

「…………それはただいまって意味か？」

瞬の言葉を見無視してカラスは我が物顔で家に入り込む。

そして突然、

ポンッ！

と軽快な音を立て、人の姿になった。

「ん、そう。ただいま」

「……………」

「む、おかえりはどうした？ シュン」

「……………る」

「む？」

「さっさと服を着ろお……………！！！！！！！！！！」
「ん、忘れてた」

「で？」

「で、って？」

「……………何にも言わず包帯だけ置いて消えたから、元の生活に戻るのかと思った」

「ワタシもそのつもりだった。でもワタシがどうしたいか考えたとき、ここにいたいと思った」

「……………そうか」

「……………いいの？　いて」

「ああ、好きにしる。前にも言ったが、家に招いた相手は自分に出来る最大限のもてなしをしるって言われてるって。お前がここに居たいってんなら、もてなすさ。……………面倒くさいけどな」

最後の一言はただのテレ隠しである。

その言葉に困った表情を見せる夜羽。

「……………招いてない」

「招いたと思うけど？　俺はベランダの窓を開けて夜羽を招き入れた。違うか？」

「……………」

まだ少し悩んでいるような表情を見せる夜羽に瞬は意を決し、本心を伝えることにした。

「……………こう言えいいか？　今日まで夜羽と一緒に過ごすのが当たり前になりすぎた。だから夜羽が居なくなるのは、寂しい。……………俺と一緒にいてくれないか？」

かなりテレながら伝えるが、誰か他の人が聞けば、ほとんどポーズにしかなくてないことに瞬は気づいていない。

「……ん、ワタシも寂しいのは、や」

そう言って笑顔を見せる夜羽。

この答えも聞きようによってはプロポーズを受けたようにしか聞こえないが、もちろん夜羽が知るはずも無い。

「じゃ、改めて……おかえり、夜羽」

「ん、ただいま、シュン」

そして一人と一羽の、彼と彼女のゆるーい生活は続く。

彼と彼女の夏休み最終日の話。（後書き）

とりあえず、夏休み編？ 完結、みたいな感じです。

この後一回番外みたいなの……てか、夏休み最終日の鳥さんバージョン挟んでから、学校が始まってからの話をやりたいと思います。

学校編？ は、ストックを作ってから更新したいので、もしかしたらだいぶ間が空くかもしれません。

どうか見捨てずにお願いします！！

感想もお待ちしております。

番外の話——夏休み最終日と彼女の話

何も言わずにシュンの家を出た。

付けていたホウタイは、シュンの家ではずしてきた。

服はなんとなく持ってきてしまったので、近くに隠しておくことにする。

カラスの姿に戻り、空を飛ぶ。

しばらく感じることのなかった感覚。

その感覚を一頻り味わった後、ワタシは目的の地を探す。

あの時、一心不乱に逃げてきたから、方向なんてまったくわからない。

ただなんとなく、懐かしさを感じる場所を探すのだ。

結局、何もわからずじまいだった。

もう夕方になる。

あと少ししたら暗くなってしまうだろう。

『どう、しよう……』

近くの木に止まりながら今後のことを考える。

すると近くに見知った気配を感じ取った。

『（ホタル……！）』

今までも、何かあるとホタルに相談に乗ってもらったことの多かったワタシは、今の状況を相談しようと思ったのだ。

急いで服を隠しているところまで飛び、着替えてホタルの居る場所まで走る。

ホタルはいつもの服じゃなくて、妙にキチツとした服を着ていた。

「ホタルッ！」

「あれ？ 夜羽ちゃん？ こんにちは」

「ん、こんにちは。……シヤンは？」

ワタシは何日も蛭やシヤンと触れ合ううちに、すっかりシヤンとも仲良くなっていた。

「あはは、見ての通りだよ？ 今日から私たちは学校だったからね。シヤンは連れてない。散歩の時間をお昼から早朝にずらしたんだ」
「ガッコウ？ ナツヤスミは？」

「あれ？ 夜羽ちゃんの学校はまだ夏休み最中なんだ？ 私たちは今日からだっただんだ」

「ん、そうなのか」

夏休みというのをまだ詳しく把握できていなかったワタシはとりあえず流すことにした。

「それで、夜羽ちゃんは何か焦り気味だったけどどうかした？」

「む、相談ある」
「相談？」

だが、ここまで言ったところで、どう説明してどう相談すればいいのかわからなくなってしまう、

「……あ、えっと、一人で過ごすのは、どうすれば、いい？」
と、要領の得ない相談になってしまった。

しかし、そんな相談にもかかわらずホテルはしっかり理解し、問いかけてくる。

「一人つて、神尾さんは？ 何かあった？」

「ん、違う。……怪我也治った。シュンの家にいるの、迷惑」

「だから、一人で過ごそうとした？」

「ん」

「違うと思うよ、それ」

「？」

「んーっと、私もうまくいえないし、どういう状況でそんな話になったかもわからないけど、今は神尾さんが面倒見てくれてるんだよね？」

「……ん」

「それって、つまり神尾さんは自分を頼ってもいいって言ってるのかもしれないよ？」

「頼、る」

「うん。迷惑をかけるって事は頼るってことだと思う。私は神尾さんなら、もうちょっと頼ってもいいとも思うよ？」

「……………」

言いたい事はわかったけど、なんとなく納得しきっていないワタ

シに、ホタルはさらに問う。

「それなら、さ。夜羽ちゃんはどうしたいの？」

「……………どう……………？」

「うん。夜羽ちゃんが一人になりたいんならそうすべきだと思うし、神尾さんと一緒にいたいなら、無理して一人になる必要はないと思う。要は夜羽ちゃんがどうしたいか、じゃないかな？」

「ワタシが、どうしたい、か？」

言われたことを理解するのに時間がかかり、しばらくポカーンとしてしまった。

「私そろそろ帰んなきゃだから……………ゆっくり考えてね？」

ホタルはそう言い残し去っていった。

かと思えば、すぐに引き返してきた。

「そうだ！ これ！ 私の連絡先ね？ 電話番号とアドレスと一応住所もあるから……………何かあったら呼んでね？ それにいつでも遊びに来てもいいから」

そして今度こそホタルは去っていった。

もらった連絡先を握り締めながらワタシは、これからどうするか

ではなく、自分が一体何をして、どうしたいかを考えていた。

こうして下す決断は、自らのためのもの。

番外の話——夏休み最終日と彼女の話（後書き）

なっていましたか？ シリアスっぽく。

とりあえずこれで夏休みの話は終わりです。

次の更新で章を区切ってみたいと思います。

彼の学校の話 (前書き)

と言うことで、少しストックがたまってきたんで再開します。

彼の学校の話

始業式の朝、制服に身を包んだ瞬が夜羽に説明をしていた。

「てなわけで、今日から学校が始まる。昨日教えたとおり、朝から出掛けて夕方ぐらいには帰ってくるから」

「ん、わかった」

「昼ごはんはレンジに入ってるから、お腹がすいたら温めて食べるように。絶対に今レンジに入ってるもの以外入れるなよ？」

「ん、もう卵が爆発するのは見たくない」

「鍵は置いておくから、散歩するなら鍵をかけてな？ でもこの時期に一人で昼間、夜羽ぐらいの年頃の子がウロウロしてたら怪しまれるからほどほどにな？」

「ん」

「後は「シュン。大丈夫。今言ったことは全部昨日も聞いた。心配ない」……そうだな。それじゃ、行ってくるから」

さらに注意を続けようとする俺を夜羽が止めた。

「ん、いつてらっしゃい」

「いつてきます」

笑顔で挨拶を交わし、俺は学校へ向かう。

教室に入り、自分の席に付くと即座に数人の同級生が集まってきた。

『宿題見せてくれ!!』

「断る」

『ひどい!!』

俺がそう答えるのは予想通りだったのだろう。

数人が自分の席に戻っていった。

「相変わらずそういうことの関しては冷たいのー。神尾」

その中で一人残ったのは、藤森 ふじもり 宗一 しゅういち。クラスの中では仲がいい

友達だ。

「面倒だろ。一回見せると絶対他にも見せろってやつが出てくる。」

つかこのクラスの連中宿題やらなすぎなんだよ」

「確かになー実際まともにやってくんのはお前と委員長ぐらいなもんじゃね？　つかその委員長は宿題やった人間が少ないことに憤慨してらっしゃるし」

藤森が指差す方を見ると、長い髪を大きく揺らし、宿題を見せてもらおうと必死の連中に「何故自分でやってこないんですのぉー！！」と、怒っていた。

誰かに頼れば大丈夫みたいな精神が気に食わないとかそのあたりだろう。

実際ただ寝てるだけの志戸塚に被害は行つて無い。

と言つか志戸塚もまともに宿題をやってきてる人間なのだが。

ちなみに話し方について「そのしゃべり方はお嬢様キャラを作っているのか？」と尋ねて、数時間怒られた男子もいる。

藤森だが。

実際のところは、委員長は本当にお嬢様で、話し方はメイドさんの話し方が移ったそうだ。

「とにかく、俺は絶対に見せない。他を当たれ」

「えーけっちな？ どうせ飯田さんにゃあ教えてあげたんだろ？」

クラスのはほとんどはありえないと思っているのだが、こいつは俺と飯田が付き合っていると勘違いをしている。

今まで面倒だったから一度も否定しなかったことも災いしているようだ。

「教えてない」

「嘘つけー飯田さん宿題を友達に見せてたぞ？ お前が教えてないや飯田さんが宿題なんか出来るわけ無いだろ？」

「やってくるわけ無いじゃなくて、出来るわけ無い……か。お前も結構言うな。とにかく俺じゃない。他の奴に教わったとさ」

志戸塚の名前を出さずに他のやつと言ったのは、人付き合いの嫌いな志戸塚に迷惑をかけないためである。

その志戸塚は、来たときからずっと机に突っ伏し、寝ている。

恐らく、誰か先生に呼ばれるまで顔を上げることは無いだろう。

「おいおい！ 他のやつってか！ 浮気じゃね？ 神尾ってば破局のピンチじゃね？」

「うるさい……」

本格的に藤森の相手をするのが面倒になってきた。

するとその話題の人物が駆け寄ってきた。

「瞬君おはよー！」

「……おはよう」

「おっと、俺はここらで……」

飯田が登場したことで、藤森がニヤニヤ笑いながら離れていった。

「瞬君！ 今日学校終わったら皆でカラオケとか行かない？」

「行かない」

「えー……いこーよー」

「断る」

「なんで「夏休み終わりには……テストがあるよな？」……ごめんなさい。勉強します」

絶対に忘れていたのだろうことを思い出させ、その話を終わらせた。

「もちろん教えてくれ「断る」……ぶー」

飯田は渋々自分の席に戻っていった。

しかしこのまま放っておいたらすぐに、じゃあテスト後に、とか言い出しそうだったので、席を離れ一時避難することにした。

「ふう……」

逃げた場所は志戸塚の席付近。

「……何」

「いや、お前の近く人いないし」

「……」

「別に会話しようってわけじゃない。独り言だ適当に聞き流せ」

「……」

「この夏休み、後半からは意外といろいろあって面倒くさがってられなかった」

「……」

「まあ、充実した夏休みになったのかもしれない」

「……」

「にしても、よく飯田に宿題を教えたもんだ。つかメール作成絶対大変だったろ」

「……………だ？」

「あん？」

今まで無言を通していた志戸塚が何か言葉を発した。

「いつから飯田愛美を呼び捨てに？」

飯田に対する文句でも聞けるかと思ったら、俺に対する疑問だった。

「夏休み最中」

「……………そう……………とうとう」

「ちょっと待て。とてつもなく勘違いをしている。お前は」

志戸塚にそういうことを言われるとは思ってもみなかった俺は、反射的に突っ込みを入れた。

結局この後チャイムがなるまで、無言の志戸塚の勘違いを解くのに時間を費やした。

彼の学校の話 (後書き)

8 / 19 なんとなく友達の名前変えました。

学校の彼と家の彼。(前書き)

続きですよ。

学校の彼と家の彼。

始業式の日から授業があるってのは生徒にとって苦痛以外の何物でも無い。

適当に授業を聞き流し、気がつけば昼休みだった。

「神尾飯だ。購買へ急ぐぞ！」

「いや、今日から弁当だ」

今まで、作るのが面倒だったので、購買で昼食を買っていた。しかも自分で買いに行くのも面倒なので、藤森に手数料を渡して買ってきてもらうようにしていた。

だが、今は夜羽の昼食を作るついでにと、自分の弁当も作ってきたのだ。

そんな予想外に衝撃を受ける藤森。

「何！……まさか、飯田さんに」

「違う。自分だ」

「マジか……どういう心境の変化だ？」

「うるさい。ついでだ。てか早く行かないと何もなくなるぞ」

「お、おお……一体何のついでか気になるが、まあいい行ってくる」

そう言って藤森は駆けていった。

「瞬君。お昼、一緒に食べ」嫌です「うえ！？ 言い終わる前に！」

「藤森と一緒に食べるからな」

「じゃあ、藤森君も一緒に」

「何言ってる。あいつはお前がいるとどこかに行ってしまうじゃない

いか」

要するに間違った気を使おうとしているのだが。

そんなことを知る由も無い飯田は、

「そうなんだよね……藤森君、私がいるといなくなっちゃうんだよね……嫌われてるのかな？」

若干凹んでいた。

「とにかく、飯田は別な奴と「嫌ってないよ!？」飯田さん! 気を使っているだけさ! まあ、今回は神尾が照れてるらしいから、俺も一緒にするが」……余計なことを」

この教室からはだいぶ離れているはずの購買に行った藤森が、脅威のスピードで帰ってきた。

しかも盗み聞きしてたらしく、大幅に勘違いした事を抜かしながら会話に参加する。

「ほんと? じゃ、一緒に食べよう!」

「おうとも!」

「……………はあ」

ため息が出てしまうのは仕方が無いと思う。

——そして志戸塚。哀れむ様な目でこちらを見るな。

放課後、なにやら飯田も藤森も話しかけてきた気もするが、面倒くさそうだったもので、全て無視してさっさと学校を出た。

瞬は家に帰る途中、冷蔵庫の中身が少なくなっているのを思い出し、とりあえず近くのスーパーに目的地を変えた。

「……なんか、込んでる」

肉コーナーに足を運ぶと、そこには数人の人だかりが出来ていた。どうやら、タイムセールが行なわれるようだ。

その情報を手に入れた俺は当然、

「めんどそうだから、他のを買うか……」

面倒くさいからとその場を離れようとする。

がしかし、ついていないことにタイムセールが始まってしまい、

ドドドドドツッ！！！！

後ろから押し寄せてくる人だかりに押し込まれてしまった。

数分で物がなくなったのか人だかりは消えていった。

「……………こ、怖かった」

恐怖する俺の手には、タイムセールの豚ばら肉があった。

抜け出そうと暴れるうちに、偶然手に入ったものだ。

「まあ、いいか。怖い思いもしたんだし」

特に豚ばら肉は要らなかったんだが。

が、何事も安く済むならそれでいい。

だいぶ疲れた顔で帰路につく。

俺は家のドアの前で、鍵を探したが、

「ああ……鍵は持って出なかったんだっただか」

と、家の中で待つものがあることを思い出し、頬を掻く。

学校が始まったこともあり、少しだけ頭から抜けてしまったのだ。

ガチャッ

「ん、おかえり」

すぐに出迎えてくれた夜羽。

「……ただいま」

その感覚に、改めて若干くすぐったくなりながらも答えた。

「さて、今日は何して過ごした？」

「ん、言うけど……シユンも」

「あーそつだな。じゃ、お互いに報告するか」

「ん」

俺と夜羽は一日に出来事を話し始める。

学校の彼と家の彼。(後書き)

感想お待ちします！

学校の間の彼女の様子の話 (前書き)

今日の夜羽の一日。

最後だけ三人称です。

学校の間の彼女の様子の話。

「てな感じかな？ 学校の話は」

シュンの今日の出来事を聞いた。

ガッコウというのはずっと座って話を聞いたりで意外とつまらないところだと思った。

でもその話の内容の割にはシュンの顔は楽しそうに笑っている。

……よくわからない。

「それで？ 夜羽は今日何を？」

「ん、今日は空飛んだり、イチロウに会いに行ったりした」

「イチロウ…… 矢島さんか！ …… 何でまた？」

「ん、少し話してみたかった」

シュンが学校に行って少ししてから、空を飛んで近くを見て回った。

運がよければワタシがいた場所が見つかるかもしれないし。

けどやっぱり見つかりはしなかった。

家に帰ったワタシは、しばらくは横になったりして時間を潰し、昼食をとり、そしてヤジマ動物病院に向かった。

この場所に自分だけで来ることのなかったので、若干緊張しながら入り口の前に立つ。

「……ふー」

少しだけ息を吐き、ゆっくりと扉を開けると、人はほとんどいなく、受付の場所に春川静香が立っているだけだった。

「あれ？ ……夜羽ちゃん？」

「ん……確か、シズカ」

「うん、そうよ？ どうしたの？ 今日は一かしら？」

「ん、シユンは学校。イチロウに会いに来た」

そういうとシズカの目が少しだけ見開かれた。

「イチロウって言う……先生かしら？ ちょっと待っててね？」

シズカはすぐにイチロウを呼びに行った。

「え？ 夜羽ちゃんが？ ……ほんとだ。えっと、僕に会いに来たって？」

「ん、いろいろ話に来た」

「……そうか。じゃ、ちょうど誰もいないし、こっちにどうぞ？」

「わかった」

イチロウがワタシを部屋に案内した。

ちなみに残された静香は不思議そうに呟いていた。

「神尾君が学校はじまったのね。……夜羽ちゃん、確か十五歳だったはずだけど、まだ夏休み中なのかしら？」

「それで、何か僕に話したいことでもあるのかな？」

「んーん、特には無い」

「……………へ？」

「む？」

イチロウが若干間抜け面でワタシを見た来た。

「どうかした？」

「い、いや……………いろいろ話にきたって言うから、何か大事な話があるのかと」

「違う。シュン暇なときいつもここに来てた。だからワタシも」

「あ……………なるほど、ね。そういうことなら、話し相手になるよ。」

……………それで、怪我は大丈夫かい？」

すぐに納得したイチロウはまずは「獣医として」と前置きをして尋ねてきた。

「ん、問題ない。治った」

「それは良かった。あ、そういえば夜羽ちゃんは今はどこに住んでるんだい？」

「シュンの家」

「あ、そこに住んでるんだ。てつきり怪我が治ったら元の生活に戻るものだ」と

「そのつもりだったけど……………自分がどうしたいか考えたとき、離れたくなかった」

「そっか。神尾君もそれでいいって？」

「ん、シュンも一緒にいたいって言うてくれた。いなくなると寂しいって」

「へー？ ……か、神尾君がそんなことを？」
イチロウはすごく驚いた顔をしていた。

「ん」

それを聞いたイチロウが「へー、あの神尾君がねー」と若干ニヤニヤしながら呟いていた。

……？ 何がそんなに面白いんだろう？

——夜羽が知る由もなかったが、今後、瞬がそのことからかわれるのは請け合いだろう。

ここに来てから聞かれてばかりだったのでワタシもイチロウに尋ねる。

「イチロウ、シュンの話を聞きたい」

「ん？ 神尾君の？ ……僕の知ってることなら」

イチロウからシュンの話をたくさん聞く事が出来た。

時間も遅くなってきたところで、

「先生、患者さんです」

とイチロウに声かけられた。

「わかった、すぐ行く。えっと夜羽ちゃん、僕はそろそろ行くけど」

「ん、大丈夫。ワタシもそろそろ帰る。シュンも帰ってくるかもしれないし」

それを聞いたイチロウは微笑みながらワタシを見て、
「うん、またおいで。今度は神尾君と一緒にでもいい」

と言った。

「む、その前にまたワタシだけでシュンの話を聞きに来るかも」

「ああ、それでもいいよ。待ってる。じゃあね？」

「ん、じゃあ、また来る」

こうしてワタシはシュンの家に戻っていった。

自分の話になっていたことなどまったく知らない瞬は、のん気に夜羽の報告を聞いていた。

「ふーん。まあ、矢島さんと仲良くなるのはいいことだと思う」

「ん、またいくと思う」

「ああ、いいんじゃない？」

そして着々と矢島しか知らなかったはずの瞬の情報が夜羽に流れていく。

その事実気づくのは、学校が休みになってから、二人でヤジマ

動物病院を訪れたときだった。

彼の照れと彼女の激しい羞恥の話

互いの報告も終わり、食事の準備に取り掛かる。
その間、夜羽はテレビを見ている。

最近前に比べ、より人間の生活を満喫しだした夜羽は、着々と家の中の電化製品を使いこなし始めていた。
始めは突然ついたテレビに驚いていたりもしたが、今では自分で見たい番組に回している。

「（いいこと……なのか？）」
人間の生活になじみすぎて大丈夫かと思わないことも無い。

だが、
「出来たぞー」
簡単な料理を作り終え、夜羽を呼ぶ瞬。
「ん、食べる」
それに応え、すぐにかけてくる夜羽。

今の生活を悪く思っていない瞬は何も言うことはできない。

「さて夜羽、カラスの姿に戻ってくれ。体洗うぞ？」
そう言って瞬は夜羽を呼んだ。

「……………?」

だが夜羽は不思議そうな顔をして、こちらを見つめていた。

「? どうし「怪我、治った。シュン、お風呂」……………」

……………」

頭を抱える瞬。

まだ諦めてなかったのか……………。

「む、どうした?」

今にも服を脱ぎだしそうな夜羽に瞬は言いづらそうに、

「……………あー……………その、何だ……………一緒にお風呂に入るってのは、さ……………何て言うか……………」

「む?」

「あー……………そういうのは、あ、愛し合ってから……………というか……………夫婦か、せめて恋人になってから」

「アイシアツテ? ……フーフ? コイビト……………コイビト? ……」
何かに気づいたように目を見開く夜羽。

「シュン。コイビトというのは、恋仲のこと、か?」

「ん……………ああ、そう、だ」

「フーフというのは……………」

「えっと何つつたらいいか……………夫婦^{めおと}、とか……………つがい、とかか?」

「メオト……………ツガイ……………!」

つがいの言葉で夜羽の頭に浮かぶ、ある行為。

夜羽はつがいとはその行為をするためになるものとして捉えていた。

そしてかなり動揺しながら、瞬に尋ねる。

「な、なら、アイシアツテって……！」

「えーっと、そういう仲になる状況、とでもいうか……」

ここまで聞いた夜羽は、

ボツ！！

と、音が聞こえそうな勢いで、顔を真っ赤に染めていった。

自分が瞬に求めていた、お風呂と一緒に入るというのは、その行為——繁殖行為をするような深い仲のものがするものだとしり、困惑する夜羽。

「お、おい？ 夜羽？」

瞬はいつもあまりうるたえない夜羽がここまで動揺するのを初めて見た。

「シュ、シュ、シュン！ お、おおお風呂と一緒に入るのが、そこまで、ふ、深い行為だとはし、知らなかった！ なんかいもそういうこと言っつて、あああああ謝る……」

「い、いや、俺も詳しく教えてなかったし」

最初は瞬も動揺していたのだが、その後の夜羽の慌てっぷりを見て、少し落ち着いていた。

今は真っ赤になってワタワタする夜羽を物珍しげに眺めていた。

それに気づいた夜羽はさらに慌て、

「あ、ああああうう！ み、見ない、で……！」
と言つて必死に瞬の目を手で隠そうとしてきた。

突然、押し寄せられた瞬は、バランスがとれずに倒れてしまう。

それに巻き込まれ、夜羽も倒れてしまう。

「つと！」
「ひゃう！」

結果、夜羽が瞬を押し倒したような構図が出来上がる。

夜羽も最初はそのことに気づかなかつたが、瞬はどうしても照れから、不自然に視線をはずしてしまった。

それを見た夜羽は、今自分が人間にとってどういう体勢かを悟つてしまい、

「——っ！……！」

赤かつた顔をさらに真っ赤に染め、声になら無い声を出して、力ラスの姿に戻り飛びながら夜羽が使用している部屋に逃げに行った。

「……………とりあえず、少しの間そつとしておくか」

今は瞬も顔が赤かつた。

彼の照れと彼女の激しい羞恥の話。(後書き)

番外編？ の続きでした。

彼女との気まずい空気と学校での委員長の話。

朝起きるとすでに夜羽は起きていた。

もう落ち着いたかと思い、声をかけると、

「おはよう夜羽」

「お、はよう」

「……………」

「……………」

……まだ、気まずいようだ。

瞬自身は昨日のことは気にしてないのだが、やはり恥ずかしかったのは夜羽のほう。

たった一晩で、この空気を取り除くのは難しいのかもしれない。

朝食を食べているときも、何度か話しかけると、答えはするが、目を合わせようとはしてくれない。

「じゃ、いつてきます」

「いつてらっしゃい……………」

「……………」

「……………」

さて、どうしようか。

「んー………… ケーキなんかでも買って帰るか？ …… いや、喧嘩してるわけでも夜羽自身怒ってるわけでも無いから、機嫌を直すとか

そついうことじゃないんだよな……」

家を出てから学校まで俺はずっとどうすればいいか考えていた。

教室に到着する頃には、考えることに疲れていた。

「ふー……お、今日は藤森も飯田もまだ来てないのか」
ほっとしながら呟く。

今日は静かな朝が過ごせそうだ。

「おはようですの。神尾くん」

「……………」おはよう、委員長」
前言撤回します。

「委員長と呼ぶのは止めてほしいです！ 委員長はわたくし以外にもいますし。わたくしには東城ゆりか（とうぎ ゆりか）と言う名前がありますの！」

「はいはい……東城さん。何か御用で？」

そう俺が聞くとジッとこちらを見つめ、はつきり告げた。

「愚痴ですのっ！……！」

「……………」は？」

「神尾くんも見たのでしよう!? このクラスの体たらく! わたくし以外のもう一人の委員長ですら宿題をやつてこないで、挙句見せてくれと言つてきたんですよ!」

「はあ……」

「わたくしそういうことする人が大嫌いなんですの! それなのに先生はそれが当たり前かのように一週間も期限を延ばしましたのよ! ? 納得がいかないんですの! ! しっかり期限内にやつてきたわたくし達のほうが馬鹿みたいですよ! ! ! !」

「……………」

東城さんは気づいて無いんだろうけど、大声で叫んでもんだから周りの生徒がこつちを見てから気まずそうに目をそらしてるぞ。このクラスの奴ら半分ぐらいは東城さんに好意を寄せてるから、その文句を周りに聞かせただけで、だいぶ罰になつてると思う。

なぜか俺が睨まれてるけど。

言いたいことを言い終わつたからか、普通の声に戻り、話を続ける東城さん。

「ふう、一方的に愚痴を聞いてもらつて申し訳ないですよ」

「いいよ。聞いてただけだし」

「それだけでもありがたいですよ。あ、神尾君も何か言いたい事ありましたら聞きますのよ?」

「あん? んー……」

「……それにしても、実際まともにやつてきたのはわたくしと神尾くんだけではありませんの? 飯田さんはやつてあつたみたいですが、自分でやつたとは思えませんし」

まだ話したりなかったのか。

ちなみに飯田が自分でやって無いつてのは正解。

「まさか、神尾くん教えてあげたんですの？」

それは不正解。

「まさか。俺じゃない。それとまともにやってきたのは俺らだけじゃないよ」

「え？ でもこのクラスでやってきてたのは、わたくしと神尾さんと飯田さんと……志戸塚くん？」

「うん」

「……でも、こう言うては失礼かもですけど、いつも赤点ギリギリの志戸塚くんが自分でやったとは思えませんの」

……この学校に他人と点数を知る手段は無いはずなんだけど、何故志戸塚の点数知ってるんだろうか。

「誰かに見せてもらったと？」

「……ええ、申し訳ありませんけど」

実際このクラスの生徒……いや、恐らく先生もそうだろう。皆が志戸塚が自分でやってないと思ってる。

「……そこがわかんないんだけど」

「え？」

「あいつにそんな社交性があると思ってるのかね？」

「あー……では、志戸塚くんは自分で？」

「ああ、あいつは実際頭いいよ。テストの点がさっき東城さんが言ったとおりの点数だったら、あいつは毎回狙ってそことってんじゃないかな？ たぶん、解答欄を埋めるのが面倒だから、必要最小限しか埋めないとか」

東城さんが目を丸くしているのがわかる。

そして志戸塚の席まで歩き出そうと、

「ちよつと待った！」

「何ですか？」

「どこ行くの？」

「志戸塚さんの所ですの。直接聞いてきますの。それでもし本当なら、謝らなければ。昨日見せてもらったと思って、怒鳴りつけてしまいましたの」

そんなことしてたのか……。

「とにかく止めてあげてくれまいか？ さっきも言っただけどあいつは社交性無い。話しかけられるの嫌いだから。聞いたって絶対話したりしないだろうし、怒鳴ったこともなんとも思っただい。すまないと思っただならほつといてやってくれ」

「……………よくわからないですのー……………」

「そんなもんだって」

「まあいいですの。それよりもさっきも言いましたけど、神尾くんは何かありますの？」

ん、ああさっきのこつちの話も聞くて奴か。

「あー……………愚痴じゃないんだけど、相談聞いてくれるかー？」

「えー？ ええ、もちろん。それにしても神尾くんが相談なんて珍しいですね？」

自分から聞いてきたのに意外と驚かれた。

「んー、まあ……………えつと、女の子に恥ずかしい思いつていうか、気まずい思いをさせちゃったときはどうすりゃいい……………？」

「予想外にピンクな話題でしたの！！ あなた一体何をしましたの

!？」

「いや、何もして無いって……。ただ勘違いが重なって相手に恥ずかしい思いをさせちゃったつか」

「……………それは、飯田さんですか？」

話の内容に驚き、半眼で睨んできた東城さん。

何か急に不機嫌になったような気がする。

「違う」

はつきり否定したのだが、まだ何か納得いつてない様子。

「まあ、相手が誰かが激しく気になるところですけど……………なんとなく教えてもらえなさそうな気がしますので、置いておきますの」
「そうしてもらえると助かる」

東城さんは少し考えた後、

「ん……………気まずいだけなら時間が解決するのでは？ それでも不安なら神尾くんのほうから一回謝るべきですの」
「謝る？」

「ええ、気まずい思いをさせている自覚はあるんですよ？ だったら、特に悪いこととしてなくても男として謝っておくべきですの」

……………よくわからないけど、委員長が言うならそうなんだろう。
「わかった。参考にしてみる。ありがとう」

「いーえ。今度ちゃんとお相手のこと聞かせてもらいますの」
そう言つて東城さんは自分の席に戻って行った。

そのとき少しだけ見えた顔は、考え込んでいるように見えたのは気のせいだろうか…………？

それと、さつきから教室の入り口付近で、ニヤニヤしている藤森とメツチャ睨み付けて来る飯田がいたような気がするのも気のせいだろうか。

彼女との気まずい空気と学校での委員長の話。(後書き)

こういうキャラを一回使ってみたかったんで……。

家での彼女が悩む話。

「……………うー……………」

ワタシは自分の感情をどこに向けたらいいのかわからず、困っていた。

昨日のことを思い出すと、また顔が熱くなる。

シュンに言われるまで自分ほとんどないことを言い続けていたのだ。

しかもその後、シュンの上に乗っかる体型になってしまった。

よくはわからなかったけど、シュンの反応を見る限り恥ずかしいことをしたのだとわかった。

結局、昨日はそれまで蓄積された恥ずかしさから部屋に籠もってしまった。

「でも……………」

ワタシは朝のシュンの姿を思い出し、

「…………でもそのあとはシュンも話しかけてこなかったし、朝になったらいつも通りだった……………」

そう呟き、若干顔をムツとさせる。

正直、恥ずかしいので昨日のことは忘れてほしかったけど、まったく気にされないのはなんとなく納得がいかない。

そう言った矛盾した感情がワタシの中に生まれる。

「……………むうー……………!!」

今の妙なもやもやと昨日の恥ずかしさが相まってどうしたらいいのかわからなくなる。

今ワタシに出来るストレス発散方法は、空を飛ぶ事だけだった。

ポンッ！

いつもの音を響かせ、カラスの姿に戻り、ベランダから飛び立つ。

何も考えず空を翔ける。

一時間ほど飛び回ったワタシは、少し疲れたのか、近くの木で文字通り羽を休める。

『ふうー』

ある程度動き回った事で、少し心が落ち着き、改めて朝の事を考えた。

朝、シユンは普段どおりの態度で、ワタシに接してきた。

まるで昨日のことなんて取るに足らないことのように。

『……………シユンは、ワタシの事はあまり気にならないのだろうか……………？』

そう呟いたところで、ワタシは昨日のシユンの態度を思い出した。

『……でも、昨日はシュンも恥ずかしそうだったし、顔も赤かった』
ふと、頭にある考えが浮かぶ。

——シュンはそんなワタシをそっとしておいてくれて、しかも今日の朝は何も気にして無いように振舞ってくれた……？

それなのにワタシは昨日のことを気にしすぎて、シュンとほとんど話すことが出来なかった……？

そして、シュンが学校に行くときの困ったような顔がワタシの頭に浮かぶ。

『……あう……ワタシ、シュンに悪い事したんだ』

シュンに対する申し訳なさがワタシの頭を占める。

『帰ったら謝らないと……』

そして、家に向かい、羽を動かす。

和解の話。

ガチャッ

瞬が学校から帰ると、夜羽が駆け寄ってきた。

そして、

「ゴメン！」「ごめんなさい！」

顔を合わせるなり、同じタイミングで二人が互いに謝った。

「え？　なんで夜羽が謝るんだ？」「え？　なんでシュンが謝る？」
そしてまたも同じタイミングで二人が互いに尋ねる。

瞬も夜羽も頭の上には疑問符が浮かんでいる。

「……………あ、ただいま」「……………あ、おかえり」
思い出したかのように言う瞬と夜羽。
タイミングはまたも同じ。

「くっ……」「ぷっ……」

「ははははははっ！」「」

なんとなくおかしくなり、二人揃って笑いあう。
もちろんまったく同じタイミング。

一通り二人で笑いあった後、改めて瞬が夜羽に尋ねた。
「それで？　なんで急に謝ったりしたんだ？」

それを聞いた夜羽は逆に尋ねる。
「む、それを言うならシユンの方。なんで謝るの？」

「んー？　いや、朝もまだ気まずい思いをしてたからさ、どうしたらいいか友達に相談したらさ、気まずい思いをさせるのは男が悪いって。だから謝るべきだよ」

「ん……よくわからないけど、シユンは悪くない。ワタシが勝手に恥ずかしがって勝手に気まづくなっただの。それなのに気を使ってくれたシユンに朝、ヒドイ態度とった。だから謝るの」

「そか、俺は気にして無いよ。それに俺もちゃんと話し機会はあったのに恥ずかしがってちゃんと説明しなかった。だからゴメン」

「ん、いい。許す」

「ありがと」

「ん、こっちも、ありがと」

「そういえば、トモダチって誰のこと？ …… イイダマナミ？」
しばらくした後、夜羽が思い出したかのように尋ねてきた。

「違う。学校の委員長」

てか、また飯田か。

東城さんもだけど、俺の交友関係で最初に浮かぶのって皆あいつ
なのか……？

そんな事を考えている瞬は、

「……そう……よかった」

そう呟きホッとしたように口元を緩める夜羽に気づいてはいなかった。

「さて、何か今日は疲れた……飯作んの面倒くさい……」
「む、おなか減った」

瞬の独り言を聞きつけた夜羽は間髪入れずに言う。

「わかってるって……今日は、外食にすっかな……？」

「ガイシヨク？」

「ああ、外に出掛けて、どこかのお店でお金払って飯を作ってもら
う」

「ん、知ってる。買い物したものをその場で食べるって事」

その答えに少し考え、

「……合ってる、のか。うん、とりあえずそうしよう」

意味合い的には合っていたのでそのままスルーして、話を進めた。

「わかった。ガイシヨク」

「そうと決まれば、さっさと行くか」

「ん、いく」

そして瞬と夜羽は支度を整え、家を出る。

外食と何故かお嬢様の話（前書き）

続きです。

外食と何故かお嬢様。の話。

外食といつてもたいした所に連れて行けるわけじゃない。
どこかのレストランなんかに行くのは気が引けるし、かと言って
近くに定食屋なんてのはなかった。

おのずといける場所はファミレスぐらいしかなかった。

ふらふらと夜羽を連れて近くのファミレスに入ると、
「いらっしやいませですの」

「……………」

見た事のあるお嬢様が店員さんをやってらっしゃった。

「あら？ 神尾くんではありませんの」

「……………何故」

「ああ、この格好の事ですか？ 一度アルバイトと言うものを体験
してみたくて」

「うちの学校バイト禁止じゃ……………」

俺が素朴な疑問を投げつけると、

「学校側には許可をとってありますの」

そう言いながら、ニヤリと含み笑いをして答えた。

「そんな事に金と権力使うなよ」

「失礼な事を言わないでほしいですの！ 私個人がしっかり誠意を
込めて説得しただけですの！ 親も家も関係ありませんの！ 何よ
り大切な社会見学をさせない学校が間違ってるんですのー！」

だがしかし説得された側は、彼女の後ろに巨大な権力が見えたに

違いない。

東城さんは真面目で自分の家を利用するつもりは無いんだろうけど、彼女は若干鈍感な所があるからな。

「……ま、いいけど」

「一週間だけの短期バイトを募集していたこの店を知り合いのおじ様に紹介していただきましたの」

ファミレスで一週間だけの短期バイトってありえない気もするが、そこはその知り合いのおじ様とやらの店に対する気遣いなのだろう。向こうで店長っぽい人が恐る恐るこっちを見ている。

「では、続けますの。お一人様でよろしいのですの？」

「あ？ いや「シュン」、入るならそこに立ち止まらないでほしい」おっと、わるい。ってことで二名で」

あまりの驚きで入り口前で立ち止まっていたためか、夜羽が少し怒りながら声をかけてきた。

「……………か、かしこまりましたの。こちらへどうぞ」
今度は東城さんが驚き戸惑っているようだ。

明日、学校で絶対聞かれるな……。

案内された席につき、次の日の不幸を想像していると、夜羽が興味深げに話しかけてきた。

「ん、シュン。今の誰？」

「ああ、学校のクラスの委員長で東城ゆりか。さっき相談したって

言つたる?」

そう言つと夜羽は少し不機嫌になり、

「……そう……」

とだけ答えた。

「な、なんか怒ってんのか」

「んーん」

「そ、そうか……」

確実に怒っているように見えたが、これ以上突っ込むのは危険な気がしたので、俺は話を変える。

「……あ、えーつと、このメニューの中から食べたいものを言えば、作って持ってきてくれるから。決まったら教えてくれ?」

「ん……………」

じつくりとメニューを眺める夜羽を見て、少しホツとする瞬であった。

「シユン、これとこれ」

「ん? どれだ……」

夜羽が選んだのは、ハンバーグのプレートにから揚げがトッピングされているものと、デザートのカーキだった。

——見た感じもう怒ってはいないようだ。

「ほんと、から揚げ好きだな。ケーキもだけど」

「ん、好き」

すっかり目を見ながら少し微笑んで、そう言う夜。

その表情に俺は若干照れつつ、店員さん呼び注文をする。

幸い注文を聞きに来たのは東城さんではなく、別の店員さんだった。

と言うか恐らく、入り口で挨拶と案内する事以外はやらされないだろう。

スムーズに注文を聞き、戻っていった。

「シュン……気になってることがある」

注文をしてから少しした後、機嫌が治っていたはずの夜羽が、まとも不機嫌になりつつあった。

「んー？ ……ああ、夜羽も気づいたか」

だが今回は俺も理由はわかっていた。

ここから少し離れた席で飯田愛美がこちらを見ていたからである。

夜羽はどうも飯田に対していい印象を持っていないようだ。人に好かれやすいタイプのあいつにしては珍しいが……。

「ま、ほっとけ」

「……………ん」

横目で飯田の方をしてみる。

——ん……………もう一人いるようだ……………あれは、志戸塚、か……………？

……なるほどつかまったのか。
不憫な。

……それにしても……。

「今日はほんとに疲れる日だ……」
俺は誰にも聞かれないほどの小さな声で呟いた。

外食と何故かお嬢様。の話。 (後書き)

んー……東城さん使いやすい、かも？

少女が巻き込む尾行の話。

「まったく瞬君ってば、ゆりかちゃんとはお話してたのに、なんで私の話は聞いてくれないのかな!？」

私は朝の事を思い出しながら散歩していた。

今日は寝坊したせいで朝から猛ダツシュだった。

途中藤森君とも合流して（藤森君も寝坊）何とか二人ともギリギリ学校に間に合ったの。

そして藤森君と他愛も無い話をしながら教室に着くと、瞬君の席の隣にゆりかちゃんが立って何かを話しているように見えた。

少しの間それを見てると、話が終わったのかゆりかちゃんは自分の席に戻って、瞬君はすぐに机に突っ伏した。

一瞬こっちを見た気がしたから、私たちが来た事には気がついてるはずなのに。

その後私と藤森君が瞬君に話しかけても、全部無視されたの。たまに返事しても全部『ソーデスネ』って！

……前まではあんまり気にしてなかったけど、ゆりかちゃんと瞬君って仲いいのかな……？

瞬君はいつも人との間に壁を作ってるような気がしてた。

学校では、瞬君と仲が良く見えるクラスメートもいるけど、やっぱり深くまでは受け入れない。

いくら話しかけても、話はするけど心は開かない、みたいな……。とにかく皆に対して愛想よく振舞ってた。

だからその瞬君が唯一気を許しているように見えた、ヤジマ動物病院の人たちがとてもうらやましかった。

でも最近の瞬君は少し変わったと思う。

瞬君が皆に対して愛想が悪くなった。

本来なら、駄目な事のような気がするけど、それは瞬君が人に対して、壁を作らなくなってきたって事。

——少しだけ私にも心を開いてくれるようになった気がする。

最初は私だけかな？ 何て考えてたけど、違った。

そんなに仲が良くなかった人に対しては、今までどおり愛想よく振舞うけど、クラスの皆に対しては素の瞬君を見せるようになってた。

瞬君自身は気づいてないようだったけど、クラスのほとんどはその事に気づいてた。

……だから正直、今までと違って瞬君の近くに誰がいると気になっ
てしょうがない。

どうして瞬君が急に変わり始めたか理由はわからないけど、

「むー……何か納得いかない……」

そんな事を考えながらふらふら歩いていると、前方にその考えてた人物を見つけた。

「あ、瞬君——」

声をかけようとしたが、後ろにもう一人いるのを見つけて、少し躊躇う。

——あれは、夜羽ちゃん……？ まだ夏休みなのかな？

ここまで考えたところで、ある考えが浮かぶ。

「……そういえば、瞬君が変わり始めたのって、夜羽ちゃんが来た頃ぐらいから……？」

とりあえず今、一度声をかけられなかったせいか、その後もなんとなく話しかけづらくなってしまった。

そのままなんとなく尾行を続けていると、

「どうしようかぁー……あ、ファミレス入っちゃった……」

一人でファミレスに入るのは躊躇われたが、愛美の中にこのまま帰ってしまうのは面白くないといった感情が出てきていた。

そこに不幸にも通りかかってしまったのは、

「あ、志戸塚君？」

「——っ！……………」

志戸塚竜刃その人である。

ゆっくりと逃げようとする志戸塚君を捕まえ、私はファミレスに入る。

「いらつしゃいませですのー」

「えー!?」「!?!……………」

そして、そこでバイトをしている人物に驚いちゃった。

独りの男が巻き込まれる尾行の話。(前書き)

視点変わりますが、前回の続きですの。

独りの男が巻き込まれる尾行の話。

最近気づいた。

僕は運が悪いんだ。

「あ、志戸塚君？」

「——っ！……………」

……………おかしいな、僕は何か神様に嫌われるような事をしただろうか。

僕はただ好きな作家の新刊が出たから買いに外に出ただけだったような…………。

そういえば、前にも似たような事があった。

諦めようか。

諦めは肝心だ。

——いや、まだ間に合うか？

ゆっくり静かに逃げよ

ガシッ！

…………捕まった…………。

確かに神なんて信じて無いから信仰心とかはゼロだけど、それに
したっていくらなんでも酷すぎないだろうか。

捕まったまま何故か飯田愛美にファミレスに引きずり込まれる。
ずっと笑顔のまま無言なのだが、捕獲された理由は教えてもらえないのだろうか？

しかしそんな事を問う前にかなり予想外のものが目に入った。

「いらつしゃいませですよー」

「え！？」「！？」「……」

……委員長？

クラス委員長あろう者が校則を破っているのだろうか。
しかも生徒会にも所属していると記憶していたんだけど。

「え！？ ええ！？ どうしてゆりかちゃんが！？」

隣の飯田愛美も驚いているから、委員長に会いに来たわけじゃないさそうだ。

「あら？ 今度は飯田さんと……志戸塚くんですよ！？ どんな組み合わせですよ！？ むしろこっちがどうして！？ ですよ！！」

それは僕も知りたいです。

「志戸塚くん、自分の事なのに理解してませんの……？」

「え？ 友達だからだよ？」

「……………ふう……………」

「ここまで意思疎通が出来てない二人組は初めて見ましたの！！」
「？ よくわからないけど、ゆりかちゃんは どうして？」

「アルバイトですの」

学校はバイト禁止だったと……ああ、無理やり許可を取ったのか。
「無理やりじゃありませんの！！！」　しっかり理由を話して理解してもらいましたの！！！」

「ふえ！？　急にどうしたの！？」

「志戸塚くんが失礼な事を言うからですの！」

「ええ！？　志戸塚君何にも言って無いよ！？」

「顔を見ればわかりますの！」

「ええー！？」

そんな馬鹿な。

「わたくし馬鹿じゃありませんの！」

……………どうやら本当にわかるようだ。

まあ、深く考えなくていいや。言葉を話す必要ないから意思疎通が楽になった。

「ものぐさ過ぎますの！」

だってめんどくさい。

「もつとしつかりしなさいですの！！！」

「……はたから見ると一人で喋ってるようにしか見えないよ……」

とにかく話を進めよう。僕はどうしてもここに連れ込まれたのだろ
う。

「連れ込まれたって……って、そんなのは自分で聞きなさいですの
！」

さつきも言ったでしょ？ めんどくさい。通訳お願いしまーす。
「……あんまり話したこと無かったからわからなかったですけど、志戸塚くん意外と感情豊かで饒舌ですね……まあ、いいですね。聞いてあげますの。……飯田さん？」

「……………」

「……飯田さん？」

「あ！ ゴメン……。ゆりかちゃんの『志戸塚君が感情豊かで饒舌』発言にびっくりしちゃって」

「……………こんな事言ってますのよ？」

否定はしないよ。……てか改めてそう聞くと、僕が感情豊かとか饒舌とかって言うのは異常だね。

「……それはとりあえず一旦置いておきますの。話が進みませんの」

「あ、うん」 そうしてください。

「それで、飯田さんは何で志戸塚くんを連れてこのお店に？ アルバイトとは言え店員が言うのもなんですけど、入り口で長めに話しても新しいお客さんが来ないくらいに暇なこのお店に」

ほんとに言っちゃいけない事を……。向こうで店長っぽい人泣いてるよ？

「でも、この時間にガラガラって問題ですの……」

「店長さんみたいな人泣いてるからやめたげて！？ ゆりかちゃん！ ……えと、志戸塚くんを連れてきた理由だっけ？ いや、ファミレスに一人で入りづらいなって」

「二人して同じ事を言わなくてもいいですけど……。でも入りづらいなら帰れば……。ああ、そういうことですよ……」

？ どういうこと？

「先ほど神尾くんが女の子を連れて来店されましたの」

神尾瞬が？ 女の子？ …… ああ、そういうことが……。

「えー！？ 何で二人ともそんな目で見るの！？」

「その一方的なかつ個人的な理由で志戸塚くんが連れて来られたと思うと……」

まあ、苦勞をわかってくれる人がいるだけいいよ。

「うう……その、ゴメンね？ 志戸塚君……無理やりつき合わせちゃって……」

もういいよ……ここまで来たら諦めてる。

そう心の中で思い、ゆりかを見つめる志戸塚。

……。

「……えー！？ ここもわたくしが通訳しなければいけませんの！？」

よろ。

「本当にあなたという人は……あ、えっと、コホン。もういいそうです。ここまで来たら諦めていると」

「志戸塚君……ありがとう！ よし！ ゆりかちゃん！ 案内よろしくお願いします！」

「ええ、こちらですの」

……… あっさり神尾瞬の席近くに案内してくれるんだ……。

案内された席に着き、神尾瞬の方を見ると、確かに見た事の無い女の子と一緒に座っていた。

「んー瞬君と夜羽ちゃんが一緒に外食……親戚って言ってたから、普通って言えば普通だけど……」

「？……夜羽ちゃん？」

「あ、やっと喋ったね？ 志戸塚君。あの子は夜羽ちゃん。何か夏休み中にあずかる事になった遠い親戚だって」

ああ……なんか聞き流せって独り言でそれっぽい事、話してたな。夏休み中面倒くさがってられなかったって。

あの子の事なのか。

まあ、なるほど。

神尾瞬が夏休み明けて、少し雰囲気が変わったように見えたのはあの子が関係してたということか。

ん……てか、そういう情報わかってるなら尾行は必要くないか？
これ、何のための尾行？

独りの男が巻き込まれる尾行の話。 (後書き)

うん、やっぱり東城さんは会話文で使うの楽しいです。

彼と彼女の帰宅とついでに尾行組との会話の話。

とりあえず、よくわからない行動の飯田と、絶対に巻き込まれたであろうかわいそうな志戸塚は忘れて、さっさと食べて帰る事にした。

「ん、おいしい」

夜羽も料理が運ばれてきてからは、機嫌も直っていたので問題ないだろう。

それにしても、確かにおいしい。

チェーン店と言うのも意外と侮れない。

でもお客さんは少ない。

よくわからんな。

「さて、食べ終わったことだし、帰るか？」

「ん、帰る。見られているのはあんまりいい気分じゃないし」

「……だよな。帰るとき止めるよう言っとくか」

志戸塚はともかく飯田はチラチラとこちらを見ていた。

夜羽は気にして無いと思っていたが、まあ無理か。

会計のためにレジに向かう瞬と夜羽。

後ろの方でバタバタしている気配を感じる。

会計を済ませ、店を出ようとするとき、

「ありがとうございますですのー」

と言いながら、東城さんが現れた。

——ほんとに挨拶と案内しかやらせてもらってないのか。

その言葉が口から出そうになったが、店に迷惑がかかりそうなので止めておいた。

「じゃあ、バイトがんばってー」

と投げやりな応援を残して店を出ようとするが、

「もちろんですの。それと、明日ちゃんと教えてもらえるんですね？」

店を出る前に夜羽を見ながら、しっかりと確認を取るゆりかに苦笑いをする瞬。

「……へいへい」

「わかってるならいいですの」

——明日の事を考えると憂鬱になるな……。

「む、シュン行こ？」

夜羽は面倒くさそうな顔をする瞬に言った。

「ああ、そうだな」

「ま、この場で聞かれて時間とられるよりはマシか」

そう呟き、瞬と夜羽は店を出る。

店を出た後、すぐに家には帰らず、少しの間店の横で待ってみると、

「ゆりかちゃん、また明日ね！？ 志戸塚君今日は巻き込んだじゃってゴメンね！？ もう付き合わなくて大丈夫！ 私はもう行くね！？ このままじゃ見失っちゃ「……何をだ？」ふええ！？」

急いだ様子の飯田が出てきた。

ほんとに尾行してたのかい。

「えー！？ ええええええええ！？ 瞬君！？ 夜羽ちゃん！？ どうしてここに！？」

まさかこんなところにいると思ってなかったのだろう飯田はひどく混乱していた。

その後をゆつくりと出てきた志戸塚は、大体予想がついていたんだろう。別段驚いている様子はなかった。

その志戸塚と目が合ったので、

「……………」
——お疲れ。

とりあえず何も言わず、目で労いの言葉を向ける。

「……………」
すると、恨みのこもった目でこちらを見る志戸塚。

どうやら志戸塚が巻き込まれた原因の元を辿れば俺に繋がるらしい。

——なんかすまん。

そんな無言のやり取りを繰り返しているところ、

「あ、あれえ？ ふ、二人ともきぐーだね？」

飯田が誤魔化そうと必死で言ってきた。

目が泳ぎっぱなしだぞ。

「で？ 何を見失うって？」

「へ？ あ！ え、えーっと……？」

「……………」

今度はどう誤魔化すつもりか観察しようとする瞬だが、

「見られるの嫌だから止めてほしい」

と、夜羽がはっきりと告げた。

「う……。ごめんなさい！！ 瞬君と夜羽ちゃんが歩いてるのが見えて、ついなんとなく……」

「何がついなんとなく、だ。意味の無い事をするな。そして志戸塚を巻き込むな」

「はい……。ごめんなさい。志戸塚君もごめんなさい……」

「もうすんなよ」

「はい……」

そのままトボトボと家に帰っていった飯田。

うん、たまにはいい薬だろう。

「さて、夜羽。帰るか」

「ん……？ こっちは紹介しない？」

「ああ………」

志戸塚か。正直紹介してもしなくてもどっちでもいいような気はしたが、一応、目でどうするか確認する。

「……………」

……一応紹介してくれ、か。

「わかった。夜羽、こいつは同じクラスの……友達、か？ まあいい、志戸塚竜刃だ。志戸塚、こっちは遠い親戚で今うちであずかっている、夜羽だ」

志戸塚はこちらを見て、今度は声に出し尋ねてきた。

「……苗字は？」

「……………神尾」

答えないのも変なので、渋々答える瞬。

夜羽はすぐに挨拶をした。

「ん、夜羽。よろしくタツハ」

当然志戸塚も名前の呼び捨てだ。

志戸塚は名前で呼ばれるとは思わなかったのか少し目を見開きながら自己紹介をした。

「……………志戸塚竜刃。よろしく、神尾夜羽」

互いの紹介も終わったところで、瞬が言う。

「んじゃ、志戸塚また明日学校でな。今日はお疲れ」

「……………それはお互いに。…………じゃ」

「タツハ、また」

「……………また」

それぞれが若干疲労しながら帰宅する。

そんな中、彼女がポツリと呟いた。

「……………ガッコウ」

彼が話し、委員長がいじられる話。(前書き)

次の日ですの。

彼が話し、委員長がいじられる話。

「え？ 弁当？」

「ん、そう」

朝、自分の分の弁当と夜羽の昼飯を作ろうとしたとき、夜羽が自分の分も弁当がほしいといってきた。

「いいけど……今日は外で食べんのか？ 公園とか」

「ん、家じゃないとここで食べる」

「？ そうか」

妙な言い回しを少し疑問に思ったが、とりあえず気にしない事にした。

「それじゃあ、いつてきます」

「む、いつてらっしゃい」

いつものように挨拶をして家を出る。

本当は今日は休んでしまおうかと考えていた。

面倒な事が起きるのを知っているためだ。

がしかし、それをするとか何か家まで押しかけてきそうだったので止める事にした。

「……………」

そつと教室のドアを開けると、

「おはようですよ！ さあこちらへどうぞ？」
早速東城さんに捕まった。

「こちらへどうぞつて、ここ俺の席……」

「さて、聞かせてもらいますの。昨日の子は誰ですの？」
スルーされた。

「……ふー、あいつは夜羽。遠い親戚で、いろいろ事情があつて今、
うちで預かつてる。事情は聞くな」

「そうなんでしたの。つまり昨日言っていた気まずい思いをさせて
しまったのは彼女と言つことでもいいですね？」

「……………そうだね」

まあ、昨日出会つた時点でバレてたと思うけど。

「それにしても神尾くん。あなた確か一人暮らしでは？ それでい
くら親戚とは言え、女の子と同棲というのは、いさかまずいので
はないですか？」

「……そこは知ってしまった人の心意気一つなんだけど？」

「……………ふう、わかりましたの。黙つていておきますの」
「ありがとな」

そう俺が言うと、東城さんは顔を赤くして、

「か、勘違いしないでほしいですよ！ このクラスで問題が起きて
ほしくないだけですの！！」

と、まくしたてた。

「「ツンデレかつ……」」

それを聞いた俺と——いつからいたのか、藤森が同時に突っ込ん

だ。

「違いますの！！　と言いますかいつから聞いてたんですの！？
藤森くん！！」

「いや、今来たばかり。んで、教室に入ったときに、まさに！
なツンデレセリフが聞こえてきたから……つい」

藤森の言葉に、東城さんはコホンと咳払いをして、

「ま、まあいいですよ。改めまして、おはようですよの藤森くん」
話をそらした。

「おう、おはよう。委員長」

「委員長ではありませんの。わたくしにも名前がありますの」

「おお、わかった。ゆっぴー」

「ちよっ！　ゆっぴーは止めてほしいですよ！」

ゆっぴーは藤森がつけた東城さんのあだ名で、一部男子内では一般的に使われている名である。

当の本人はさすがに恥ずかしいのか、使われるのを必死で阻止している。

「え？　なんで？」

「なんで？　じゃありませんの！　恥ずかしいですよ！　何度も止めるよう警告していますのに！　いい加減にしないとわたくしにも考えがありますのよ！？」

権力を使用した強行手段だ。

「えー……こまる」

「なら止めればいいですよ！！」

ここまで黙っていた俺が参戦することにした。

「まあまあ、落ち着きなよ。ゆっぴー。只のあだ名だろ？」

「——っ！！ 神尾くん、あなたまで！！」

またも顔を赤くして、東城さん——もとい、ゆっぴーが怒る。

「？ どした？ ゆっぴー？」

「……もう知りませんのー！！！！」

そしてとうとう怒ってどこかに行ってしまった。

藤森は大爆笑しながらその様子を見ていた。

とりあえず、後で謝っておく事にしよう。

……それと怒った東城さんは志戸塚のところに歩いていったよう
だ。

つまり、今の愚痴を志戸塚に聞かせるつもりなのだろう。

……とりあえず、志戸塚にも後で謝っておく事にしよう。

彼が話し、委員長がいじられる話。（後書き）

うーん、会話文に使いやすいからと、ゆっぴーを使いすぎてしま
ってるかも。

そろそろ自重しなければ。

彼と学校の友人との話。(前書き)

続きであり、繋ぎの話です。

彼と学校の友人との話

一通り笑い終わった藤森が改めて尋ねてきた。

「で？ 何の話してたんだ？ クラスの迷惑とか言ってたけど」

ああ、そのセリフが聞こえてきたから、突っ込んだんだっただか。

とはいえ、藤森に話す内容でもないだろう。

「別に。大した事じゃない、気にすんな」

瞬はたいして気にとめた様子もなく、そう告げた。

その言葉に、藤森は納得の行かないような顔で少し考えた後、

「……………なあ」

ゆっくりと話し始めた。

「んー？」

「お前さん、夏休み終わってから少し変わったなあ」

突然の始まった話に、瞬は訝しげな表情を浮かべる。

「なんだよ、いきなり。……………変わった？」

周りは気づいていたが、瞬自身は自分の変化に気づいていなかった。

藤森はいつもなら絶対しないような真面目な顔を浮かべて話を続ける。

「面倒事を嫌ったりするところは変わんねえけど、人との関わりかたとかが。今までは適度に愛想よく、皆に嫌われないような、作ってる様な振る舞いだった。でも今は、少なからず自分を出してるって言うか、素の自分っぽいって言うか……とにかく、お前変わった」

「……………」

藤森が何を言いたいのかわからず、黙って話を聞く瞬。

「あー……つまり何が言いたいかって………せっかく素の自分を出すようになったんだから、ついでに俺と本当に友達なってくれってこと」

「は？」

突然跳んだ内容の話を、瞬は疑問符を浮かべる。

「だから……今までお前、友達つっても、学校の中だけの……しかもどっか壁を作ってる友達しかいなかったろ」

「……………」

瞬は目を見開いて驚く。

それは自分の作ってきた薄い交友関係があっさり見抜かれた事……ではなく。

藤森が、それを知った上で——瞬が本気で友達を作ろうとしていなかったことを知った上で、一緒にいた事に、瞬は驚いていた。

「正直、お前がその薄い関係のほうがいいと思ってるなら、俺もその薄い関係が続けるつもりだったけど、お前が少しでも変わったなら、もしかしたらその考えも変わるかと思ってな」

「……………藤森……………」

「やめろよ、その感動のシーンみたいな雰囲気出すの。で？俺と

友達になってくれるのか？ 本当の意味で」

藤森はニツと笑い、再び尋ねた。

「……………そうだな。なつてやつてもいいぞ？」

「へっ！ 上からかよ！ なんだったら親友つてポジションくれてもいいんだぜ？」

「ああ、それはまた別の話」

「なんだそりゃ！ ……ま、いいや。改めてよろしく頼むわ」
「ああ、まあよろしく」

真面目な話が終わり、藤森が「で？」と前置きをおいて尋ねる。

「さっきの話し、聞かせてくれるんだろうな？ ん？」

「さっきの？」

「ほれ、クラスに迷惑がどうのここのの」

「あ……………」

夜羽の件か。

別に話しても話さなくても、どっちでもいいけど。

てか、この話しが聞きたかったから、真面目な話をしだしたのか、こいつは。

馬鹿か。

「別に大した事じゃない。うちで親戚を一人預かってるっただけ。東城さんが大げさに言っただけだって」

と、大方の概要を伝える。

別に間違いじゃないし、そこまで詳しく話すつもりはなかったが、藤森は納得しなかった。

「それだけで委員長はあんな言い方はしないだろ。他になんかあんじやないのかー？」

「俺が一人暮らしだから問題なんじゃないか？」

瞬がそういうと、藤森は考え込みだし、

「……………っ！ まさか、女の人か！？ しかも年頃の！」
自力で答えにたどり着いた。

——意外と鋭いのな。

藤森は瞬に詰め寄る。

「そうだろう！ どうなんだ神尾！！ 同棲なのか！？」

しかし瞬は動じない。

「さあ？」

実際人じゃないわけだし。それに同棲と言うべきじゃないような気もする。

しかし、その言葉で勝手に納得した藤森は、ニヤニヤ笑いながら話しかけてきた。

「そうかい、同棲か。なるほどな。それは確かに問題ありっぽく聞こえるわ。で？ どんな子なんだ！？ かわいいのか！？」

…………面倒くさそうなので、無視して机に突っ伏す事にします。

「あ！ おい！ 寝るな！」

「……チャイム鳴るぞ、席もどれ」

「くっ！ 飯時に詳しく聞かせてもらおうじゃないか！！」

自分の席に戻りながらそう言い放つ藤森であった。

……………面倒くせ。

藤森がいなくなった後、ふと今日は飯田が来なかったなと思い、飯田の席の方に視線を送ると、暗い雰囲気漂わせながら、静かに座っている飯田がいた。

……凹みすぎじゃね？ そんなに強く言ったわけじゃないんですけど。

彼と学校の友人との話。（後書き）

投稿してみてなんですけど、この話は今のところ、あってもなくてもどっちでも良かったような気も……。

まあ、こういう話もいずれ書きたいと思ってたので、それが早まっただけ、なのか……？

何かありましたら、感想ご指摘お願いします！

委員長に巻き込まれる独りの男の話。 (前書き)

お気に入りキャラクター二人の会話です。

委員長に巻き込まれる独りの男の話。

ここ最近の出来事を思い出し、考える。

最近、他人との接触が増えている気がする。

今までは話しかけてくるものもほとんどいなく、いたとしても神尾瞬と飯田愛美が稀に、程度だった。

つまりその『稀』を除けば、平和そのものだった。

しかし、夏休みあけてから……いや、夏休み最中からか。そのあたりから、人と関わる事が増え始めているんだ。

何故、今それを思い出しているかというと、

「聞いてくださいですよ！！ 志戸塚くん！！！」
現在進行形で絡まれているからだ。

先ほどまで、近くで声がしていたので、誰かと話していたと思われる委員長。

その話が終わったのか、わざわざ僕の席に来て、いきなり大声で言ってきた。

だから、隣の席にいた男子生徒がものすごく驚いた顔をしている。

……よく考えれば当たり前だ。人との関わりを拒絶したがる僕に、人気者のクラス委員長が話しかけているんだ。
それは驚きもするだろう。

……で？ 何？ 僕の睡眠を邪魔するだけの価値のある話？

「なんかちょっと怒っているようですね……まあ、いいですよ。

コホン。聞いてほしいのは神尾くんのことですよ！ 藤森くんと一緒に
なつてわたくしをからかうんですの！！」

へえ……。

「何ですよ！ その気の無い相づちは！！ からかうなんてひどい
とは思いませんの！？」

別に。

「即答ですよーっ！！ もうちょっとわたくしの身になり、考えて
返事なさいですよ！！」

ん……………うん、別に。

「考えても同じ結論ですよ！？」

興味は無いし、僕をからかうなんて勇氣のある奴はいないから、
身になって考えるとか……無理！！

「なんで志戸塚くんをからかうのは勇氣がいることですよ？」

人と関わるのさえ面倒くさがり、話しかけても返事はない。無表
情で、学校にいるときはほとんど机に突っ伏し眠っている。そんな
相手を誰がすき好んで相手するんだい？

「……そう言われるとそうですね。実際、今わたくしがずっと話
しかけているというのに、未だ声すら出さないですし」

その通り。

今、僕は一言も発していない。

周りから見たら、ただ委員長が一人で僕に話しかけているように

しか見えていないだろう。

実際、隣の席の生徒は不思議そうな顔をこちらに向けている。

この委員長は何故か僕の考えている事を見て読み取るのだ。
楽ではない。

「やっぱりものぐさですよ！ わたくし以外はどうかやって会話するつもりなんですよ！？」

神尾瞬も僕に似たタイプだから、彼もある程度は目で会話が出来
るよ。そもそも、誰かと会話しようなんて考えていないさね。

「……もういいですよ。それより話を戻しますのよ。身になって考
える事が出来なくとも、もうちょっとなんかごさいませんの！？」
別にな……ごめんなさい。それで？ どんな風にかかわれ
たんですか？

ものすごく睨まれ、若干殺気も感じたので、仕方なく話を聞くこ
とにした。

「う……その、名前を……」
を？

東城ゆりかは声を小さくして、
「恥ずかしいあだ名で、呼ばれたんですの。ゆっぴーって……」
と言った。

………で？

「で？ じゃありませんの！！ このわたくしをそうやって辱めた
んですの……」

かなりきわどい発言を大きめの声で言ったもんだから、またも隣の彼は目を見開いてこっちを凝視してきた。

そんなことも気づいていない様子の委員長はさらに続ける。

「わたくしもう恥ずかしくて恥ずかしくて！」

……ただのあだ名でしょ？

「あなたも神尾くんと同じことを言っんですの！？ あだ名でも恥ずかしいものは恥ずかしいですの！」

知らないし……顔見る感じでは満更でもないって風に見えるけど。

「んなつ……か、勘違いですの……それは志戸塚くんの勘違いですよ……！」

……まあ、いいけどね？ どうでも。てか、もうメンドイ……。

……眠る。

「ちよつ……寝ないでくださいの……話はまだ終わってませんの……！」

その後、完全に眠りについた僕に、委員長はしばらくの間、怒鳴り続けてたらしい。

委員長に巻き込まれる独りの男の話。(後書き)

いずれ番外編みたいなので、隣の生徒視点の話をやりたいです。

彼のなぐさめと目に入ってきた光景の疑問の話 (前書き)

最後ちよつと三人称です。

彼のなぐさめと目に入ってきた光景の疑問の話

「おい、せっかく友達になったんだ。お前ん家遊びに行きたいんだが」

「何回目だ！ それ言うの！ 答えはかわんねえよ、やだよ！」

現在、ちょうど午前中の授業が終わり昼休み突入。

藤森の馬鹿は朝から授業が終わるたび冒頭の台詞を連呼してきた。顔にははつきりどんな子と同棲してるのか知りたい！ と書いてある。

「いいからさっさと購買にでも行って来い！」

「……くう！ お前は彼女に作ってもらった弁当があるんだもんな」

「違う。作ったのは俺だ。いいからさっさと行け。お前と話すの疲れるから、ゆっくり行ってこい」

「何てひどい奴なんだ……」

そう言い残し、藤森は購買に向かった。

「ふう……… やつと一息つけ……… ないのか」

藤森がいなくなった瞬間、クラスのほとんどが俺に何かを訴えかけるような目を向けてきた。

いや、何が言いたいのかはわかっているんだが、何故俺に目を向ける。

そんなことを考えている間もクラス中の空気が俺に早く何とかしろといってくる。

飯田愛美の機嫌をなおせと。

クラスのムードメーカーでもある飯田が、なにやら落ち込んでいるのはほとんどの連中が気づいていたらしく、皆なんとなく騒ぎづらい状況に陥っていた。

耳を澄ませば、ボソツと「神尾早く」なんて声も聞こえてくる。

——だから何故俺っ!？

「……………はあ、仕方ない……………のか？」

そう呟き、愛美の席に向かうことにした。

「……………飯田」

机に突っ伏していた飯田を呼びかけると、ビクツと体を揺らし、ゆっくりと起き上がった。

そして必死に目を合わせないようにしながら話し始めた。

「う、うん、おはよう、瞬君……………」

「もう昼休みだ」

「あう……………こんにちは、瞬君……………」

「学校でその挨拶を聞いたのは初めてだ」

そこまで言うと、飯田はゆっくりと視線を上げ、

「あの、瞬君……………昨日は本当にごめんなさい」

「……………いいよ、もうしなれば」

「うん、ありがとう」

弱弱しく微笑む飯田から目をそらし、俺は言う。

「いいからさっさといつもの能天気にもどれ」

「また言った！ 能天気って！ ひどい！」

「ソーデスネ」

「またもやそれ！」

とりあえず元に戻っていくと思うので「これでいいか？」と周りを見渡すと、クラスの連中はなんともいえない目をしてこちらを見ていた。

その中にいつ戻ってきたのか、藤森がいたので近寄って、

「この視線はなんだ？」

と尋ねる。

「いや、飯田さんが元気ない原因お前かよ！ って皆思ってたんだわ」

「あいつが勝手に凹んだだけで、それを俺のせいにされても……」。

大体たいして強く言ったわけでもなし」

「今回、何があったか知らんが、そろそろ自覚を持ったほうがいいだろうに……」

「？」

いまいち藤森の言っているがわからん。

「ま、とりあえずはまだいい。飯にしようぜ」

「？ ああ」

昼食のため、鞆から弁当を取り出し、席に着く瞬はふと、窓に目

を向けた。

「その行動にたいした意味はなかったが、

.....」

その目に映ったのは驚きだった。

頭を抱え、目を瞑りながら、考える。

——ふう、疲れて、るんだな。

コンコンコン

「.....」

「おい、どうした？ 神尾？」

瞬の様子が変わったことを心配し、藤森が声をかけるが、瞬はもうそれすら耳に入ってはいなかった。

コンコンコン

意を決し、もう一度窓の方に目を向ける。

もちろん先ほど見た光景となんら変わりなく、

「神尾？ ってうわ！！ 窓んここに、何かを嘴にくわえた力
ラスがいる！？」

「.....」

朝作った弁当をぶら下げ、こちらを見つめる黒い鳥さんがそこにいた。

お嬢さん、何してるんですか？

彼のなくさめと目に入ってきた光景の疑問の話。

（後書き）

感想等、お待ちしております！

乱入鳥さんの話

藤森が妙に騒いってしまったおかげで、数人が窓に注目しだした。そして次第にザワザワしだす教室内。

その状況の間も、窓の外のカラスは――夜羽は、コンコンと窓を突き続けている。

チラッと周りを確認すると、ほぼ全員が困惑している中、飯田がもしや、見たいな目でこつちを見ていた。

――変なところで鋭いな……。

とりあえず放っていくわけにもいかず、俺は窓に近づく。その途中クラスの連中に「お、追い払うのか！？ 危なくないか！？」とか「カラスって頭いいから嫌な事した人間を覚えて、仕返しするって聞くよ！？」とか言われたが、全て無視した。

そして何のためらいもなく窓を開ける。

『ちよっ！！！！』

その行動を見ていたほぼ全員に突っ込まれたが、当の本人……じやなくて本、鳥？ は、トントんと足で跳ねながら、先ほどまで俺が座っていた席まで行き、

『カー』

と、わざわざこちらに向きなおし、一声鳴いた。

——…それは早く来いという意味かな？

すでに言い訳やら今後どうするかやらを考える事が面倒くさくなっていた俺は、のろのろと自分の席に着いた。

すると夜羽は、器用に弁当箱を包んである布と弁当箱の蓋を外した。

カラスの姿の癖に器用だなーと的外れな事を頭に浮かべながら「いただきます」と呟き、自分の弁当を食べ始める。

同じタイミングで夜羽もか『カア』と鳴いた。

恐らく意味は、いただきますだ。

そして夜羽は一つ一つおかずを食べ始めた。

——ほんとに器用な。

もちろん自分に向けられる様々な感情が織り交ざった視線は全て無視している。

さすがにこの状況で一緒に飯を食う気にはならなかったのか、藤森は少し離れた場所でこちらを見ながら購買のパンを食べていた。

自然とこの教室の中にカラスについて触れてはいけないのだろうか？　みたいな空気が流れ始めていた。

が、残念ながらそんな空気をまったく気にしない人物がこのクラスにいるのだ。

「ちょっと瞬君！！　このカラスってもしかして瞬君が飼ってた、

あの!？」「神尾くん!! 一体どういうことですか!? このクラスさんは何ですか!？」

さっき復活したばかりの飯田愛美とクラス委員長の東城ゆりかだ。

いろいろ面倒だな、と思いながらもさすがにこのまま無視するわけにはいかず、

「飯田さん? 俺には『飼ってた』とか『あの』ってというのが良くわかりません。それと東城さん、どうと言われても困る。見てた通り、俺は暑かったから窓を開けたら勝手に入ってきて、何故か俺の席で弁当を食べだしたんだ。それ以上でも以下でも無い。ってことで、はい解決! お二人ともさっさと自分の席にお戻りください」と、適当なことを並べ話を打ち切った。

しかし当然そんな話で納得するはずもなく、
「いやいや!! わかりませんって、無理があるよ!？」「……………
…東城さん……………もう、ゆっぴーとは読んでくれないんですのね……………」

飯田のツツコミの声が大きすぎて、東城さんがなんて言ったか聞こえなかった。

まあ、適当な説明に対する文句だろうけど。

「とにかく、話すことはありません」

「何で私のとき敬語!? ……じゃなくて! ちゃんと説明してよ!？」
ね? ゆりかちゃんも何とか言っちゃって!」

飯田に話を振られた東城さんだが、なにやらぶつぶつと考え込んでおり、聞いてなかった。

「え!?! ちょっと! ゆりかちゃん!？」

「……………はっ！ ごめんなさいですの！ 神尾くん！ ちゃんと説明するべきですよ！」

やっと我に返った東城さんも口撃くちげきに参加した。

ああ、面倒くさい……。

「面倒くさがらないでちゃんとはなして（ですの）！」
……………読まれた……………ダブルで。

しかも二人して同じ言葉でつつこまれた。

「……………さて」

どつという話を作ろうかと頭を悩ませていると、

『カア』
と隣から聞こえた。

そちらを見ると、弁当箱が空になっており、夜羽がこちらを見ていたので、さっきのはご馳走様なんだろう。

「ふむ、お粗末さまです」

そしてその後すぐに、

『カー』
と鳴いた。

「……………あ、包みなおせと」
そう言つと嘴を縦に振ったので、肯定だろう。

——ま、確かにその姿のまま包みなおせたら驚きだわ。

包んで夜羽に渡すと、すぐに啜え、そのまま外に飛び出していった。

.....ほんとに何しにきたんだろ.....？

とりあえず夜羽がいなくなったので、説明する必要性はなくなっ
たと思っていたが、

『今のはどういうことだ!!?』

と、今度はクラスのほとんどに詰め寄られた。

「.....何？」

『何、じゃねーよ！ 今のもうほとんど会話してるようにしか見え
なかったわ!!』

「うるさいなあ.....」

『おい!!!』

俺は残っている弁当をそそくさと食べ始めた。

その間、周りから聞こえる質問、疑問等には、全て無視させても
らった。

そしてさつさと食べ終わり、

「ご馳走様でした。.....さて、寝るか」

食後の睡眠を貪ることにした。

『おい！！！！！！！』

——こいつ等チームワーク抜群だな！。突っ込むタイミングばかり揃ってる！。

寝落ちる寸前まで聞こえたクラスの連中の声をBGMに、俺は意識を落としていった。

乱入鳥さんの話 (後書き)

感想ご指摘お待ちしております！

彼が知る彼女の思いの話。

昼休みが終わる直前に目を覚ますと、まだ周りに人だかりが出来ていた。

——しつこいな、おい。

とりあえずは、

「少し前に怪我をしたカラスの世話して、怪我が治った後、外に飛び出していった。今日来たのはそのカラスに間違いないと思うけど、何で来たかもわからない。弁当についてはあのカラスに聞いてくれ」と、適当かつ、嘘はつかない説明をした。

それでも渋々納得した風なクラスの間中は、昼休みが終わった後もまだ何か聞きたそうな顔をしていたが、もちろん面倒くさいので全て無視した。

飯田と藤森は俺がこれ以上絶対に話さないとわかっていたからか、もう聞いているはこなかった。

某委員長が何かを考え込んでいたのが気にはなったが。

放課後、さつさと身支度を済ませ、帰宅を図ろうとする俺を藤森が呼び止めた。

「あいやまたれい！」

「断るけど何？」

「断るけど！？俺の考えは筒抜けか！」

ずっと言いつけてたんだ。わからないほづがおかしい。

「って事で、じゃ」

「はっ！ 待てゴラァ！」

はい、絶対に待ちません。

俺はそそくさと家路につく。

「ただいま」

もう習慣になりつつある挨拶で家に入ると、

「……おかえり」

落ち込んだ雰囲気で、辛そうな表情をした夜羽が出迎えた。

「夜羽……大丈夫か？」

「ん、何が？」

気になって声をかけるが、夜羽はそのままの顔で俺を見上げた。

恐らく夜羽は、自分がどんな顔をしているのか気づいていないのだろう。

「何が、じゃないぞ。何か辛そうな顔してる。どうかしたのか？」

そう尋ねると、夜羽がゆっくりと口を開いた。

「……………シュンがいつも楽しそうに話すガッコウに、ワタシも一度行ってみたかったの」

「だからわざわざ弁当にして飛んできたのか」

「ん……でも、ガッコウのニンゲンはワタシを嫌いな目で見てた」
「……ああ……」

そうだった。

元々、夜羽は人間が嫌いだった。
自分たちを迫害してきた人間が。

今は人として色んな人間と触れ合ってきたおかげで、少しは人間
嫌いも治っていった。

でも今日、学校で夜羽を見たのは、夜羽の嫌いな、迫害の目……
嫌悪の目……恐怖の目……。
そのせいで、少し思い出してしまったんだ。

人間への恐怖を。

「だから……ワタシ」

「もう、いいよ」

少し目に涙を浮かべながら夜羽が話を続けようとしたが、俺はそ
れを遮り、

……ポン

ゆっくりと夜羽の頭に手を置いた。

「……シュン……？」

「もう話さなくて大丈夫だ。ゴメンな？ そんなこと思い出してる
なんて考えてなかった」

「……ん、謝らなくていいの。私が勝手にガッコウに行ったから」

夜羽は自分が人間にどう見られているのかを改めて確認して、もしかしたら今は自分と仲がいい人間も自分の事を知ったらあの目で見てくるかも。そう思ってしまった、怖くなっていた。

夜羽のそんな思いをわかった上で。

「……そっか。でも安心しろよ？ 俺は——大丈夫だから」

「あ……………」

夜羽の目から涙が流れ落ちる。

そして俺を見つめ、

「ありがとう」

色んな思いを込めそう告げた。

少し間を置き、やっと落ち着いた夜羽が俺に聞いてきた。

「シユン、どうしてワタシの頭に手を置いたの？」

「んー昔、親にやられて覚えてたんだけど、泣いている時は頭を撫でるって」

実際、以前に蛍を説教し、涙させたときも、ほぼ無意識にこの行動をとっていた。

その言葉を聞き、夜羽は少しそっぽを向いた。

「？ どした？」

「……泣いてない」

「……プツ！ そうか、すまなかったな？」

「む……笑った……」

「悪かったって」

「むー……」

少し怒ってしまった夜羽を見て、俺は内心ホツとする。

そう考えていると、夜羽は怒りを納め、

「シユン、今までもニンゲンの生活について教えてもらったけど、ワタシはもっと知りたい。……ニンゲンを知れば、少しは辛くなくなるかもしれないから」

と頼み込んできた。

「………わかった。俺に教えられることならな？」

「ん、シユン。ワタシに色んなことを、教えてほしい……」

「——っ！！ おう……」

若干きわどい台詞に動揺してしまった。

が、そんなこと知る由も無い夜羽は、無意識に更なる追い討ちをかける。

「ん……シュン、顔、赤い。大丈夫……？」
そう言いながら夜羽は近づく。

「だ、大丈夫だから」
「？　ならいい、けど」

……夜羽の無自覚は時に凶器になると思う。

彼が知る彼女の思いの話。

（後書き）

感想お待ちします！

ある休みの日の午前の話。

休日になった。

いつもだったら面倒なので昼過ぎまでは絶対に起きないのだが、

ボスンッ！

「グハッ！！」

……いつも通り少しでも寝坊すると与えられる衝撃で目を覚ます。

「……………お、はよう、ございます。夜羽さん」

「ん、おはよう。起きた？」

「はい、起きました……………しかし何度も申し上げます通り、ボデ
イプレスはやめていただけないでしょうか……………？」

寝起きの一発を食らった俺は、弱弱しく抗議の声を上げる。

「や」

が、拒否された。

「……………そですか」

「で？ 今日学校が休みだが、どうする？」

朝食をとりながら何気なく夜羽に尋ねた。

「む、どうすると言われてもよくわからない」

「まあ、そうか。じゃ、昼まで家でごろごろして、昼飯食べたらず
島さんの所でも行くか？」

ちゃっかり午前中は休んでいたいと希望を言いながら、提案した。

「ん、ごろごろはしないけど、昼からイチロウの所には行く」

が、午前中の案は、残念ながら許可を得られなかった。

「ふう、じゃあ今からどうするつもりだ？」

「ん、散歩に行こう」

「またか、好きだなあ散歩」

苦笑いを浮かべながら呟いた。

「少し行きたい場所もある」

「？」

夜羽の言葉に疑問を持ちながらも、準備を整え散歩を開始する。

もちろん俺も一緒にである。

俺も夜羽も、片方だけが出掛けるという考えは微塵も浮かんでいなかった。

「どこに行くつもりなんだ？」

夜羽がなにやらウロウロと、紙を見ながら歩いていたので、住所が書いてあるのだろうと想像した。

だが、夜羽は住所が読めるのだろうか？

「ここに行きたい」

と差し出されたのは、やはり住所と電話番号、そしてメールアドレス

レスが書いた紙だった。

「これは？」

「前にホタルがくれたの。遊びに来てって」

なるほど、これは高嶺……さんのものだったか。

確かにメールアドレスには、HOTARUの文字が入っていた。

「そうか……でも夜羽どうやって行くか、これ見てもわかんないだろ」

「む、そんなこと無い。昔、空の上からシンゴウに似たようなのが書いてあるのを見たことある」

当然というべきか、やっぱりわかっていなかった。

「うん、似たような、だろ？ 同じじゃないと思うんだ、それ」

「む、でも」

まだ反論しようとする夜羽の声を遮り、告げた。

「とりあえず反対だから、一旦家の方角に戻ろうか」

「……………ん」

夜羽は若干、頬を赤くしながら目を逸らしてついでにきた。

やっと自分が間違ってたことを認めたらしい。

ボソツと聞こえてきた「最初から聞けばよかった……」の言葉に俺は笑いを噛み殺しながら歩いていく。

「つと、休みの日に朝から訪ねるのに、何の連絡もしないのは失礼か……とは言え、話すの面倒だな……うし、ほい夜羽」

「ん？」

「前に教えただろ？ 電話。とりあえず『もしもし、夜羽と申しませんが、蛭さんいらっしやいますか？』って言って、本人が出たら今

から遊びに行ってもいいか聞くんだ」

その言葉に夜羽はキョトンとした顔で、告げてきた。

「ホタルはさん付けいらないうって言った。それにいつでもいいとも言った」

「それでも、だって。彼女本人が出るとも限らないし、いつでもいいって言っても、いきなりだと驚くだろうし」

「……ん、わかった」

そして夜羽は言われるがまま、通話ボタンを押した。少し待った後、

「も、モシモシヨハネトモウシマス、ホタル……サン、イラシャイマスか？」

と若干片言になりながら言われたとおりの言葉を言った。噛み気味ではあったが。

「……ん……ホ、ホタル……？　ん、そう夜羽」

どうやら本人に代わってもらったらしい。

「……ん、今から遊びに行きたいと思う……ん、今から……わかった」

夜羽は電話から耳を放し、じっと携帯を見つけていた。

「終わったのか？」

「ん、っーっー言ってる」

「終わったんだな。で？　なんだって？」

夜羽の声を聞く限り、今から来ることに驚いていたので、難しいとは思うが。

「いいよって」

「おう！？　そ、そうか」

許可されたいらしい。唐突過ぎる話だっただけにちょっと驚いた。

「ん、行こ？」

「……ああ」

そして紙に書いてある住所まで、俺と夜羽は向かう。

ちなみに彼女に、俺が一緒であると伝えていないことに誰も気づいていない。

ある休みの日の午前の話。 2 (前書き)

ん、
続き。

ある休みの日の午前の話。 2

「ここか」「む、ここなの?」

シユンについて行き、少し歩いたにホタルの家はあった。
シユンの住んでいるマンションではなく、イッケンヤだ。

「じゃ、呼び鈴鳴らすぞ」

シユンはワタシに確認を取り、玄関前まで歩いた。
ワタシもそれについていく。

ピンポーン

少しすると、ドタバタと音が聞こえ、扉が開いた。

「いらっしやい! 夜羽ちゃん! 来てくれてうれ……し……」

元気よく扉を開いたホタルだったけど、シユンを見て、固まってしまった。

「? ホタル、来た。どうかした?」

「ふへえ!? え!? なんて……なんで神尾さんまで!?!」

「ん、一緒に来た」

ワタシが質問に答えたけど、言葉が足りなかったのか、ホタルはポカンとしていた。

シユンはそんなホタルを見て、「ああ」と呟き、気まずそうに話し出した。

「そつえば俺が一緒だって言っただけだったか。女の子同士がいいなら俺はとりあえず家に帰るけど……」

シュンがいなくなるのは残念だけど、ホタルがそういうなら、と言おうとしたけど、それはホタル本人に遮られた。

「い、いえ！ そんなこと無いです！ ちょっと驚いただけで……ど、どどどどぞ！ お二人とも！」

「じゃあ、お邪魔します」「ん、おじゃまします」

シュンに教わった挨拶をしながら家に入る。

すぐにシヤンが駆け寄ってきてくれた。

「シヤン、ひさしぶり」

「ワンッ！」

「……大分懐いてるんだな」

シュンがワタシを見て、そんなことを言っていた。当たり前。

ここまで仲良くなるのにとっても苦労したものだ。

そのことをシュンに話そうとしたところで、

「あら？ 蛸。お友達って女の子だけじゃなかったのね？」
知らない声が入ってきた。

「お、お母さん！？」

どうやら、ホタルの母らしい。

「あ、お邪魔してます」「！ おじゃましてます」

シュンが挨拶したので、慌ててワタシも挨拶をした。

「ふふっいらっしやいませ。それにしてもまさか男の子も一緒だっ

たなんてね？」

「し、知らなかったんだって！ と、とにかくお母さんは部屋に戻ってて！」

「いいじゃない。あなた学校には友達たくさんいるけど、なかなか家に招待することしなかったから、驚いてるのよ？ そんなあなたが、まさか……ねえ？」

「もう！ いいからあ！」

「あら、いいじゃないもう少しお話させてくれても」

「ちよつ、お母さん！」

「はいはい、わかったわよ」

「はあ……あ！ ごめん、ほったらかしにしちゃって」

「ん……？ ん、大丈夫」

確かに突然ものすごい勢いで始まった会話に少し驚いたけど。

「……………」

シユンはまだポカンとしてた。

……こつこつシユンは珍しい。

同時にホタルもシユンの様子に気づき、顔を赤くしながら急いで話題を代えた。

「じゃ、じゃあ部屋に行きましょうか！」

「ん、いこつ」

「え？ ああ、うん」

ホタルの部屋に案内された後、ホタルは飲み物を持ってくると言って部屋を出た。

ついでなのでさっきのことをシュンに聞いてみる。

「シュン？ さっきはどうしたの？ 何か変だった」

「ん？ ……いや、ちよつと唾然としちゃって。それとなんとなく自分の母親のことを思い出してな」

「……？ シュンの母？」

「ああ、まあ別に大したことじゃないから気にすんな」

「……ん」

少し知りたい気もするけど、気にしてほしくないなら気にしない。

「お待たせしました！」

話してるうちにホタルが飲み物持つて戻ってきた。

「ありがと、でもほんとに良かったのか？ よく考えたら、夜羽が一緒とはいえ、休みの日に女の子の部屋の男が入るってのは……」

「大丈夫です！」

「そ、そうか」

何かシュンが押され気味だ。

……シュン、ホタルが苦手なのかな……？

「……………」

「……………」

「……………」

何故か誰も話さず黙ってしまった。

沈黙に耐えられなくなったのかホタルが言葉を発した。

「えっと！ と、ランプとかやります？」

「あー……いいけど、夜羽わかんないんじゃないかな。……てか、夜羽。遊びに来たいって言ったぐらいだからなんか用があるかと思っただが？」

「んーん、いつでも来ていいって言ったから」

「あー……なんかすまん、高嶺」

「ううん！ いいんです！ 実際言ったことですし、遊びたいと思
つてきてくれたわけですから」

「ん、そう」

「……………それにしても……………こついつときの遊びって、何するんだ
ろ？」

ある休みの日の午前の話。 2 (後書き)

感想、ご指摘お待ちしております！

ある休みの日の午前の話。 3 (前書き)

さらに続きだね。

ある休みの日の午前の話。 3

夜羽が高峰の家に遊びに行きたいというから連れて来たんだが、
「シユン、こういう時の遊ぶって何？」
と聞かれてしまった。

……逆に聞きたい。何がしくて来たんだ。

結局、他愛も無い世間話をして過ごした。

「それじゃ、もう昼時なんで帰りますね？」

「ん、帰ります」

玄関先で高嶺と彼女のお母さんに告げる。

「一緒に食べていったらいいのに」

「そうですよ！」

二人してそう言ってくれた事をうれしく思ったが、さすがに朝早くから訪れて、その上食事までありつくなんて図々しい事は、出来そうに無い。

「いえ、そこまで迷惑をかけるわけにはいかないのです。じゃ、高嶺もまた」

「ん、ホタルまた」

そう言って、俺と夜羽はドアを開け——ようとした。

「ちょっと待って」

だが、何故か高嶺のお母さんに腕を掴まれ、とめられた。
高嶺も驚いた表情をしていた。

「えっと……何か……？」「お母さん！？ 何してんの！？」
二人で声を揃えて質問をすると、高嶺のお母さんはニコツと笑った。

ちなみに夜羽はこの光景をポカンと見ていた。

「いえ、別に大したことじゃないの。ちょっと気になって」
「はあ、何がですか？」

「高嶺、だと私もそうなのよね。だからそう呼ぶとわかりづらいから、この子の事、名前で呼んであげてくれないかしら？」

「はい！？ いや、それは……」
何の前触れも無い、突然すぎる提案だった。

というか、前に高嶺自身にも同じようなことを言われた気がする。
……やはり親子……。

「いいじゃないの。神尾君……だったわよね？ 名前を呼ぶくらい減るもんじゃないし、この子も呼んでほしがってるし」

「お、おとお母さん！？」

高嶺が顔を真っ赤にさせていた。

「ほら見なさい。この子も否定して無いわ。とにかく、紛らわしいから名前で呼んじやいなさい」

高嶺母のその言葉に、高嶺自身も若干期待を込めたような目をこちらに向けてきた。

んー……別に呼びたくないとかそういうんじゃないけど、正直恥ずかしいんだが……。

「はあ………じゃあ、この家に遊びに来たときだけ」

その答えに高嶺母は納得いかないような表情を浮かべたが、

「……ま、いいわ、とりあえずそれで。慣れてきたら、普通に呼んであげてね？ そのほうが喜ぶから」

と、渋々といった様子でそう告げた。

その間、高嶺は真つ赤な顔で自分の母にボソボソと何かを言っていた。

何を言っているかは聞き取れなかったが、言われた本人が完全に無視しているので、文句が何かなんだろう。

「じゃ改めて、お邪魔しました。またな………蛭」

「は、はひっ！ ままたいらしてください！」

後ろで高嶺母がクスクス笑いながら自分の娘を見ていた。

この人は一体何がしたいんだろうか。

「……おじゃましました。……ホタル、また」

「あ！ う、うん、夜羽ちゃんもまた来てね？」

慌てて夜羽にも挨拶をする高嶺。

「む……ホタルはワタシのことを忘れてた」

「ええ！？ そそそんなこと………ない、よ」

そんなしどろもどろになったらいくらなんでもバレるぞ

「むー……」

ほら。

……仕方ない。

「夜羽。行くぞー」

「………ん」

高嶺に対する多少の助け舟のつもりで、夜羽に声をかけ、高嶺家を後にする。

「それじゃ、必ずまたいらっしやいね？ 夜羽ちゃん。……それにもちろん、神尾君も、ね？」

ドアを閉める直前、そんな声が耳に届いた。

「……夜羽、今度遊びに行くときは、一人で行ったり、しないか？」

「ん……？ 何で？」

「………いや？」

ふ、深い意味は無いぞ……？

ある休みの日の午後の話。

家に帰り、昼食を作っていると、夜羽がそっと近づいてきた。

「ん、シュン……それ、どうやるの？」

「んあ？ それ……って？」

「ご飯作るの」

「あー……やってみたいのか？」

そう尋ねると、夜羽は何も言葉を発さずにコクコクと首を縦に振る。

その様子になんとなく和んでしまい、無意識に夜羽の頭に手を置いた。

「ん………？」

夜羽は特に抵抗を示さなかったが、不思議そうな顔を瞬に向けていた。

瞬は夜羽の表情を見て、自分が無意識に行なった行動に気がついた。

若干動揺したものの、それを隠しながらスツと夜羽の頭から手を下ろし、話を続ける。

「と、とりあえず今はもう大分出来上がったから、明日な？」
「ん」

その言葉に納得したようで、夜羽は元いた場所に戻っていった。

夜羽がいなくなった後、瞬はこっそりと息を吐く。

「……ふうー、いきなり何をしてるんだ俺は……」

昼食後、当初の予定通りにヤジマ動物病院に足を運んだ。
中をのぞくと、相変わらず、患者さんはいなかった。

——この町の人間が飼っている動物を大切にしているということ
なのだろうか？

「ちわす」「ん、おじゃまします」

そう言い、二人で中に入ると、すぐに矢島が姿を現した。

「（……んー……なんだ……？ 今日矢島さん、ずいぶんニヤニヤしてるな……）」

「やあ、待ってたよ？ 神尾君」

「……はあ……え、待ってた？」

矢島の一言に瞬は疑問符を浮かべる。

「まあまあ、話は座ってゆっくりしようじゃないか？」
いつもと違う矢島の様子に、瞬は口元を引きつらせた。

ちなみに夜羽はポカンと二人の様子を見ていた。

出された椅子に座る瞬と夜羽。

矢島は常に顔をにやけさせていた。

「……それで、待っていたってなんですか？」

「それは、ほら。夜羽ちゃんに聞いたらどうかな？」

「夜羽に？」

矢島の言葉に瞬は、隣に座っている夜羽を見た。

「……ん、ワタシ？」

当の夜羽は自分の名前を呼ばれて、目を見開いていた。

夜羽は少し首をかしげ、考え込み、

「む、前に遊びに来たとき、今度は瞬と二人で来るって言った……から？」

とりあえず思い出したことを口にした。

その言葉に瞬は前に聞いた夜羽の報告が頭に浮かぶ。

「ああ、そう言えば前に遊びに来たって言ってたな」

「そういうこと。……色々聞かせてもらったからね」

そう言い、瞬を意味ありげに見つめる矢島。

「……色々？」

「そ、色々」

「………夜羽？ 矢島さんに何言った？」

「ん？ 大した事は言っていない。怪我は大丈夫って事とまだシユンの家にいるって事。後は、ワタシは話さないでイチロウにシユンの事聞いただけ」

「俺の事？ って、ちよっ！ 矢島さん、何話したんですか!？」

さすがに矢島には色々知られている瞬は、若干焦りながら問いか

ける。

しかし瞬が必死に説明を求めるも、矢島はそれを置いて話し出す。

「まあまあ、その話はまた後。今はそれよりも……」

「……それよりも？」

「夜羽ちゃんの怪我が治った後、夜羽ちゃんに、一緒にいたいっていなくなると寂しいって言ったんだって？」

「!? ———っ!?!?!」

矢島の問いかけに、言葉をなくし、みるみる顔が赤くなっていく瞬は、慌てて夜羽のほうを見た。

「よ、よよよ夜羽さん!? 何を、言っ……て!!」

激しく動揺中の瞬を不思議そうに見る夜羽。

「ん? 何って、前に言ってくれたことをそのまま教えたの。……それよりも顔が赤い。大丈夫？」

「だ、大丈夫だ!」

「ん、そう」

そんな二人の様子を可笑しそうに眺めていた矢島。

笑いを堪えようとせず、瞬をなだめる。

「ぶくくく……まあ、落ち着きなよ、神尾君。君らしくないね？」

……まあ、仕方ないか。あんなプロポーズみたいなこと言って、それを別の人に聞かれちゃったわけだから」

「プロッ!？」

矢島の一言に、瞬は言葉が詰まってしまった。

そんな瞬の様子を矢島は、呆れた顔で見ている。

「やれやれ、やっぱり自覚なしか。……鈍感な上に天然のたらしの才能でもあるのかな……？」

この間夜羽は、プロポーズの意味がわからず、疑問符を浮かべていた。

ある休みの日の午後の話。

（後書き）

感想お待ちしております！

ある休みの日の午後の話。 2

俺は矢島さんの言葉で、混乱していた。

今、矢島さん、なんて言った？

……プロポーズ？

そんなまさか。

俺は前に夜羽に言った言葉を思い出す。

『……こう言えはいいか？ 今日まで夜羽と一緒に過ごすのが当たり前になりすぎた。だから夜羽が居なくなるのは、寂しい。……俺と一緒にいてくれないか？』

……言ってる、ように聞こえる……。

確かにこれならプロポーズに聞こえるかもしれない。

ってか、むしろそうにしか聞こえない……！

「おおおお……！」

は、恥ずかしい……。

恐らくあの時の夜羽も気づいてはいないだろうが、俺はとんでもないことを言っていた。

しかもそれが今回、矢島さんにも知られてしまっている。道理で来たときから妙にニヤニヤしてると……。

とりあえず、弁解が必要だ。

「矢島さんわかって「ん、シュン。プロポーズって何？」……おう」
矢島さんに何かを言う前に、夜羽に遮られてしまった。

しかもその質問は、このタイミングでは爆弾にしかないものだ。

「夜羽ちゃん。プロポーズと言うのはツモガツ……!!」
矢島さんが勝手に答えようとするのを口を押さえて止める。

「よ、夜羽。と、とりあえずそれは置いておこう。今度話すから」
「……ん、わかった」
よし、わかってくれた。

後は帰ってから適当に誤魔化そう。

……出来れば。

「あーびつくりした。まあ、神尾君。皆まで言わずともわかってるよ。君の性格上無自覚で言っただろうね」

矢島さんはいつの間にか俺の拘束をはずし、座っていた。

「……………わかってるならいいんです」

「まあ、とりあえず言っておくけど、自覚無しとは言え、女の子に軽々しくそういうこと言っちゃだめだよ。発言には責任が付き物だからね？」

「責任……ですか……。——っ!! と、取れと!？」
責任の意味を考えると、そういう結論にたどり着き、また顔が熱

くなる。

「いや、そうとは言ってないよ。ただ、もうちょっと考えて行動したらってこと」

「はあ……」

……考えずに動いたことはあんまり無いんだけどな。

でも確かに最近では、思い立ったことをすぐに行動に移してる気もする。

実際藤森にも、俺が変わった、と言われたぐらいだ。

いつからだろうか……。

そこまで考えたところで、ふと夜羽が目に入る。

「そっか……夜羽が来てからか」

「ん……？　ワタシが、何？」

っと、つい声に出してしまった。

「や、なんでもないよ。矢島さんの言うとおりですね。もうちょっと考えて行動してみます」

「そうだね。そうしてほうがいいかも」

——でも……。

「でも、考えない行動も後悔はしてませんから」

「……そうか。だったらいいんだ」

そして俺と矢島さんの二人で笑いあう。

夜羽は俺たちを見て、ポカンとしていた。
が、すぐにムツとした顔になり、

「シユンもイチロウもワタシを話に入れない。退屈」と拗ねてしまった。

そんな様子に、俺はクスリと笑い、夜羽に謝る。

「悪い、そんなつもりはなかったんだって」

「……ん、ちゃんと謝って」

「ごめんなさい」

「ん、帰りにケーキをかうなら許す」

甘いもので簡単に許してくれる夜羽に苦笑いをする。

「……わかったよ」

「ん、許す」

「ありがとう」

その後は帰るまで、最近あった出来事を話した。

ちなみにその時、矢島さんから夜羽に、俺の個人情報が出てくることを知り、再度矢島さんを拘束したことは言うまでも無い。

そして帰り際。

俺は矢島さんに引き寄せられ、

「……考えない行動も後悔して無いなら、プロポーズみたいなセリフの件も後悔して無いって事だね？」

と、ニヤニヤ顔で言われた。

「——っ！！！！！！！！」

今日の俺は赤面しすぎだ……。

「それじゃあまたね、神尾君、夜羽ちゃん」

「……はい、また」

「ん、また」

そして二人で家路につく。

ある休みの日の午後の話。 2 （後書き）

瞬君やつとあの時の言葉を理解しました！。

感想お待ちしてます！

彼女の質問、彼の返答の話。（前書き）

家にて瞬君、質問されます。

ちゃんと答えられるでしょうか？

彼女の質問、彼の返答の話。

イチロウのところから帰ってきて、早速ワタシは、話題になっていた『プロポーズ』について、シュンに聞いてみた。

「シュン？ プロポーズって、何？」

「……さて、そろそろ腹減ったな。飯にするか」

む、それは答えじゃない。

ん……でも確かにお腹すいた。
ご飯にしよう。

ご飯の後、改めてシュンに聞いてみた。

「シュン？ プロポーズって、何？」

「……せっかくケーキ買ったんだし、食べるか」
「ん、食べる」

そうだった。ケーキがあった。
まず、そっちが先。

ケーキはおいしかった。
満足したから、もう一回聞いてみる。

「シュン？ プロポーズって、何？」

「……今日は疲れたなあ。風呂にしよう。あ、夜羽を先に洗ってから、元の姿に「シュン？」……」

今、気がついたけど何かシュンが話を逸らそうとしている。
……なんだろう。

「シュン、プロポーズについて、帰ったら教えるって言った」

「……ち、違うな。『今度話す』と言ったんだ」

「む……………」

ワタシはジッとシュンを見る。

シュンは口元を引きつらせてて、ちょっと汗もかいてる。

何かを誤魔化そうとしてるのは明らか。

——そうだとっても、

「……ん、シュンが話したくないなら、聞かないし、聞けない」

シュンがわざわざ隠したりするのは、ワタシには聞かせたくないことなんだろうし、無理に聞いちゃだめだと思う。

……でも、なんだろう……シュンに隠し事されるの、ちょっと、
苦しいし、何か、やだ……。

「おいー！？ そんな顔すんなよー！？」

シュンに声をかけられて、ワタシは顔を上げた。

顔を上げたって事は、ワタシは無意識に俯いてたんだ。

シュンはそのまま話を続けた。

「話したくないとか言えないんじゃないかって……っとだな、言いづらい……じゃなくて、説明しづらいだけだって！ だから、うまく言えるようになったら、言うから！」

「……ほんと？」

「ほんとだ！」

なんだ、隠し事じゃないのか……。
よかった。

ワタシが内心ホッとしてると、シュンが心配そうにこっちを見ていた。

多分、ワタシがまた辛そうな顔しちゃったんだと思う。

「ぷっ……！」

シュンの妙に焦ったような顔を見て、ワタシは少し笑ってしまった。

「何でいきなり笑うんだよ……。まあ、とにかくその話については俺がちゃんと教えられるようになるまで、保留な？ 夜羽も聞いてくんだよ？」

でも、まだ少し気になるし……あ。

「ん、わかった。シュンに聞かない」

明日は一人でホタルのところに行ってみよう。

「……………俺以外もだめだぞ？ 高嶺に高嶺のお母さん、ヤジマ動物病院の人たち……………後は飯田もだめだからな」

「む、バレた」

いい考えだと思ったのに。

彼女の質問、彼の返答の話。（後書き）

はい、解決！……じゃなくて、瞬君は先送りを選択しました。
今後この話題が出てくるのでしょうか……！？

感想ご指摘お待ちしております！

料理と彼女の苦戦の話。(前書き)

やっちまいました。

料理と彼女の苦戦の話。

「夜羽……緊張すんのはわかったけど、力入れすぎんな……」

「む……だい、じょうぶ……」

「ふう……いいから少し落ち着け。出来ないことじゃないんだ……」

「ん……でも、少し……怖い」

「大丈夫だつて。とりあえず最初は俺が……な？」

「ん……わかった……シユンに、全部……任せる……」

「ああ、じゃ、いくぞ……っ！」

「……………ん、血……出てる……」

「当たり前だろ？ 魚さばいてんだから」
現在、夜羽と台所で苦戦中。

昨日言われたとおり、料理を教えるんだが、
「シユン、これ、怖い」

そう言っただけで夜羽は思い切り力を込めて、包丁を握っていた。

事前に刃物の危険性を叩き込みすぎたか。

ちなみに今作ってるのは、鯖の味噌煮。

ほんとなら初心者なんだから、最初は火とか刃物とか使わないの
にするべきなんだろうけど、俺が一番得意で、一番好物なのが、鯖
の味噌煮だったから、なんとなく教えやすいと思ってこれにした。

それに俺のやり方はで、鯖を二枚におろして、それをぶった切っ
て切れ目入れるぐらいしか刃物使わないし、火もずつつけばな
しにはなるけど、火がついてる時はずっとそばにいる、ってことを
教えるにもちょうどいい。

とはいえ、何か二枚におろすことも出来なさそうだな……。

「じゃあ途中までやってやつから、最後は自分でやってみ？」
「ん、わかった」

そう言っただけで、手早く二枚におろす。

「おー……」

夜羽はパチパチと拍手をしていた。

……どこで覚えた、そんなリアクション……！

「……とりあえず、この二つを半分に切るだけ」

「む、わかった」

そして夜羽は振りかぶり、「ちよつと待てっ！」

夜羽は不機嫌そうな顔でこちらを睨んだが、そんなのは関係ない。
「何をやってるんだ！？」

「む、言われたとおり、きる」

「包丁が怖いといった奴の言葉とは思えない……」
「む？」

「夜羽さん、二回ほどやって見せたんだが、俺はあんなふうに包丁を振り上げたか？」

「……ん、ない」

「だよな。……まあ、俺も少し手本が早すぎた。ゆっくり教えるから」

「ん」

今日は夜羽の料理を食べれそうに無いな。

とりあえずこの日は、夜羽に包丁の持ち方、食材の抑え方、切る

ときの立ち方などを教えてる事に時間がかかりすぎた。

当然、料理の続きは俺が作った。

もちろん夜羽は不服そうだったが、空腹に負けたのか、諦めたようだ。

「むー……」

食事中、夜羽が唸ってた。

「夜羽？ どうした？」

「ん、今日は何も出来なかった」

「ああ、料理の話か。頑張ってたと思うが？」

実際、初めてにしては上達は早かったと思うが。

「でも、出来てない」

そうか、最後までやりきる事が出来なかったからか。

「違うな。続けてたら出来てたよ。俺が勝手に夜羽の出番を奪っただけだ」

「む……それは、違う。あれはシュンが正しい。続けてたら……夜」
「夜羽があれで正しいと思うなら、今日はこれで終わり。……ゆっ
くりでいいんだ」

「……ん、わかった。……でも、次の休みもやる」

「……おー、何教えるか考えとくよ」

次はもうちょっと簡単な料理にしてくか。

料理と彼女の苦戦の話。（後書き）

はい、と言うことで、一回こういうのやってみたかったですけど。

無理やりすぎました、か？

それともわかりやすかったですか？

感想をお待ちしてます！！

ただし料理に関してはあまり触れないで頂きたい……料理はほんではないもので。

のせたのは、ほぼ我流で、細かい臭み取りなどは省いています。

委員長の奇襲と彼のカウンターの話。

今日は学校に着くなりすぐに、委員長に絡まれた。

……なんでしょ？

「神尾くん、この前会った女の子、夜羽さん……でしたっけ？ あの子にすっかり挨拶して無いことを思い出したので、今日はあなたの家に行きますの」

……。

「……えっと、東城さん、もう一度言っではもらえませんか……？」
俺がそう言つと、

「神尾くん、この前会った女の子、夜羽さん……でしたっけ？ あの子にすっかり挨拶して無いことを思い出したので、今日はあなたの家に行きますの」

一言一句間違はなく同じ言葉を繰り返された。

「それは……『行ってもいいのです？』とかの質問じゃなくて『行きますの』という断言ですか……？」
「もちろんですの」

「……」

「……そこまで露骨に嫌な顔されなくてもいいんじゃないやありませんの？」
「？」

あんまり家に人を招くのは好きではないんです。

「どうしてわざわざ家まで来るんだ？」

「特に意味はありませんの。しいて言うなら、女の子と同棲しているという部屋を、チェックするためですの」

何か、変に疑われてるということか？

「部屋は別ですよ。一人暮らしといってもワンルームとかじゃないですし」

「ああ、あなたは家族で住んでた家にそのまま住んで、っ……………」
「ごめんなさいですの」

「……………気にしないで下さい。大分前のことですし」
やっぱり東城さんは俺の家の事情も知ってたか。

一応、学校ではほとんど誰にも言ってなかったんだけどな。

今は、知ってるのは教師と……………飯田ぐらいか？

このまま気まずい空気にいるのはさすがに、面倒なので、話を先に進めるか。

「とりあえず、あいつには両親が使ってた部屋で寝てもらってるん

で、ゆっぴーが想像しているような事にはなっていないよ」

「なっ！ またゆっぴーって……！ それにわたくし、そんな想像してませんの！！」

そう言つて一気に顔が赤くなった東城さん。

「そんな想像、ね。顔が赤くなってるけど、どんな事を想像したんだろうか？」

「——っ！！！ か、神尾くん！！」

「だって俺は特に誰かが赤くなるようなことは言っていないと思ったけど？ なんでゆっぴーは赤くなったのかな？」

「うう……っ！ か、風邪気味なだけですの！」

「へえ……いきなり風邪気味に、ねえ？」

「そ、そうですのー！！」

「まあ、そういうことにしといてあげよう」

「しといてあげるって！ わたくしは！！」

「さて、ゆっぴーで遊ぶのはこれくらいにして、話を戻そうか」

「あ、遊っ！！ わ、わたくしのことは、遊びでしたの！？」

焦ったように叫ぶ東城さん。

……最近、飯田や東城さんみたいな派手なリアクションとってく

れる人で遊ぶの、面白くなってきた。

ちょっと前まではこういう、騒がし目の人と関わるのは面倒なだけだったんだが……。

うん、確かに俺は変わってきてるらしい。

「家に来なくても、夜羽に挨拶できればいいでしょ。とりあえず、放課後に公園の……そうだな、アイス屋の前で」

……ん、でも夏休み終わったけど、アイス屋まだあるかな……？
まあ、あるだろう。

「……………わかりましたの。今回はそれで妥協しますの。でもそのうちにあなたの家にも行きますのよ！！」

勘弁してもらいたいな……………。

そういえば、東城さんと話してる最中、時々教室中がざわついてたな……。

なんだっ
たんだろう？

委員長の奇襲と彼のカウンターの話。（後書き）

周りには東城さんの一部分のセリフが聞かれてましたー。
それがざわついてた理由です。

どの部分かは……わかりやすいですね。

彼が正す友人の勘違いの話。

東城さんの話はそれだけだったようで、からかわれたことに若干憤慨しながら席に戻っていった。

「ふう……なんか、面倒くさいことになってきたな……」

軽く息を吐きながら、呟くと、何やら大きく顔を引きつらせた藤森が近づいてきた。

「神尾……さん？ 君は委員長と一体どんな話をしてたのかね……？」

「ん？ なした？ そんな変な顔して」

「そりゃ……ねえ？ ちよくちよく聞こえてきた話し声のせいで」
「なんだ、盗み聞きか」

「違うわ！！ 会話の内容は聞こえなかったが、時折委員長の叫び声が聞こえてたんだよ……！！」

俺が何の気なしにそういうと、ものすごい勢いで否定された。

「そうか」

「………そもそも、なんでそんな冷静なんだ？」

「何がだ？」

「………冷静ってことはそんな深い話じゃなかったのか……？ いや、それにしてはさっき聞こえたセリフの数々は怪しすぎるが……」

藤森はブツブツと何かを言いながら、考え込み始めてしまった。

何を言ってるのかは聞こえないが、恐らくさっきの東城さんとの会話でも深読みし過ぎてるんだろう。

「東城さんとは別に大したこと話して無いぞ。ちょっと俺の知り合いに会わせるとかそなん」

「……さっき聞こえたセリフでは、まったく違うことを想像させられたが」

何を言ってるんだ、こいつは。

……セリフ……？

「ああ、軽く東城さんをからかって遊んだだけだ」

「からかって……遊んだ……？ ……はっ！ まさかさっきの、私のことは遊び、うんぬんってのは！！ ……つく！ よく考えればこいつがそんな遊びなんてありえるわけも無い……！」

「お前は一体なに言ってるの……？」

「つかつ！ 俺！」

もうつっこむの面倒くさくなってきたな。

寝よ……。

「それにしても、そんなに委員長と仲良かったっけ？ お前」

寝ようとしたが、藤森に阻止された。

いつの間にか、いつもより高いテンションの頭がおかしい奴から、通常の頭がおかしい奴に戻ったようだ。

とは言え、テンションが通常でも、おかしい奴なのは変わらないようで、また妙なことを言い出した。

「いや、前に比べて特別仲良くなったっていう感覚は無いな。元々たまに話す程度だったし」

「……神尾が俺をどういう風に思ってるのかは置いて、俺が見た限り、お前が誰かと、特に女子と会話が長続きしてるのは、飯田さん以外には見た事がなかったが」

またなんか心の中を読まれた気がする。
顔に出てたか？

まいいや。

「飯田ともそんなに話してるつもりもなかったんだが、前と違ってたんなら、お前が言うとおりの、俺が変わったって事だろ」

「んー……まあ、そうだろうな。とりあえず、あんまり委員長と仲良くしすぎると、飯田と喧嘩になるから

気をつけるよ？ 同棲してるって言う女の子の件もな」

「……？ 飯田と喧嘩？ 何で」

「何でって、付き合ってたんだろ？ お前ら」

……ああ、そういえばこいつそんな風に勘違いしてたんだっけ。
「いや、付き合って無いよ」

「はあ！？ え！？ 何、別れたってこと！？」

「いや、もともと付き合って無いって」

「だって、お前否定しなかったし！」

「面倒で。肯定もして無いだろ？」

藤森の顔が面白いように驚愕に変わった。

「おまつ、え！？ じゃ、何でいつも飯田さんと一緒に」

「さあ？ それは俺に聞かれても……あいつが付きまどってきただけだし。なんて言うか……懐かれたって感じ」

「それは……予想外だったわ……」

「そうかい。もういいか？ 俺はちと……眠る……」

休みの日は、あんまり休めなかったから、まだ疲れが残ってるんだなあ……。

寝落ちる寸前、藤森がなんか言うのを聞いたような気がした。

が、今度は阻止されてたまるか……。

——おい！ 寝るな！ 付き合っていないのはわかったが、とりあえず教室前で委員長のセリフを聞いてた飯田さんのフォローはしろ

よー！

気の……せい……だな……。

「うう？ うう……」

な、なんか頭がパンクしそうで……。

「落ち着けい！！ 飯田さん！！」

私が知恵熱で倒れそうになると、藤森君が急いで駆け寄ってきた。

「うえ！？ 藤森君、あああああのね？」

「いいから飯田さんや。一旦落ち着こうじゃないか……」

「う、うん……」

「とりあえず、今飯田さんが想像してるような事じゃないから」

「え！？ わわたしが想像って……！？」

「いいから飯田さんや。一旦落ち着こうじゃないか……」

「う、うん……」

あれ？ さつきも同じやり取り繰り返したような気がする……。

「それがわかるって事は、やっと落ち着いたと」

「あ、多分……うん」

ちよつと混乱しちゃったから、藤森君に迷惑かけたかな。

……あれ？ 今、心読まれた？

「それじゃ、勘違いの謎解きといこう！」

私が不思議がっていると、何か軽い感じで話が始まった。

「それじゃ、えっと、勘違い……って？」

「とりあえず、さっきはどんな事想像してた？」

「うえ！？」

藤森君の言葉に私は顔が熱くなってしまった。

うう……そんな恥ずかしい事、言わなきゃだめなの……？

「……えっと……」「言いよどんでるってことは、ちょっとアダルトな事を想像したと」ふえ！？……うう……うん……」

藤森君がじつと私を見ていた……キチクだ……。

絶対私を恥ずかしい目に合わせて楽しんでるんだ……。

「そこが勘違い」

「……え？」

「神尾はそんなこと出来る奴じゃない。それは飯田さんが良くわか
ってるんじゃないのかい？」

「で、でもゆりかちゃんも嘘なんかつく子じゃないよ」

「委員長が言ったのは、自分が遊ばれたってだけ。それに関しては
飯田さんもよく神尾に遊ばれてるように見えたけど？」

「え！？ わ、私も……？ ……あ、もしかして、からかわれ
たって事……？」

「そういう事。神尾自身もからかって遊んだって言うてたし、気にな
るなら委員長にも聞いてみればいいんじゃない？ う嘘をつく子じ
やないんだろ？」

「うん……」

「じゃ、これで勘違いは終わり」
「うん！ 藤森君、ありがとう！」

ホッとした私を見て藤森君が呟いた。
「それにしても……」
「え？」

「飯田さん、意外とそういう知識は持つてるんだねえ……お馬鹿な子から、ちょっとエロい子に認識が変わったわ」

「ちよっ！！ やめて！！ 変な認識持たないで！！ っていうか元がお馬鹿な子って……ひどい！！」

藤森君ってば、優しかったり相談に乗ってくれたりもするけど、結構、毒吐いたりとんでもないこと言い出したりして……。

藤森君の性格がつかめない！！

少女の困惑、友人の気遣いの話（後書き）

……作者も藤森の性格が掴めなくなってきましたよ。

感想お待ちします。

待ち合わせの間での話。 (前書き)

タイトル通りですね。

前に一回だけ出たキャラも登場します。

待ち合わせの間での話。

「と、言うことで、公園に行くぞー」

「むー？ 一体どういふことで公園に行く？」

帰って真っ先に言ってみる。

もちろん夜羽は困惑していた。

「わるいわるい、なんかさ、この前外食したときに「シュン」ん？」

夜羽に言葉を遮られた。

「おかえり」

「おお、ごめん。ただいま
忘れてた。」

「ん。で、何？」

「ああこの前外食したとき、店員やってた東城さんが」

「……ん、シュンが相談したニンゲン？」

「そ、その人がさ、夜羽ときちんと挨拶したって」

「ん……？ 何で？」

「さあ……何でだろ」

二人で首をかしげる。

「とりあえず行くぞー」
「ん、行くー」

公園のアイス屋前に着くが、まだ東城さんは来てなかった。

「……てか、まだあつてよかった」
待ち合わせの場所がなかったらどうしようかと思ったよ。

「はいー。まだまだ営業中ですよー？」
「うわっー!!」

軽く独り言を呟くと、知らない声が返ってきた。

「どうもー、こんにちわー。今暇なんでお散歩中でしたー」

「え、っとーどなた、ですか？」

「あら、ひどいですー。私はあなたに一回だけあつた事があるのにー」

「一回!? それじゃ、覚えて無いのに無理は「ん、アイス屋さんのテンイン」……え？」

俺が謎の女性につっこみをいれていると、途中から夜羽が乱入した。

「え？」

「あなたは覚えてくれてましたかー。何回か来てくれましたからねー」
「ん」

アイス屋の店員？ 何回か来た？

「えっ、そのアイス屋の店員さんですか？」

「はいー。店員兼店長ですー。あなたは一回だけ、この子は今までで計五回来店してくれましたー」

俺が一回で、夜羽が五回って……。

「も、もしかして、今まで来たお客さん全員覚えてるんですか？」

「当たり前ですー。常連さんは全員覚えてますー。例え一回だけでも皆さん私の常連ですー」

「す、すごいですね……」

接客業の鏡だなあ。

「感心するなら買ってくれ！ ですー」

催促されてしまった。

まあ、今日はあつついし、いいか。

「はい。そうですね……っと、これからもう一人来るので、来てから決めますね？」

「はいー、じゃあ車の中でお待ちしてますー」

「ふう。……ん？」

ふと横を見ると夜羽が目を輝かせていた。

た、食べたかったのかな？

「お待たせしましたですの」
待つこと数分で東城さんは現れた。

「少ししか待ってないよ」

「……こういう時は、今来たところ。とか言つべきではありませんの？」

「こんなところで嘘つく必要ないじゃん」

なぜかジト目で見られた。

「………まあ、いいですの。さて、まずは自己紹介にしますの」

「いや、ここで立ち話もなんだし」

「そうですね。とりあえずどこかに行きましょう」

その言葉とともに目に入ったある光景に、夜羽は俺をチラリと見て、俺は苦笑いを漏らした。

そんな俺たちの様子に、東城さんは怪訝そうな顔で尋ねてきた。
「なんなんですか……？」

「甘味所は予約済みですよ。お嬢さん」

東城さんの後ろに見えるアイスの販売者から、さっきの店員さんがこつちをガン見していた。

待ち合わせの間での話。 （後書き）

と言うことで、アイス屋さんでした。

今後もたまに出現するかもしれません。

……ですが、名前はまだありません。

感想お待ちしてます！

彼女とお嬢様と店員さんによる、言葉遣い議論の話。(前書き)

続きます。

彼女とお嬢様と店員さんによる、言葉遣い議論の話。

言ったとおり、アイスを購入していると、東城さんがアイスを真剣に選ぶ夜羽を、食い入るように見つめていた。

「……………ぱり……………じ……………」

何かを呟く東城さん。

よく聞こえなかったこともあり、俺は声をかける。

「東城さん？ 何か言った？ それに、どうしたんだ、そんなに夜羽をガン見して」

「い、いえ！？ なにも言ってませんし何でもありませんの！ さで、これからどうしますの？」

「あー……………なんとなく、ここで話すことになりそうです」

俺の目線の先には、いつの間にやら用意された椅子とテーブル、そして笑顔で椅子を引く店員のお姉さんがそこにいた。

東城さんも特に反対することなく、アイスを片手に自己紹介が始まった。

「コホンッ！ まずは自己紹介ですの。わたくしは、東城ゆりかと申しますの。あなたのお名前は？」

東城さんの話し方が若干、子供に対しての話し方のような気がしたが、夜羽はいくつに見られているのだろうか？

「ん、夜羽。よろしく、ユリカ」

「よろしくですの……って、いきなりタメ口で呼び捨てですの!？」
「ん……?」

今までに無い反応だった。

確かに言われて見れば、誰に対してもこんな感じだったな。

「……シユン……? ワタシ何か間違った?」

俺は、若干不安がる夜羽に軽く首を振り、東城さんに向きなおした。

「東城さん、その辺はいいと思う。……さほど気にするところもないだろうし」

「神尾くん! 幼いときからちゃんとした教育を施さなければいけないんですよ!」

「幼い……って、ほんとにいくつだと思われてんだか……。そこにつつこんだのは東城さんだけだよ。あの志戸塚でさえ受け入れたんだし」

「——っ! し、志戸塚くんが……名前の呼び捨てを受け入れた……! ってそんなに驚くことでも無いじゃないですか。単に面倒だっただけです」

志戸塚の性格を完璧に理解してる……。
いつの間にそんな仲良くなったのやら。

「あいつもそんな嫌がつてる顔はしてなかったけどな。まあ、東城さんが嫌だつて言うなら、名前の呼び方ぐらいは、変えてもらえる……ただ、話し方はずつとこうだから無理だと思っけど」

「わかりましたの。それで我慢を「ちょっといいですかー?」……

はい？」

東城さんが妥協案を受け入れようとした時、予想外の横槍が入った。

アイス屋のお姉さんだ。

「いきなりなんですの!？」

「えっとー話を聞く限り、この子、夜羽ちゃん、ですがー、会う人みんなに同じ様に話してるんですよー？」

東城さんは軽く怒っていたが、まったく気にする様子なくお姉さんは話を続けた。

「ん、そう」

「それで、ゆりかちゃん、あなたはそれが嫌だとー」

「嫌だなんて言ってますんの! ただ、しっかりとした言葉遣いを」

しかしまたもお姉さんは東城さんの言葉を遮り、

「でもそれだとゆりかちゃんだけ別扱いになっちゃいますねー？」と指摘した。

「え?」「ん?」「……ああ」

東城さんと、夜羽は疑問符を浮かべていたが、俺はなんとなく納得していた。

「だってー、夜羽ちゃんはみんなに分け隔てなく一緒に態度をとってるわけですよ。どんなに目上の人でも夜羽ちゃんは変わらないですよ。でも、今ゆりかちゃんが自分だけ呼び方を変えさせたら、ゆりかちゃんは一生、夜羽ちゃんとの距離は縮まらないですよー」

「……えっと、言ってる意味がちょっと良くわかりませんの」
「……ん、わからない」

二人ともよくわかってなかったので、俺が多少付け足す。

「例えば、俺が東城さん以外クラス全員とタメ口の呼び捨てで話してて、東城さんだけ敬語でさん付けだったら、俺と東城さんは仲良いと思う？」

「……その場は状況にもよりますが、傍から見たら一人だけ馴染んでないように見えますの」

「そういうこと。……夜羽が会う人全員に口調を変えないのは、それが仲良くなるために必要なことだと思ってるからかもしれない」

思い返せば、夜羽が初めて人と……俺と会話したとき、俺が敬語を使っってなかったから、夜羽もそうしてるのかもしれない。

東城さんはチラリと夜羽を見て、

「ふう……わかりましたの。今までどおりで良いですの」

「そりゃ良かった。……だってよ、夜羽」

「ん………そもそも、何の話？」

ああ、そこから良くわかってなかったのか。

「とりあえず解決したからいいよ」

「ん、わかった」

「.....」

俺と夜羽が話している所を東城さんは、何かを考え込むように見ていた。

彼女とお嬢様と店員さんによる、言葉遣い議論の話。（後書き）

言ってる事ちよつと訳わからなかったですね……。
とりあえず、感想等お待ちします！

それにしても、アイス屋の店員さん、名前とかどうしようかな。

彼とお嬢様の攻防とそれを傍観する彼女、そして……の話

「ともかく！ 話を進めますの」

ユリカがワタシとシユンが話してるのを遮り、言った。

む、今度は何の話をするんだろう。

そう思っていると、シユンが質問を投げかけた。

「東城さん、話って自己紹介のことだろ。それは今終わったんじゃない？」

シユンの言葉にユリカはちょっと笑いながら言う。

「違いますの。本題はこれからですの」

……むう、本題……？ 何だろう？

「本題？ 何のこと？」

ワタシが考えて聞こうと思っていたことを先にシユンに聞かれてしまう。

「それは……あ、そうですね。アイスも食べ終わりましたし、ついでなんで神尾くんの家で話をしますの」

「何でそうなった！？」

シユンがすごく驚いてる。

「朝も言ったとおり、健全な暮らしをしているか確かめる必要があ

りますの。それにあまり聞かれたくない話ですの」

「嫌だよ！　ここでいいじゃん」

「さ、サッサと行きますの」

「無視か！！」

ん、よくわからないけど、シュンの家で話をするようだ。

今、シュンの家にまっすぐ向かっているけど、少し気になる事がある。

「ん、ユリカ？」

「……はい、なんですか？」

「どうしてシュンの家に迷わないで行ける？　前に来た？」

「いいえ、しっかり下調べが済んでいるからですの」

「下調べ……？」

どういふことかシュンに聞こうとしたけど、シュンは「やっぱりか……」て、俯きながら呟いていて、聞けなかった。

住んでるマンションが近くなったとき、シュンがユリカに話しかけた。

「東城さん、やはり私の家に行くのはやめてくれまいか」

「何故ですか？　……もしかして見られて困るものでも？」

「無いけど。いや普通、男子高校生の家ならあるとは思うが……」
「ならいいではないですか」

なんとなくわかってたけど、シユンは家に誰かを入れるのはあんまり好きじゃないよう。

「……………ワタシは、いいのかな？　いてほしいって言われたからいいと思う。」

家に向かってサクサク歩くユリ力を見てシユンは、少し考え込み
「……………ゆっぴーはそんなに俺の部屋に来たいのか？　何がしたいのやら……………」

と、ニヤリと笑いながら言った。

そしたらユリ力はいきなり戸惑いだした。

「なっ何がつて！？　先ほども言いましたの！　少し確認するだけですの！」

「何でそんなに焦ってるんだ？」

「それはっ！　神尾くんが変なことを言うからですよ！」

「俺は、何がしたいか聞いただけだよ。まあ、確かにさっきもそんなこと言ってたね。忘れてた」

む、なんだかさっきまでシユンが押され気味だったのにいきなり逆になった。

「そ、そうですの！　忘れる神尾くんが悪いですよ！」
「うん、ゴメン。で？　何でそんなに焦ってたんだ？」

「そ、それは……」

「朝も言っただけ、ゆっぴーが想像して様なことは無いんだけどなあ」

朝……？ ガツコウ、かな？

それにしてもシュン、なんだかちょっと楽しそう。

………。むう……。

「あ、ああ朝も言いましたけど、何も想像してませんの！！」

ん、ユリカの顔が真っ赤だ。

それを見たシュンは、すぐに言った。

「じゃあ、別に家に来る必要ないと思うが」

やっぱり家は嫌なんだろうか。

「それは……そうですね」

ユリカもちよっと納得気味。

なら、

「ん、家に行かないならここで話をする？」

ワタシが尋ねると、すぐにシュンが続けた。

「ああ、そういう事になるな。東城さん、何かまだ話があるならここで聞こうじゃないか」

ん、シュン、家に連れてかなくなって、ちょっとホッとする。

ユリカは何かを考えながら、周りを見渡して言った。

「……………まあ、確かにここなら人通りも少ないですし、話してもよさそうですね」

む、確かに今は他にニンゲンはいない。

「そういえば東城さん最初に人に聞かれたくないとも言ってたか」
「ええ、ですので家で話したかったんですの。でも、そんなに嫌ならとりあえずここでいいですの」

ユリカは不機嫌そうだ。

そんなユリカに苦笑いをしながらシユンが尋ねる。

「それで、話って……………」

「ええ、それでは……………」

そしてユリカは真剣な目でワタシのほうを向いた。

「ん……………」

？ 何だろう？

「夜羽さん。あなたは一体誰なんですの……………」

.....え.....?

彼とお嬢様の攻防とそれを傍観する彼女、そして……の話 (後書き)

感想お待ちします。

核心に迫る話 (前書き)

少し真面目な話になっています。

核心に迫る話

東城さんの放った一言は、俺と夜羽を硬直させた。

「夜羽さん。あなたは一体誰なんですか……？」

それはあまりにもまっすぐな質問。

夜羽はまだ固まったままだ。

下手に動揺して妙なことを言うよりはいいのかもしれない。

東城さんがどういう意味で言ったのかはわからないが、俺は出来るだけ平静を装って返す。

「……自己紹介は済んだはずだろ。こいつは家で預かってる遠い親戚で」

しかし俺の言葉を遮るように、東城さんはしっかりと目を合わせて答えた。

「言いましたの。下調べは済んでいると」

「……なんだって」

下調べ……さっきの夜羽が質問したことに對して、答えたときに使った言葉。

それが意味するのは……。

次に東城さんがなにを言うのかを予想できてしまった。
だが俺は、その予想が外れることを願いながら東城さんの言葉を待つ。

だが、

「神尾くん、失礼だとは思いましたが、まずあなたの事調べさせていただきましたの」

「——っ！！……………」

やはりそうだった。

願いもむなしく、俺の予想が当たってしまう。

そして東城さんは話を続ける。

「あなたに夜羽さんという親戚の方は見つかりませんでしたの。と言つよりまず、親戚と呼ばれる人があなたに居ること自体が確認が取れませんでしたの」

「……………調べが足りなかっただけだろ？」

「……………本当に、そう思いますの？」

「……………」

正直、思っていない。

それは東城さんの実家がどれだけ金持ちで、どれだけの情報を手に入れる事が出来るか……………などはまったく関係ない。

元々、取って付けたような適当な設定。

誰かが調べれば簡単にわかってしまう事も想像はついてた。

「シュ、シュン……？」

黙ってしまった俺を気遣い夜羽が声をかけてくれた。

夜羽自身もだいぶ動揺して、オロオロしていた。

「……大丈夫だから」

気休めにしかなら無いだろう言葉を吐いて、夜羽の頭に手を乗せ、落ち着かせる。

それを見ていた東城さんが、また少し考え、改めて口を開いた。

「わたくしがこのことを知ったとき、まず最初に、家出少女を人のいい神尾くんが匿っている、と思いましたの。実際、その可能性が最も高いですし、現実的ですよ」

「……………」

「倫理的にも問題ありますし、隠すとしたらそういう事情があるとも思ってますの」

今の時代ならそういう事もあるのか……。

でも、それならそれで通すか。俺がどう思われようとも。

「……ですからわたくしがこれから話すことは、さっきまでとは関

係ない、妄想とか夢物語と思って聞いてくださいの」

「……………え？」

唐突な言葉に俺は、少し動揺していた。

「わたくし、夜羽さんに会うのはこれで二回目、ですの」

「……………ああ、そう、だな」

「ですが、わたくし夜羽さんの雰囲気を別の所でも感じた事がありますの」

「……………？ それは、散歩中に会ってたとかそういう？」

東城さんは首を横に振り、否定した。

「わたくしが夜羽さんと同じ雰囲気を感じたのは……………学校で、ですの」

「なにを言つて……………？」「……………？」

俺も夜羽も話を理解できていない。

だが、東城さんは俺たちの疑問を気にせず話を続ける。

「少し前に、教室にカラスが入ってきた事がありましたね」

「っ！……！」「あっ……………」

俺が声を出さずに、夜羽は少し声を漏らしながら驚いた。

そして思い出す。

そうだ、あの時一度だけ夜羽がカラスの姿で学校に来ていた。

「改めて今日、夜羽さんと会って事で、ハッキリとわかりましたの。夜羽さんはその時のカラスと同じ感じがするんですの」

「……東城さん……そ、それは、勘違いじゃ？」

「そう、思いたいですけど、多分、違いますの。……わたくしは動物と会話が出来るわけではありませんが、他人の表情を読むことは得意ですの。それが動物にも通用するのはわかりませんが、あの時の神尾くんはしっかりとカラスと意思疎通が出来ていたように見えましたの」

「……………っ！」

俺もなんとなくだが、カラスのときの夜羽が何を言いたいかがかかるようになってきていた。

だが、たった一度学校に來ただけで、東城さんはそれがわかったと……。

俺の動揺をよそに、東城さんは言いづらそうに視線を下げ、話を続ける。

「わたくしだって、おかしいことを言ってるのはわかってますの。でも学校にカラスが來たときに感じた違和感は、この答えじゃないと落ち着きませんの」

「……………東城さん」

「夜羽さん！ あなたは……………！」

「東城さんっ！……！」

「っ……！ な、なんですの……？」

このまま自分で結論を出そうとする東城さんを制止する。
大きな声を出してしまったせいか、東城さんは少し動揺している。

「……でかい声出してゴメン。……さっきは断ったけど、やっぱり俺の家で話そう」

俺の言葉に東城さんの表情が、動揺から驚きに変わった。
「え……？ それは………」

「………夜羽……いい、よな……？」
俺はあいまいな言葉で夜羽に提案した。

恐らくこれだけで何が言いたいのかはわかっていると思う

「……………ん」

夜羽はしっかり考え、俺の提案を承諾した。

「じゃ、東城さん。行こうか」
「……………ええ、行きますの」

そして、ゆっくりと俺の家に向かい歩き出す。

夜羽のことを教えるために。

核心に迫る話 (後書き)

感想いただけたらうれしいです。

家で真実を……の話。（前書き）

前話は真面目な話で……。

家で真実を……の話。

家まで東城さんを案内し、リビングで少し待ってもらおう。
飲み物ぐらいは出さないと失礼だろう。

東城さんに飲み物を渡すと、すぐに口を開いた。

「話を……聞かせていただけるんですね……？」
「……ええ」

俺は一度、深呼吸をして東城さんを見る。
隣では夜羽が不安そうにこちらを見ていた。

そして、俺はゆっくりと口を開く。

「実は、かくかくしかじかと言うことになっている」

「わかりませんのー！ー！！！！ 何ですの！？ かくかくしかじ
かって！！ 今まで真剣な雰囲気だったじゃありませんの！！ ど
ーしていきなりボケたりするんですの！？」

このやり取りに俺は笑いを噛み殺し、夜羽はポカンとしていた。

ああ、やっぱり、シリアスな雰囲気で話すのは好きじゃない。

「ごめんごめん、重い空気のままだ嫌だったから」
「にしても何かやり方というものがありますの！」

東城さんはまだ怒ってらっしゃる様子。

「でも、さっきまでの空気は壊れたじゃないか」

「そうですね！ 何か納得いきませんの！」

「そう、それはよかった」

「どういう意味ですのー！？」

「……シュン」

俺はもう少し遊んでいたかったが、夜羽が、話が進まないから早くしろ的な目で睨んできたから少し話を戻そうか。

「ふう、東城さん。話を続けますので、少し静かにしてもらっても？」

「り、理不尽ですの……！」

「結論から言いますと、お察しの通りです」

「ずいぶんサラツと言いましたのね。……本当、ですの……？」

「見てもらったほうが早いかな。夜羽」

「ん」

夜羽も何をすべきかはわかっていたようで、すぐに元の姿に戻った。

「……………」

東城さんは言葉をなくしているようだった。

「予想してたとは言え、やっぱり驚くか」

「……当たり前ですの……元々、突拍子も無いありえないような仮説でしたし、まさか本当にその通りだとは……。……一つ聞きますの。夜羽さんは……その、どちらですの？」

質問の意味を一瞬だけ考え、俺は答える。

「人の姿になれるカラス、だ。今の姿が夜羽にとって本当の姿だ」
「……わかりましたの」

後ろで夜羽は人の姿になった音が聞こえた。

すると東城さんが若干動揺しだした。

「っ……………！」

「？ 東城さん？」

「その、人の姿になるときは、毎回、ああ、ですの……？」

「ああって……あー……東城さんが考えてるようなことは無いぞ。いつもすぐに着るように言ってるし、なるべく隠れてなるべく言うように言っているから」

東城さんが言いたいのは『夜羽が人の姿になるとき、毎回何も着てないのか』だと理解した。

今現在、後ろで服を着てる音も聞こえるし。

「それでも……二人暮らしでこの状況は……いつ何が起きてもおかしく無いではありませんの……？」

「東城さん、何度も言うように何も無いから！ てか、今追及すべきところはそこじゃないと思うが！」

「……そう、ですの。今は置いておきますの」
渋々納得してくれたようだ。
つか、今はかよ。

そんなやり取りをしていると、服を着終わった夜羽が東城さんに話しかけた。

「ん、ユリカ。聞きたいことは終わり？」

「いえ……正直聞きたいことはたくさんあるんですけど、色々ありすぎて頭が混乱してますの」

そう言い、頭を抱える東城さん。

そんな東城さんを夜羽が心配そうに見つめる。

「ん、大丈夫……？」

「……ありがとうございます。大丈夫ですの。少し時間が経てば落ち着きますの」

「ん」

そして少しの沈黙の後、俺がまず口を開いた。

「東城さん。聞きたい事がたくさんあるって言ってたけど、正直俺たちが答えられることは少ないぞ？」

恐らく東城さんが一番知りたい事は『どうして夜羽は……』ってことだと思う。

でもそれは、

「……それは、あなたたちもこの現象をよく理解して無いと……？」

「そういう事。でもって俺は夜羽を目立たせるような真似はしたく

ない」

要約すると、調べるなんてことは思わないでほしい、だ。
夜羽は疑問符を浮かべていたが、東城さんならその意味はわかってもらえると思う。

俺は夜羽に辛い思いはさせたくない。

「……………わかりましたの。このことは誰にも言いませんの」
「東城さん……………ありがとう……………」

俺が礼を言うと、東城さんはそっぽを向いて言った。
「別にわたくしはあなたの為を思ったわけじゃありませんの。わたくしも夜羽さんのことを気に入ってしまっただけですの」

「……………東城さん、本当にありがとう。感謝の気持ちでいっぱいだから、ツンデレなセリフについては突っ込まないよ」
「……………っ！……！」

顔を真っ赤にさせていた。

それを見て笑っていると、夜羽に睨まれた。
「シユン、ユリカ、いじめちゃだめ」
「いじめてるんじゃないぞ、からかってるんだ」

俺の言葉を聞いたのか東城さんはキツと俺を一睨みして、

「……今度は、あなたたちの事を聞かせてもらいますのよ？　あなたたちの生活について……ね」
と、黒い笑みを浮かべながら言ってきた。

おおぅ、からかいすぎた。

家で真実を……の話。（後書き）

今回の真面目な話ではありませんでした。

感想もらえたらうれしいです！

お嬢様の追求質問の話。

予想していたことはありません。

でも、その予想が当たっていたと知ったとき、やはり驚きましたの。

そして神尾くんは夜羽さんの為にわたくしに黙っていてほしい、と。

そんなの、当たり前じゃないですの。

と言うか元々どうこうしようなんて考えてません。

わたくしはただ、自分の知りたいことを確かめただけですの。

でも、

「……今度は、あなたたちの事を聞かせてもらいますのよ？ あなたたちの生活について……ね」

それとこれとは別ですの。

わたくしがそう言うのと、神尾くんは引きつった顔で苦笑いをしました。

ふっふっふ、今からわたくしをからかったことを後悔しても遅いんですのよ……！

「と、東城さん？ 俺たちの生活って言っても特に変わったことは無いですよ……？」

「それはわたくしが判断することですの」
「くっ……！」

今度はこちらがからかう番ですの。
何かあつたらすぐ、ですよ！

……夜羽さんはきょとんとしてますが。

「では、まずは軽いところから……あなたたちが一緒に暮らすようになってどれくらいになるんですの？」

私の質問に、神尾くんは少し考え込み、

「……夏休みの中ぐらいだから……もうすぐ一ヶ月、か」
と答えました。

意外と期間は短いですね。

立ち込める雰囲気はかなり親しげでしたから、もうずいぶん長い
かと思っていました。

……神尾くん、色々思い出して感慨にひたっている場合ではあり
ませんのよ。

「次に、衣食住はどうしてますの？ 住まいについては、ここで別の部屋を使ってもらつてると言っただけです」

「あー、服は夏休み中に夜羽を連れて、いくつか買いに行った。飯のほうは、理由はわからんが、夜羽は人の姿のとき、食の環境も人と同じ風になつてから、俺と一緒に物を食つてる。最近夜羽、人の姿でいることが多いしな」
「ん」

「そうなんですか？ でもそれだとかかなりお金がかかるのでは？」
「……………そこも調査済みじゃない？」

神尾くんが少し冷たい目でわたくしを見ますの。

……仕方が無いことですが。わたくしはそういう目をさせるようなことをしたわけですから。

「……………詳しい金額までは調べさせてませんの。言いたくなければ、かまいませんの」

「……………じゃ、置いてごうか」

とは言え……………どうも、神尾君をからかえるようないい質問が……………。
んー、どうして神尾くんはわたくしをからかう言葉が簡単に出てくるんですの……………？

「じゃあ、お風呂、とかはどうしてますの？」

……………質問してみたはいいですけど、これもうまくかわされる気が……………っ！

「……………」……………「……………」

ヒットしましたの！

何か神尾くんも夜羽さんも顔が真っ赤ですのっ！ 絶対なんかありましたのっ！！

「かみ「いや、風呂は、あれだ、夜羽に元の姿に戻ってもらって、それで体を洗ってる」……………へえ」

神尾くんが必死に平静を装いながら返してきました。
夜羽さんもコクンツコクンツと首を縦に振ってますの。

でも残念。

神尾くんもまだ少し頬が赤いですし、夜羽さんに至っては未だ顔が真っ赤ですよ？

「それにしても、神尾くんも夜羽さんも……顔、赤いですのよ？」
「うっ……！ ……あれだ……風邪です！」

む、それは前にわたくしが言った言葉。

ふっふっふ、では今度はこっちが言っ差し上げます！

「ふーん、急に、ですの？」

「……………急に、だ」

「そういう事にしておいてあげますの」

「……………くそっ」

初めて勝った気がしますの……！！

「……………で、もう聞きたいことは？」

神尾くんが若干不機嫌な顔で言ってきました。

「えっと、後は……わたくし以外に夜羽さんのことを知っている人はいますの……？」

神尾くんは今まで隠してきたようですから、あまりいいとは思いませんけど。

飯田さんあたりは、知ってそうですの。

「ああ、東城さん以外は一人だけ。動物病院の矢島さん。そこも調べた？」

「……ええ、多少は。何度か足を運んでいるようですね？ お友達ですの？」

「友達って言うか、世話になってる、かな？」

「ん、ワタシの怪我も診てくれた」

「そうですの……って、何が？」

聞いて無いですよ？ それは。

「元々怪我してる夜羽を見つけて、矢島さん所に運んだのから始まったんだよ。この生活」

「ん」

「そうでしたの……もう大丈夫ですの？」

「ん、全部治った」

「それはよかったですの」

今は大丈夫と聞いて安心してますの。

と言うか、本当に夜羽さんのことを気に入っているみたいですのね、わたくし。

その後は、とりあえず、今までであったことを順番に聞いていきました。

時折、答えてくれないところもありましたが。

そうしている内に、時間も遅くなってきましたし、おいとましたほうがよろしいですね。

「では、神尾くん、夜羽さん。遅くなってきましたし、わたくしそろそろ帰りますの。聞きたいことは少しは聞けましたし」

「それはよかった。もう聞かないでくれ」

「嫌ですの。少しはと言いましたの」

「……………」

どうやら最後にはわたくしの完勝のようですのね。

んっと、夜羽さんがわたくしの服を掴んでいます。

「どうかされましたの？」

「ん、ユリカも一緒にご飯食べる」

「……………え？」

ふと神尾くんを見ると、彼も目を丸くしてましたの。

……………えっと、どうでしょうか……………？

お嬢様の追求質問の話 (後書き)

東城さん視点……意外とうまく書けなかった……。

感想お待ちします。

彼女の思いつきの話

ワタシは思いついたことがあったので、その為に必要なことを言う、シユンもユリカも何故か固まってしまった。

「？……どうしたの」

「いや、唐突な発言にビックリしただけが。……えっと、東城さんにも予定つてもんがあるだろう。いきなり言っただけ」

「あ、えっと、わたくしは、一応、一言家に連絡を入れれば大丈夫だと思いますが……」

ん、二人とも何か戸惑ってるけど、

「大丈夫なら大丈夫」

「……………そうだね」「……………そうですの」

ワタシがそう言つと、何故か苦笑いで返された。

むー？

「んじゃ、とりあえず俺は買い物にでも言ってくる。東城さんは夜羽と二人で待つてもらえる？ その間に連絡してもらつて……………てか、東城さん。本当に大丈夫なのか？ 連絡だけで」

ん、どういう意味だろう。

ワタシはよくわからなかったけど、ユリカはわかったみたいで。

「大丈夫ですの。家柄の割には自由にさせてもらってますし。一応信頼はされてるみたいですよ」

「そっか」

シユンは安心したように言っただけ、その後ユリカはシユンに聞こえないように、

「まあ、もしかしたら監視ぐらいはついてるかもしれませんが……」
と言っていた。

ん……とりあえず大丈夫って言ったから大丈夫！

シユンはそのまま買い物に出かけて、ユリカは電話をしていた。

ユリカが戻ってきたので、色々話そうと思う。

そう思っていたら、ユリカから話しかけてきた。

「えっと、夜羽さん？ わざわざたくしを呼び止めたのは、何か話したいことでも？」

「ん、聞きたい事がある」

「聞きたいこと、ですの？」

「ん、プロポーズって、何？」

前にシユンには、話すまで待ってって言われたけど、やっぱり気になる。

それにあの時シユンは、ユリカに聞いちゃだめって言ってない。

……あの時はユリカのことはよく知らなかったけど。

今はシュンもないし、ちょうどいい。

そう思っただけだ……。

「……………」

ユリカがまた固まっちゃった。

「ユリカ？」

「……はっ！ よ、夜羽さんっ！ い、いきなりなんですの！？
プ、プロッ！ プロポーズって……！」

「ん……？ それが、何か知りたい」

「えっと……！ まず、どうしていきなりそんなことを知りたいと
思われたんですの？」

「む、前にシュンとイチロウがそのことについて話してるの聞いた」

「いちろう……あ、矢島獣医のことですね。それで、神尾さんと
矢島獣医はどんなことを？」

「ん、イチロウがシュンに『あんなプロポーズみたいなこと言っ
て、それを別の人に聞かれちゃった』って言った。シュンはそれで動揺
してた」

ワタシはあの時のことを思い出しながら言った。

「……………」
「……ユリカ？」

そしたらまた固まった。

「……………」
「ユリカ……？」

「……………」
「ユリカ」

む、今度はなかなか戻らない……。

んー……………シュンが戻ってくる前に教えてほしいな……………。

彼女の思いつきの話。 (後書き)

夜羽さん、聞かないよう言われた事を、ゆっぴーに聞いちゃいました。

さて、どうなるのやら。

彼の帰宅で感じる変化の話。

買い物から帰ってきたんだが。

「……………」
「……………」
何故か二人とも無言だった。

おかしいな、なんとなくドア開けた瞬間は、話し声が聞こえてた
と思ったんだが…………。

夜羽のほうは俯いていて、少し見える顔は真っ赤に染まっている
ように感じる。

な、なにがあつた…………。

対する東城さんは俺が帰ってきた瞬間から、ジト目で睨み続けて
いる。

な、何なんだ一体…………。

……………うむ、とりあえずは。
「えっと、ただいま」

すると夜羽が勢いよくこちらを向き、
「お、おおおおおおおおおかえりー!!」
と、異常にテンパリながら返してきた。

「お、おお。じゃ、ま、早速作るとするか…………その前に東城さんち
よつといいか?」

状況を知るために、未だジト目で睨んでくる東城さんと呼ぶ。

「……一体どういう状況だ。俺が買物に言ってる最中になにがあった……？」

「……さあ？ 知りませんの。自分で考えればよろしいんじゃない？ ありませんの？」

しかし帰ってきたのは冷たい言葉だった。

「いやいやいや、知らないわけ無いじゃん。てか、何でそんなに不機嫌……！？」

「不機嫌じゃありませんの。本当に大した事はありませんのよ？ ただ少しお話して、聞かれたことにお答えしただけですよ」

「聞かれたこと？ って……？」

「もういいですよ？ わたくしおなかが減りましたのっ！ 不味ければ承知しませんのよ！？」

東城さんは俺の疑問に答えてくれることなく、元いた場所に戻り、夜羽と雑談しだした。

——ええええ……な、なんなんだ！？

食事が出来上がったので、早速食卓を囲む。

……そういえば、ここで三人以上で食事すんのは、本当に久しぶりだな……。

まあ、今の、妙な空気じゃなかったら、もっとよかったんだけど。

「えーっと、どう、でしょうか？ 東城さん？」

「………美味しいですの」

「それはよかった」

俺の料理の感想を、そつぽを向きながら答えた東城さんだが、その後も箸は進んでいるようなので、安心した。

そして、チラリと夜羽を見ると、

「………」

一応、美味しそうに頬張ってはいるが、どうも意識して俺のほうを向かないようにしているっぽい。

ほんとに、なんだろうか。

………あれ？ てか、前にも何か似たようなことあった………気も………？

「神尾くん、今日はご馳走様でしたの。夜羽さんも誘ってくれてあ

りがとうですの」

「いや、気にしないで」「ん……！」

食事の後、多少は機嫌を直してくれた東城さん。
だが、夜羽のほうはまだ、妙に戸惑い気味。

東城さんも、機嫌は直してくれたが、どという話を夜羽としたかは、教えてはくれてない。

「それではわたくしもう行きますの」

「ああ、じゃあまた、学校で」

俺が何気なくそう言つと、夜羽はちらりと俺を見て、言った。

「ユリカ、また来て」

「え？」

その言葉に東城さんはニヤリと笑い、

「ええ、もちろんですの。と言つことで神尾くん？ では、また」

……ああ、学校で、じゃなくて、ここでつてことか。

これは事前打ち合わせありだな……。

「はいはい……」

どうも今日は東城さんに負けっぱなしみたいだ。

東城さんはドアに手をかけ、

「あ、そつですの神尾くん」

たが、思い出したかのように俺に向きなおした。

「ん？」

そして、

「自分の発言には責任を持ったほうがよろしいですの」と最後に言い残し、帰っていった。

……ん、そのセリフは最近どっかで聞いた……。

『発言には責任が付き物だからね？』

……あ。

『聞かれたことにお答えしただけですの』
『ん、わかった。シユンに聞かない』

……ああ。

『俺以外もだめだぞ？ 高嶺に高嶺のお母さん、ヤジマ動物病院の人たち……後は飯田もだめだからな』

……ああああ！

「よ、よよよ夜羽さんっ！？ つ、つかぬことお伺いいたしますが、東城さんに、何かお聞きに！？」

俺がそう言つと夜羽は真っ赤な顔で、
「……………ん、シュンはユリカに聞いたちゃだめって言わなかった」
そう言い、自分の部屋に走っていった。

「……………さ、さて、どう、しよう」

……………うん、まず落ち着こう。

東城さんがどういう風に話したかわからないんだし。

そしてちゃんと落ち着いて、冷静になってから、夜羽と話そう。

彼の帰宅で感じる変化の話。 (後書き)

瞬君、自力で状況を把握いたしました。

感想お待ちします！

一方、少女とその周辺の話。

学校が終わった後、掃除のために私は残っていた。
そして唸っていた。

一応掃除も終わって、後は帰るだけなんだけど。

「うう……気になる……」

藤森君のおかげで、妙な勘違いは解けたけど、その後待ち合わせの約束をしてた気も……。

「んな、気にすることじゃないと思うけど？　何か知り合い紹介するだの言ってたし」

「知り合い……？　んー、でも何か家に行くとかも聞こえたし……」

「神尾が人を招き入れるとは思えんけどね。てか、俺なんか家の場所すら知らないし。……飯田さんはあいつん家は入ったことあるの？」

「え？　あー、何回か。でもあんまりいい顔されなかったから……。」

「いや！　落ち込むこと無いって。あいつの家に案内されただけでも信頼はされてるってわかるし、今回も待ち合わせしたって事は、家に招くつもりは無いってことだろ？」

「そう……かな？」

「うーん、そう言われるとそう思えてくる。」

「そうだよ！　それにどうしても気になるなら明日委員長に聞いて

みればいいさ」

「そう、だね……うん、そうする！」

そして、私と藤森君は二人で笑いあう。

「それはそうとき、飯田さん」

「んん？」

「どうして、彼を捕まえてるの？」

そう言って藤森君は私が掴んでいる人物を指差す。

「……………」

特に抵抗するでもなく、ただ黙ってる志戸塚君を。

「え？ いや、志戸塚君にも相談に乗ってもらおうかなって思ったから」

今日は志戸塚君も掃除当番。

いつもは掃除後にそそくさと帰ってしまつのを止めて、捕まえておいたのだ。

「えっと、俺は志戸塚とあんまり……って言うかまったく話したことは無いんだけど……見る限りすごく嫌そうな顔してるけど」

「そんな事無いよ！ 私たち友達だし、ね？ 志戸塚君？」

「……………」

「……………人間、諦めの境地に至るところという顔するのか……………」

藤森君がよくわからないことを言ってるけど、まあいいや。

すると、志戸塚君がやつと声を発した。

「……………相談、とやらは解決したと見える。ならもう帰して…………」

「うお！？ お、俺…………志戸塚の声初めて聞いたかも」

「ええ！？ ついでだから三人で一緒に帰ろうと思ってたのに」

「……………人間、絶望の淵に立つとこういう顔するのか…………」

む、藤森君がまたよくわからないことを言ってる。

「……………いや、急いで帰らなければいけない用がある」

「そうなんだ……………なら仕方ないね？ あ、ゴメンね、引き止めて……………いいよ……………どうでも……………」

志戸塚君は早足で帰っていった。

「行っちゃった……………。ほんとに急いでたんだ……………悪い事したな……………」

なにも考えずに引き止めてたけど、志戸塚君にも予定はあるよね……………。

今度から気をつけなくちゃ。

ちなみに私が反省してる間、

「うーん、志戸塚も結構、面白い性格してるなあ。苦勞人っぽいし。よし、今度から話しかけよう」

藤森君は妙な決意を固めていた。

「それじゃあ、藤森君一緒に帰る？」
「いーよ」

その後は二人で他愛も無い話をしながら歩いていたら、ちょっと遅い時間になってしまった。

「お、俺はこっちだ。飯田さんはそっち？」
「うん」

「そろそろ暗くなるけど、一人で大丈夫か？」
「大丈夫だよ。近いし」

「そっか、じゃあ……って、あれ神尾か？」
藤森君が別れの言葉を言おうとしたところで、近くをスーパーの袋を持った瞬君が歩いていった。

まあ、瞬君はこっちに気づいてなかったみたいだけど。

「ほんとだ。ゆりかちゃんのお話終わったのかな？」
「じゃないか？ にしても買い物の量、多っ！！」

「あ、多分纏め買いじゃないかな？ それに二人暮らしたしね」
「あ、そっか。一人分で考えてた……って、ん！？ 飯田さんは二人暮らして知ってるんだ」

藤森君が驚いた表情で見てきた。

私にしたら藤森君がその事を知ってるのにびっくりだよ。

「藤森君こそ、夜羽ちゃんの事知ってるの？」

「夜羽ちゃん？ いや、名前までは知らないけど、一人増えたって事だけは。……飯田さんは……あ、家に行った事もあるからか」

「うん。その子は神尾くんの遠い親戚で、夜羽ちゃんって言っただけど、いい子だよ？」

「へえ、今度紹介してもらおう」

無理だと思うけど……。

「それにしても、買い溜めには少なかった気もしたなあ。……もしかして、家で委員長にご馳走する分だったりして？」

「え……？」

「……………いや！ 冗談だよ！？」

「あ、うん。わかってるけど……………」

まさか、ね…………？

一方、少女とその周辺の話。 （後書き）

志戸塚君は夏休み以降いろんな人らに目を付けられています。

これから彼の受難はあまり語られず、続くでしょう……（笑

ちなみに、まだ飯田さんのターンではありません……。
もうちょっと先です。

しっかり話し合いました。の話。 (前書き)

そして話は戻り……。

しっかり話し合いましょう、の話。

「よし、とりあえずここに座りましょうか、夜羽さんや」
「……………ん」

とりあえず俺が落ち着き、夜羽を居間に呼び戻す。

幸い、風呂のときのように部屋から出て来ないといった事にはならなかった。

「…………とりあえず、俺に何か、聞きたい事は…………？」

「…………あ……………」

そう聞くと、夜羽は顔を赤くして口をパクパクさせた。

…………聞きたいことはあるけど、うまく言葉に出来ないと言ったところでしょうか？

「それじゃ、先に俺から聞こう。…………東城さんに何を聞いた？」

「…………ん、プロポーズって何かって」

「…………それに東城さんは何と答えた？」

「…………ん…………フーフになろうって意味の言葉ですよ！……………って」と、夜羽は顔を赤らめながら答えた。

「そ、そうか……………」

うん、直球すぎるわ……。

もうちょい、何かボヤかした言い方出来ただろ。

大体いつもの俺を知ってる東城さんなら、考えれば勘違いだと思
うと思ったのに！

ああ、でも、東城さんが堂々とさっきのセリフを言い放つ姿が目
に浮かぶ……。

軽く現実逃避気味に考え事をしていると、夜羽は慌てた様子のま
ま話しかけてきた。

「そ、そそれで、シュン……？ その、プロポーズ……」

「——っ！ い、いや、その、矢島さんも言ってたろ？ 『プロポ
ーズした、ように聞こえる』って。その、あの時思った事を言っ
たら、プロポーズっぽく聞こえたって言うか、何て言うか……」

「ん……！ わ、わかってる……！ でも……その……」

夜羽の顔はまだ真っ赤で、それにまだ何か聞きたそうな顔してる
ような……。

そう思い、黙って夜羽が話し出すのを待っていると、少し言いつ
らそうに目を逸らし、口を開いた。

「……………えっと、あの時、最後に、言った事に後悔してな「あー
！！」と、とにかく！ この話はまた今度、いずれ、だ！ 元々、

俺がちゃんと言えるようになるまで保留って言ったのに、夜羽が東城さんに聞いちゃうから」……ん、ん！ わかった！」

……そうだった。

あの時夜羽、最後まで俺と矢島さんの話し聞いてたんだった。

うーん、この話、とりあえず先送りにしちゃったけど……本当にいずれ、話す事になりそうな……。

つか、俺はこれから、どうしていききたいんだろう。
多分、ずっとこのままって訳にはいかない……と思う。

でも心のどこかでは『ずっとこのまま』を望んでる気もする。

——……ああ、駄目だ、もう疲れた。

正直、今日は色々ありすぎた……。
疲れて頭が回らん。

「ん、シュン、そろそろ、体洗う時間」

「お、おう、そうだったな」

まあ、考えるのはいつでも出来る。

とりあえず、夜羽もいつも通りに戻ったし、それでいいか。

あ、明日あたりに東城さんの誤解は解いとかなきゃ。

何か久しぶりに言う気がするな……面倒くさい。

しっかり話し合いましょう、の話。 (後書き)

瞬君は先送りの駅にのりました。

感想お待ちしてます。

番外の話 ― ハロウィンの話 1 (前書き)

季節物の特別版です！

時間軸的には、本編より少し先の話です。

ですので、登場人物に若干の違和感を持って、気にしないで下さい。

番外の話 ― ハロウィンの話 1

「ハロウィン……?」

「そうです。明日ですの」

今日はユリカと一緒に、イチロウの所に遊びに来た。

いつも通り色々話していると、ユリカが突然「ハロウィンですのー!」って言い出した。

「ああ、そういえばそうだったね」
イチロウが答える。

でも、ハロウィンって……?

「そうですね、そして見たところ夜羽さん。あなた、やっぱりハロウィンを知りませんのね?」
「ん」

「コホンッ! ハロウィンとは、簡単に言うと、お菓子をもらえるかもしれないイベントですのー!」

「お菓子? ……甘いもの?」

「東城さん、ザックリだな……」

イチロウが苦笑いでつつこんだ。

でも、ユリカはイチロウを無視して話を進める。

「そうです。本来はお化けの格好をして、近所の家に行って『トリック・オア・トリート』と言って回るんです。でもそんな大掛かりな事は出来ませんので、個人でも誰かに『トリック・オア・トリート』と言えば、お菓子をくれるかもしれないです。」

「いや、その知識も結構偏ってるけどね？」

「それは置いておくですの！ 夜羽さんにそこまで深くハロウィンの歴史を教えるつもりありませんし」
「それもそうだね」

ん、よくわからないけど、そういう日なのはわかった気がする。

「む、でもくれる『かも』って？」

ワタシの質問に、ユリカはニッコリ笑って答える。

「いいところに気が付きましたのね、夜羽さん。いいですよ？」
「トリック・オア・トリート」の意味は『お菓子をくれなきゃイタズラするぞ』です。だから、言われた人が、もしお菓子を持ってなかったらイタズラしなければいけませんの」

「ん、言われたときに持つてなきゃいけないんだ。わかった」

そうワタシが言うと、何かゴソゴソとカバンの中を探して、服を取り出した。

そしてそれをワタシにくれて、
「ええ、ですから、明日神尾くんが帰ってきたらこれを着て、神尾くんに『トリック・オア・トリート』って言うんですの」

って言った。

それを見て、イチロウがすごく笑ってた。

「ん、わかった」

「それで、もしお菓子をくれたならそれでいいですけど、もしお菓子を作ってくれるようでしたら、わたくしに連絡してほしいですの」

「レンラク……どうやって？」

「それは……神尾くんにこの紙を渡してくださいの」

そしてユリカは何かを書いた紙をワタシにくれた。

「ん……もし、お菓子持ってたとき、イタズラ……って、どうやるの？」

ワタシが質問すると、ユリカが悩みだした。

「うーん……そうですね……」

そしたら、イチロウが「それなら僕が」って、教えてくれた。

「ん、わかった。何ももらえなかったらそうする」

ワタシがそう言うと、イチロウは笑いながら「頑張って」って言

った。

何を頑張ればいいかわからないけど、頑張る。

その間ユリカは、

「……へえ……神尾くんになんな弱点が……」

って呟いてた。

とりあえず、明日言ってみる。

その後も明日について色々話して帰った。

番外の話 ― ハロウィンの話 1 (後書き)

と言う事で、この話では東城さんと矢島さんが一緒に居ました。

本編ではもう少し先に、邂逅しますのでもう少しお待ちください。

それと、ほかのメンバーを期待されてた方々、申し訳ないです！
色々考えて、今回じっくりきたのが、この二人でした！

本編はまだ数話は東城さんのターンですが、終わりましたら、ほかのメンバーのターン入ります。

そしてこの話の続きは日にちがかわってから。

番外の話。——ハロウィンの話。 2 - A (前書き)

番外の話。——ハロウィンの話。 1の続きです！

この話ともう一つ別パターンを書きました。
序盤は同じで、途中から分岐します。

番外の話 ― ハロウィンの話 2 - A

学校が終わり、家に帰ると、珍しく出迎えがなかった。

「ただいまっ」と……」

部屋にいるのかと、少し不思議に思いながらも居間に向かう。

特に今はやる事が無いな……。

とは言え、まだ夕飯の準備には早いし。

どうするか悩んでいると、後ろから声がかかった。

「おかえり、シュン」

「おーただい……………ま」

パツと振り向くと、夜羽は以前に買いに行った服でも、母親の服でもないものを着ていた。

明らかに大きさが合っていない魔女帽子に、だいぶスカートの丈が短い、黒い服、そして黒のニーハイソックス。

要は魔女っぽい服だ。

しかもそれっぽい短いステッキまで持ってる。

「え……と、夜羽さん？」

「ん、シュン。とりつくおあとリーと」

「え？」

「とりつくおあとリーと」

ああ……今日はハロウィン……。

……それはいいとして、一体誰が……って、大体わかるな。

「とりあえずその前に、誰に、いつ教えてもらった？ 今日的事」

「ん、ユリカとイチロウに、昨日」

そうか……やはりあの二人か……！

どおりで今日東城さんがいやにニヤニヤしてると思った。

余計な事吹き込んで無いだろうな……。

と、俺が考え込んでいると、夜羽が再度話しかけてきた。

「シュン」

「んー？」

「とりつくおあとリーと」

「……………」

……さて、どうする……？

一応、昨日買い物行ったばっかだし、色々作れる程度の材料は入ってる。

んー……………。

「まあ、いつか。おし夜羽、ハッピーハロウィン。ってことで、これからお望みのもの作るけど、何がいい？」

「ん……………！ ケーキ！」

うーん、満面の笑み。

ほんとにうれしそうだ。

こっちまで笑顔になる。…………こっちの顔は赤くもあるが。

「わかった。んじゃ、まあハロウィンだし、パンプキンケーキにでもしとくか」

「ん。…………あ、シュン」

すると、夜羽が何かを思い出したように、紙を差し出してきた。

「なんだ？ これ」

「ん、ユリカがシュンがお菓子作るっていったらこれを渡せって」

なんだそりゃ。

えーなになに？

『どうも、ハッピーハロウィンですの。これを読んでいるという事は、やっぱりお菓子を作って差し上げる事にしたんですね。わかつた事ですの。とりあえずわたくしもあなたが作るお菓子が食べたいですので、作るならわたくしの分も用意して、招いてくださいの』

……随分と勝手な……。

まあ、いいんだけどさ。

……いいものも見れたしな。

俺はチラリと魔女の格好をした夜羽を見る。

相変わらず、嬉しそうにケーキが出来るのを待っている。

その姿に俺はクスリと笑い、声をかける。

「夜羽。東城さんも呼んでほしいみたいだから呼ぶぞー」

「ん、ハロウィンパーティー」

「ああ、そうなるのか。……それもありか」

少し前のこの家で、パーティなんて考えた事もなかったな。

これも、夜羽のおかげ、かな。

番外の話。——ハロウィンの話。2 - A (後書き)

もう一つも読んでいただけるとありがたいです。

感想お待ちしております!!

番外の話。——ハロウィンの話。 2 - B (前書き)

番外の話。——ハロウィンの話。 1の続きです！

もう一つ別パターンの番外の話。——ハロウィンの話。 2 - Aを同時に投稿してますので、そちらも読んでいただけると嬉しいです。

番外の話——ハロウィンの話 2・B

学校が終わり、家に帰ると、珍しく出迎えがなかった。

「ただいまっ」と……」

部屋にいるのかと、少し不思議に思いながらも居間に向かう。

特に今はやる事が無いな……。

とは言え、まだ夕飯の準備には早いし。

どうするか悩んでいると、後ろから声がかかった。

「おかえり、シュン」

「おーただい……………ま」

パツと振り向くと、夜羽は以前に買いに行った服でも、母親の服でもないものを着ていた。

明らかに大きさが合っていない魔女帽子に、だいぶスカートの丈が短い、黒い服、そして黒のニーハイソックス。

要は魔女っぽい服だ。

しかもそれっぽい短いステッキまで持ってる。

「え……と、夜羽さん？」

「ん、シュン。とりつくおあとリーと」

「え？」

「とりつくおあとリーと」

ああ……今日はハロウィン……。

……それはいいとして、一体誰が……って、大体わかるな。

「とりあえずその前に、誰に、いつ教えてもらった？ 今日的事」

「ん、ユリカとイチロウに、昨日」

そうか……やはりあの二人か……！

どおりで今日東城さんがいやにニヤニヤしてると思った。

余計な事吹き込んで無いだろうな……。

と、俺が考え込んでいると、夜羽が再度話しかけてきた。

「シュン」

「んー？」

「とりつくおあとリーと」

「……………」

……さて、どうする……？

実際、手持ちにお菓子とかも無いし……。

「えー……つと、ちょっと待っててもらえるか？」
すぐに買ってくれば大丈夫だろう。

「ん……無いの？ 今」

「あー……はい……」

「ん、じゃあイタズラ」

「やっぱりそうなりますか……」

矢島さん東城さん発案なら絶対そういう事になるとは思ってたが。

とは言え実行するのは夜羽。
ひどいイタズラとかはしないだろ。

「それで、何をするつもりで？」
「ん、しゃがんで……？」

しゃがむ……？ 何するつもりだ？

「こっか？」
「ん、そう」

夜羽がゆっくりと近づいてくる。

そして、

「ん……目をつむって……？」

「——っ！！ はい！？」
何するを気ですか！？

「む、だから、目をつむって？」
「いやいやいや、何する気だ！」
予想だにして無いセリフにだいぶ焦りながら俺は聞く。

が、夜羽はそんな俺を上目遣いで見て、言った。

「……いいから……はやく……」

「——っ！！！！！！」

ここで俺は言われたとおりにしなければいけない、と言う妙な使命感に襲われた。

……そう、言い訳させてほしい。

とにかく言われるがまま、目をつむった。

——目を閉じると、異様なほどの心音が聞こえる。

当たり前だ。

何をされるとはつきり言われたわけでも無いが、この状況だと頭には一つしか浮かんで無い。

そうしてる間にも、どんどん夜羽が自分の顔に近づいてくる気配。

そして……。

……フウッ

「うぁー！！！！」

俺は突然訪れた感覚に、大きく身を引いた。

そんな俺を満足そうに眺めて、夜羽は一言。

「ん、おわり」

だが俺は状況がつかめて無い。

「な、なななな何故いきなり耳に息を！！！！」

そう、目を閉じ待っていると、耳に息を吹きかけられた。

「ん、イタズラ。何をしたらいいか聞いたら、イチロウが『神尾君

は耳が弱点で、息を吹きかけられるのが苦手みたいだよ。だからイタズラするならそれをしてほしい』……って」

……あの、ハゲがあああああ！！！！！！！

とんでもない事を夜羽に吹き込むんじゃない！！

「む、でも、それをするまでの言い方はユリカに教わった」

やはり、あんたもかつ！！！！

次会ったとき覚えてろ、ゆっぴー！！

俺が二人に対し憎しみを燃やしていると、夜羽がさらに爆弾を投下してきた。

「ん……でも、息を吹きかけられた時のシュン、面白かった。……またするかも」

「ちよっ！！ やめてもらえまいか！？」

「む……………シュン、おなかすいた」

「話を逸らした！！ やる気満々だ！！ ……くそ、何か面倒くさい予感が…………」

「シュン、早く」

「……………わかったよ」

そしてこの日を境に、朝の俺の起こし方に、ボディプレスの他に、
耳への息の吹きかけが加わった……。

番外の話——ハロウィンの話 2・B（後書き）

二つのお話、いかがでしたでしょうか？

どっちがいいかとか、感想いただけると嬉しいです。

次の季節物では、全然違うメンバーを出す予定です。

さて、次のイベントと言えば……ああ、その日は子供たちが、皆修行して過ごさなきゃならない『苦理済ます』でしたね。

知ってますよ、出来ない子のところには『サタン』がやってくるんですよね。

学校内約束連発の話 (前書き)

本編再開！

学校内約束連発の話

次の日、学校で東城さんの誤解を解くのにものすごく時間がかかった。

それこそ学校にいる時間、全て使って。

そしてようやく話を全て伝える事が出来た。

「………ってことですので、妙な勘ぐりはしないで頂きたいんですが」

「ふむ……あなたの言い分はわかりましたの。ですが、あなたの言葉だけでは信用に足りませんの」

「……どうしろと？」

俺が疑問をあらわにすると、東城さんはニッコリと笑い、言った。

「わたくしを矢島獣医に会わせてほしいんですの」

そうきたか……別に拒否する理由も無いから、いいけど。

「わかった、じゃあ放課後現地集合で。場所はわかってるんだろ？」

「ええ、約束ですよ？」

そして俺は自分の席に戻っていく。

「ふう……………」

机に突っ伏していると、すぐに声をかけられた。

「えっと、瞬君……？」

「ああ、飯田か。なんだ？」

顔を上げると、何故か困惑気味の飯田が立っていた。

「うん、今日もゆりかちゃんと、その……遊ぶの……？」

「遊ぶって言うか、連れ回される、かな。矢島さんに会いたいんだと」

俺が何気なくそう言うと、飯田は酷く驚いた顔をした。

「ええ！？ ど、どうして、ゆりかちゃんをあそこに！？」

「どうして、って言われても……。昨日飯のときの話の流れで」

「めし……？ ご、ごはんゆりかちゃんと食べたの！？」

「いや、夜羽もな」

「そう、なんだ……ね、ねえ？ 今日、私も一緒に矢島さんのところに行ってもいい……？」

なんだ、また唐突な……っていつものことが。

とは言え今日は多分、夜羽のことを話にいくだろうから、飯田を連れてくのはやめといった方がいいかもな……。

「あー、悪い。今日は二人で行ってくる。あんまり人数多いと、矢島さんにも迷惑だろうし」

俺がそう言うと、飯田は、一瞬だけつらそうな顔をした。

だがすぐに笑顔になり、早口で言った。

「そう……だよね！ ゴメンね？ 変なこと言って」

「？ 何言って」

「それじゃあね！」

飯田の言いたいことがわからず、聞こうとしたが、俺が言い終わる前に飯田は、背を向けようとした。

「ちよい待ていやあ！！」

しかしそれはやけにテンション高く、阻止された。

「うえあ！？ ふ、藤森君！」

うるさいなあ。

……しかし、藤森。お前は神出鬼没だな。
さっきまで教室にいなかったろ。

「話は聞かせてもらった！」

「何時から聞いてた」

「んなことはどうでもいい。てか、お前らはあれだ、どっちも言葉が足りてない！」

「なんて？」 「ふえ？」

ポカンとしている俺と飯田をおいて、藤森は話を進める。

「まず神尾。話の流れから察するに、今日は委員長と二人でどこかに行く。そして飯田さんは連れてけないと」

「……大体合ってるけど、マジで何時から聞いてた」

そんな俺の突っ込みも無視される。

「んじゃ、聞くが。それは何故だ？」

「ん……？ まあ、色々あつて」

「色々……！」

なにやら飯田がさらに暗くなった。

「まあ、話したくないこともあるだろうからその色々は聞かん。だがこれだけは聞いておこう。……お前、委員長と付き合ってたの？」

「……………はい？」

何か話がおかしな方向に。

「どうなんだ？」

「いや、どうしてそうなった」

またいつもの訳のわからんことかと思い、俺が尋ねると、藤森は割りと言真面目な表情で答えてきた。

「どうしてもこうしても、今の会話はそう聞こえんだつて。お前と委員長が付き合つてて、二人でデートが決まつてて、飯田さんを断つた。飯田さんは、二人の邪魔をすべきじゃないと判断したから、変なこと言つたと謝つた。今のはいくらなんでも言葉が足りなすぎ

るぞ。説明できることはちゃんと説明はしろい」

「……………ああ、付き合ってない。てか、矢島さんここに連れてくのも、なんていうか……………弱みを握られた的な感じが」

それを聞いた飯田がパツと顔を上げた。

「え！？　じゃ、じゃあ私も矢島さんのところ行っていいの？」

「駄目なわけないだろ。つか行かなかったら、逆に怒られんじゃね？　春川さんあたりに」

そういうと、飯田は大きくため息をついて、安心した表情を見せる。

「よかったー……………瞬君とゆりかちゃんと一緒にあそこに遊びに行つてるとき、私も行っちゃったら気まずくなるような気がしたから、もうあそこに行けないかと思った」

「よくわからんがよかったな。つか今日以降は飯田が東城さんと一緒に行けばいいんじゃない？」

「うん！　そうする！」

飯田は不安が取れたからか、満面の笑みで自分の席に戻ろうとした。

「ちょい待ていやあー！！」

しかしそれはまたも、やけにテンション高く、阻止された。

……………今度は何だよ、うるさいなあ。

「飯田さんちょっと待ってなさい」

「え、え、え？ ええ？」

飯田愛美混乱中。

……気持ちはわかる。

「神尾。お前の言葉足らずのせいで飯田さんが変に不安にさせられてしまったぞ？ その埋め合わせも何もなしに終わりにするつもりかい？」

「……何言ってる？」

藤森は相変わらず人の話を聞かない。

「男なら『お詫びに言うこと一つだけ何でも聞くよ』ぐらい言ったらどうだ！……！」

……こいつは何を言ってるんだろう。

パッと助けを求めるように飯田を見ると、

「……………」

若干期待してるような目でこっちを見ていた。

……お前もこいつ側か！

「……ふう、わかったよ。出来ることであれば、一つ言つこと聞く。……これでいいか？」

「ほんとに!!? 約束だよ!!」

「……………ああ」

飯田がものすごく喜んでる。

……何を命令するつもりなのやら。

面倒くさいことになったなあ……。

まあ、たいした事は言わんだろ。

つか、後ろで面白そうにガッツポーズしてる藤森腹立つ。

学校内約束連発の話 (後書き)

はたしてこれは飯田さんのターンに繋がるのでしょうか。

感想お待ちしております。

お嬢様に案内させられた動物病院の話 (前書き)

遅くなりました！

お嬢様に案内させられた動物病院の話。

学校が終わり、夜羽には少し出てくることを言っ て家を出た。

そして通いなれた道を歩き、ヤジマ動物病院に。

とりあえず、着いたけど……。

「何ですの!?! 何ですの!?! どこからともなく声が!?!」

「いや、こっちにいるからね? 隣に立ってるから。てか、あれかい? もしかしてワザとやってる? 意図的に無視してる?」

「ふふつ、この子が愛美ちゃんの言っ てたゆりかちゃんね? 結構面白い子だわ」

カオス……と言っるのは、こっ言っ時に使っ言葉なんだなあ……。

「はっ!?! 神尾くん! 何ですのここ!?!」

「あ! 神尾君! やっぱり君の知り合いだ! この子ひどいんだけど!?!」

「あら、神尾君いらっしやい」

少し時間を置いてもう一回来ようと、背を向けた瞬間に見つかつてしまった。

……面倒くさい、この状況。

「東城さん。ここは病院です。お静かに。春川さんも止めてくださいよ」

俺が注意すると、東城さんはすぐに理解してくれ、おとなしくなった。

「すみませんの……少々取り乱しましたの」

「あら、ごめんなさい。ちょっと面白くなっちゃって」

「……あれ？ 僕に対する言葉は？」

ん……何か、空気が騒がしいな。

「……神尾君、もしかして今ひどいこと考えてる？」

よくわからない雑音が聞こえるが、気にせずに話を進めよう。

「えっと、まあまずは紹介からですかね。春川さん、彼女はうちのクラスの委員長、東城ゆりかさんです。……まあ、飯田から聞いてたみたいですけど。んで、東城さん。こちらは春川静香さん。ここへの受付」

「よろしくですの」

「ええよろしく」

「よし、これでここにいる全員の紹介は終わったな」

「やっぱりワザと言ってるよねえ！？」

「そついえば春川さんと会つのは久しぶりですね」

この前夜羽と来たときはいなかった。

「そうね。少し前に来てくれてたみたいだけど、その日私休みだったから」

「そうですか」

あるとき話した内容を思い出し、若干ホツとしてるのは秘密だ。

「それで？　今日はどうしたの？　いつも学校終わりはめんどくさがって、ここには来ないのに」

「あー、東城さんが矢島さんに会ってみたいって」

「あら？　つまり先生に彼女の紹介？」

「今の話がどう飛躍したんですか！」

思わず突っ込むと、春川さんにクスクス笑われた。

「ふふっ、冗談よ？」

「当たり前ですよ。それで矢島さんは今……？」

「ええ、先生は今診察中よ。患者さんは今の子だけだから、もうすぐ先生は空くから、もう少し待っててね？」

「はい」

「……………」

俺と春川さんの会話をポカンとした様子で眺めていた東城さん。

「どうかした？」

「あ、いえ。随分と仲がよろしいんですね」

「ああ……この人たちが一番心開いてんのかな？ 俺
「そうでしたの」

すると診察室から患者さんと思われる犬と、飼い主さんが出てきた。
「た。」

「ってことは、もうすぐ出てくる。」

「すぐ来ると思っけど」

「え、ええ……何か緊張してきましたの」

「何故に」

「いえ、何となくこう、ご両親への挨拶的な」

「いや、どうしてそうなる！」

「またも思わず突っ込むと、」

「あれ？ 神尾君……と？」

狙い澄ましたかのようなタイミングで、矢島さんが現れた。

「どうも」

「は、初めましてですの！」

「あ、うん。えっと、今日はどうしたんだい？ 神尾君」

「どうしたって……あれ？ そもそもなんで東城さんは矢島さんに
会いたかったんだっけ。」

「とりあえず、お話……ですかね？」

「そっか。それじゃ、こっちへどうぞ？」

言われたとおり、矢島さんについていく。

近くでなんかうずくまって、グズグズ泣いてる存在はほんとこっ

お嬢様に案内させられた動物病院の話 (後書き)

感想お待ちしております！

お嬢様のツツコミ疲れと今後の彼の憂鬱の話。

案内された場所に腰掛け、東城さんに興味の眼差しを向ける矢島さんに、俺は言う。

「実は、かくかくしかじかと言う事になってます」

「またそれですよ！？ いい加減にきなさい、神尾くん！」

「なるほど、大体わかった」

「わかりましたの！？ 何故ですよ！？ 一体どこで理解しましたの！」

うーん、いい感じにツツコミ頑張ってるなあ、東城さん。

俺も矢島さんも笑いをかみ殺す。

「それにしてもさすが矢島さん。即座に被せてくるとは」

「うん、まあね。何となくだけど。でも紹介より先に、からかうことを優先してくるとはね……」

「わたくしも初対面でからかわれるとは思いませんでしたのっ！！」

俺と矢島さんの会話に全力でツツコミ東城さん。

すでに若干息が切れはじめてるので、本題に入るか。

「矢島さん。こちらはクラスメートの東城ゆりかさん。矢島さんに会いたいつてことなんで連れてきました」

「僕に？ 理由は？」

「その辺は東城さんに聞いてください」

矢島さんが東城さんの方を向く。

東城さんは本編に入った事を悟り、静かに深呼吸して、話し出した。

「本日訪ねたのは、矢島獣医に聞きたいことがあってですの。でもその前に知っていてもらいたいのが……
わたくしも夜羽さんのことを、知っていますの」

……まあ、そのことを知ってもらわないと話が出来ない、か。

矢島さんもすぐにその言葉の意味を察し、軽く目を見開いてこっちを見てくる。

俺はその視線に苦笑いで返し、話の補足をする。

「……色々ありまして、まあ、偏に東城さんの観察力の賜物、ですかね。あ、でも東城さんに話したのは夜羽も納得してのことですんで」

「……うん、君らが話すことを選択してのことなら、僕からは特に言うことはないよ。……それで、東城さん……だったね？ その上で聞きたいことは？」

矢島さんが真剣な表情で東城さんを見る。

東城さんはその真剣な視線に応えるように、口を開いた。

「ええ……聞きたいことはただ一つ……」

矢島さんが息をのむ。

「神尾くんが夜羽さんにしたプロポーズまがいの行為についての真偽を確かめたいですの……!」

「……………へ?」

矢島さんの真剣な表情が、ポカンとした表情に変わる。

ちなみに俺は、一瞬その緊迫した空気に吞まれそうになったが、学校での会話を思い出し、この会話を真剣に聞くのをやめていた。

東城さんは俺や矢島さんの様子にかまわず、話を進める。

「神尾くんの話だと、聞きようによつてはプロポーズに聞こえるとのことですけど、実際はどうなんですか? 神尾くんも夜羽さんも内容については教えてくれませんでしたし」

「……………」

矢島さんはしばらく、黙って東城さんの話を聞いていたが、その

後チラリと俺の方を見て……ニヤリと笑った。

……あんまり良い予感がしない。

もちろん、そんな俺の不安は的中する。

「そうだねー……僕に話せることなら、教えてあげてもいい」
「本当ですよ!？」「ちよい、矢島さん……」

俺の声は無視され、矢島さんは東城さんとの会話を続ける。

「本当だとも。ただかわりに、東城さんからは神尾君の学校での話を聞かせてもらおうかな？」

「なるほど、情報の交換ですね。いいですよ」

あー……何か本人の許可なしにいろいろ話が進んで……。そろそろ止めないと、

「ああ、神尾くん。もう帰ってもよろしいですよ？ 後は矢島獣医と二人でお話いたしますので」

……止めないと、

「神尾君、そろそろ帰らないと夜羽ちゃんに怒られるよ」

……もう、面倒くさい……お好きにどうぞ。

別に矢島さんに学校でのこと聞かれるのは問題ないし、ここでの話も特に聞かれて困るものじゃないからいいんだけど、何か釈然としない。

なので部屋を出る直前、かなり念を込めて言う。

「ハゲてしまえ」

……うん、矢島さんのテンションが、がた落ちしたから良しとしよう。

しかしまあ、今後は逆に東城さんにかかわれることも増えるだろうな……。

お嬢様のツッコミ疲れと今後の彼の憂鬱の話。(後書き)

感想お待ちしております！

彼の帰宅後、二人の話（前書き）

ちょっと真面目に。

彼の帰宅後、二人の話

僕の心を決る酷い一言を残し、神尾君は帰って行った。

僕は改めて、彼が連れてきた東城さんという女の子に向き直し、
「それで？　もしかして、本当に聞きたいことがあるんじゃないのかい？」

と言ってみた。

すると彼女は眼を見開き、驚きの表情を見せた。

「……………気づいてらしたんですのね」

「いやー、半分くらいはカマをかけてみたんだけどね？　当たりだったようだけど」

「……………ええ、仰るとおりですの。聞きたいこと……………というより、少し、確認したいこと……………ですけど」

「……………話してごらん」

僕がそう言うと、深呼吸を一つし、真剣な顔で尋ねてきた。

「矢島獣医……………？　あなたは どうして、彼女の……………夜羽さんの事を
受け入れられたんですの……………？」

「……………なるほどね」

「え？」

「わざわざ僕に聞きにくるということは、君自身がどうしてもあの子を受け入れることが出来たのかがわからなくなってるんだね？」

「……………」

彼女は戸惑っている。

自分で出した答えのはずなのに、どうしてもその答えが出たのかわからずに。

「それに対しては、僕からは何も言うことは出来ないよ。君自身のことだからね。…………でも、そうだね。僕が夜羽ちゃんを受け入れることが出来たのは…………神尾君を見てたから」

「神尾くんを…………見てた…………？」

東城さんが不思議そうな顔で、僕が言った言葉を繰り返した。

そんな彼女の様子には僕は、苦笑いを浮かべながら話を進める。

「神尾君が真剣に頼んできたのがわかったからね。理由はそれだけで十分。それに、夜羽ちゃんには神尾君に良い影響を与えてみたいだし。それだけわかれば、この病院の人間ならみんな夜羽ちゃんを受け入れるんじゃないかな？」

「…………神尾くんがここの人たちに心を開くわけですよ」

東城さんが納得したように笑みを浮かべた。

…………神尾君、何か言ってたのかな？

「でも、僕らと彼のつきあいは、実はそんなに長いものでも深いものでもないよ。でも神尾君は、僕らに心を開いてくれた。なら僕らはその信頼に応えなきゃね」

東城さんは、納得した表情を見せた後、ぼそりと口を開いた。
「それにしても……良い影響、ですか。やはり、夜羽さんが来てからですか？ 神尾くんが変わり始めたのは」

「……確かに夜羽ちゃんが来てからだと思う。でも変わったんじゃないと思う。……多分、戻り始めたんだ。家族がいたころの彼に」
「あ……」

東城さんは、少し暗い表情を浮かべた。
と言うことは、彼女も多少は何か知っている、のか。

このままだと暗い話に、しかも本人のいないところでそういう話をするのは気が引けたため、僕は話題を変えることにした。

「しかし、聞きたいことは夜羽ちゃんのことだったんだね。てつきり君も《・》神尾君に好意を持っていて、神尾君のことを聞きたいのかなと思ってたよ」

「………も、ですか。そういえば彼女もよくここに来るんですよね」

「まあ、あの子も出会いは神尾君と同じだしね。それなりに付き合いはあるよ。それこそ……いつ頃から神尾君のことを………っているのも大体わかるし」

「なんですの、そのおもしろそうな話！是非お聞かせ願いたいですの！」

あ、考え方は大人っぽくても、こういう所は年相応なんだね。

僕は苦笑いしながら、話を戻す。

「それはまた今度ね。それで？ 東城さんはどうなんだい？」

「うう……答えにくいことを平然と聞きますのね……まあ、いいですの」

彼女はコホンと一つ咳払いをし、話し始めた。

「…………正直、前から多少、彼に好意を持ってましたの。それは他の男性に比べると、程度でしたけど。でも、夏休みが終わってから少し雰囲気が変わった彼と話すうちに、段々惹かれていきましたの」

真剣な面持ちの彼女の話をも、僕は静かに聞く。

「ただ、ふと気づきましたの。神尾くんが変わったのには、何か理由があるのではないか、誰かが神尾くんを変えることが出来たのではないかと。……まあ、それもつい最近簡単にわかりましたけど」

「夜羽ちゃん、か」

東城さんのあっさりとした言い方に苦笑いで返す。

「最初は、別の誰かが神尾くんを変えたんだとしても、関係ない。わたくしはその方に勝って神尾くんと……！ なんて、考えたりもしましたけど……………神尾くんと夜羽さんが一緒にいるところを

見たら、その気があつさり無くなりましたの」

「それはまたなんで？」

「だって、神尾くんが夜羽さんといるときの雰囲気が他の誰とも違いますもの。神尾くんの夜羽さんへの眼差しも。……まあ、それはほかの誰にも、それどころか本人達も気づいてないんでしょうけども。あ、矢島獣医は気づいてらしたのよね？」

……彼女は随分とよく見てるんだね。

そういえば神尾君も、夜羽ちゃんのことをバレたのは、彼女の観察力の賜物だ、とか言ってたか。

「うん、でも、その雰囲気や眼差しにどういう感情が含まれているのかは、わからないよ」

「……それは、家族になりたいのか、友達でいたいのか……恋人になりたいのかってことですか？」

「うん、そうだね。神尾君は変なところで鈍感だし、多分まだ自分がどうしたいか、は考えてないと思うよ。……だから東城さんもまだチャンスはあるんじゃない？ もちろん飯田さんもだけど」

僕の言葉に、少し考えた様子を見せたが、彼女はまたもあつさり言いのけた。

「さっきも言いましたけど、もうその気はありませんのよ？」

「……理由を聞いても？」

「単純ですの。わたくしも夜羽さんを気に入ってしまいましたから」

「……そっか。ならいいんだ」

東城さんはとてもいい笑顔で言った。

その言葉は、最初に僕に尋ねてきたことの、自分なりの答えにも思えた。

あの子を、夜羽ちゃんを自分が受け入れることが出来たのは、自分自身が夜羽ちゃんを気に入ってしまったから。

「……さて、じゃあ当初の話通り、神尾君のプロポーズの件、プラスその他諸々をお話しよう」

「ええ！ わたくしも学校での神尾くんの様子をお教えいたしますの」

パツと話を切り替え、元する予定だった話に戻してみると、東城さんもあっさり切り替えてきた。

恐らくこのときの、神尾君をからかう材料を探す僕たちは、似たような笑みを浮かべてたに違いない。

彼の帰宅後、二人の話。（後書き）

気持ちの整理をつけた一人の女の子。

……どうでしたか？ 感想お待ちします。

暇な彼女のお迎え中の、いろいろな勘違いの話。

む、ひま。

ガッコウからシュンが帰ってきて、そのまますぐに出かけてしまった。

イチロウの所にユリカと行くって言っていた。

……む、シュンとユリカが二人でどこかに行くことを考えた
ら、なんとなく、嫌な気分になった。

……多分、置いていかれたからかな。

「ん、ということで、迎えに行く」

誰に言ってもなく、呟いて、歩いて外に出る。

ふらふらとひまつぶしのつもりで歩く。

すると見たことのあるニンゲンとないニンゲンが前から歩いてきた。
た。

「なー志戸塚あ、いーじゃん家に遊びに行くくらい」

「……………」

「うう、無視かよお…………飯田さんとは話したくせに…………。通称、

俺こと藤森宗一、悲しくて泣いちゃうよ？　しくしく」
「……………」

片方は知らないけど、一人はタツハだ。

そのタツハが困った顔をしている。

む……おそらくあれは、シュンが出会ったらすぐに逃げろって言うていた、あれだ、カツアゲだ。

それでタツハはそのカツアゲに話しかけられて困ってる。
多分、うまく逃げれないんだ。

……………ん、ワタシはニンゲンであるシュンに助けられた。
なら今度はワタシがニンゲンを助けるのもいいかもしれない。

そう思い立ったワタシは、駆け足でタツハの元に急いだ。

「ぶー、無視はいかんぞ、無視は。そう言うのはよくな「タツハ」
……………ん？」

タツハとカツアゲが同時にこっちを見た。

カツアゲは不思議そうな顔をしてるけど、タツハは少し目を見開いてた。

「うお！　かわいい！　……………って、た、たつは……………？　あ、志戸塚、確かおまえの名前、「タツハ、こっち」え！？　ちょい待っ！」

カツアゲが何か言っていたけど無視して、タツハの手を取り、狭い道に入る。

シュンに連れられてや空を飛んでるときも、よくこの辺を通るから、ビョーインまでの道は完璧。

狭い道だって迷わない。

……前に何回か迷ったこともあるけど、行ったことのないとこは迷う。当たり前。だからハウコウオンチじゃない。

カツアゲから離れて、少し広い道に戻った。

「………神尾、夜羽」

「ん……？」

「……あー……いや、助かった。………どうも」

「ん、いい。でもお礼は『ありがとう』って言わなきゃだめ」

ワタシはタツハの方を向いた。

タツハはまた困った顔をした後、

「………あ、りがとう」

と言った。

「ん」

言いづらそうだったけど、ワタシもたまにああなるから、多分みんな一緒なんだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………いつまで」

しばらくどっちも話さなかったけど、タツハが話しかけてきた。

「ん？」

「……………いつまで……僕は、引っ張られてる……………」

「む、忘れてた」

「……………帰っても？」

タツハが帰りたいそうにしてたので、帰ってもいいと言おうとしたけど、その前にワタシに声かけられた。

「あれ、夜羽……………？ と志戸塚……………って志戸塚！？ 何故？」

「ん、シュン」

迎えにいく予定だった相手だった。

暇な彼女のお迎え中の、いろいろな勘違いの話。（後書き）

夜羽のなかで、藤森〓カツアゲという名前で定着しましたー。

感想受付中です！

彼の驚きと小さな……の話。

矢島さんと東城さんに追い出されて、ふらふらと家に帰ろうとすると、前から二人組みが歩いてきた。

逆行でよくわからないが、手をつないでいるように見えるので、恐らくどこかの恋人同士なんだろう。

……まったく、人目を気にしていちゃついでくださいっての。

そんなことを考えながら、横を通りすぎようと思っていたのだが、近づいてみると、歩いてきたのは見知った者だった。

「あれ、夜羽……？ と志戸塚……って志戸塚！？ 何故？」

最初に夜羽を確認して、隣は誰かと見てみると、予想外もいいところ。

志戸塚だった。

ど、どんな組み合わせだ……？

恐らく頭の上に疑問符が浮かんでいるであろう俺に、夜羽が笑顔で言ってきた。

「ん、シュン迎えに来た」

「おー？ お、おお……それはいいんだが、何ゆえ……」

俺が志戸塚に視線で尋ねようとしたが、その前に夜羽が答える。
「ん、タツハはカツアゲに話しかけられて困ってたから、連れてきた」

「カツアゲに話しかけられるって……まあ、言いたい事はわかるが」

もう一度志戸塚に視線を送る。

——どうということだ？

志戸塚もダルそうに返してくる。

——藤森宗一に話しかけられて迷惑してるのを見て勘違いされた。

あー、大体わかった……てか、あの馬鹿に話しかけるとか志戸塚も相変わらずだなあ。

俺が軽く志戸塚に同情していると、夜羽からの視線を感じた。

じー、と効果音まで付きそうなくらいにこちらを見てくる夜羽。

……………ふむ。

「あー、人助けか。すごいな」

そう言っただけで頭をなでると、

「……ん！」

満足そうな返事が返ってきた。

……一応、これでよかったのか……？

「……………いちゃつくなら人目を気にして」
しばらく夜羽をなでていると、志戸塚から声がかかった。

「いや、いちゃつくって……てか珍しいな、お前が話しかけるって。しかも校外で」

「……勘違いとはいえ、神尾夜羽に助けられたのは助けられた。……その礼をかねて、神尾瞬に言っておくことがある」

礼をかねてって、なんだそりゃ。

……それにしても、今日はほんと珍しくしゃべるな……。

「言っておくことって？」

「……………礼として、忠告。それと……謝罪を」

後半は何やら目をそらしながら言っていた。
なんか面倒くさそうな予感が。

「……僕は明日から事情で二週間ほど山奥の親戚の家に行かなくてはならなくなった。携帯も通じない」

「二週間！ 大丈夫なのか？ 確か二週間後ってテストだろ。いくらお前でも」

「……………そのあたりは問題ない。いつもどおりの点数を取ることぐらいはできる。一応テスト前には戻れるし」

ん……………まあ、こいつなら、そうなのか……。

「じゃあ、忠告と謝罪って……？」

「……僕がいないことで……恐らく君に迷惑がかかることになると思う。……先に謝る。申し訳ない」

「はい？ ど、どういうこと……？」
「……………明日、わかる」

そついい残し、志戸塚は踵を返した。

ちよっ！ もうちょい詳しく！ なんか面倒くさそう今の話！

俺がそついう前に夜羽が先に口を開いた。

「ん、タツハ。またね」

「……………また。神尾夜羽。今日は……………ありがとう」

「ん、どういたしまして」

「……………神尾瞬も、また。二週間後学校で」
「え？ あ、ああ。また……………じゃなくて！」

あわてて声をかけたが、時すでに遅し、志戸塚は狭い路地に入っていた。

志戸塚と別れ、帰る途中、なんとなく気になっていたことを聞いてみた。

「……………それにしても、夜羽。何か志戸塚と仲良さげだったな？」
「ん、タツハは多分いいニンゲン」

「……………そうか」

俺の頭に夜羽と志戸塚が手を繋ぐ風景が蘇ってきた。

……………。

恐らく夜羽は志戸塚を案内するためにそうしただけ何だろうし、志戸塚は志戸塚で振り払うのが面倒だっただけなんだろうけど……。

……………なんか、妙に胸がざわついた。

どうしてかはわからないが、俺はなんとなく夜羽の手をとって歩いていた。

夜羽は驚いた顔をしていたけど、気にしない。

こうやっていることで、胸のざわつきが少し落ち着いたらからだ。

俺はこれがどういう感情なのか、まったく気にせずに、手を繋いだまま家に帰った。

彼の驚きと小さな……の話。（後書き）

その感情の名前は、この話のタイトルにもある『……』に入る言葉です。

何が入れるかは……ご自由にどうぞ。

てか何気に瞬君がこうなったのは、初……？

感想お待ちしております！！

おかしな学校と彼の理解の話。 (前書き)

あ……と、以前間違えて投稿してしまいました話です。
以前に読まれた方は読まなくても大丈夫です……。

おかしな学校と彼の理解の話

次の日、いろいろ憂鬱ながら、学校に行った。

前日の志戸塚の言葉の意味や、東城さんに何を言われるのかを考えながら、ボーツと席に座っていると、馬鹿ふじもりが寄ってきた。

「はよっす、神尾」

「ああ、おはよう、馬鹿ふじもり」

「……………神尾？　今、何て字を書いて俺の名前を呼んだ？」

「……………さあ？」

……………相変わらず変なところで鋭いやつめ。

「所で、そろそろ修学旅行だな」

「あー……………そうだったな」

うちの高校は少し変わってる。

まず、修学旅行は全学年で実施される。

つまり毎年行くと言うことだ。

どうも、入学金を多めにとって、これに回しているらしい。
……………クレームが来ないのが不思議だ。

その修学旅行なのだが、行き先は毎年変わる
しかも、学年どころか、クラス毎に行き先が変わるのだ。
そして行き先の決め方が……………。

「うーん！ それにしても、くじ引きかぁ……確か、各クラス委員長が引くんだよな？ ゆっぴーの運に賭けるしかあるまいて！」

そう、くじ引きなのだ。

それも各学年に振り分けられたはずの修学旅行費が、一旦一つに集められ、くじ引きでいいところを引いた順に、改めて振り分けられていく。

運が良ければ海外何てのも用意されていて、悪ければ最悪、隣町何てのもある。

ちなみに、去年卒業した先輩たちの中には、最強に運が悪く、三年間全て隣町を引き当てた生徒がいたらしい。ただ、そのときにある先生が不憫に思ったのか、三年間全て隣町だった生徒を集め、卒業旅行と称して、旅費の半分は先生が、残り半分をその生徒たちに出させて、海外に連れて行ったとのこと。

先輩たちは、いい先生に巡り会えてよかった、と泣いたそう。

で、どうしてこんな妙な事になっているかというと、この学校の創立者が、

『学校は面白ければいい。面白ければ成績が伸びる。当たり前だ』と、どこかのマンガで聞いたことのあるようなことを言ったかららしい……いや、絶対嘘だと思うけど。

まあ、とりあえずうるさいから、楽しみだとテンションの上がつ

てる藤森を現実に戻すでしょう。

「まあ、その前にテストがあるけどな」

瞬く間に藤森のテンションががた落ちした。

「か、神尾……何故俺を現実世界に連れ戻した……！」

「藤森……うるさかったから」

「ぐはっ！　なんたる言いぐさ……！」

「その感じなら、何も勉強してないな」

「うう！　何故こんな非道な制度を作った！　学校よ！」

なにがどう非道なのかと言うと、修学旅行直前のテストである。

これもこの学校の変わってるところの一つなのだが、通常の期末や中間とは別に『修学前テスト』と言うのが用意されている。

このテストは、直接成績には関係なく、赤点をとっても追試などは行われない。

だが代わりに、赤点をとってしまうと、修学旅行の自由時間の半分を勉強会にあてられてしまうのだ。

勿論、いい点数をとれば、それなりの特典もあるらしいが。

それゆえ他のテストより、こっちの方が真剣に取り組む生徒が多い。

とにかく、このまま行けば、恐らく藤森はまあ……。

……それは置いとくか。

「しかし、志戸塚も面倒な時期に休まざるを得なくなったもんだ……」

「んあ？ 志戸塚がどうかしたか？」

「ああ、ちよつとな」

「なんだそりゃ……あ！ そう言えば志戸塚と言えば！ 神尾！
聞いてくれ！ 実はな――」

藤森が何かを言い掛けていたが、残念、タイムアップだ。
先生が来た。

俺は先生の連絡事項を聞き流しながら、考えていた。

……ぶつちやけ教室に入ってからずっと視線は感じていた訳で。
さっきその視線がする方に、チラツと横目で確認したら、いい笑顔でニツコリ笑ってらっしゃる委員長がおりました訳で。

……からかいに来るタイミング計ってるんだろつなあ……今まで
藤森が近くにいたから話しかけてこなかったけど。

……ああ……面倒くさい。

「ああそれと、志戸塚だが、家の事情で二週間ほど休みだ」
つと、志戸塚の話か。

「一応テストには間に合うらしいが…… かわいそうにな、ほとんど勉強出来ないだろう。まあ、多少は考慮してやるつもりだが」

お、よかったじゃん…… 何となく必要無さそうだけど。

先生は話を続ける。

「誰かメールでテスト範囲教えてやれよ…… と言いたところだが、これまたかわいそうなことに、事情で行く場所がかなりの山奥でな。電波は届かないらしい」

クラスのほとんどが、今の言葉に、小さく哀れんだ表情を見せたが、一人だけ、大きな反応を見せた。

「………… ええ!!?」

みんな突然の大声に、その声がした方——飯田愛実の方を向く。

そして俺は思い出す。

志戸塚の忠告を。

…………… 俺に迷惑、ね…………… そういうことか……………。
なるほど、確かにこれは、俺に来る、な……………。

すうく……面倒くちです。

おかしな学校と彼の理解の話。(後書き)

かなり前から考えていた設定をやっと一つ出せました……。
変な学校大好きです。

感想お待ちしております！

少女の上機嫌からの急降下、かーらの？の話。

ふふっ、何でも……かあ……。

藤森君のおかげで瞬君とこんな約束できちゃった……。

無理やりっぱかったから、ちょっと気は引けるけど。
チャンスがあるなら手にしなきゃ！

それにしても……どうしようかな……？

何でもって言ったって、一つだけだし、面倒くさがりな瞬君のことだから、多分本当に頼まれたことを一つしかやらなさそうだし。
てことは、何となくばやかして、大ざっぱにお願いしたらいいのかな？

ううー……どうしよ。

あ、誰かに相談、とか？

でもこんなこと相談できそうな相手って……藤森君？ 後……あ
！ 志戸塚君！

ってあれ！？ 今日志戸塚君まだ来てない！

珍しいな……お休み？

風邪とか、かな？ だとしたら心配だよ。

とりあえず、後でメールしておかなきゃ。

その後すぐに先生が来て、色々話してる。
話の中で、修学旅行の話が出てた。

あー……忘れてたなあ。

そっか、もうそんな時期か。

………んー？

……あ！ そうだ、お願いは修学旅行中にしよう！

行き先はクジだからどこに行くかはまだわからないけど、自由時間
で何かお願いすればいいんだ！

私ってば、頭いー！

よし、じゃあそのお願いの内容を考えなきゃ……うーん……
……あれ？ 悩んでる事は最初と同じ？

私がしばらく悩んでいると、先生の口から志戸塚君の名前が聞こえた。

「ああそれと、志戸塚だが、家の事情で二週間ほど休みだ」

あ、おうちの事情だったんだ。

よかった……病気とかじゃなくて。

私がほっと一息ついてる間も、先生は話を続ける。

「一応テストには間に合うらしいが……かわいそうにな、ほとんど勉強出来ないだろう。まあ、多少は考慮してやるつもりだが」

………テ、テスト……？

あ、ああ……ど、どうしょ。本気で忘れてた。

確かあの修学旅行前のテストって、成績には関係ないけど、修学旅行中の自由時間が半分も勉強で潰されるんだった。

ま、まったく勉強してないよお……。

困ったな……志戸塚君お休みだし……。

あれ！？　ほんとにピンチだ！

お、落ち着いて、落ち着くの、飯田愛美……。

いつも勉強を教えて貰ってる志戸塚君がお休みでも、メールで聞けばいいの……。

どっちにしてもテストの範囲を教えてあげなきゃだめだし、ね？

「誰かメールでテスト範囲教えてやれよ」

ほ、ほら。先生もそう言って、

「……と言いたところだが、これまたかわいそうなことに、事情で行く場所がかなりの山奥でな。電波は届かないらしい」

……………え？

「……………ええ！！？」

私はつい大きな声を出してしまった。

それによつてみんなが私の方を驚いたように見てきた気がするけど、今はそれどころじゃなかった。

えまーじえんしーだっ！！！！

た、頼りにしてた志戸塚君が……！

ど、どうしよあ……。

他の誰かに教えて貰うにしても……ゆりかちゃんは多分「普段から勉強してないのがいけませんの！」って言いながらも、ちゃんと教えてくれるけど……今の時点でかなりの人数が殺到してて、ゆりかちゃんすごく大変そうだよ……。

とりあえずゆりかちゃんに頼るのは無理そう。

藤森君は私と同じのような気がするし。

……うー！ 仕方ない！ ダメ元で瞬君に頼んでみるしかない！

「と言うことで、お願いします！！」

「何がどう、と言うことで、なんだ！」

瞬君の前につくなり、すぐに頭を下げた私。
でも怒られた。

何で……あ、私何も説明してないや。

私が急いで説明しようとすると、

「……とは言えまあ、大体言いたいことはわかるが」
って言われてしまった。

うう……確かにこのタイミングで私が頼むことは一つしかないよね……。

「それで、その……」

「面倒くさい、断る……」と言いたいが、その前に聞くことがある」
「え？」

予想してたセリフだったけど、その後に言葉がまだ続いていて少し驚いた。

そして、聞かれたことに、私は固まってしまう。

「これは、この前言ってた『お願い』になっても？」

………？

………え。

「え……ええ………」

瞬君、それはないよお………！

ちょっと冗談かと思ったけど瞬君の目は本気で。

「うう……はい」

私は仕方なく頷いた。

はう……これじゃ意味ないや……。

やっぱり無理やり手に入れたチャンスは使っちゃだめなんだね……。

私の落ち込みを気にせず、瞬君は話を続ける。

「とりあえず、一度頼まれたことだから、責任もって教えてくから」
「……はい」

「今日から二週間は学校の休み時間もきっちり勉強だ」
「……はい」

「目標は高く、全教科八十点台な」
「……はい………え？」

今、何て？

瞬君を見ると『今、はいつて言ったな？』みたいな顔をしていた。

「ちょ、ちょっと待って瞬君。無理だよそんなの。私のいつものテストの目標は『目指せ、平均点！』だよ」

「それじゃ俺が教える意味ないだろ。それにいい点とれば、特典もあるらしいし」

「だからって、むぼーすぎるよ！」

「大丈夫だろ。休み時間もそうだし、放課後も教えるし」

「へ？」

えっと、さっきから私、点数のことしか気にしてなかったけど、もしかして瞬君、なんかすごいこと言ってる？

私の疑問を聞く間もなく、瞬君はどんどん計画を立てていつてる。

「休み時間は図書室とかでいいとして、放課後は……今は俺の家、夜羽がいるから、勉強に集中出来ないか……？ 飯田の家は？」

「え？ う、うちはお父さんもお母さんも夜まで仕事で家にいないけど」

「ああ、ちょうどいいな。なら放課後は飯田の家で勉強でいいな？」

「へ？ は、はい！」

あつと、咄嗟に返事しちゃったけど……。

ちよつと、頭を整理しなきゃ。

……勉強で、放課後に、私の家に、瞬君が？

……………私の家で、瞬君と二人きり……………？

……ええええええーっ！！！！？

し、瞬君何てとんでもない事をつ！？

あ、瞬君、自分でもすごいこと言ってたって、気づいてないんだ！

てか、私もいいって言っちゃったー！

それに休み時間も勉強ってことは、学校でもずっと一緒！？

はわわわわわわっ！！！！

な、なんか、修学旅行中にしようと思ったたお願いより、はるか
にすごいことお願いしちゃったみたいだ……！

少女の上機嫌からの急降下、かーらーの？の話。(後書き)

感想お待ちしております！

その後の学校でのやり取りと家での彼の問い掛けの話。
(前書き)

何か最近、サブタイが長いのばかりに……。

その後の学校でのやり取りと家での彼の問い掛けの話

飯田の勉強スケジュールを頭の中で組み立てていると、当の飯田は何やらわたわたしていた。

何をしてるんだか……。

若干呆れながら見ていると、

「……くっ！ その休み時間の間だけでも、俺にも勉強を教えてください……」
「……と言いたいが、流石に割り込むことは、飯田さんに悪すぎるぬう……！」

藤森がどう表現したらいいかわからない表情で立っていた。

「仮に言ってきたとしても断るけどな」

「何故に！？ ……はっ！ やはり飯田さんと二人きりが……」

「え？ 普通に面倒くさい」

「酷いっ！」

「そもそも飯田に教えるのも面倒だが、そうしなきゃならんのは、お前のせいだし」

「くうう……っ！ 飯田さん！ 飯田さんからなんか言っちゃってくれ！ この友達甲斐のない極悪非道のめんどくさがりに！ そしてお願いですから昼休みだけでも一緒に勉強させてください！！」

藤森は俺に暴言を吐きながら、飯田に助けを求めた。
てか、言ってることが無茶苦茶だ。

だが飯田は未だ何かに動揺してる様子で、

「ふえ！？ え？ ええと……あ、諦めて……？」
と言い放った。

……飯田、絶対今までの話聞いてなかったと思うんだけど、的確な切り返し。

最後だけ聞こえてたのか？

藤森は飯田の言葉に打ちのめされた様子で。

「ああ！ やっぱりか！ だと思ってたけど！ こうなりや最後の手段………ゆっぴー、お助けー！！」

結局、叫びながら東城さんの所に走り出す藤森。

……あの様子じゃ、教えては………くれないだろうな。

とりあえず面倒くさいから、藤森のことは今から二週間くらい記憶から消してしまうことにし、改めて飯田とスケジュールを組んでいく。

「とりあえず何も準備してないから、明日からなー？」

「う、うん………！ ふ、ふつつか者ですがよろしくお願いしましゅー！」

「……色々言いたいことって言うか、ツツコミたいところはあるんだ

が……今は面倒だから、いいや……」

その後は、ゆっぴーの愚痴を長々と聞かされたことを除けば、平穩に一日が終わった。

幸い、ゆっぴーがクラスの連中の体たらくに憤慨してらしたお陰で、今日は、からかわれることはなかった。

……しかし、明日はどうなることやら……飯田に勉強を教えることもそうだが、憂鬱すぎる。

「ただいま……」

「ん、おかえり……？ シュン？ どうかした？」

あまり疲れを隠さずに帰ってきてしまったせいか、夜羽に心配されてしまった。

俺は「なんでもないよ」と言い、夜羽の頭を撫でる。

——この行為、最初はかなり恥ずかしくなったけど、慣れてしまえば自然にやっていた。

夜羽は、撫でられながらも、探るような視線を送ってきたが、何も聞いてこなかった。

それから、いつも通り家事などをして、結局、夜遅くまで学校での出来事を忘れてしまっていた。

だが人間、忘れていたことは唐突に思い出す。

「……あ！ 準備！！」

そう、唐突に、夜羽の体を洗ってる今思い出した。

夜羽も突然の大声に驚いたようで、顔をこちらに向け、

『カア……？』

と鳴いた。

俺は自然にそれに答える。

「ああ、明日からの勉強のな。テストが近いんだよ」

『カア、カアー』

「まあ、面倒くさいがな……」

端から見たら頭のおかしい人間に見えるだろうが、最近はカラスの姿でも大体言ってることがわかる。

——ちなみに、今の場合だと、一回目が『準備……？』で、二回目『そう、がんばって』って所だ。

そのまま俺は話を続ける。

「ったく、ほんとに面倒な事になった。飯田に勉強教えるとか、かなり厳しいだろ」

『……………』

しかし夜羽は突然鳴かなくなった。

「……………？ 夜羽……………」

『カー』

「早く終わらせろって？ わかったけど……………どうしたんだ？ いきなり」

『……………』

む、無視ですか……………。

言われたとおり早めに体を洗い終わると、夜羽はすぐに人の姿になった。

「ん、べんきょうって、イイダマナミも一緒なの？」

「ん？ ああ、そうだけ……………」

別にわざわざ人の姿に変わって聞かなくてもよくないか？

「……………」

夜羽は妙な目線を送ってくる。

……………どうしよう、まだ一つ言わなきゃいけないことがあるんだけど……………この状況では、すごく言いづらい。

「えー……………っと、その勉強のこともあり、明日から少し、その……………帰りが遅くなる……………かも」

「……………」

「あ、いや、夕食時には間に合うように帰ってくるつもりだ」

「……………」

おおう、さつきから夜羽の視線が鋭くなるばかりだ。
な、何をそんなに怒ってらっしゃるんでしょうか。

……なんか前にも似たような空気になった気も……あー、前も飯田が絡むと夜羽の放つ空気が変わったような。

……………飯田も気にしてたし、とりあえず聞いてみる、
かな？

「……………なあ、夜羽。もしかして、飯田のこと嫌いか……………？」

その後の学校でのやり取りと家での彼の問い掛けの話。
(後書き)

感想、お待ちしております!!!

彼女の……の話。

話の中でシュンに聞かれた。

「……なあ、夜羽。もしかして、飯田のこと嫌いか……?」

「……… イイダ、マナミ。」

「キライ……じゃない」

そう、キライじゃない。

最初にワタシに話しかけてきたときもそうだけど、元の姿でいるときも、イイダマナミは変わらずやさしく接してくれた。

元の姿のワタシに、怯えるような目も、嫌うような目もなかった。

ホタルもイイダマナミのことを話すときは笑顔だった。

わかってる。

イイダマナミは多分、いいニンゲン。

………でも、たまに……よくわからないけど、何か、怖く

なる。

ホタルやユリカがシュンと一緒にいるときも少し思っ
てしまっけど、イイダマナミがシュンと一緒にのときが、一番怖い。

どうして怖くなるのか、わからなくて……。

「……夜羽？」

突然喋らなくなったワタシに心配そうな声を出すシュン。

「……ん、大丈夫」

「そ、うか……？ 何かあるなら言えよ？ 言わなきゃ一緒に居る意味無いしな」

「……あ……………」

そっか……。

シュンが、ワタシのそばにいてくれなくなるような……そういう考えが出てくるのが怖いんだ。

「……………夜羽……………?」

また黙ってしまったワタシにシュンが声をかけてきたので、ワタシは話し出す。

「さっきも言ったけど、イイダマナミ……………マナミのこと、キライじゃない」

そついつとシュンは少しホッとしたような顔で言う。

「……………そっか、ならいいんだ。何か飯田の話になると夜羽の機嫌が悪くなったような気がしてたから、あいつの事嫌いなのかなってさ」

「む……………」

シュンはワタシの心配もするけど、同時にマナミの心配もしてた。

「…………………………」

ワタシはそれがやっぱり嫌で。

……………ん、よく……………わからない。

こんなときは、相談。ホタルに聞く。

「シュン、明日ホタルの家に行くから、ホタルに言って?」

「ん？ いいけど……あー……電話はかけてやるから、自分で話せばいいんじゃないか？」

「……………デンワ、キライ」

顔が見えないのに声だけするのは、何か嫌。

そう言ってシュンを見ると、シュンも微妙な顔をしていた。

「ん……？ シュン？ どうしたの？」

「いや……俺は高嶺のお母さんのテンションがちと苦手で……」

シュンが苦笑いを浮かべて言う。

む……シュンもデンワが嫌だった。

彼女の……の話。（後書き）

ご指摘、感想お待ちしております！

番外の話。——仲良くなってからのある一幕の話。（前書き）

えー、本編の続きに少々手詰まっまして、タイミングがなくてやれなかった話を番外編として投稿します。

軽い気持ちでご覧ください。

続きを待つてらした方、いらっしやいましたら申し訳ありませんです。

番外の話——仲良くなったからのある一幕の話。

ある日夜羽が唐突に言ってきた。

「シユン、お風呂、入ってみたい」

「……………え？」

ええっと、夜羽さん。それは、前にお話致しませんでした？

とりあえず詳しく話を聞くと、どうやら今日、矢島さんとの会話の流れでお風呂の話になり、夜羽が入りたければ、一人で入ればいいのではないかという結論がでたらしい。

「…………シユン、だめ？」

上目づかいで頼んでくる夜羽。

俺は妙に照れてしまい、顔を背ける。

…………しかし何だろう、この行動、意図的に夜羽がやったように見えたが。

夜羽が意識して上目づかいとかやるとは思えないし、誰かの策略

性を感じるな。

……まあ、誰かにやらされてるとわかってても、照れるものは照れるが。

「いや、別に駄目じゃないけど、やり方とか一人じゃわからないだろ。前も言ったけど、俺が入るわけにもいかないし」

「む……………」

「……あーいや、水浴びならぬ、お湯浴び…………まあ湯に浸かるだけなら俺が準備すればいける、か…………？　ん…………夜羽、今日はもう遅いから、明日でいいか？」

「ん、わかった」

どうせなら一人で体とか洗えるようになれば楽なんだがなあ…………。

次の日、学校にていつものようにボーッとしていると、やはりと言うべきか、東城さんが近づいてきた。

「おはようですよ、神尾くん」

「おはようございます、東城さん。最近俺に話しかける回数増えてません？」

「気にすることはありませんの」

いえいえ、東城さん。気づいてないのか、忘れてるのはかしりませんが、あなたに話しかけられる度に、私に嫉妬と羨望の目線を送ってくる生徒が、結構いるわけですよー。

……まあいいや。

「それで、今日はいつたいどんなご用件ですか（訳 どうかからかってくるつもりだ）？」

「ええ、どういたしましょう？ お話したい（訳 からかいたい）ことは、沢山ありますの」

……ふむ、矢島さんと会わせてから、以前の恨みを晴らすかのようにならかってくるな。

……面倒くさい。

「ああ、そういえば、神尾くん。最近夜羽さんに頼み事をされました？」

「？ 何で知ってるんだ？」

夜羽に頼み事されたのは昨日だぞ。

「ふふふつ、前にわたくしが夜羽さんに頼み事をするときのやり方を教えてさしあげたことがありましたの。……どうでした？ あつさり頼み事を聞いてしまいましたでしょう？ わたくしも教えながら、夜羽さんの上目づかいの破壊力にやられてしまいましたのよ」

そっかい……思った通りかい。

でも、普通に頼まれても、よっぽどじゃ無い限り断りはしないけどな。

それに夜羽、たまに本当の無意識に上目づかいしてくるし。

にしても、頼み事が……とりあえず帰ったら風呂洗わなきゃ。

と考えたところで、俺をからかうネタを選んでいる東城さんが目に入り。

……………おお。

「東城さん」

「はい、どうしましたの？」

「うちのお風呂に入らない？」

「……………はい？」

「だから、うちの風呂に」

「い、iiiiiiiiiiiiきなり、何を言い出しますのっ！……！！」

？ あれですよ！？ わたくしが最近からかってばかりだから仕返しですよ！！？」

「いや、じゃくて」

「ではなんだと言っんですの！！」

どうしたんだ？ 東城さん、いきなりテンパリだして。

「実は、か「かくかくしかじかとか言ったら本気で怒りますのよ！！」……はい、ごめんなさい。ちゃんと説明します……」

むう、すっかり手強くなってしまった。

結局、昨日の経緯を一から説明した。

——もちろん、以前に勃発した『一緒にお風呂』うんぬんの騒動は省いて、だ。

そして東城さんが一言。

「……最初からそう言ってくださいの……」

そう、疲れた表情で呟いた。

「言ったよ」

「あんな誤解を招くような言い方では何もわかりませんの！！！！」

「……？ どう言っことだ？」

誤解とは、一体？

俺がそう言つと、東城さんは目を見開き、

「ま、まさか、先程のセリフはワザと言つて、からかったとかではなく、真面目に言いましたの……………！？」

「からかい…………？ 今日は一方向的にゆっぴーからやられたと思つたけど」

「…………多少鈍いところがあるとは思つてましたが…………ここまでとは思いませんでしたの…………！」

いや、俺はどちらかと言えば物事には鋭い方だと思うが…………。

「それよりゆっぴーさんや、結局受けてくれるのかい？」

「……………神尾くんがよろしいのでしたら……………か、かまいませんのん？ 俺がつてどゆこと？」

「自分で考えてください！！」

そう言つて、ゆっぴーは自分の席に戻つていった。

てか、途中からずっと『ゆっぴー』って呼んでたのに、ツツコミをくれなかった…………。

ふむ、にしても一体なんだと言つんだ。

その時は全く気づかなかったが、家に帰って夜羽に、東城さんが風呂の入り方教えてくれる、と説明した後、ちよつとしてから来た東城さんが顔を真つ赤にして、

「か、かか神尾くんは決して自分の部屋から出ないでくださいの……！」

と、ややどもりながら言ってきたときに、唐突に気がついた。

——……あれ？ 俺、学校で東城さんにとんでもないこと言った？

あー、俺は……あれか？

女の子に？

男の自宅で？

風呂に入ってくれって？

………そりゃ、ああいう反応見せるわ……。

全面的に俺が悪い。

よく受諾してくれたもんだ。

俺は言われたとおり、大人しく自室に籠もる。

流石にからかうとかそういう次元の話じゃないし。

………たまに風呂場のほうから聞こえてくる二人の声は、妙な色っぽさを感じ、かなり居心地が悪かったが、何もかもが完全に自業自得なので、テレビなどで、必死な気を紛らわせた。

そして約一時間後。

「神尾くん」

「ん、んー……？」

部屋のドア越しに東城さんが話しかけてきた。

「終わりましたの。……いいお湯でしたの。夜羽さんにはちゃんとお風呂の入り方を教えましたので」

「そ、そっか、わざわざありがとうございます。それと……その、すみませんでした……」

「ああ、やっと気がつきましたの。………本当に恥ずかしかったですのよ……」

「本気ですみませんでした！」

東城さんは呆れたようにため息をつき、

「もういいですよ。今後さえ気をつけていただければ。……それでわたくしはそろそろお暇いたしますの」と言った。

「本当にありがとう、東城さん」

「ですから、いいですよ。夜羽さんも楽しそうでしたし、何より私も楽しかったですから」

「……そう言ってもらえると助かる」

「ふう、でも頑張ったんですから、埋め合わせを期待してますの。
では、失礼します」

埋め合わせ、か。
なんか考えとかなきゃな。

しかし、これでやっと夜羽は一人で風呂に入れるな。

ただ、次の日の夜。

「ん、シュン。体洗って？」

そう言っつて、夜羽はいつも、体を洗うときに使っているタオルを
俺に差し出してきた。

「あれ？ 東城さんに入り方教えてもらったから、一人で入れるだ
ろ？ それとも風呂は好きじゃなかったか？」

「んーん、確かにユリカとのお風呂、楽しかったし、さっぱりもし
ただ」

「けど？」

「ん、ワタシはシュンにしてもらう方が好き」

「そ、そうか……」

東城さんの頑張りを割と無駄にしてしまう発言をした夜羽だった。

ちなみに、この発言で俺の顔は真っ赤になったのは、言うまでもない。

「ん、でもたまには一人でお風呂入るの」

……だそうだ。東城さん、無駄にならなくてよかったね。

番外の話。——仲良くなってからのある一幕の話。（後書き）

またしつこく風呂の話を引き張ってしまいました！

一応、ゆっぴーが夜羽の事を知った後すぐにやろうかなって考えて
ましたが、本編の都合上入れられませんでした。

感想お待ちしておりますっ！

飼い主さん家の話。

ブルルルルルルルルルッ！

電話だ。

誰だろ、こんな時間に。て言うか最近携帯ばかりで、家の電話はあんまり使っていないから、セールスかな？。

私が出ようとしたけど、その前にお母さんが出た。

「はい、もしもし？ ああ、ええ、今代わります……でもその前に……あれ以来一度も家に遊びに来て無いけど、いつ頃来れるのかしら？ ……ふふふつ、そうやって誤魔化すのね？ ……まあいいわ、それについてはまた今度。ちょっと待っててね？ ……蛍、電話よ。愛しの神尾さんから」

「ふえっ！？ 神尾さん！？ 何だろ……って、お母さん！！ 愛しのって！」

神尾さんに聞かれたらどうするの！？

私は急いで電話口に。

ちょっと焦ったけど、お母さんはちゃんと保留ボタンを押してた。

……やめてよ、ほんとに焦ったんだから……。

「えっと、もしもし、代わりました。蛍です……」

『あーもしもし。神尾です。ごめん、こんな遅くに』

「い、いえ！ 大丈夫です。それよりどうされたんですか？」
『ああ、大したことじゃないよ。明日、夜羽が高嶺の家に遊びに行きたいって』

「あ、もちろん大丈夫です。神尾さんも一緒にですか？」
『……いや、ちょっと用事があるから夜羽だけだな』

「そうですか……」

って、ちょっと残念に思っちゃったけど、それじゃ夜羽ちゃんに失礼だよね。

「……あれ？ それならどうして神尾さんが電話を？」

『あー、何か夜羽、電話が苦手なんだと。顔が見えないのに声だけ聞こえるってのが慣れないらしい』

「そうですか。では夜羽ちゃんに三時半頃にはいると思うので、と伝言お願いします」

『任された。夜遅くにすまなかったな。それじゃ、おやすみ』

「………は、はい！ おやすみなさいです！」

ゆっくりと受話器を下ろす。

ガチャ！

受話器を戻した状態で固まってしまった私。

……か、神尾さんに『おやすみ』って言われちゃった。

ただの挨拶なんだけど……普通に話すだけじゃ使わない挨拶なだけあって、何か、嬉し恥ずかし！

「なーにニヤニヤしてるのよ」

「うきゃっ！……お母さん！脅かさないでよ！」

いつからいたのかわからないけど、ちょっと呆れ顔のお母さんにツッコまれてしまった。

「あなたが妄想ばかりして私に気づかなかっただけでしょ。それより、彼の用件は何だったの？」

「あ、別に大したことじゃないよ？明日夜羽ちゃんが遊びに来たって。なんか夜羽ちゃん、電話苦手だからって神尾さんが代わりにかけてくれたみたい。……一応言っておくけど、来るのは夜羽ちゃんだけだからね」

「あら、そ？ニヤニヤしてたから、てっきり彼も来るものだと思ってたわ。……それにしても……」
「？お母さん？」

お母さんは、少し真剣な顔で考え込み、

「……ねえ、夜羽ちゃんって確か、あなたと違う学校で、夏休み中に彼の家で預かってたって言ってたわよね？ ……もう夏休みが終わってずいぶん経つけど、夜羽ちゃん、学校はどうしてるのかしら。彼の家から通えるくらいの学校なの？ 何か聞いてる？」

「あ……………」

確かに言われるまであんまり考えてなかったかも。

……違う。無意識に考えないようにしてたんだ。

私は悩んだ拳げ句、初めて夜羽ちゃんに会った日のことをお母さんに話した。

ほんとと話したらまずかったのかもしれないけど、夜羽ちゃんの為に何か出来ないかって思った。

今までは、神尾さんに聞かないでほしいと言われた……とか、夜羽ちゃんが話そうとしてない……とか、自分に言い訳して、踏み込まないようにしてたから。

……私、夜羽ちゃんの友達なのにな……。

でも、友達だから、何かつらいことがあるなら、一緒に解決した

いの。

「……どう思う？ お母さん……」

「ん……そう、ね……普通に考えれば……虐待とか、イジメとか……もちろん、それも憶測の域をでないけど。ただ……程度にもよるけど、怪我するなんて、よっぽどの事があったのかしらね……」

「……………」

お母さんにそう言われて、夜羽ちゃんの笑顔が浮かんできて……。

……夜羽ちゃん……。

コッソッ！

「いたっ！」

そしたら、お母さんに頭をこづかれた。

「こら。今あなたがそんな顔して何になるの？ それに憶測の域をでないって言ったでしょ。……とにかく、少し話を聞きたいわ」

痛む頭をさすりながらも、お母さんに感謝していた。

——そうだね。今私が暗くなっても意味ないや。

「あ……でも、お母さん。その、夜羽ちゃんに直接は……」

「わかってるわよ。聞かない。本人も多分……話したくはないだろうし。とりあえず、まあ、彼に聞くのが妥当かしら」

「……うん、神尾さんは、何か知ってると思う。……でも、他人の私たちに教えてくれるかな？」

「難しいかもしれないけど……夜羽ちゃんの力になりたいんでしょ？ だったらまあ、任せておきなさい」

「……うん、ありがとう、お母さん」

飼い主さん家の話。(後書き)

瞬の誤魔化しで、高嶺家がシリアスな話をしちゃいました。
でもまあ、あの誤魔化し方ならいざれこつなりますね。

感想お待ちしてます！

……しかし、瞬の話と夜羽の話、全く毛色の違う話を同時進行できるのか？ 自分は……。

勉強と突然の困惑の話

現在昼休み、ご飯も食べ終わり、飯田と二人、テスト勉強のため、図書室へ来たのだが。

「……………」

「……………」

「いいですか？ 飯田さん……？」

「な、何かな……？ 瞬君」

「どうして、教科書がないのですかな？」

「き、今日はノートだけがあれば大丈夫な授業と、体育だけだったから……………」

もう一度言うが、俺たちは、勉強……………するために、図書室に来ているはずなんだが。

「君は……勉強をする気はあるのかな？」

「……………」
「……………」

「いえね？ 別に急にこんな事してる訳じゃなくて、昨日のうちに勉強すると言ったはずなんです。だから準備が出来ないはずがない訳ですよ。それともあれですか？ 学校のテストの勉強するのに、学校で使ってる教科書は必要ないと思われましたか？ まあ、それ

ならそれで？ 勉強の仕方は人それぞれですから、いいですけど。
そもそも私の記憶が正しければ、君の方から勉強を教えてくれと頼
んできた気がしていたのですが……そこのところどう思われますか
？」

「あああ……キ、キャラが違うよお……面倒くさがりな瞬君らしか
らぬ敬語の長文を口に出してるよお……」

キャラが違う？

ああ、今俺は少し気が立っているからかな。

俺にとつての昼休みは、学校内で過ごす時間の中で唯一無二の、
何もしなくても良い時間なのだ。

それを削ってまで付き合っているというのに……こいつは、まっ
たく。

「飯田愛実さん？ そんなくだらないことを言う前に、言わなきゃ
ならないことがあるんじゃないやありませんか……？」

「……は、はう……き、教科書は、忘れてしまいました……テスト
勉強をする自覚が足りませんでしたあ……ご、ごめんなさいい……」

「はい、よくできました。悪いことをしたらまず謝らなければいけ
ませんね？ ……許しませんけど」

「はい、これからは気をつけ……！？ あれ！？ 許されてない！
？ 謝ったのに！」

実際はそんなに怒ってはない、てか、怒るのも面倒くさいから、別にいいんだけど、まあ、こういう風に言っとけばより一層勉強に励むかなと思ったので、とりあえず許さないでおく。

「さて、とりあえずそれは置いといて、時間がもったいないから勉強始めるぞ。教科書は俺のを貸すから」

「ええ！ 置いとかないでえ！ 瞬君に嫌われたままなら勉強すまないよお……」

ぬ、逆効果……てか、何気に他人が聞いたら勘違いされそうなのを言う奴だ……。どんだけ懷かれてんのだ俺は……。

「わかったわかった。とりあえず真面目に勉強するなら許す」
「はい！！」

飯田は、今まで見たこと無いような真剣な顔で、勉強に取り組みだした。

……出来んなら普段からやれよ

学校での勉強も昼休みの短い時間だけなら、飯田も集中して行っていた。

……問題は、これから飯田の家での勉強会か……。

帰ってきてから、飯田の家に向かう準備をしながら、軽くため息がでてしまった。

と、そこに夜羽が近寄ってきた。

「シュン」

「お？ なした？ これから高嶺の家に遊びに行くんだろ？」
「ん、行く」

「とりあえず高嶺と高嶺のお母さんによろしく言っといてくれ。テスト勉強に修学旅行で、しばらく行けなさそうだけど、修学旅行でお土産は買ってくるってさ」

「ん、わかった。……シュンは、これからマナミの家に行く？」
「ああ……多少面倒くさいが、まあ、仕方ないなあ……」

俺がそう、苦笑いしながらボヤいていると、夜羽はなにかを言いたそうに俺を見ていた。

「ん、どうした？」

そう尋ねると、夜羽はゆっくりと俺に近づき、

「……………」
「ん……？ ——っ！！！！？」

いきなり俺に抱きついてきた。

「な、ななよ、夜羽、さん……？」

な、何だ！？ 何がどうしてこうなっている……！？

てかまた誰かの入れ知恵か！？

そんな俺の混乱をよそに、夜羽はそのまま口を開いた。

「……シュン……はやく……帰ってきてね……」

「あ……ああ、わかったよ。で、出来るだけ早く帰る」

「……ん」

俺の言葉を聞いた夜羽は、すぐに俺が離れ、駆け足で家を出ていった。

「……………」

夜羽……何かあったのか……？

最近はずっと変わった様子の無かっただけに、少し心配になる。

これから飯田の家に行かなきゃならないんだが……とりあえず、
俺の動悸と顔の赤さが収まってからだな……。

勉強と突然の困惑の話。（後書き）

ふむ、修学旅行編に入るまでの軽い話にするつもりだったのに、少々長くなりそうな予感……。

それはさておき、気がつけばもう九十話……。記念すべき百話が近づいています。

ここは何かやつとくべきでしょう！
さて、何をやるか……。やはり一度やってみたかった『人気投票』にしてみましたか。

と、言うことで人気投票をやってみることにしました！
それで、人気投票で、一位のキャラメインのお話を一つ投稿したいなと思います！

誰も読んでねえよ。とか、読んでてもそんなこと出来るほど人気じゃねえよ。とかの意見はとりあえず横に置いて……。

お暇な方！ 活動報告にも書いておきますので、感想でも活動報告でもメッセージでも、好きな場所に投票お願いします！！

期限はそうですね……九十五話目が投稿されるまで、にしておきますね。

あ、瞬や夜羽みたいに、頻繁にメインをはるキャラの場合は、リクエストがあった方がやりやすいかもしれないですね。

それでは、投票お待ちします!!
もちろん、普通に感想とかご指摘とかだけでもお待ちしております
よ!

混乱彼女と飼い主家での話。（前書き）

夜羽サイドで。

多分少しの間は、夜羽サイドと瞬サイド、交互に更新すると思います。

あ、視点は誰になるかはまだわかりませんが。

混乱彼女と飼い主家での話。

最初は、ただ、シュンと話してただけ。

ワタシがホタルの家に行く話。

マナミはクライじゃない。

シュンもそう。

でもシュンとマナミが一緒にいるのはなんかイヤ。

その理由がわからなくて、相談するのに、ホタルの家に行く。

でもその間も、シュンはテストベンキョーでマナミと一緒に。

……そう考えるとやっぱりなんかイヤだった。

だから早めに帰ってきてほしい。

そう言おうと思った。

でも、顔を見てそう言おうとしたら、よくわからないけど、急に恥ずかしくなった。

ワタシはどうしたらいいか考えて、思いつく。

——顔を見なくていい場所まで行けばいい。

だからワタシは、シュンに近づいて……ぶつかった。

上からシュンの焦ったような声が聞こえるけど、これなら顔を見なくても、言いたいことを言える。

「……シュン……はやく……帰ってきてね……」

「あ……ああ、わかったよ。で、出来るだけ早く帰る」

シュンは早く帰ってきてくれるって言った。
よかった。

……でも、なんだろう。

恥ずかしくないように、顔を見ないように、今こうしてるのに、
今度は急に今こうしてるのが、恥ずかしくなってきた。

むう……どうしよ、う。

「……ん」

色々悩んで、やっぱりシュンの顔を見るのが恥ずかしくなって、
顔を見られないように家を出た。

……帰ってきてからはちゃんと話せるようになってるといい。

「あ、きたきた夜羽ちゃん！ 待ってたよ」
「ワンッ！」

ホテルの家まで行くと、すぐにホテルとシアンが迎えに来てくれた。

「今日はどうしたの？」

部屋に向かいながら、ホテルはワタシたちの周りをくるくる回っているシアンを気にせず、聞いてきた。

「ん、相談」

「相談？ ……それって……」

「ん？」

「……あはは、なんでもない！ でも夜羽ちゃん時々私に相談しに来るけど、私、そんなにいいアドバイスあげられてるかな？」

何かを聞いたそうにしてたけど、すぐに言うのを止めてしまった。
………ん、聞かないのは、聞かなくてもいい事だから？

ワタシはとりあえず、置いておくことにした。

「ん、何回も助けられた」

「ほんとに？ よかった！ ……それで？ 今度はどんなこと？」

「ん、実は——」

ワタシが聞きたい事を聞き終わると、ホタルは固まっていた。

「む？ ホタル？」

「あ、ご、ごめん。予想してたのと違って……しかも結構直球なものと聞いてきたから驚いちゃったよ。……それに、ちよつと複雑な気持ちかも。夜羽ちゃんは強敵過ぎる……」

最後の方はなんていったかわからなかったけど、最初は聞こえた。

「チョッキユウ？」

「うん、夜羽ちゃん。それって多分……その……やきもちだと思う」

「ヤキモチ……？ それってどういう意味？」

「え！？ ど、どういう……な、なんて言ったらいいんだろ……？」

ホタルが頭を抱えてると、近くから別な声が聞こえてきた。

「うまく答えられないなら言わなきゃいいのに」

「お母さん！」「ん、ホタルの母」

「夜羽ちゃん、さっきの質問だけど、それは帰ってから彼に直接聞いてみるべきね。そして今度どういう反応したかを私たちに教えるべきね」

「？ シュンに直接聞けばいいの？ わかった」
そのあとにホタルたちにシュンの事を教えればいい。

ただ、ホタルはちょっと複雑そうな顔をしていた。

混乱彼女と飼い主家での話。(後書き)

感想お待ちしてます!!

人気投票もまだまだ受付中です!!

番外の話——クリスマスの話 1 (前書き)

季節物のクリスマス版です！

本編お待ちの方いらっしゃいましたら、申し訳ありません……。

番外の話。——クリスマスの話。 1

世間一般的にクリスマスイブの日。

大体の学生は冬休みと言う行事が始まる直前日、つまり終業式だ。

そしてそれはこの学校でも同じではあるが、やはりこの変わった学校。

終業式直後のホームルームで、何か来た。

「はっはっは！！ 我が名は黒サンタ！ またの名をサタン・クロス様だ！！ これから、苦^{こと}しみの理^{ことわり}、すなわち『苦理』を済ます、貴様らに望まぬ魔のプレゼントをくれてやろう！」

黒いサンタコスチュームを纏ったのは、他でもない校長。

そして『魔のプレゼント』と称して渡されるのは、冬休みの宿題量は夏休み時の二割増しだ。

何でもこれは、この学校の創立者がやり始めて、その後代々、この学校の校長になった人は、毎年やっているらしい。

……………いい加減にしろよ、この学校……………そして創立者……………。

ちなみに隣にはグラサンをかけたトナカイのコスプレをした教頭もいる。

もう意味がわからない。

……とりあえず、視線を逸らし、窓の外を見て、このホームルームが終わるのを待とう。
教室内に響き渡る東城さんのツッコミの嵐が終わるのを……待とう。

……気がつけば、もう放課後だった。
どうも寝てたっばいな。

さて、東城さんは……。

……。

ぜえぜえ言いながら机に突っ伏してた。

——……お疲れ様です。

俺が心の中で東城さんに労いの言葉をかけていると、藤森がニヤニヤ顔でやってきた。

「帰ってくれ」

「いきなりなんだ!？」

「いや、なんとなく。お前の顔が、おかえり願いたくなるような顔で」

「それは喧嘩を売ってるとっていいのか？」

「どうでもいいから、何か用があるなら言えばいい」

終業式も終わったし、俺はさっさと帰りたいんだ。

そして今日で宿題を終わらせたいんだ。

「神尾が普通の学生にあるまじき行為をしようとしているのは置いといて……よくぞ聞いてくれた！」

「宿題をするのが何故あるまじき行為なんだ……てか思考を読むな。そして話を聞きたい訳じゃない。お前が話したいだけだろ」

俺の反論を聞こうともせず、藤森は勢いよく話し始めた。

「実はな、神尾！俺は今日から年明けまで……ワイハーで過ごすのだ！今日帰ってからその足で空港さ。はっはっは！羨ましいだろう、そうだろう」

「……藤森、羨ましがられたとか、自慢がしたいとかなら相手を間違えすぎだろ。俺の感想を言わせてもらうなら『海外とか面倒くさそう』の一点のみだぞ」

「……ぬ、い、言われてみれば」

「……それと、余計なお世話かもしれないが……『ワイハー』なんて今誰も言わないぞ。死語とかそういうレベルじゃないだろ」

「そ、それはほっとけよ！」

「……………そうだな、すまん」
「謝るな！」

藤森の会話に付き合っていると、なにやら機嫌がよさそう

な飯田と、いまだお疲れの様子の東城さんも寄ってきた。

「しゅっんくーんっ！」

「帰ってくれ」

「いきなりどうして！」

「呼び方が不服だった」

「ひどっ！ ま、まあ、そ、それはそうと、瞬君。今日の夜はお暇ですか？」

……随分とまた何の脈略も無い話だな。

「何で……？」

「うん！ 実はね？ 今日の夜ゆりかちゃん家でクリスマスパーティーやるの。だから瞬君と夜羽ちゃんも一緒にどうかなって」

俺が答える前に藤森がのってきた。

「おおっ！！ いーね、それ！ ゆっぴーの家でクリスマスパーティー！！ しかもやつと神尾家の同居人に会えるのか！！」

が、飯田がそれを止めた。

「え？ さっき聞こえたけど藤森君、今日帰ったらハワイなんだよね？ それじゃあ来れないよ」

「あ」

……藤森が固まった。

忘れてたのかよ。

ま、これで藤森が来ないことは確定か。さっきまで自慢してたことだしな。

とりあえず藤森は放って、気になる事を聞いてしまおう。

「俺のイメージだと、東城さんはそういうイベントは家族と過ごしてると思ってたんだが」

俺の言葉を聞き、東城さんが疲れた表情のまま口を開いた。

「……毎年そうしてましたけど、今年は両親共にお仕事で海外ですの。ですから今年は使用人たちとわたくしだけ。だったらお友達を招いて豪華にやろうと思っただけですの」

「そうか……。それはそうと、東城さん、疲れすぎじゃない？ 大丈夫か？」

「学校側の非常識度合いが酷すぎたからですの！ というか、どうしてツツコミを入れるのがわたくしだけでしたの！？ 他には誰もつつこまなかったんですの！？ 唯一、共に学校側と戦ってくれそうな神尾くんは寝てましたし！」

俺の言葉でまたツツコミを入れてきたゆっぴー。

しかも、ちよつとツツコミをサボって寝てた俺にも怒ってるっぽい。

てか、学校側のおかしさと、それをあつさり受け入れてるこの学校の生徒に関してはもう、今更としか言いようが無いが。

「それはさておき、どれぐらいの規模でやるんだ？」

軽く話を逸らすために話題を変える。

実際、気になる事でもある。

東城さんの家は確か、かなりの豪邸だったはず……。だとしたら呼ぶ人数も多くなりそうな。

なら、夜羽を連れてきたくはない。

……まだ、大量の人間には慣れてなさそうだし。

「さておくかどうかは、また別の話ですけど、どれくらいの人を呼ぶかは神尾くんしだいですの」

……………話、逸らせてくれなかった。

「で、俺しだいって？」

東城さんは俺にだけ聞こえるような声で、

「もしあなたが来られるのであれば、夜羽さんが知ってるメンバーしか呼びしませんの。そのほうがよさそうですし。来るのが面倒でしたら、神尾くん以外のクラス全員ぐらいは呼びしますのよ」
と言ってきた。

さすが東城さん、か。

夜羽の事も俺の事も、よくわかってらっしゃる。

しかし、そういうことなら……………どうすっかな。

番外の話 ―― クリスマスの話 1 （後書き）

変な学校、ひゃっほう。

はい。今回、終業式の話をやってしまいましたので、本編の冬休み編は、いきなり冬休み最中から始まる予定です。

次の更新は、ハロウィン同様、二パターン投稿予定です。

と、言う事で、九十五話は意外とあっという間かもしれませんよ…
…？

人気投票まだまだお待ちしてます!!

この話の続きは明日で（時間は未定）。

番外の話。——クリスマスの話。2 - A (前書き)

遅くなりました！

番外の話 ―― クリスマスの話 2 - A

「……夜羽の知り合いつて事は、もしかして矢島さんとかもか？」
ふと思いついた事を聞いてみる。

すると、あつさりといった感じで東城さんが返してきた。

「ええ。ただ動物病院で夜羽さんとしつかりとした面識があるのは矢島獣医と春川看護師さんだけらしいので、呼ぶとしたらあの方たちだけです。他の看護師の方々はあまり夜羽さんと会話できてないようですので、矢島獣医と春川看護師を休ませるシフトをこちらで組ませていただきましたの。ほかに獣医もいらっしやらないようでしたので、それもこちらでご用意いたしますし。あ、後は高嶺さんもお呼びする予定ですよ」

「……おかしいな。動物病院のほうはまあ、百歩譲っていいでしょう。顔見知りでもあるから、休んでくれと頼んだ、とかそういう感じに違いない。」

「……シフトを組んだと聞こえたけど、気のせいだ。」

さて、それにしても、高嶺はおかしくね？ 東城さん、面識は絶対無いと思うんだ。

「あのさ、東城さん……」
「何ですか？」

いい笑顔で返事をしてくる東城さん。

……聞かなくてもわかるか……。

「いや、なんでもないや」

「そうですの？ では、どうされますの？」

「ならまあ、夜羽に確認してからだけど、多分行くわ。つつても、急な話だからプレゼントとか何も無いけどな」

「かまいませんの。そこは皆さん同じですし。要はクリスマスを皆で楽しみましょう……ただけですの」

……東城さんも意外とこの学校向きの性格してるんだけど……そんな事言ったらめちゃくちゃ怒られるんだろうな。

とりあえず家に帰り、夜羽に軽く今日のパーティの事や、クリスマスの事を説明した後、適当に準備をして外に出る。

クリスマスに関しては、とりあえず『メリークリスマス』って言えば問題ないと言っておいた。

で、家から出た瞬間に、漫画でしか見たこと無いような高級車が目の前に止まった。

「うわ……」「……」

俺と夜羽がポカンとしてしまったのは無理も無いはず。

そしてまず、でかい門を、次に門から家までの結構ある距離を通

り、もう説明するのも面倒なくらいに豪華な屋敷にたどり着いた。

そのまま案内された部屋は、やはりというべきか、夜羽の知り合いだけ集めたなら、広すぎる部屋だった。

「メリークリスマスですの。お二方とも、いらっしやいですの」

「ああ、どうもメリークリスマス。お招きいただき」「ん、ユリカおじゃまします……と、め、メリー、クリスマス……？」

さつき教えたばかりだから、言い慣れてないようだ。

東城さんもそれがわかったのか、気にせず話を続ける。

「どうですか？ 家にある部屋で、出来るだけ狭い部屋を選んだつもりでしたけど」

「……うん、そんなところかと思ってた」

やっぱり、この部屋を狭いと言い切っちゃうんだな。

「しかし……すごい格好だな」

「ん、ユリカキラキラして、綺麗」

東城さんの格好は本当に本物のパーティとかに着てくるようなドレスだ。

正直、他の来客の服装を考えると、かなり浮いてる。

「ふふっ、ありがとうございますの、夜羽さん。……それはそうと、神尾くん？ わたくしの格好に対してのご感想は？ ふふふ」

東城さんが夜羽に礼を言った後、にやにやしなから俺にも尋ねて

きた。

それに俺は素直に、

「ああ、よく似合ってる。すごく綺麗だと思うよ」
と言った。

ほんと、こんだけ豪華な服を着ても、違和感がないどころか、似合ってる。

さすがお嬢様。

まあ、どっちかって言うと、ファンタジーとかでよく見る、貴族のお嬢様……いや、どこぞのお姫様って感じだ。

しかし、感想を言ったにも関わらず、東城さんは無反応だった。

「？ 東城さん？」

「……………」

「おーい、東城さーん」

「……………」

「ん、ユリカ？」

夜羽も心配して声をかけるが、

「……………」

変わらず惚けたまま。

「ゆっぴー……………」

「……………」

……………よくわからないけど、とりあえず放っておこうか。

「んじゃ、東城さん。とりあえず、一通り夜羽と挨拶してくるよ」

そう言い残して、俺と夜羽は他の人のところに向かう。

夜羽は少し心配そうだったが。

少し離れてから、チラッと後ろを見てみると、一応復活しているようだったが、何やら、わたわたしていた。

……まだ放っておこうかな？

「あ、矢島さん、と……春川さん……？」

「ん、イチロウとシズカ」

「ああ、神尾君、夜羽ちゃん」

「こんばんは。……それで神尾君はどうして私がすぐわからなかったの？」

矢島さんと春川さんを見つめ、挨拶をする。

春川さんをすぐにわからなかったのは……いや、仕方ないと思う。いつも同じ格好しか見てなかったし、何より東城さんほどではなかったけど、きちんとドレスを着てきたわけで。

「あー……すみません、いつもと違うんで」

「ふーん、そう……。ま、当然ね？ 最近私は影が薄かったし」

「え？ いや、そんなことは」

「あら？ でも最近神尾君も夜羽ちゃんも、新しいお友達で今回

のパーティを開いてくれたゆりちゃんも、みんな矢島先生とばかり話したりしてるじゃない。しかも、何かコソコソ内緒話。夏休みまでは私とも結構話してくれたのに、今では仲間はずれね」

「あー……はははー……」

春川さんの鋭い指摘に苦笑いをしてしまう。

矢島さんも視線を逸らしてる。

夜羽は……ん？　なんか思案顔だ……どうかしたのか？

つと、とにかく誤魔化さなければ。

「春川さん影が薄いとは思ってませんよ。話しかける機会が少なかつたのは謝りますけど」

「でも、今だって私の事がわからなかったでしょ？」

「いや、単に見惚れてただけですよ」

「え？　あ、ありがとう……って私、何簡単に誤魔化されてるの……」

いや、事実でもあるから誤魔化しだけでも無いんですけど。

とか思っていると、矢島さんがなんとも言いがたい微妙な目線を送ってきた。

——相変わらずだね……とか言ってる気がする。

俺は矢島さんにその目線の意味を聞いたさうとすると、夜羽がずっと考えていただろう事を口にした。

「ね、クウキは来てないの？」

『……空気？』

って……あ。

「いたな、そういえば」「ああ、彼は……どうだったかな？」「と
いうか、シフトに彼の名前入ってたかしら……？」

全員あの存在を忘れてた。

多分この様子だと、東城さんも忘れてて、呼んでも無いし、シフトにも名前が入って無いんだなあ。

まあ、いいんじゃないかな？ 面倒くさいし。

てか、よく覚えてたな。夜羽……。

矢島さんたちと離れ、次の人物の下に。

「お、飯田に高嶺」「ん、マナミとホタル」

「あ！ 瞬君！ 夜羽ちゃん！ メリークリスマス！」「神尾さん、
夜羽ちゃん。こんばんわ。メリークリスマス」

「ん、メリー、クリスマス」

「はいはいはい、メリクリメリクリ」

「「雑っ！」」

二人同時に突っ込まれた。

挨拶の後、二人の格好を見る。

飯田は、よそ行きといった感じの清楚なワンピース……だいぶ印象が変わるな。

そして高嶺は、制服だった。

「つて、何で制服？」

「あ、学校から帰るのちょっと遅くなっちゃって、帰ってる途中で車に乗せられて」

……………拉致じゃん。

「だ、大丈夫なのか？」

「あ、事情を聞かされた後、お母さんにはちゃんと連絡入れましたので。『楽しんできなさい』だそうです」
相変わらずすごい人だな。

「ね、瞬君。私の格好は、どうかな？」

「アアニアッテルニアッテル」

「ひどっ！ちゃんと感想言ってよお！」

そう言われて、とりあえず思った事を言おうとしたら、
「ん、マナミっぽくないけど、似合ってる」

夜羽に先に言われてしまった。

「ありが……え、私っぽくないのかなあ？ やっぱり」

「いや、似合ってるって言ったる、夜羽。ちなみに俺も同じ感想。いつもの飯田のイメージとは違うけど、なんか清楚な感じも似合ってるいいと思うぞ」

「……にゅっ！？ えええ！？」

……何かテンパリだした。

「いいなあ……ふう、私運悪いな。ちゃんとした格好してれば私も……」

？ 高嶺も何を呟いてるんだか。

「む、ホタル。その格好もいいと思う」

「ああ、俺も制服姿は新鮮でいいと思うが」

「みやつ！？ いきなり何ですか、夜羽ちゃん！ 神尾さん！ ビツクリするじゃないですか！」

「すまん、いや、何か呟いてたから」「ん」

「き、聞いてたんですか……」

どうやら聞かれたくなかった類の独り言だったようだ。

高嶺は顔が真っ赤だった。

なんとなく、そつとしておいたほうがよさそうな気がしたので、テンパってる飯田と、顔を真っ赤にしたたらずんでる高嶺を置いて、夜羽と静かにその場を離れる。

これで、一応全員と話し終わったかと思っていたが、俺の目にとんでもないものが飛び込んできた。

「ん、タツハ」

「そ、そのようだな」

志戸塚って……レアすぎるだろ。
通常のこいつは来ないだろうし……何があった！

とりあえず挨拶に以降と一歩近づくが、

「……………」

すぐに激しく疲れたような目線を送ってきた。

……………そうか、そんなことが。お前も拉致パターンか…………。

視線で今に至るまでの経緯を聞いて、他人事なのにちよつと泣きそうになってしまった。

志戸塚のところに行こうとする夜羽を止め、その場を離れる。
夜羽……不思議そうな顔してないで、今は言う事聞いてくれ。

志戸塚から少し離れたところで夜羽が口を開いた。

「む、シュン。タツハに挨拶しない？」

そうだな、言いたい事はわかる。

だが、

「夜羽……今はそつとしいてやれ」

——……少しだけでも、休ませてやろう。

意味のわかってない夜羽はキョトンとしていたけど。

と、ここで、完全復活した東城さんがどこからマイクを取り出し、話し始めた。

「皆様、メリークリスマスですよ！」

『メリークリスマスー!!』

さすがにみんなノリがいい。

「今日はお集まりいただきありがとうございます。今日は楽しんでいてください。……それでは、僭越ながらわたくしが……かんぱーい！」

『かんぱーい!!』

おお、結構人数少ないのに、意外と盛り上がるな。

乾杯の後は、みんな楽しそうに談笑をはじめた。

しばらく夜羽と一緒に、観察していると、飯田が何気にテンションが高いことと、何故か東城さんがボケにまわってることがわかった。

ツツコミいなくなった……？

……あ、飯田が志戸塚巻き込んだ。

あーあーあー、この中で志戸塚だけは、知らない人が多いのに。

……東城さんに自己紹介させられてる……人見知りなのにかわいそう……。

結局、志戸塚がテンションの低いまま、ツツコミにまわってる……。ま、まあ、藤森がいなくてまだマシなんだろう……。

そんなことを考えてると、

「ふふふっ」

珍しく夜羽が声を出して笑っていた。

「夜羽……？」

「ん、シュン」
「どうした？」

夜羽は俺の方を向き、笑顔で言った。

「みんなとクリスマス。楽しい」

「……ああ、そうだな」

「ん、ワタシたちも行く」
「……それは少し面倒くさいがな」

歩きながら、手元にあったサンタ帽子を夜羽にそっとかぶせる。

夜羽は気づかなかったのか、そのまま集団に向かっている。

そして混沌と化している集団に現れた夜羽サンタが言った一言は、
「メリークリスマス！」

番外の話 ―― クリスマスの話 2 - A (後書き)

か、かなり長くなってしまいました。
少しずつ訂正していきます。

Bパターンもありますので、そちらもよろしくお願いします！
感想お待ちしてます！

番外の話——クリスマスの話 2・B（前書き）

同時投稿予定ですので、Aのほうもよろしく願います！

番外の話 ―― クリスマスの話 2 - B

ふむ……。

「いや、やめとく」

「えっ！？ えー、瞬君来ないの？」

「理由をお伺いしてもよろしいのですの？」

飯田が戸惑い、東城さんがジト目で見ながら聞いてくる。

……いや、東城さん？ 俺が来ない可能性も視野に入れてたんだろー？

「理由は……じゃあ黙秘で」

「ええ！？ 答えないの！？」

「……単に面倒くさいからじゃありませんの？」

それもあるが……。

「……別に、今日中に宿題を終わらせたいとか、冷蔵庫の中の物を片づけるとか、色々あるから」

「えー……」

「納得はできませんの」

「とにかく、行かないわ。んじゃ、先帰るな。よいお年を」

「あつ、ちよつとー」「よいお年を……って、神尾くん、今年中にわたくしたちと会わない予定で話してませんの!？」

何も聞こえません。買い物か俺を待っていますので。

さて、うまいこと二人を巻くことができた。

というか、俺が先に帰った後、なんか藤森が、追いかけようとする二人に話しかけて、とどまらせてた。

何を言っで、二人を止めたのかは知らんが、珍しく役に立ったな、藤森よ。

よし、買い物はある程度済んだな。
大物は昨日のうちに買っであるし。

……買ったはいいけど、二人で食いきれるか……？ ……多分大丈夫かな。

あー、色々買い物してたらだいぶ遅くなったな。
夜羽には遅くなるって言っであるから良いけど。

「さて、買い忘れは無いかな……………ある……………」

ヤバい、一番重要なのを買い忘れてた。

まずいな、ここからだと店までだいぶ離れてるし、そもそもまだあるんだろうか……………？

「…………ふう、悩んでも仕方ないか。急いで買いに「こんばんは」おわっ！？」

とりあえず買い忘れを走って買いに行こうとしたら、妙に間延びした声に遮られた。

「あ、アイス屋の店員さん？」

「はいー、どうですか？ アイスお一つー」

こ、この寒い中勧めてきますか……………。

「い、いえ、結構です……………」

「ですよー。皆さんそうですー。ふむー、そろそろアイス以外の商品も出さなきゃまずいですねー？」

この時期にアイスだけ売り続けてたのがおかしい……………てか、アイス以外ってことは、アイスはまだ売るんですか。

「こたわりですのー」

「そうですか……………ああ、また何か心読まれた。俺の周り読心属性が高すぎる……………」

「他の皆さんは表情で読んでいるだけですよー？」

「……………あなたは？」

「ふふふふふー……………」

「怖っ！」

つと、店員さんとしゃれあつてゐる場合じゃない。
急がないと。

「あ、すみません、俺ちよつと急いでますので」

「わかつていて止めているのですー。あなたが向かつてゐる場所には、
すでに目的のものはありませんー。ちなみに他のお店でも同じでし
ようねー」

……色々突っ込まなければいけないのはわかつていたが、与えら
れた情報にその氣力を奪われた。

「そう、ですか……………ありがとうございました……………」

「こちららー、だめですよー。教えてあげたんですから、協力プ
リズですー」

「そうですね……………」

最悪この際アイスでも夜羽はよろこぶだろうしな……………。

「ふむー、あなたに協力してほしいのは、アイスと並ぶ新商品の販
売についての意見ですー」

「はあ」

「ですから、新商品のこれ、買ってくださいー。そして今度、味の感想を聞かせてくださいー」

「……………え？」

そう言われ、俺は店員さんに箱を一つ押し売りされた。

「ただいま」

「ん、シュン。おかえり。遅かった」

「ああ、悪い。買い物が長引いてな。今から飯作るから」
「ん、大丈夫」

軽く夜羽の頭を撫でつつ、ばたばたとキッチンに向かう。

冷蔵庫のものを取り出し、早々に準備をはじめ…………。

「出来たぞ」

「ん……………む、シュン……………なんか豪華」

夜羽が気づいたとおり、テーブルにはかなりの品数の料理を並べていた。

「ああ、クリスマスだからな」

「……？ クリスマスって？」

「んー、まあ細かい説明は面倒だから省く。まあ、前にやったハロウィンみたいなもんだ」

「む、お菓子もらえるの？」

「いや、そこじゃない。……とにかく特別な日って覚えとけ。合言葉は『メリークリスマス』だな」

「メリー、クリスマス」

説明も何もしてないからキョトンとしてるけど、概要なんてのは今知らなくても別にいいだろ。

「んじゃ、改めて……メリークリスマス」

「ん、メリークリスマス」

そしてちよつとしたパーティーの始まり。

「む、シュン……これは、大きいから揚げ？」

「いや、ローストチキン。から揚げとは味が違うけど、これはこれでうまいぞ？」

「む！ シュン！ ケーキもある！」

「ああ、クリスマスにはケーキは付きもんだ。手に入らないかと思つてたら、予想外に入手できた。多分……いや、絶対うまいぞ、これ」

東城さんたちのお誘いを断ったのは、面倒だったのも、単に前日に買った食材を無駄にしたくなかったのも、色々理由はあるけど、一番の理由は違う。

夜羽が俺に笑いかける。

「ん、シユン。クリスマス楽しい」

俺が誘いを断った理由は――クリスマスを『家族』と過ごしたかったんだ……。

「そうか、そりゃ良かった」

俺はそう言って、夜羽の頭に帽子をかぶせる。赤い、サンタ帽子を。

夜羽は不思議そうにしているが、特に何も言ってこなかった。

夏休みにやって来た、カラスと言うサンタは、俺の元に、夜羽と言う家族をプレゼントしてくれた。

番外の話 ―― クリスマスの話 2 - B (後書き)

Aに比べれば少々短め。

何にせよ、夜羽が楽しんでくれることには変わりないお話でした！
ちなみに藤森が飯田さんと東城さんに言った事は「同居人と二人つきりで過ごしたいんじゃない？」という、意外と正解を言っていました。

感想お待ちしてます！

そして人気投票締め切りまで後一話です！

少女の家での話 (前書き)

九十五話目です!!

少女の家での話。

「む……ここか」

家で起こった、顔の赤みと動悸を押さえ、教えられた住所にやってきた。

「……しかし、マジで家から動物病院の間にあるな……」

前に、俺が矢島さんに会いに行くとき、近くの道を通ったら、必ずと言って良いほど飯田が出現したのも頷ける。

——しかしほんと、わざわざ俺が通るのが見えたからって出てこなくてもいいのに……。

とにかくインターホンを押す。

ピンポーン。

すると、ドタバタと聞こえる物音とともに、

「は、はははい！ どちら様ですか！？」

と、ドア越しに言ってきた。

いや、直接声をかけてくるなら、このインターホンの意味ないんじゃない。

……とりあえず、

「……すみません、お届けものでーす」

声色を変えてそう言ってみた。

——いや、確実に飯田は俺が来たと思ってるっぽかったから、暇つぶしに。

その俺の言葉に、飯田は少々テンションが下がった様子で答えた。

「あ……はい……今開けますー」

……ガチャツ。

「はい、勉強の時間のお届けでーす」

「はやっ！？ え！？ うええ！？ し、ししし瞬君！？ あれ！配達屋さんは！？」

「俺が声色変えただけ。てか、『お届けもの』とか言われて、顔とかも確認しないでドア開けるのやめた方がいいぞ。世の中物騒だしな」

「へ？ あ、はい……ごめんなさい……て、あれ？ い、今、心配された？ 私」

何か妙なことに頭を悩ませ始めた飯田を遮るように言う。

「とにかく中に入れてくれ。时期的にももうそろそろ寒くなる時期だ」

「あ……うん……ど、どうぞ」

飯田は何やら少し顔を赤くしながら、俺を家に招き入れた。

俺は案内されるまま、飯田の部屋の前に。

そこで、飯田が俺に言ってきた。

「しゅ、瞬君……！ あ、部屋、あんまりじろじろ見ないでね……」

……？ 恥ずかしいから」

「いや、物珍しいから確実にじろじろ見る。っていうか、何で恥ずかしい？」

「そ、そんなの………瞬君、もしかして、まだ気づいてない……？ 自分が何してるか」

「何って？」

……俺、なんかしたか？

とりあえず、一から考え………あ、確かにやらかしてるな。

つい前もこんな事あったな。東城さんのときに。

何も考えずに言った事が、実行されてから、やらかした事に気づく。

「……………すまん。気が回らなかった」

そうだった、飯田は結構人気の女子なんだったな。最近周りの視線が減ってたから忘れてた。——何で減ったんだろ……？ まあ、

それはいい。

で、その人気な女子の家に俺は軽々しく入り込んだわけだ。しかも普通に部屋に入ろうとして、あまつさえ『じろじろ見る』発言。

ああ、こりやまずい。

「やつと、気づいてくれたんだね……」

「なんだったら、今から別な場所に行くか？ 図書館でも」

「え！？ ううん！ 大丈夫だよ、ちょっと恥ずかしかったただけだから！ ただ勉強するだけだし」

「恥ずかしいなら、別に居間とかでもいいぞ……いや、そう……だな。部屋を見る余裕も、恥ずかしさを気にする余裕もないくらいにもう勉強すれば問題ないな」

「……え？ しゅ、瞬君……？ そ、それはちよつと……」

「よし、じゃあ早速部屋に入って始めようじゃないか」

俺は飯田の首根っこを掴み、部屋に入る。

飯田の部屋が、動物のぬいぐるみなどがだいぶあり、結構女の子っぽい、かわいらしい部屋だった……… ような気がしたが、自分で言っただけ、完全に視点を勉強に向けていたため、あんまり覚えていない。

「さて、今日はこのくらいにしておくか」

「……………」

部屋の机に突っ伏したまま動かない飯田に言う。
若干、魂が抜けそうだな。

「んじゃ、俺は帰るぞ」

「……え？ もう……行っちゃうの……？ 勉強……見てくれたお礼に、お茶くらい出すよ……？」

飯田が弱弱しくそう言ったが、

「悪いな。ありがたいが、早く帰ってこいとの命令だ」

俺は苦笑いでそう断った。

「………そっか、夜羽ちゃん……いいなあ………」

飯田がボソッと何かを言った気がしたが、疲れているのは知っているので、気にしない事にした。

「それじゃあ、ゆっくり休んでくれ。明日からも頑張ってもらうぞー。教科書は、忘れんなよ？」

「あ、うん。明日からもよろしくね？ 瞬君」

「おお」

飯田家を出た俺は、晩御飯の献立を考えながら、家に向かって歩き出す。

少女の家での話（後書き）

勉強風景を書ける自身はありませんでした……。

感想お待ちしております！！

それと、人気投票の方は締め切りとなります。

投票してくださった方々！ ありがとうございます！！ 大変感謝しております！！

百話のほうは、頑張って書きたいと思いますので、応援よろしく願います！！

飼い主家母の考えの話。(前書き)

遅めですが、明けましておめでとつございます。
今年も宜しくお願いいたします。

飼い主家母の考えの話。

夜羽ちゃんの相談を聞き、何ともいえない表情をしている我が娘は置いていて、私は話を進める。

「それで夜羽ちゃん。今日は彼はどうしたの？ 電話で誘ったけど断られちゃったわ」

避けられてるようで納得いかないわあ。

「む、シュン？ シュンは……マナミの家でテストベンキョウ」
「テスト？ また微妙な時期にテストがあるのね」

普通はもう少し先だったと思ったけど……まさか……嘘ついたのかしら？

そう思っていると、複雑そうな顔をしていた蛸がパツと表情を変えて、答えをだした。

「え？ あ！ それってもしかして噂の修学前テスト！？ うわあ、やっぱりみんな真剣に取り組むんだあ……私も早くいきたいな……」
……ああ、そういう彼の行ってるのは、あの学校だったわね。
確かにあったわ、そういう行事も。

………この子、どうしてあんな学校に憧れてるのかしら……行きたいと望んで勉強頑張るなら、応援はしてあげるけど……先が不安だわ……。

「と、とにかく、夕方くらいにはいるわよね？ 少し話したいこと

があるから」

「ん、シュンに今日は早く帰ってきてって言ったら、早く帰ってくるって言うてくれたから、いる」

「そ、そう……」

な、なんか、新婚さんの会話を聞いてるみたいだわ。

その後、蛍と夜羽ちゃんさ他愛もないような会話をして過ごしていた。

時折蛍が、何かを聞こうか悩んではやめているのも見えた。

まったく、決断力も判断力も行動力もあるくせに、いざ物事を目の前にしたり、本番になると弱いんだから。

「そ、それじゃあ、またね。夜羽ちゃん」

「ん、ホタル、また。……シアンも」

「ワンツ！」

結局、何も聞けなかったのね、あの子。

まあ、元々夜羽ちゃんには直接確認しないで、神尾君に話を聞くってことになってたからいいのだけど。

そう思っていたら、フラフラと涙目で螢が歩いてきた。

「おかあーさあん……やつぱり夜羽ちゃんに直接聞けなかったよお……」

「いや、あなた。元々直接聞かないって話だったの忘れたの？」

「ふへ？ あ、そうだった。……よかったあ、無理して聞かなくて……」

ふう……この子は全く……。

「とりあえずそのことは私に任せておきなさいな」
「う、ん……わかった」

……ん、もうそろそろ頃合いかしらね。
これ以上遅くなっても迷惑だろうし。

少し時間をおいた後、私はゆっくりと電話をとった。

ルルルルルルッ！ ガチャッ！

『あ、はい、もしもし』

「もしもし、高嶺ですけど、神尾君ね？　今大丈夫？」

『あー、そうですね。大丈夫です』

「なんか大丈夫そうには聞こえないんだけど……」

『いえ、料理中ではありますが、後は煮えるのは待つだけですから。あ、夜羽、皿出しといってくれ。……すみませんね、立て込んで』

神尾君……もう完全に主夫ね。

「……そう、ごめんなさいね？　……掛け直しましょうか？」

『いえ、そこまでして頂くわけには……』

と、彼がそこまで言ったところで、電話越しにインターホンを鳴らす音が聞こえた。

お客様かしら……？

『ん、誰だ？　こんな時間に……あ、すみません、って夜羽、ちょっと待て……い、行っちゃった……』

どうやら、本格的に立て込んできたようね。

「神尾君、大丈夫？」

『いや、本当にすみません！　何かこの時間に誰か訪ねてきて、夜羽が何も確認もせずに玄関まで行っちゃって……あ、戻ってきた……え？　客来だから入れたって？　ああ、そうか……って、誰！？　……い、今来るって……はあ！？　何で！？』

……立て込みすぎじゃないかしら。

「えっと、もしもし？」

『……………すみません、一旦こっちが片づいてから、掛け直します……………』

「え？ ええ……………問題ないわ。なんか大変そうだし」

『……………本当にすみません……………』

「いいのよ。それに、少し真面目な話だから、時間ももらいたかったし」

『え……………？ ………………わかりました。では、また後で』

ふう、彼も苦勞してるのね。

……………でも、それだけに、

「出来るだけ大人が手助けをしてあげなくちゃね」

そう呟いた後、私も私で、夕食の準備を始める。

飼い主家母の考えの話。（後書き）

次回更新ですが、正直未明です。

正直時間をうまく作れるか不安でして。

……ま、間違っても百話記念の話が浮かばないからの時間稼ぎじゃ、あ、ありませ、んよ……？

とりあえず、少しずつ時間を見つけ、ストックを作ってから、投稿再開したいと思います。

では、感想もお待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7384t/>

黒い鳥さんと一緒。

2012年1月2日22時49分発行